鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅳ）

国道159号線改築事業に係る石川県鹿島郡
鹿島町徳前Ｃ遺跡第４次緊急発掘調査報告

１９８３

石川県立埋蔵文化財センター

鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅳ）

国道159号線改築事業に係る石川県鹿島郡
鹿島町徳前Ｃ遺跡第４次緊急発掘調査報告

石川県立埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は石川県鹿島郡鹿島町徳前地内に所在する徳前C遺跡の発掘調査第4年次報告書である。第1年次調査区は「鹿島町徳前C遺跡（I）」として、昭和53年に報告されている。第2～3年次分の報告書は現在整理途上であり（II）・(III）として発行を予定しているので、本報告書には（IV）を付している。

2　本遺跡の発掘は、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所管内の国道159号線改築事業（鹿島バイパス）にかかるもので、昭和52・53年度に第1・2次発掘調査を石川県教育委員会文化財保護課が実施している。昭和55年度に第3次発掘調査、昭和56年10月5日から同年12月10日まで第4次発掘調査を石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　本遺跡の第4次発掘調査は、平田天秋、福島正実、浜野伸雄、土上正男、西野秀和（石川県立埋蔵文化財センター）が担当し、浦辺常寿（七尾市教育委員会)、村井伸行（押水町教育委員会)、宮下栄仁の協力を受けた。

4　調査の実施にあたっては、建設省金沢工事事務所、鹿島町教育委員会、七尾市シルヴァ人材センター、(株)松本組の助言、協力を受けた。

5　遺物の整理作業にあたっては、次の各氏の指導・助言を受けた。
小林達雄（国学院大学助教授)、小島俊彰（金沢美大助教授)、南　久和（金沢市教育委員会）

6　本遺跡出土の整理作業は、石川県埋蔵文化財協会に委託し、荒木繁行（同事務局長）をはじめとし次の各氏が縄文時代の遺物の記名・復元・実測・トレースを行った。
滋井　真、米沢亮子、米沢富士枝、浦　照子、宮本洋子、松田智恵子、浅野豊子、河村裕子、小谷紀美子、山岸康子、小林なお子、斉藤和代、川端敦子、辻森由美子
弥生・古墳・奈良時代の出土遺物の実測・トレースは、次の各氏が分担した。
平田天秋、浜野伸雄、宮下栄仁、浦辺常寿、村井伸行

7　石器の石質鑑定にあたっては、藤　則雄（金沢大学教授）の指導を受け、本遺跡の古環境についての玉稿も受けた。

8　本報告書の編集は平田、西野があたり、次の各氏が分担執筆を行なった。
福島正実（第1章)、西野秀和（第2・3章、第4章第1節、第5章第3節)、浜野伸雄（第4章第2節、第5章第4節)、平田天秋（第4章第3節、第5章第5節)、藤　則雄（第5章第1・2節）
なお、写真撮影は各執筆者が分担した。

9　本遺跡の遺構、遺物実測図、写真、出土遺物等の資料は、本センターにて一括して保存管理にあたっている。

10　本報告書の遺構、遺物挿図、写真図版の指示は次の通りであるが、適宜変更したものについては挿図に明示した。
（1）方位は全て磁北を表示する。
（2）水平基準は海抜高で表示する。(単位　m)
（3）挿図の縮尺
縄文式土器拓影・実測図――1／3、石器――1／3（石皿は1／6)、弥生式土器・土師器・須恵器――1／3、縄文式土器展開図――1／4
（4）写真図版中の復元土器の縮尺は統一していないが、破片は略1／3の縮小である。
（5）写真図版の遺物番号は、挿図に使用したものと同一である。
（6）遺物の計測値の単位は、cm、gである。

目　　次

第１章　遺跡の環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 1
第２章　調査に至る経緯と経過 …… 6
　第１節　調査に至る経緯と第１～３次調査 …… 6
　第２節　第４次調査経過 …… 8
第３章　層序と検出された遺構 …… 10
　第１節　層　序 …… 10
　第２節　遺物の出土状況 …… 12
　第３節　遺　構 …… 15
第４章　出土遺物 …… 16
　第１節　縄文時代の遺物 …… 16
　　（１）土器・土偶（２）石器 …… 16
　第２節　弥生・古墳時代の遺物 …… 85
　第３節　奈良時代の遺物 …… 105
第５章　まとめ …… 110
　第１節　徳前Ｃ遺跡の古環境 …… 110
　第２節　徳前Ｃ遺跡からの石器の石質に関する考察 …… 116
　第３節　縄文時代について …… 119
　第４節　弥生時代について …… 136
　第５節　奈良時代について …… 145

挿　図　目　次

第１図　徳前Ｃ遺跡の位置 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図（１／25,00） …… 2
第３図　徳前Ｃ遺跡周辺地形図（１／10,000） …… 4
第４図　調査区割図（１／3,000） …… 6
第５図　第４次調査区画図（１／300） …… 8
第６図　土層断面図（１／80） …… 9
第７図　縄文土器出土状況平面図（１／60） …… 11
第８図　遺構配置図（１／200） …… 12
第９図　弥生時代の遺構配置図（１／80） …… 13
第10図　弥生時代住居址実測図（１／80） …… 14
第11図　縄文時代土坑実測図（１／30） …… 14
第12図　縄文土器拓影・実測図（１～23）（１／３） …… 18
第13図　縄文土器拓影・実測図（24～38）（１／３） …… 20
第14図　縄文土器実測・展開図（39）（１／４） …… 21

第15図　縄文土器拓影・実測図（40～42・44～57）（1／3）……22
第16図　縄文土器実測・展開図（43）（1／3）……23
第17図　縄文土器拓影・実測図（58～65）（1／3・1／4）……24
第18図　縄文土器拓影・実測図（66～85）（1／3）……26
第19図　縄文土器拓影・実測図（86～107）（1／3）……28
第20図　縄文土器拓影・実測図（108～136）（1／3）……30
第21図　縄文土器拓影・実測図（137～148）（1／3）……32
第22図　縄文土器拓影・実測図（149～154）（1／3・1／4）……33
第23図　縄文土器拓影・実測図（155～162）（1／3）……34
第24図　縄文土器拓影・実測図（163～179）（1／3）……36
第25図　縄文土器拓影・実測図（180～195）（1／3）……37
第26図　縄文土器実測図（196～199）（1／3）……38
第27図　縄文土器拓影・実測図（200～212）（1／3）……40
第28図　縄文土器拓影・実測図（213～235）（1／3）……41
第29図　縄文土器拓影・実測図（236～259）（1／3）……42
第30図　縄文土器拓影・実測図（260～272）（1／3）……44
第31図　縄文土器実測・展開図（273）（1／4）……46
第32図　縄文土器実測・展開図（274）（1／4）……47
第33図　縄文土器拓影・実測図（275～293）（1／3）……48
第34図　縄文土器拓影・実測図（294～318）（1／3）……50
第35図　縄文土器拓影・実測図（319～330）（1／3）……52
第36図　縄文土器拓影・実測図（331～361）（1／3）……53
第37図　縄文土器拓影・実測図（362～375）（1／3）……54
第38図　縄文土器拓影・実測図（376～398）（1／3）……56
第39図　縄文土器実測図（399）（1／4）……58
第40図　縄文土器拓影・実測図（400～402）（1／3）……60
第41図　縄文土器拓影・実測図（403～405）（1／3）……61
第42図　縄文土器拓影・実測図（406～410）（1／3）……62
第43図　縄文土器拓影・実測図（411～425）（1／3）……63
第44図　縄文土器拓影・実測図（426～446）（1／3）……64
第45図　縄文土器拓影・実測図（447～457）（1／3）……65
第46図　縄文土器拓影・実測図（458～484）（1／3）……66
第47図　縄文土器拓影・実測図（485～487）（1／3）……67
第48図　縄文土器拓影・実測図（488～502）（1／3）……68
第49図　縄文土器拓影・実測図（503～509）（1／3・1／4）……70
第50図　縄文土器拓影・実測図（510～520）（1／3）……72
第51図　縄文土器拓影・実測図（521～528）（1／3）……73
第52図　縄文土器底部拓影・実測図（529～535）（1／3）……74
第53図　縄文土器底部拓影・実測図（536～556）（1／3）……75
第54図　縄文土器底部拓影・実測図（557～573）（1／3）……76
第55図　縄文土器底部拓影・実測図（574～594）（1／3）……77
第56図　底部立ち上がり集成図（1／3）……78

第57図　土偶実測図（595）（１／２）……80
第58図　縄文時代石器実測図（１～20）（１／３）……81
第59図　縄文時代石器実測図（21～29）（１／６）……82
第60図　弥生・古墳時代前期の遺物（壺）（１／３）……86
第61図　弥生・古墳時代前期の遺物（壺）（１／３）……87
第62図　弥生・古墳時代前期の遺物（甕）（１／３）……89
第63図　弥生・古墳時代前期の遺物（甕）（１／３）……91
第64図　弥生・古墳時代前期の遺物（甕）（１／３）……92
第65図　弥生・古墳時代前期の遺物（甕）（１／３）……95
第66図　弥生・古墳時代前期の遺物（鉢・底部）（１／３）……96
第67図　弥生・古墳時代前期の遺物（高坏）（１／３）……98
第68図　弥生・古墳時代前期の遺物（高坏）（１／３）……101
第69図　弥生・古墳時代前期の遺物（器台）（１／３）……102
第70図　管玉実測図（１／２）……103
第71図　古墳時代後期・奈良時代の土師器（１／３）……103
第72図　古墳時代後期・奈良時代の須恵器、珠洲焼（１／３）……104
第73図　奈良時代の須恵器（１／３）……106
第74図　奈良時代の須恵器（１／３）……108
第75図　鹿島町の地形区分図……110
第76図　徳前Ｃ遺跡周辺の微地形……111
第77図　徳前Ｃ遺跡付近の地質図（「鹿島町史・第１巻」より抜すい―1982―）……112
第78図　能登半島における海水準と気候の変化……113
第79図　日本中部山地（堀　正一）と北陸（藤　則雄）における過去１、２万年間の気候・植生変化…114
第80図　ニュージィ・ランドにおける過去１、２万年間の気候変化……114
第81図　北陸地方の花粉化石群集に基づく古気候変化とスウェーデン・北米・ニュージィランド等との気候・海水準変化の比較……114
第82図　鹿島町徳前Ｃ遺跡出土〝石器〟の石質の最寄りの分布地……117
第83図　１類器形の変様（１／６）……126
第84図　３・４類器形の変様（１／６）……127

表　目　次

第１表　遺跡地名表……３
第２表　底部集成表……78
第３表　石器計測表……84
第４表　編年対応表試案……131
第５表　長頸壺タイプ別細分表……138

図　版　目　次

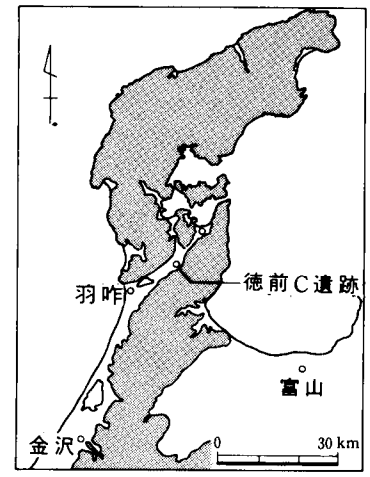
図版１　航空写真（１／15,000）（1974・10・25、セントラル航業（株）撮影）
図版２　航空写真（１／5,000）（1979・12・19、セントラル航業（株）撮影）

図版３　調査風景（４－３区、４－７・８区弥生期包含層除去）
図版４　土層断面（４－３区）、調査風景（４－７・８区）
図版５　弥生期遺構全景（南西から）、同（北東から）
図版６　弥生期遺物出土状況
図版７　縄文期包含層発掘風景、縄文期遺物出土状況
図版８　縄文土器出土状況
図版９　遺構全景（北東から）、同左
図版10　土坑遺物出土状況（No. 133）、不整形落ち込み（No. 129）
図版11　縄文土器（復原土器、３・27・39・40・43・65）
図版12　縄文土器（復原土器、146・154・155・273・274）
図版13　縄文土器（復原土器、194・198・279・319・399・454・447）
図版14　縄文土器（復原土器、471・487・503・504・522）
図版15　縄文土器（１～56）
図版16　縄文土器（41～89）
図版17　縄文土器（90～139）
図版18　縄文土器（140～179）
図版19　縄文土器（180～211）
図版20　縄文土器（201～255）
図版21　縄文土器（254～318）
図版22　縄文土器（304～337）
図版23　縄文土器（338～398）
図版24　縄文土器（403～428）
図版25　縄文土器（429～483）
図版26　縄文土器（485～509）
図版27　縄文土器（510～528）
図版28　縄文時代石器（１～24）、土偶（595）
図版29　弥生・古墳時代前期の土器
図版30　弥生・古墳時代前期の土器
図版31　弥生・古墳時代前期の土器
図版32　弥生・古墳時代前期の土器
図版33　古墳時代後期・奈良時代の須恵器
図版34　奈良時代の須恵器
図版35　奈良時代の須恵器
図版36　奈良時代の須恵器・珠洲焼
図版37　へら記号集成

第1章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

徳前C遺跡は能登半島の基部、鹿島郡鹿島町徳前地内に所在する。本遺跡の西端は行政区画を越え、同郡鳥屋町黒氏地内に及んでいる。羽咋市から七尾市に至る約20kmの区間は、新第三紀～第四紀更新世前期にかけて形成したと推定される(註1)、いわゆる邑知地溝帯が半島を斜めに横断している。この断層地形は南東側各所に小扇状地を形成しつつ、沖積作用によって幅2～3kmの低地帯と化している。また鳥屋町新庄付近からは、低地帯と分岐する形で北方の田鶴浜町に続く沖積低地が延び、現二宮川の流路となっている。したがって徳前C遺跡は、田鶴浜、七尾、羽咋の三方を望む低地帯の要に位置するといえる。低地帯の両側は、南側は石動・宝達山、北側は中能登丘陵に区分されており(註2)、前者は当地では標高565mの石動山を主峰とし、低山性ながらも急峻な浸食地形を呈している。後者は標高150m以下の丘陵地であって、低地帯側は比較的急傾斜ながらも丘陵全体は地溝帯の背後、北西方向に緩く傾斜している。このため北側から低地帯に流入する河川は小規模な谷川を除き殆んどみられない。



第1図　徳前C遺跡の位置

低地帯のうち、南側（鹿島町側）には、二宮川、長曽川、能野川、久江川、地獄谷川等によって各所に小扇状地が生じており、これらが連接あるいは複合した結果、低地帯横断面は北側（鹿西、鳥屋町側）に緩やかに傾斜している。徳前C遺跡はこれら扇状地の中でも最大規模である二宮、長曽両川によって形成された複合扇状地の中央、現標高45m付近に立地する。本扇状地は扇頂部の標高約100m、扇端との比高約70mを測り、低地帯流入河川の流水界となっている。すなわち二宮川水系は低地帯を横断し田鶴浜町を経て七尾湾に注ぎ、一方長曽川水系以西は低地帯を西流し邑知潟を経て日本海に至っている。

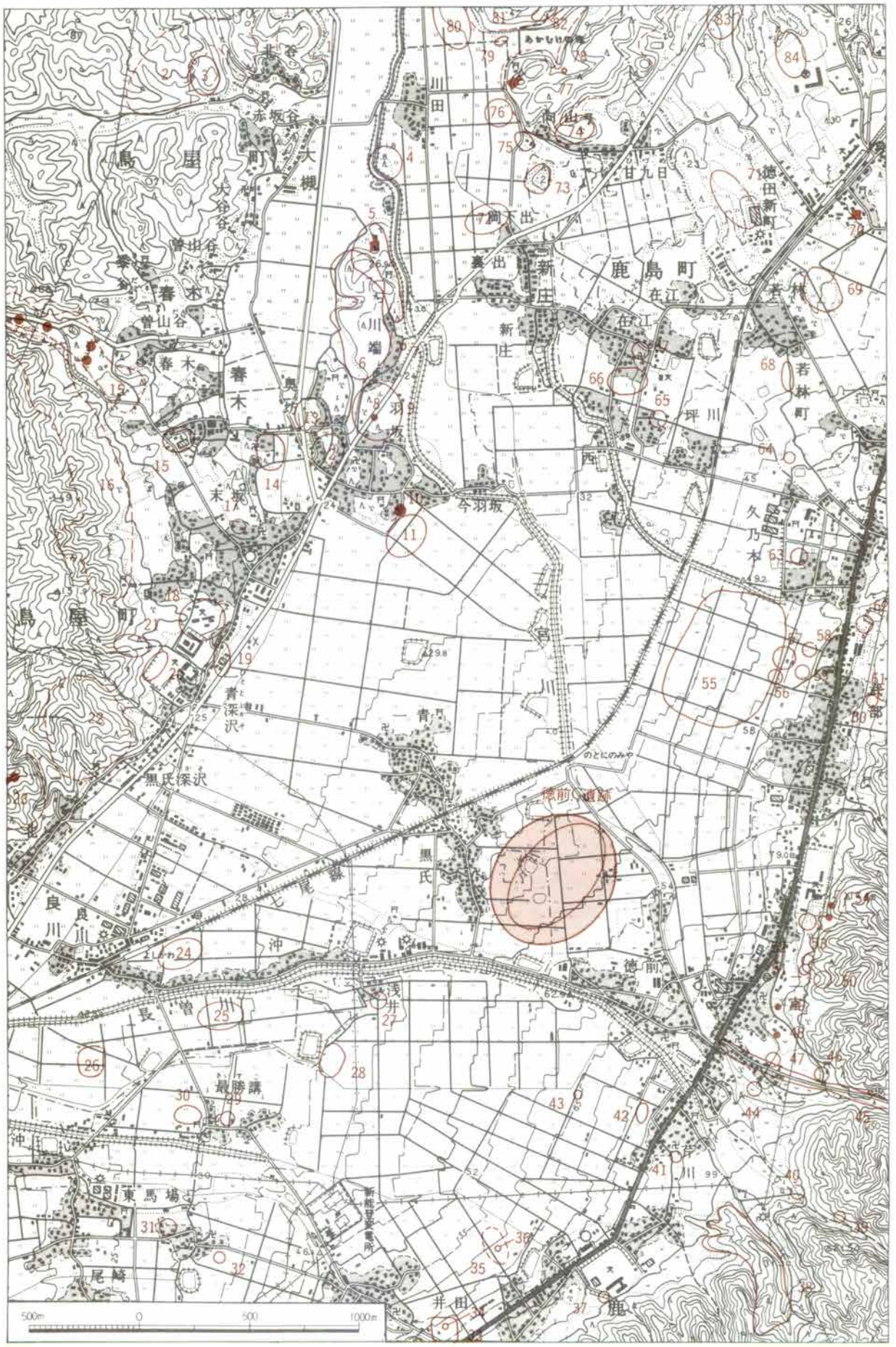
本遺跡付近の微地形および立地に関しては『鹿島町徳前C遺跡調査報告（I）』(註3)ですでに指摘されているとおりである。第4次調査まで、扇状地を横断する方向で延長約350mにわたって設定された調査区では、各所に流路跡が検出され、また激しい伏流水のためしばしば調査が中断している。さらに洪水等による土砂の堆積は最下層の縄文前期末～中期初頭までで1.5～2mに達し、この間に各時代の生活面が砂礫層を主体とする間層に挟まれつつ認められることなど、これらは扇状地に立地する本遺跡の環境を如実に示すものといえよう。

第2節　歴史的環境

1　縄文時代

本遺跡の調査によって、縄文時代前期末頃には邑知低地帯中央部に集落が進出していたことが明らかになった。立地を詳細に見れば扇状地扇央であって低地帯中央部でもやや高所であるが、従来当地域での縄文遺跡の分布が山麓線付近あるいは丘陵上と考えられてきただけに画期的発見といえよう。また近年来当地周辺部で新資料が増加している。鳥屋町若狭見地内では楕円押型文土器片が採集され、発掘調査が実施された田鶴浜町野寺遺跡では前期初頭に遡ると推定される土器群が出土した。一方、地溝帯内では学術調査が継続されている鹿島町福田原山遺跡(註4)を除き新資料は少ない。

現在地溝帯内で最古の資料は海岸砂丘上に立地する羽咋市寺家遺跡より出土した爪形文土器(註5)（北白川下層併行）があり、本遺跡以外では現在のところ前期に遡る数少ない資料である。中期の遺跡数は比較的多い。この


鳥屋町
春木
春木谷
春木山谷
末坂
赤坂谷
大棚
川端
羽坂
今羽坂
青深沢
黒氏深沢
黒氏
良川
長曽川
最勝講
東馬場
尾崎
新能登変電所
徳前遺跡
徳前
のとにのみや
鹿島町
新庄
在江
若林町
若林
坪川
久乃木
川田
向出
甘九日
徳田新町
井田
鹿
500m
0
500
1000m

第２図　周辺遺跡分布図

縄文時代
4 新庄神社遺跡
35 井田遺跡
47 二宮川遺跡
51 徳前B遺跡
62 武部堤C遺跡
68 若林A遺跡
69 若林一ノ坪遺跡
71 徳田新町遺跡
84 下町樹苗園遺跡

弥生、古墳時代（散布地）
9 羽坂遺跡
12 羽坂B遺跡
27 浅井遺跡
30 最勝講土師遺跡
37 井田鹿島中学校遺跡
40 芹川八幡遺跡
42 芹川母田遺跡
53 二宮上野B遺跡
57 武部堂田遺跡
58 武部国道C遺跡
59 武部ヨの部遺跡
60 武部国道A遺跡
61 武部国道B遺跡
63 久乃木遺跡
66 坪川遺跡
72 新庄弥生遺跡
73 在江遺跡
74 川田向山遺跡
76 川田B遺跡
80 川田A遺跡

古墳
1 北谷古墳群（7～14号墳）
5 大槻古墳群（1～11号墳）
7 大槻横穴
8 羽板古墳
10 灰塚古墳
22 黒氏深沢古墳群
23 良川古墳群
36 井田江塚古墳
48 二宮2号墳
49 二宮1号墳（行人塚）
54 徳前古墳（1、2号墳）
70 下町院内勅使塚古墳
75 川田横穴古墳群
77 川田古墳群
81 川田古墳群

奈良、平安時代（散布地）
11 手間神社遺跡
43 芹川土馬遺跡
44 二宮土馬遺跡
55 武部ショウブダ遺跡
64 若林B遺跡
71 徳田新町遺跡
74 川田向山遺跡
80 川田A遺跡
82 川田遺跡
84 下町樹苗園遺跡

須恵器窯跡
15 春木窯跡群（奈・平）
16 末坂窯跡群（奈・平）
17 〃 （ 〃 ）
20 深沢中学校庭窯跡
21 深沢窯跡群（古墳）

鎌倉～江戸時代（散布地）
25 吉川沖遺跡
29 最勝講瀬戸遺跡
32 井田中屋垣内遺跡
34 井田A遺跡
41 芹川花畠遺跡
46 二宮神社遺跡
52 徳前A遺跡
56 武部古銭出土遺跡
65 坪川白山神社遺跡
67 栄林寺遺跡
79 川田中世陶器出土地

城館跡、寺跡
2 大槻防塁遺跡
13 安楽寺跡 （江戸）
14 春木斉藤館跡
26 免田中世城遺跡
28 合城跡
31 窪田館跡
38 勝山城跡
50 二宮寺谷内遺跡

その他
33 井田中世遺跡 （墳墓）
39 芹川五輪平遺跡（ 〃 ）
45 二宮口参遺跡 （古道）

不詳
3 常楽寺遺跡
6 大槻住居遺跡
6 春木A遺跡
6 春木B遺跡
18 鳥屋小学校遺跡
19 深沢遺跡
24 良川遺跡
83 白馬遺跡

注 石川県遺跡地図（1983.3 石川県教育委員会）より作成

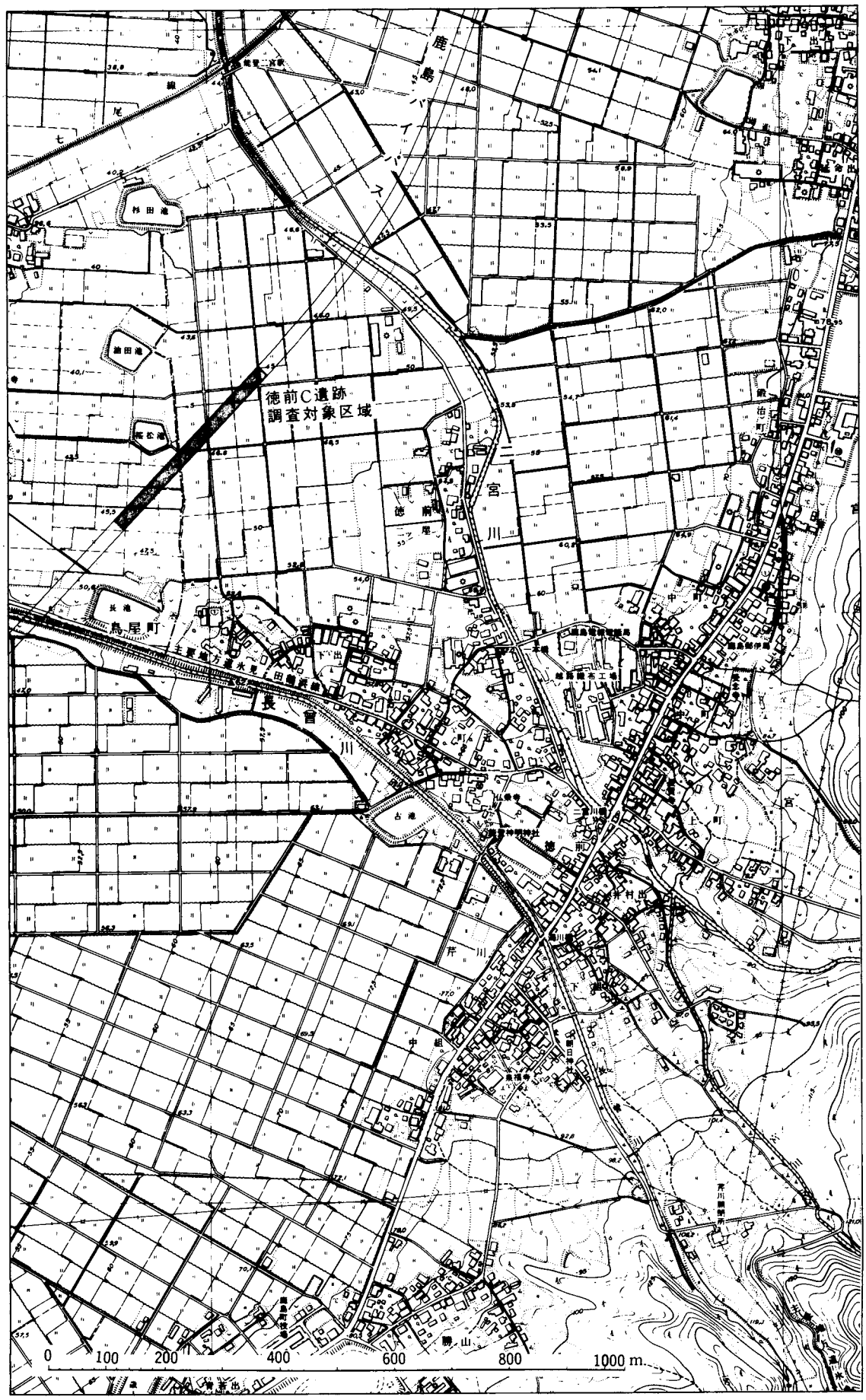
第1表 遺 跡 地 名 表

中で羽咋市四柳貝塚(註6)は中期前葉から後葉にかけてのシジミ貝を主体とする淡(汽)水性貝塚であって、寺家遺跡とともに旧邑知潟を中心とした該期の古環境を復原する面で貴重な遺跡である。福田原山遺跡は標高320m、急峻な石動・宝達山地内に点在する平坦地の一つに立地し、中期初頭から後期初頭に至る集落跡である(註4)。発掘調査が行われたこれらおよび七尾市徳田丘稜上に立地する数箇所の遺跡を別とすれば低地帯南北両山麓線付近に約20箇所の遺跡が散在するものの、石器の単独出土が多く集落跡として把握可能なものは藤井縄文遺跡（中期中葉～後期前葉）、小田中寺屋敷遺跡等があげられるにとどまり、特に後期中葉以降に関してはその実態は依然として不明と言わざるを得ない。ただ低地帯域は一部を除き厚い堆積層に覆われていることもあり、表面踏査による把握が困難な点は事実であり、今後の保護問題の面からも慎重な対応が必要となってきている。

2 弥生、古墳時代

本遺跡周辺、低地帯中心部では弥生時代中期に遡る集落跡は発見されていない。邑知低地帯での初期弥生農耕の定着は低地帯の西端、羽咋市吉崎(よつさき)・次場(すば)遺跡に代表される旧邑知潟南岸およびその周辺部と推定される。同遺跡は中期初頭から古墳時代移行期にかけ一貫して同地域の母村的存在として、また邑知低地帯の西の要として重要な役割を担っていたことはその出土遺物の内容からも窺い知ることができる。一方低地帯東部でも七尾市細口源田山遺跡の調査によって中期中葉から後葉に位置づけられる方形周溝墓群が発見されている(註6)。同遺跡は低地帯と平行して続く鷹合川流域の谷平野に挟まれた丘稜上に立地する。また低地帯から分岐し北方に延びる二宮川下流域でも七尾市池崎向手遺跡等で中期集落が確認されている。

旧邑知潟東岸から本遺跡に至る低地帯中央部の集落遺跡は後期後半から古墳時代前期にかけてが大部分であって、本遺跡をはじめ第1表に示した各遺跡が発見されている。ただ殆んどは採集遺物によるため時期の限定は難



第３図　徳前Ｃ遺跡周辺地形図

しい。それらの立地は両側の扇状地帯あるいは微高地に立地するとみられるが、最勝講土師遺跡、浅井遺跡等中央付近に進出したものもみられる。このような状況は、厚い堆積層のため遺跡分布の把握が困難な制約もあり、若干の中期集落の存在する可能性はあるものの、すでに指摘されているように鉄製農具の普及と耕作技術の進展を契機とし、また集団内の人口増等を背景に砂礫層を含み水量変動の著しい扇状地部に進出したとの基本的理解があてはまるのではないか。

弥生時代末以降二宮川下流域の大槻台地、田鶴浜町吉田経塚山等に台状墓群が出現する。一方低地帯中央部では盟主墳である大型前期古墳が造営される。当地の古墳群の把握は昭和51年度から行われている県内古墳群分布調査事業の成果に著しいものがあり、総数800を越える古墳群の分布がほぼ把握されつつある。一部は報告書が刊行され[註7]、二宮川下流域の濃厚な分布状況が明らかになっており続刊が期待される。当地の前期古墳は前方後方、帆立貝形の墳形が多い。低地帯を眼下に見渡す鹿西町眉丈山丘稜雷ヶ峰には共に県下最大級の規模をもつ雨の宮1号墳（前方後方、全長70m）、同2号墳（前方後方、全長70m）があり、また対岸の鹿島町小田中には丘稜端に親王塚古墳、亀塚古墳が隣接して立地する。前者は70mを越える帆立貝形古墳となる可能性があり、後者は推定長約70mとみられる前方後方墳である[註8]。また大槻丘稜に立する小形前方後方墳である大槻11号墳（全長30m）もこの時期に造営されている。さらに鹿島町水白鍋山古墳は範囲確認調査によって全長64m、後円部径51mの帆立貝形古墳であることが判明し、5世紀前半代でも初頭に近い年代観が与えられた[註8]。また七尾市国分尼塚1号墳も学術調査によって全長50mを越える前方後方墳であることが明らかにされた。鳥屋・高階古墳群は前方後円墳8基以上を含み、二宮川両岸の丘稜に広く分布する大古墳群であって、10群以上の古墳群を包括した名称であり、その規模、造営年代の長さは県下最大といえ、特に5世紀代と推定される川田ソウ山1号墳（前方後方墳、全長54m）、典型的な後期群集墳である川田向山古墳群等注目される内容をもつものである。また七尾市徳田地区、鹿島町水白・小竹・井田地区、鳥屋町良川地区でも分布調査により古墳群の発見が相ついでいる。ただ長曽、二宮川扇状地周辺では該期の古墳群は発見されていない。

本遺跡周辺では7世紀代の横穴式石室墳が散在する。徳前1、2号墳は東方約1km、丘稜端に立地し共に無袖形横穴式石室を有する円墳であり、7世紀前葉～中葉とされる[註8]。また二宮1、2号墳もほぼ同時期とみられ、2号墳は無袖型石室を有している。なお本遺跡の北東約4kmにはいわゆる終末期古墳として著名な院内勅使塚古墳が立地する。これら古墳群への須恵器供給は鳥屋窯跡群からおそらく一元的に行なわれたとみられる。その中で深沢1号窯は現在のところ県内最古の窯跡の一つであり陶邑編年Ⅰ期末ないしⅡ期初めに該当するものである。

3　奈良、平安時代

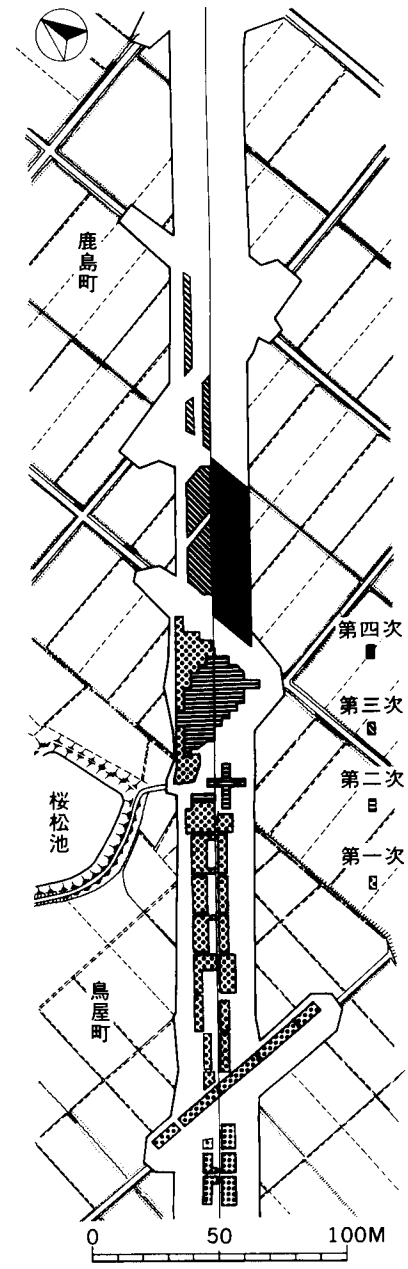
『続日本記』によれば能登国は718年、757年の二度立国を行っている。徳前C遺跡の上層で検出された掘立柱建物群は奈良時代前期に比定されており、第1次立国から越中への併合（741年）頃となる。当期もまた調査例の乏しい時期である。集落跡では本遺跡の他には七尾市八幡昔谷遺跡、同市古府タブノキダ遺跡の2遺跡に過ぎない。前者は奈良時代前期を中心とする掘立柱建物群等が検出され、一部平安時代の遺構も伴なっている。後者は1982年に調査が行われ、奈良時代前期を下らない掘立柱建物群が検出されており、地名の示すとおりその後の能登国の中枢部に位置し、その性格をめぐり注目すべき遺跡である。また古墳時代より当地に一貫して須恵器供給を行っている鳥屋窯跡群は能登最大の窯業地帯として奈良時代末から平安時代にかけて生産のピークを迎えている。なお、該期の集落跡と推定され、本遺跡に隣接する武部ショウブダ遺跡の調査が1983年から実施予定であり成果が期待される。

註1　藤則雄「地形・地質」『鹿島町史資料編』（続）上巻 1982 鹿島町役場
2　紺野義夫『石川県の自然環境』第1分冊地形地質 1977 石川県
3　湯尻修平『鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅰ）』1978 石川県教育委員会
4　平口哲夫「福田原山遺跡」『鹿島町史』資料編（続）上巻 1982 鹿島町役場
5　小嶋芳孝『寺家』1980年度調査概報 1981 石川県埋蔵文化財センター
6　土肥富士夫他『細口源田山遺跡』1982 七尾市教育委員会
7　石川考古学研究会（橋本澄夫・谷内尾晋司）「鳥屋・高階古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第20号 1977
8　谷内尾晋司「古墳文化」『鹿島町史』資料編（続）上巻 1982 鹿島町役場

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と第１～３次調査

邑知地溝帯内部での遺跡は、扇状地形という地理的条件に負う面が大きいと考えられてきたが、本遺跡の発掘調査の進展にともない、厚い堆積層にはばまれはするが、縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代、中世にいたる各時代の包含層が形成されている事が判明した。調査区に隣接する鹿島郡鳥屋町黒氏地内に所在する桜松池の改修工事が昭和初年に実施された際に、耕作土下約1.5m の砂層上部に、梯子、舟形木製品、盆形木製品の３点が弥生時代後期～古墳時代前期の土器をともなって出土したとの報告があり、高堀勝喜氏による詳細な聞取り調査が行なわれている。(註１) 原始・古代においても扇状地扇端部での立地に拘泥する事なく、生活の基盤をおいたものと想定できる。第１次調査においては耕作土下層の浅い地層で奈良時代の集落が顕現され、本遺跡の直接的調査原因となった鹿島バイパスの七尾寄りの石塚川の左岸では津田耕吉氏の踏査によって武部ショウブダ遺跡が発見された。奈良･平安時代の集落址と推定され、耕作土直下に包含層が形成されている。邑知地溝帯におけるまばらな遺跡分布状態は歴史的な反映ではなく、扇状地形にまどわされた思い込みによるものであり、分布調査の不備を痛感せざるを得ない。



第４図　調査区割図（１／3.000）

徳前Ｃ遺跡の発見は昭和30年代に行われた耕地整理の際に、土器片が採集された事にはじまる。発見以後の経過および調査に至る経緯については、湯尻修平氏が「鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅰ）」(註２)のなかで詳細に記述されているので参照していただきたい。

第１次調査（昭和52年）

６月８日から対象地域約1,800m²について試掘調査を実施し、出土した土器から弥生時代後期～古墳時代前期と奈良・平安時代の複合遺跡である事が判明した。試掘調査の結果をふまえて、７月15日から本調査にかかり約750m²に全面発掘調査を実施している。上層の奈良時代の遺構は、８棟の掘立柱建物と柵列、３条の方形溝、１基の井戸、２基の土坑からなり、溝や柱穴の切り合い関係や方位、建物規模、全体の配置等を検討し、Ａ・Ｂ・Ｃ期の３時期に区分されている。Ａ期には３間×４間で方形の柱穴掘り方を持つ南北棟３棟が並列して置かれ、柵列、溝等が付属する。Ｂ期には方形溝の内部に２棟の東西棟が並び、両脇に南北棟が置かれる。柱穴掘り方は円形に変化している。井戸はＢ期にともなうとされる。Ｃ期には溝を持つ２間×４間の南北棟１棟だけとなる。Ａ・Ｂ・Ｃ期の建物は出土土器等から考えて短期間に推移したものと想定されている。湯尻修平氏はこれらの奈良時代前期の建物群を、集落を構成する基礎的な単位の房戸ととらえる視点を呈示し、北陸における純農耕集落研究への大きな手掛りとして評価されている。(註３) 下層から得られた土器は３時期に大別されている。徳前第Ⅰ様式（弥生時代後期、柳田うわの式に類するもの）、徳前第Ⅱ様式(弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、塚崎Ⅱ式古～月影式)、徳前第Ⅲ様式（古墳時代、宮地式に類するもの）の３時期で、邑知地溝帯の南西端部にある羽咋市次場遺跡から香島津の七尾

市周辺までの資料的には空白地域に近い地溝帯において、遺構こそ検出できなかったものの、一定程度の資料の発見は地溝帯の研究史においては大きな意義が見い出されるであろう。

上層の発掘が終了したのは、同年８月26日であった。秋の農繁期に一時中断して、９月13日から10月６日まで、下層の発掘を行っている。湧水とヘドロ状になった黒色土に悩まされ下層遺構は発見されなかった。この間に、二宮川から長曽川にかけての路線内約１kmの試掘調査を実施している。桜松池付近から羽咋方向約250mの鳥屋町地内、発掘調査区の東方七尾方面へも約250mの範囲に遺跡が分布している事が確認され、徳前Ｃ遺跡の等高線に平行する位置でのひろがりを押さえる成果を上げている。なお、発掘区の東方には旧河道（幅約30m）と見られる地区の発見もあり、扇状地内の複雑な様相に注意を払っている。(註４)

第２次調査（昭和53年）

７月30日から昨年度に引き続き湯尻修平氏が担当して、第２次調査を開始した。発掘面積は道路敷内約2,000m²である。第１次調査の北側部分の拡張区からは、奈良時代前期に属する掘立柱建物の柱穴を補足し、新たに南北平行溝数条を検出している。さらに、北東端の拡張区下層から弥生時代後期土器群を溝状遺構にちかい状況で検出している。第１次調査区南西側、長曽川方向には、道路センターラインを中心にして両側に幅５mと６mのトレンチを設定して発掘をすすめている。鳥屋町黒氏地内にはいるグリッドナンバー105から80までの約70mは、砂利層が厚く堆積しているところから奈良時代以降におきた旧二宮川の河道跡と推定している。このため、上層、下層の包含層は押し流されていた。グリッドナンバー70～72にかけてと、60～62にかけての２個所では、道路センターを横断するような溝遺構が地表下約２mのレベルで発見している。 特にグリッドナンバー70～72の溝は幅45cm、深さ20cmの規模であるが、完形土器を多量に含む古墳時代前期の土器が足の踏み場もない状態で出土した。 器種は壺、甕、鉢、高坏、器台等があり、赤彩を施した特殊器形のものが多い。 このような出土状態から、湯尻氏は当時の農耕にかかわる祭礼に関係するものと推定され、邑知地溝帯中央部の古墳時代前期の一括資料として大きな意味を持つものと考えられている。また、徳前Ｃ遺跡の下層は鳥屋町黒氏サクラマチ遺跡のひろがりとしてとらえる事が可能となったとしている。グリッドナンバー50～40にかけては室町時代の包含地で、石列遺構の他に珠洲焼、灯明皿等が出土し、集落址の可能性が高いと指摘している。(註４)

第３次調査（昭和54年）

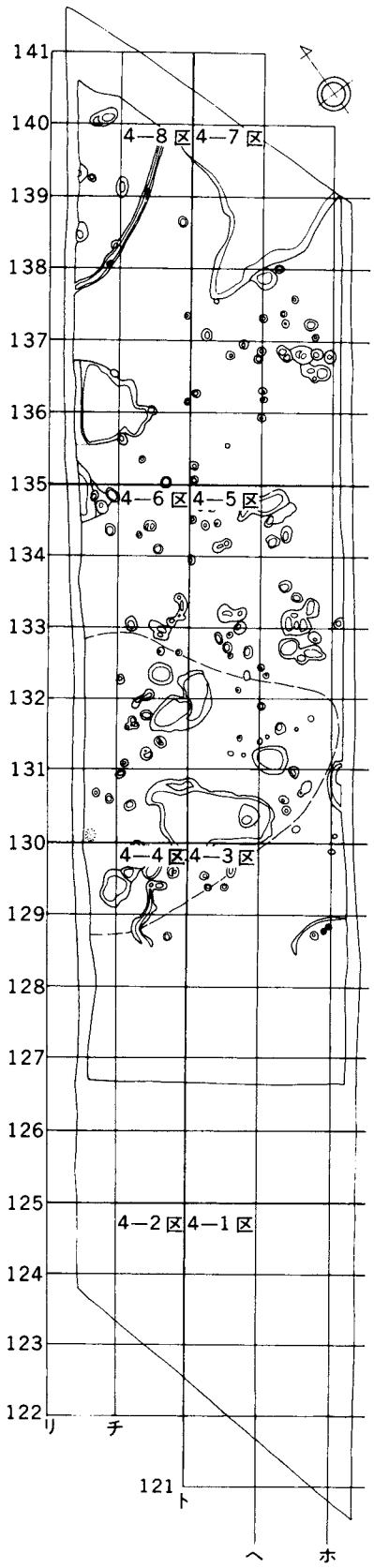
10月１日から、県教育委員会文化財保護課から改組なった県立埋蔵文化財センターが調査を開始した。担当は中島俊一氏、谷内尾晋司氏、米沢義光氏の３名である。調査面積は道路敷内約700m²で、第１次調査区の二宮川寄りの地区の道路センターから北西部分である。遺物包含層はグリッドナンバー127から142ラインにかけて形成され、上層、中層、下層の３つの包含層が確認された。上層は奈良時代前期の包含層で、耕作土層約20～30cm下位に約10cmの層厚を持つが、遺構は検出されなかった。中層は第１・２次調査では下層として取り扱ってきた弥生時代、古墳時代の包含層で、地表下約90～110cmのレベルに堆積していた。下層は表土下約150～200cmのレベルにあり、包含層は約15～20cmの厚さを持ち青灰色砂礫層をおおう。下層にはこれまで発見されなかった縄文時代中期前半の遺物を包含するものであった。青灰色砂礫層にはピット等の遺構の存在を確認できたものの、激しい湧水とヘドロ状になった包含層にはばまれて、発掘区の壁そのものが崩壊するような危険な状態となったために実体の検出にまではいたらなかった。グリッドナンバー145から七尾寄りでは、遺物の出土も少なくなり地山面が急激に下降していた。そして、砂礫層の堆積が多くなり、遺物そのものも２次堆積と見られる状況を示していた。(註５)

第３次調査は縄文時代中期前半の包含層を検出するという、邑知地溝帯の原始時代を考えなおす大きな衝撃を与えた。出土遺物には、破片総数で7,000点を越える土器があり、土偶、打製石斧、磨製石斧、凹石、石皿、石鏃等の出土が見られた。それらの概要は米沢義光氏によって、「鹿島町史」資料編（続）に詳細な報告があるので参照されたい。出土した土器から、中期前半の新保式に後続する中平式に近い土器群が主体を占めるが、文様構成等から若干の差を持つものとされている。(註６)

本次調査により徳前Ｃ遺跡の学術的価値はさらに高まり、今後の調査状態をより良くするためと、作業の安全確保をはかるうえから、矢板工事を調査区に施す必要性が指摘された。

第２節　第４次調査経過

昭和55年度は埋蔵文化財センターの調査体制がととのわないところから、当遺跡の調査を見あわせている。昭和56年10月５日から12月10日までの間、第４次調査を実施した。第３次調査区に隣接する道路センターから東側（石動山方向）地区で、平面プランは平行四辺形の略菱形をなし、１辺が50m、他辺が12mを測るものである。土留工事は扇状地形を考慮して、石動山方向、二宮川方向、長曽川方向の三辺に、長さ５mの矢板を打ち込んだ。道路センター側はゆるい傾斜を持たせて掘進する計画を立て矢板は打ち込まなかった。つまり、「コ」の字状に発掘区を囲い込んだわけである。



10月５日～12日　器材搬入。調査区の表土除去作業。

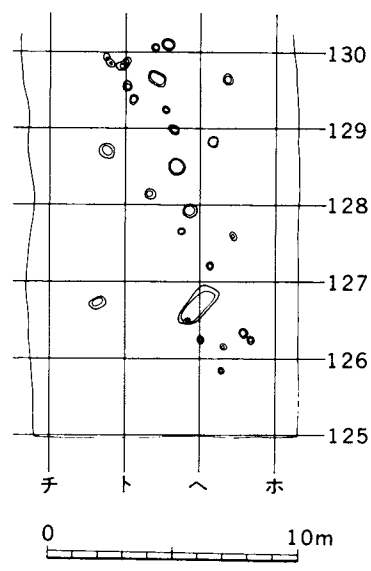
10月13日～18日　大区画の４－１～４区の黒色土層の発掘。弥生・古墳・奈良時代の遺物を検出する。４－１・２区はヘドロ状となり調査は困難をきわめる。

10月19日～20日　４－２・４区の黒色土２回目の発掘、遺物多量に出土。

10月21日～26日　４－３区の弥生期の遺構検出。４－６区上層部の発掘。

10月27日～31日　土層断面図作製。４－４～６区の縄文期の包含層発掘。

11月１日～14日　４－７・８区の調査にかかる。表土層から順次掘りすすめる。ヘドロ状になった包含層に完形土器を含む弥生時代後期の土器が散発的に出土する。須恵器の出土は見られなくなる。



第５図　第４次調査区画図（1/300）

11月15日～18日　４－７・８区の遺構検出。ピット等多数を検出、住居址と見られるピットに完形の鉢型土器が出土した。

11月19日～24日　４－５・６区の下層の発掘。

11月25日～30日　４－３・４区の弥生時代後期の遺構発掘。写真撮影。平面図作製。

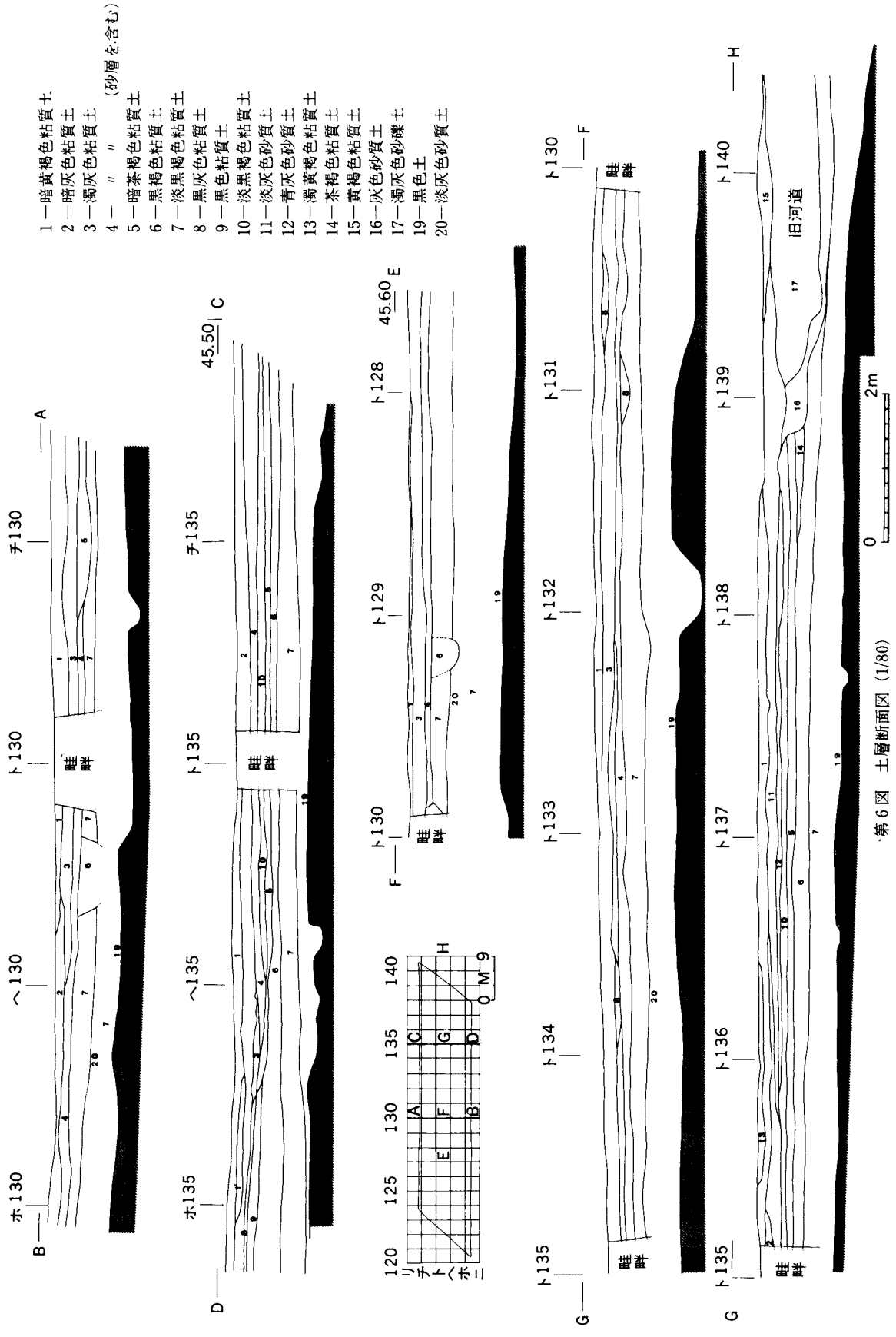
12月１日～４日　４－３・４区の縄文土器集中出土区の発掘。平面実測を行い、遺物取り上げ。

12月５日～11日　発掘区全体にわたる下層の遺構検出。写真撮影。実測作業。

12月12日～21日　器材の撤収。現地説明会。埋め戻しと矢板の撤去。

第３次調査で推定された範囲に、

縄文期の遺物、遺構を検出したのが、大きな成果であるが、不十分ながら厚い堆積層の状況が把握され、弥生時代～古墳時代前期においても、単純に遺物の流れ込みではなく遺構がのこされているという成果を上げる事ができた。第１～３次調査までの発掘成果の結果として本次調査があったと言えよう。



第６図　土層断面図 (1/80)

第3章　層序と検出された遺構

第1節　層　　序

本遺跡が所在するのは、石動山（標高565m）を源流とする二宮川、長曽川が形成した旧小扇状地の扇端部分にあたる標高約46mの地域である。現在は邑知地溝帯の水田地帯として整備されているが、第1～3次調査で明らかになったように遺跡は自然堤防上に立地しているので、遺跡を寸断するようにして河道がはしり、洪水時の砂層の形成、遊水地となった際のヨシ状の繊維を含む黒褐色の粘質土層および青灰色粘質土層が互層をなすようにして堆積し、上層、中層、下層の包含層を包み込んでいる。

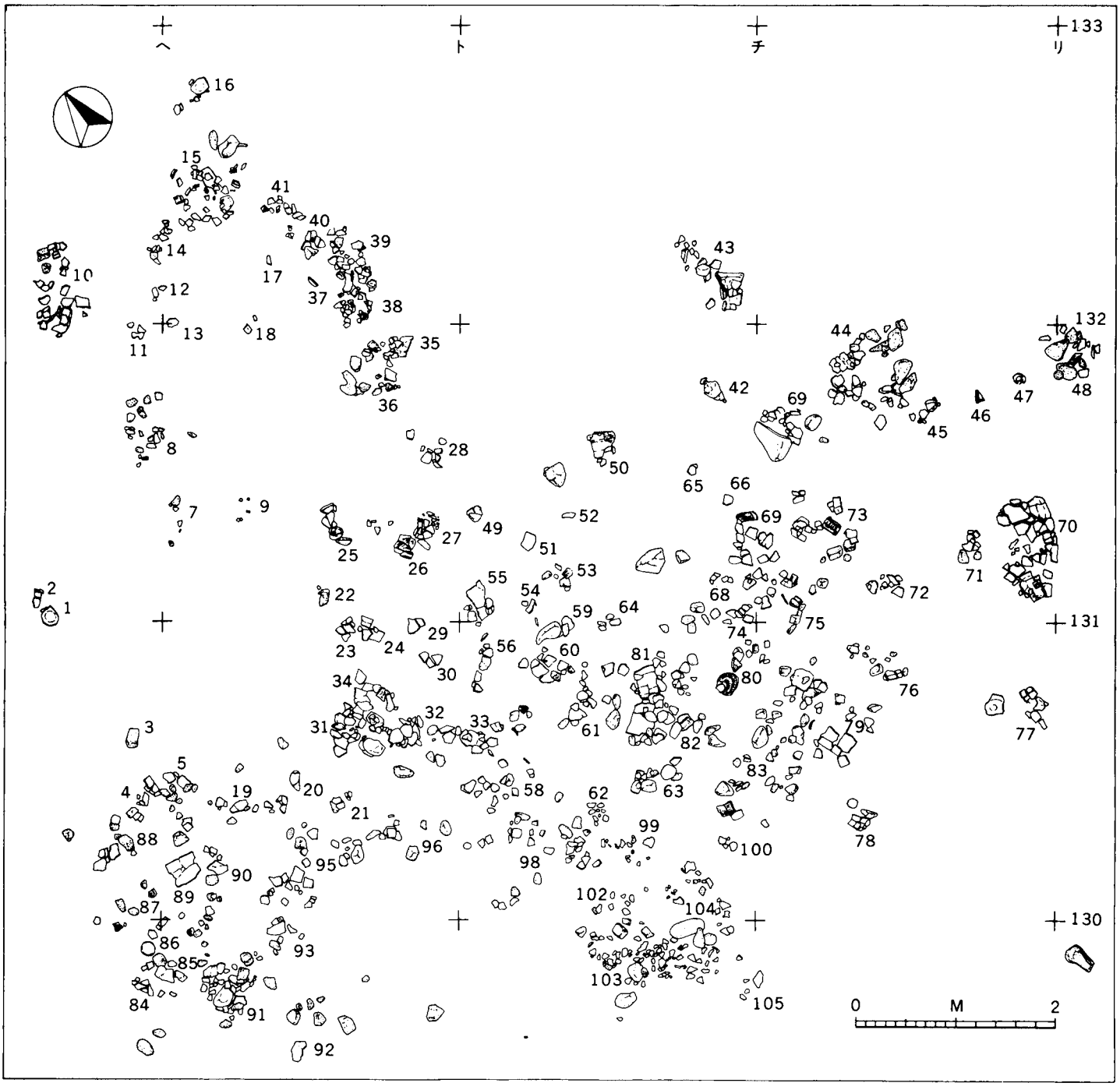
第4次調査は第1～3次までの成果から選地されたもので、桜松池の東方約80mから約130mの範囲におさまる。第1次調査時において検出された奈良時代の集落址の下層位に弥生時代・古墳時代前・後期の土器が出土し、さらに間層をおいて縄文時代中期前半の包含層が第3次調査によって新発見されており、現水田面から2m以上の堆積層の除去が必要と考えられた。また、湧水や現場作業の安全、層序の確定を含めて、長さ5mの先板工事を発掘区を「コ」の字状に囲い込む工法をとって行ったが、層序は不十分な形でしか記録がとれなかった。第1次調査時において検出された奈良時代集落址の地山面とした青灰色砂層は比較的に安定したベースであるが、15～25cmの層厚をはかるのみで、その下位にある10～25cmの水性植物遺体を含む黒褐色粘質土は水分を多量に含んでヘドロ状に変化し、土層観察用の畦畔をも支えきれない状況となり、畦畔そのものが崩壊してしまう結果となる。本次調査においても、矢板工事によって伏流する地下水および表層の水の流れは一定程度しめ出す事はできたものの、弥生時代後期の遺構検出面の下位にも黒褐色粘質土が約70cm以上にもわたって土層性質を微妙に変化させて縄文時代包含層をおおっていて、やはり地下水を引き上げてヘドロ状に崩壊していってしまった。そのために、縄文時代包含層との境は明快にはとらえきれていない。

発掘区は鹿島バイパスの道路センターから南東方向、石動山山麓を向いた側で、長軸50m、短軸12mの菱形の平面形を呈す。面積約600m²であるが、複数の包含層および排土量の莫大さから丘陵地形の発掘に比べて数倍になるであろう。

発掘区中央部分での基本的層序は、Ⅰ　耕作土（灰茶褐色粘質土、10～20cm）、Ⅱ　黒色砂質土層・黒色粘質土層（弥生～奈良時代遺物包含層、20～40cm）、Ⅲ　青灰色粘質土（20～30cm）、Ⅳ　黒褐色粘質土層（40～50cm）、Ⅴ　黒褐色粘質土層（縄文時代包含層、10～20cm）で、暗茶褐色砂礫土の縄文時代遺構検出面に至るが、各々の層位は砂粒の含み具合や色調によってさらに細分される。最終遺構面としたベースも地点によって変化し、灰褐色砂質土となっている所も見られる。水田面から最終検出面までは150～200cmをはかった。

調査箇所の南西端、長軸方向で約20mの範囲は、耕作土下層に近世陶磁器や流木を含む河道が北流するような状況で認められた。そして、砂粒を多く含んだ層の下位が黒色粘質土でヘドロ状に変化してしまうもので、泥土の中を手探りで弥生式土器を採集するような状況であった。第1次調査区に近い発掘区南西部分では上記のような状態で、奈良時代の集落址を検出できた青灰色粘質土のベースは、流出したか、あるいは形成されなかったかのいずれかであろう。なお、土器等の遺物を採集したあと、ヘドロとなった黒褐色土層の掘進は困難と判断して南西端部での作業を中止した。河道跡と推定できる地点は、発掘区北東端でもう一個所あり、北方向に向いて流れるものと理解できる。土層断面図(第6図)のG－Hラインで見ると、幅560cmまでを確認する事ができる。深さは約100cm程度で縄文時代の包含層にまでは届いてはいない。奈良時代以降の河道跡であろう。

南西地区では奈良時代の須恵器は黒色土上層で散発的に得られ、グリッドナンバー134ラインから北東部分へのびていないし、134ラインより南西側では遺構の検出はなかった。弥生時代の包含層は131ラインまでは青灰色粘質のベースを持つが、北東方向へむけて傾斜をつよめ、135ラインからは縄文時代包含層と直接的に重複するよう

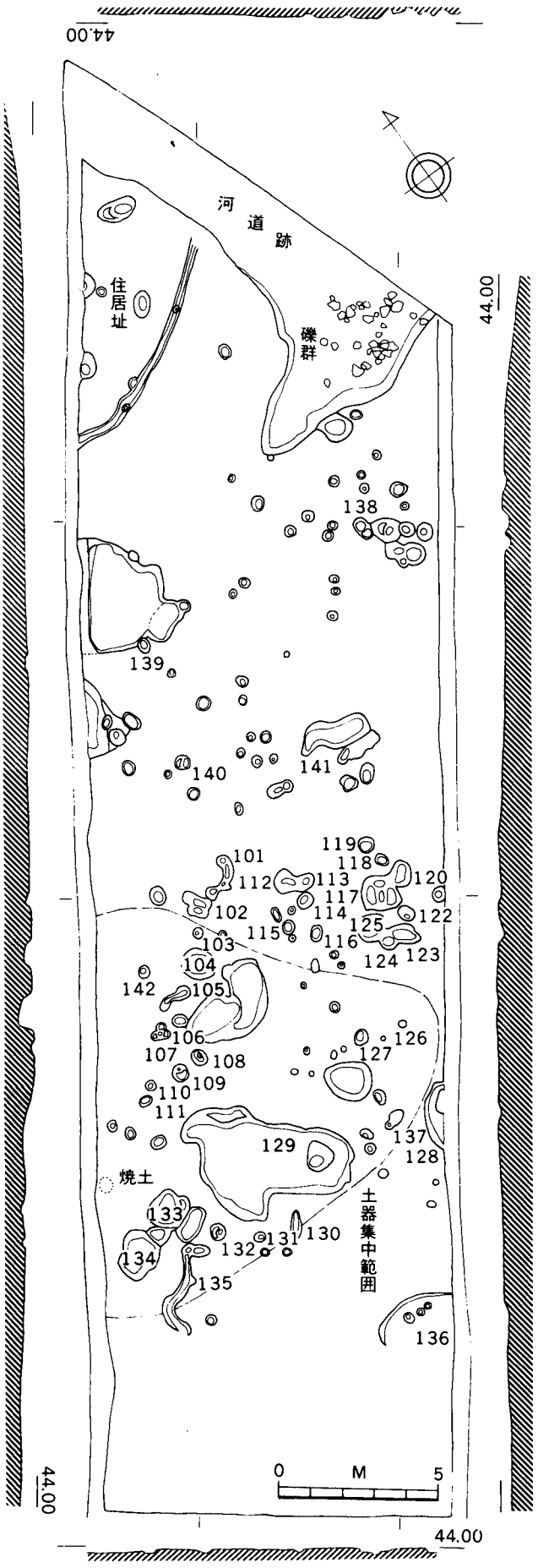


第7図　縄文土器出土状況平面図（1/60）

なかたちで堆積していた。包含層からは転倒したり直立した壺形土器の完形品が得られているが、136ラインから北東地区である。

縄文時代の地山面としたものは、134ラインを最高地点として、北東側および南西側にむけてゆるやかな傾斜面を持つもので、土器集中出土地点はその南西側の傾斜面肩部に位置する事になる。縄文時代の微地形としては、北方向を向いたわずかな微高地が尾根上に伸びていたものと理解され、第3次調査時における土器・遺構検出状況と直接的に結びつくと言える。さらに遺構と土器出土状況とも符合するようであり、137ラインから北東方向には極めて散発的にしか得られなかった事から現状での縄文時代の遺物・遺構が濃密な範囲は北東方向で約35mであるが、南西方向へは最下層まで調査がおよんでいない事からさらに広がりを持つ可能性は否定できない。扇状地形の等高線に直行する南北方向は厚い堆積層にはばまれて未知数である。

本次調査区の狭小な範囲での層序ではあるが、堆積状況を大雑把にまとめると、南北方向にのびる扇端部分の



第8図　遺構配置図（1/200）

微高地に縄文時代前期末から中期にかけての包含層が形成され、その後、滞水地帯としてヨシ等の水性植物が繁茂しては黒褐色粘質土を堆積させていく。その間には流水等による砂層を狭在させる。それらの上に、弥生時代のベースである青灰色粘質土が堆積し、包含層が形成される。奈良時代のベースの土層の下位には、やはり水性植物の繁茂した黒褐色土がおおう。遺構検出が容易である青灰色粘質土のベースは、全ての地区をおおうものではなく地点によって異なり、黒褐色粘質土層中に掘り込まれた遺構も想定しうると思う。中世においては長曽川に寄って集落が営われたものであるが、第1～4次調査においては所々に流木等を含む旧河道が走り、奈良時代以降の中・近世の時期の例が多い事から、それまで流水等による砂層の形成はあったにせよ大きく地勢を変化させるものではなく、石動山にかかわる開発の状況が変化し旧河道跡に見られるような大きな変化を惹起したのではないかと思われる。が、しかし、現在でも暴れ川の異名を持つ二宮川の形成した扇状地形の複雑な状況の一断面として、今後の他地点における調査成果を集積し課題として考えてゆく必要があろう。

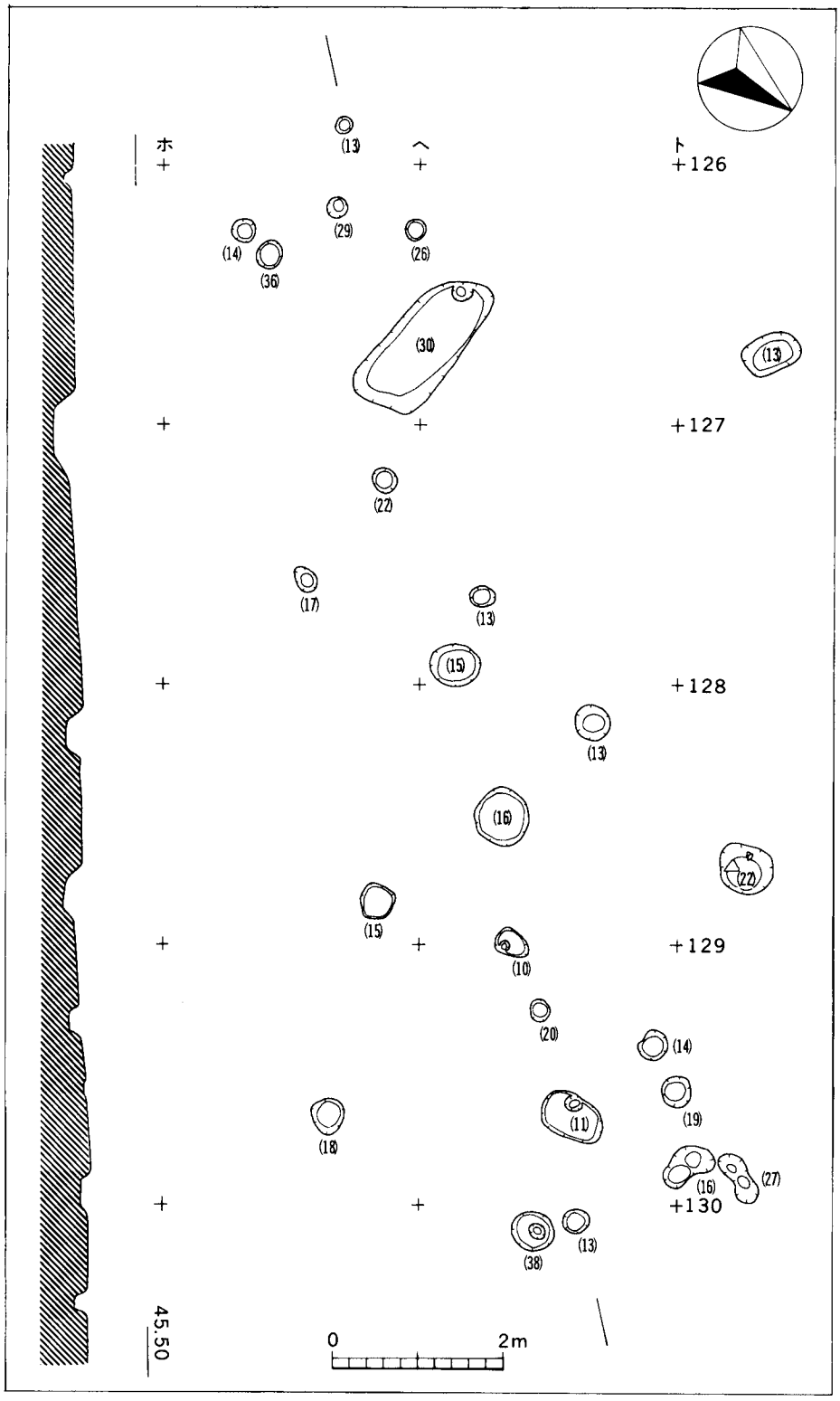
第2節　遺物の出土状況

奈良時代の須恵器・土師器は前節で記述したように散発的に出土するもので、集中する地区等は見られなかった。第1次調査区に近い125ラインから南西方向が多いように見られるものの、ヘドロ状となった包含層のために明快には言及しえない。散布範囲も限られており、134ラインから北東方向へはのびていない。

弥生時代・古墳時代の遺物は発掘区全面にわたり出土した。第1次調査区に近い127ラインより南西側の大区画、4－7・8区および4－6・5区の南西端においては小片となって散布しており、一定程度のレベルを保っていたようであるが、幾度も記述したごとく満足のゆく出土状況を作り得なかった事から印象的な状況を述べるにすぎない。それらの地区のなかで、土層観察用に残していた畦畔をとり除いたところ、写真図版6で示し

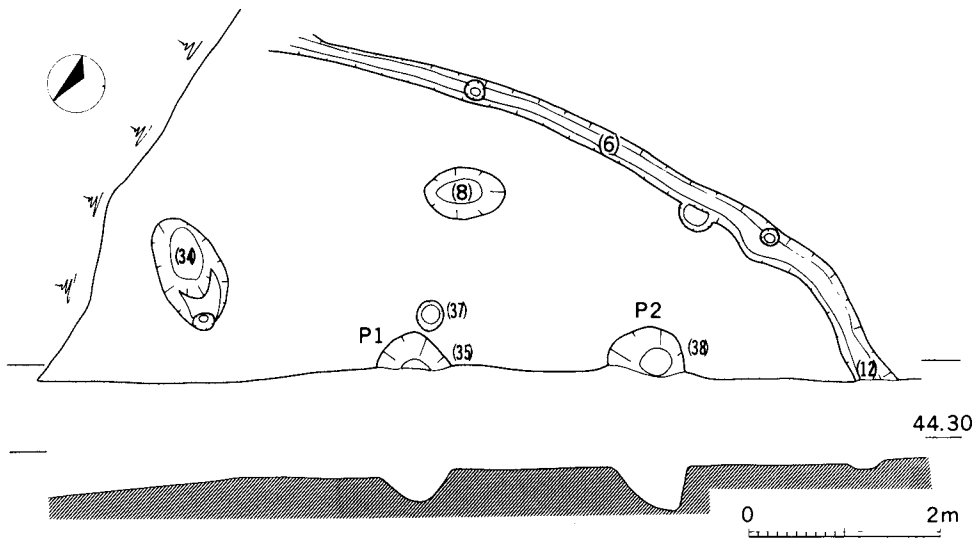
たように小片となって出土した地点も見られはするが、全体的なひろがりを持つものではない。発掘区の北東端部の大区画、４－１、４－２区で完形土器を得ている。ト36、ト37グリッドに２個の壺型土器が正位置で、若干の距離をおいて出土しているし、ヘ36グリッドでは横位置になった大型壺が見られた。前者の下層には住居址が掘り込まれているが、後者の周辺部分に特別の状況を示すものは得られていない。

縄文時代の遺物は、大区画の４－５・６区での出土量が多く、ついで４－３・４区が多く、発掘区北東部の４－７・８区では散発的であり量的には極めて少なくなる。遺構が検出できた灰褐色砂礫土層は133から135ライン

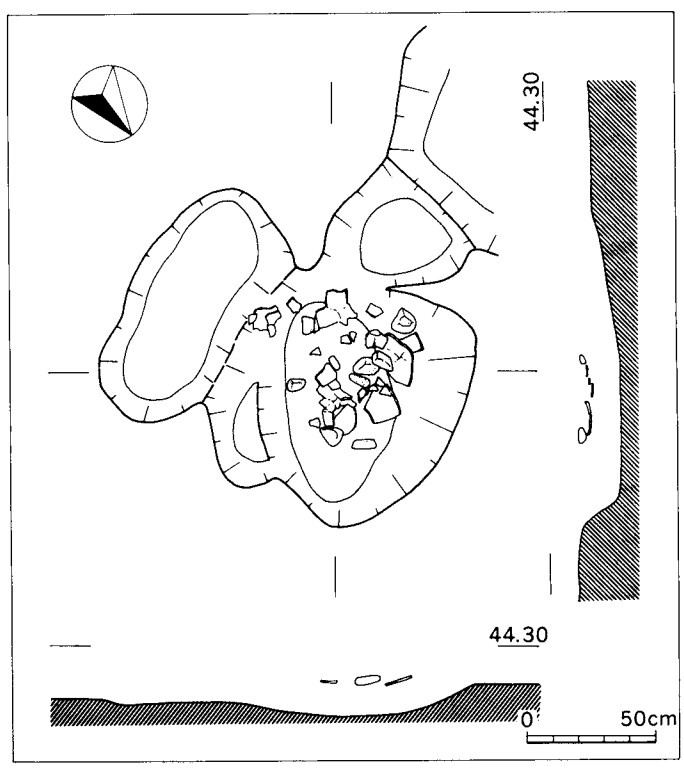


第９図　弥生時代の遺構配置図（1/80）

の内側が最も高くなり、北東方向、南西方向ともにわずかながら傾斜を持っている。その南西方向の傾斜面の肩部の地区で、全形を保つ深鉢や、平面的に押しひろげられた大型深鉢等をまじえた土器片が大量に出土した。133ラインから南西方向で、へ～リ133、へ～リ132、へ～リ131、へ～リ130、へ～ト129の18のグリッドにまたがり、略楕円形の平面プランを呈する。北西方向約11m、南西方向約12.5mの範囲内であり、第3次調査区方向へひろがりを示している。事実、第3次調査時に出土した土器と本次調査時の土器との接合が1例だけであるが認められている。土器が集中する18のグリッドのなかでも、リ132、チ131、ト131の東西方向にのびてゆくグリッドが特別に多く出土し、その周辺部分は若干希薄な状況を示している。土器片と共に人頭大から挙大の礫が多量に混在していて、整理箱で25ケース以上が得られたが、風化して表面がはっきりしないクサリ礫が多く、水洗作業のあと、敲打痕、磨耗痕を持たない礫は放置してきた。石皿は全てこれらの土器群に含まれていたもので占められる。



第10図　弥生時代住居址実測図（1／80）



第11図　縄文時代土坑実測図（1／30）

第3節　遺　　構

弥生時代の遺構（第9図）は、4－3・4区画の境を中心にして小ピット群が検出できた。約17m×約9mのごく限られた範囲に青灰色粘質土層がひろがっていて、小ピット群はその土層を切り込んでいる。青灰色粘質土層は北東方向に向けて漸移的に層厚を減じてゆくため同一レベルで見ると黒褐色土層となり、遺構の検出は極めて困難である。小ピットは径50cm前後のもの、径30cm前後のもので大多数を占めていて、深くなるものは少数で10～20cmまでの深度をはかるものが多い。ト137グリッドのピットから、復元完形となった器台が逆位の状態で出土した他、ピットから得られた土器はない。リ127とチ127グリッドにまたがる土坑は、平面プラン略長方形を呈し、長軸95cm、短軸40cm、深さ30cmをはかる。覆土は暗茶褐色粘質土で、土器片を少量包含していた。

最下層の遺構面は層序の項で記述したように、発掘区北東半で弥生時代の包含層と重複するようになり、地山面とした灰褐色粘質土層を切り込んだピットを見る事ができる。発掘区北西端部、ト139～141、へ138～141の7個のグリッドにまたがる溝にまかれるピット群を検出している（第10図、図版5）。弧状を描く溝は幅約20～30cm、深さ6～12cmをはかるもので、途中に小ピットをとり込む。弧状溝の内側に径約80cmのピット（p_1・p_2）が置かれており、柱穴と想定される。掘り方間は170cm、心々間250cmをはかる。溝は住居址の壁溝あるいは外郭溝と想定しているが、住居址の平面プランは不明である。なお、p_1の覆土中には完形品の鉢型土器が口縁を内側に向け斜め位置で出土している。

縄文土器が集中していた地区の下層には、土坑や不整形の落ち込み、焼土痕が見られるところから、生活の舞台そのものであった事がうかがえるが、明確な住居址はつかみ得なかった。チ131を中心とする不整形の落ち込み（129）や、リ129で検出した弧状にめぐる落ち込み（136）等を考えに入れて良いようであるが、壁の立ち上がりがゆるやかで内面に凹凸が目立つ点で疑問点が多い。

へ131グリッドの焼土痕から約1.5m南方で検出された土坑は比較的遺存状況の良い土坑である。遺物取り上げ番号を各落ち込みに付してあるが、133（第11図、図版10）がそれである。平面プランは略楕円形状を呈し、長径95cm、短径85cm、深さ18cmをはかる。周囲には幾つかの不整形プランの落ち込みが接し、土坑中央に礫をまじえて一括土器が集積していた。土器群と土坑床面とは直接的には結びつかない。床面は皿状を呈し、ゆるやかに立ち上がる。

註1　高堀勝喜「鹿島郡鳥屋町黒氏出土の木器について」1956石川考古学研究会々誌第8号
2　湯尻修平「鹿島町徳前C遺跡調査報告（I）」1978石川県教育委員会
3　高堀勝喜「鹿島町考古学研究のあゆみ」「鹿島町史」1982鹿島町
4　湯尻修平氏より教示をうけた。
5　谷内尾晋司氏より教示をうけた。
6　米沢義光「徳前C遺跡」「鹿島町史」1982鹿島町

第4章　出　土　遺　物

第1節　縄文時代の遺物

第4次調査で出土した縄文時代に属する遺物は、遺物整理箱で30ケースに近い量があった。出土状況は前節で記述したごとく、微高地肩部に足の踏み場もない状態で散布しており、遺物下には焼土痕や不鮮明ながら土坑、ピット多数が検出された。土器片が重なり合う状態のなかに人頭大から拳大の礫（石皿、打製石斧を混在）が規則性を持たずに見られるところから、流水等による自然的な力による堆積ではなく、縄文時代に遺棄された状況をそのままに示しているものと考えられる。土器の堆積は垂直的な視点で見ると包含層そのものが薄いものであり、上下関係での把握は困難と言わざるを得ず、水平的、面的な状況での判断を行った。出土土器は現在的な編年観では前期末から中期前半までのもので占められているところから、出土状況から見られる土器群のまとまりについては、章をあらためて記述する事とし、個別遺物の説明をしてゆきたい。なお、現地で平面実測を行なって出土地点のあきらかな遺物については、通し番号の他に採取番号を付した。第7・8図と参照されたい。

（1）　土　器・土　偶

土器の分類にあたっては、従来の編年観に沿ったものと、小島俊彰氏が珠洲郡内浦町新保遺跡出土土器を分類した際の器形を含み込んだ型式分類のふたつの方法をとっているが、破片をもできるだけ取り込んでいる為に、分類が煩雑になっている面が多い。御寛恕をいただきたい。

分類は文様を主たる群とし、器形を従たる類とし、大小による差、その他をＡＢＣで分類しているが、浅鉢器型、胴部片、底部等については細かく分類しなかった。文様帯のなかで口辺部に2種以上ある場合（半隆起線・爪形文を除く）には、上位置にある文様系列に含めている。

以下、群（主として文様系列）と類（主として深鉢の器形系列）の大まかな基準を記しておきたい。

第1群土器　前期末葉に含まれる土器
第2群土器　口辺部に格子目状文を持つもの
第3群土器　口辺部に縦位平行半隆起線文を持つもの
第4群土器　口辺部に軌軸文・逆位蓮華状文を持つもの
第5群土器　口辺部に連続弧線文を持つもの
第6群土器　口辺部に横位無文帯を持つもの
第7群土器　口辺部に縄文地文が残されているもの
第8群土器　Ｂ字状文を持つ胴部片のもの
第9群土器　類例の少ない文様をもつもの、および、口唇部突起
第10群土器　縄文施文の粗製土器
第11群土器　浅鉢器形のもの
第12群土器　胴部片および底部

1類　口辺がキャリパー形を呈する深鉢。2類　口縁が「く」の字形に内屈する深鉢。3類　口辺部が直立する円筒形の深鉢。4類　口辺の外傾する深鉢。5類　口縁がわずかに外反する深鉢。6類　口辺がキャリパー形を呈し、口縁が直立する深鉢。7類　口辺がキャリパー型を呈し、口縁が大きく外傾する深鉢。8類　外傾する口辺を持ち、口縁が直立する深鉢。9類　彭形の胴部で口縁が大きく内屈する深鉢。10類　「く」の字形に口縁の外反する深鉢。

第1群土器（第12図1～7、図版11・15）

縄文前期末葉に位置づけられるものをまとめた。

1と2は同一個体で、キャリパー器形となる大型品である。内傾する口縁基部には粘土の継ぎ目が見られ、2の破片ではその部分で剥離している。口辺にはV字状文、口頸部には山形文を幅3mmと小さな半截竹管で施文する。V字状文の施文は右方向でなされている。すなわち、斜めの細隆起平行線を引いた後に、横方向のものを引き、右側の斜線でとめる。口辺部の円形突起は細隆起平行線文を施文する前に貼付している。地文には縄文がかすかに窮い知られ、ナデ調整がなされている。胎土には微砂粒が多く含まれ、口縁を除く内面は丁寧にナデ調整が入れられている。

3は口径約34.5cm、現器16cmをはかる四個の波頂を持つ深鉢である。口唇にはほぼ等間隔に粘土紐が貼付される。口縁部には三角形の彫去を上下逆方向、交互に入れ、鋸歯状文をつくり出す。鋸歯状文の下には、横走する半隆起線を5条引きまわし、波状部分の真下に渦巻状文を施文する。渦巻文の中心部分へ巻き込む条線には彫去がなされ、おそらく半截竹管の外周部分をあてて、ナデ調整を施したのであろう。渦巻文間には密に半隆起線文が引かれ、間隙部には彫去が施される。口唇内面は若干肥厚して段ができ稜線が引かれる。色調は暗茶褐色から淡黒褐色を呈し、胎土は精選され、焼成は良好である。内面は丁寧にナデ調整が入れられている。

4は口径約20cmをはかるもので、細隆起平行線文を引いたあとに、口縁部と口唇内面に粘土を貼りつけ、口唇部に粘土紐を置く。三角形の彫去はヘラ状工具で行ない、粗くナデ調整を施す。

5は口縁部片であるが、器形を想定する事はできない。口唇部分が大きく肥厚し、向かい合せの三角形の彫り込みを入れる。細隆起平行線文で渦巻文をつくり、中心部分を円形に彫去し、周囲に斜行格子目文を充填する。平行線文を切るようにして、焼成前の穿孔が見られる。

6は口縁が内屈する深鉢で、縄文地文に細隆起平行線文を縦方向に施すが、横方向に引いた後に縦平行線文をめぐらす。施文の順序は上からである。口縁部には、ヘラ先を使用した沈線が入り、斜格子目文となる。内面は丁寧にナデ調整を施す。

7は波状口縁の波頂部分である。縦の隆帯の両側および口縁に平行し、撚紐の原体による押捺が施されている。口縁内部に細半隆起線文が引かれる。色調は暗褐色を呈し、胎土、焼成とも良。

第2群土器

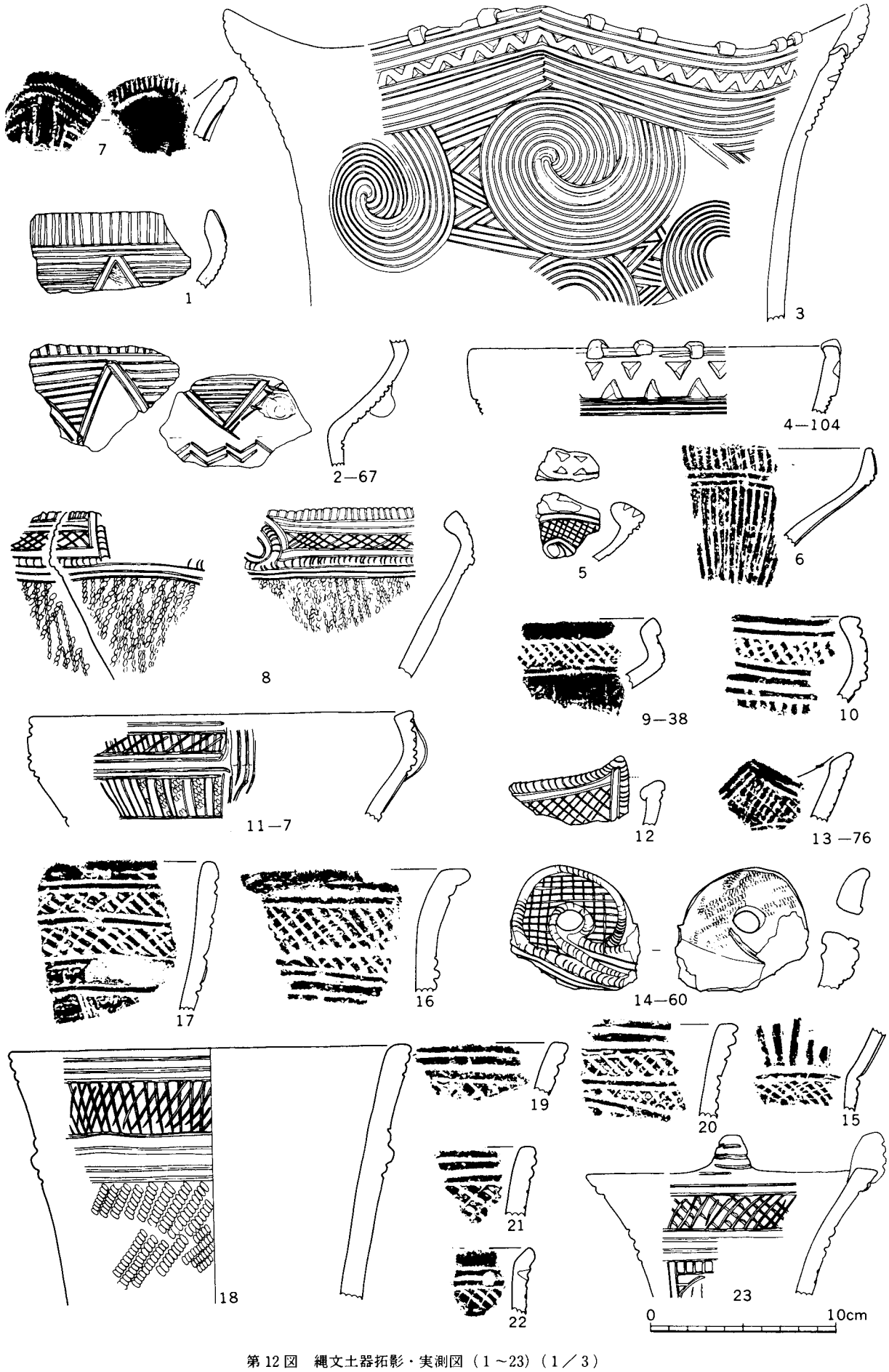
口縁部に斜位格子目文を持つものをまとめた。大部分が中期初頭の新保式土器に含まれるものと考えられる。細別は器形の相違を基本とし、第3群土器以下も同様である。

2類（第12図8・9、図版15）

口縁が「く」の字形に内屈する深鉢で、8は口径約21cm、現器高9.2cmを測る。2個の土器片は接合点が見つからず、平面的に表現した。屈折する位置に隆帯をめぐらし、口唇に向けて直線的にのびるものと、渦巻文？の外周をめぐるものが基本で、口縁端部は幅3.5mmの半截竹管で半隆起線を縦方向に引き、区画内を同一施文具を使い、右下り、左下りの順序で斜格子目文をつくり出す。以下には撚糸文を重ねて施文する。渦巻文の中には彫去は行なわれない。9は口縁端部を肥厚させ、段をつくり出し、屈曲部の半隆起線との区画内に斜位格子目文を施文する。以下には撚りの小さな撚糸文が見られる。色調は暗褐色ないし灰褐色を呈し、8の胎土には砂粒が目立つ。

1類（第12図10・11、図版15）

口辺がキャリパー形を呈する深鉢で、10は幅6mmの竹管で斜格子目文および縦位平行線文を入れた後に、横方向の半隆起線を引く。口縁端部内面を肥厚させるが、11では逆に外面が肥厚する。口径約21cmをはかり、口縁



第12図　縄文土器拓影・実測図（1～23）（1／3）

部分に突帯を置き、下位に渦文？がつけられるようだ。半截竹管による施文順序は10と同様であるが、地文に縄文が置かれている。内面は横方向のナデ調整を施す。11の胎土には石英、長石の砂粒が目立ち、10には金雲母が見られる。

11類（第12図12～15、図版15）

器形を判別できないものをまとめた。12は突起部分で、垂下する隆帯上の爪形文が上向きになっているのが注意される。口縁内面が大きく肥厚し段をつくる。13は波状口縁の波頂部と推定される。口縁部分の爪形文が磨耗して、拓影には十分にでていない。14は大型の突起で円形の窓を持つ。基隆帯からやや細目の隆帯で縁取りし、横方向に半隆起線を引いた後で、浅く縦方向に引き格子目文をつくるが、現資料ではさほど目立たない。内面の調整は粗く、弱く斜縄文が施文されている。15は大きく外反する口縁を持つもので、縦方向の粘土紐を貼付した特異な土器である。施文の順序は上から下へと行なわれている。胎土に砂粒が目立つ。

3類（第12図16～23、図版15）

口辺が直立ないしわずかに外反するものをまとめた。大型品から小型品までを含む。17の斜格子目文の左下りの沈線は、上段、下段と別々に引かれヘラ先を使用している。基隆帯は剝落し、胴部は撚糸文を使用している。20の斜格子目文は三段に分断しているが、横走する半隆起線は最後に引かれたもので、右端に円形文をつくり出すようだ。18はバケツ状を呈する器形で、口径約22cm、現器高14cm、器壁厚1.3cm をはかる。竹管の幅も広く6.5mmである。口辺と胴部の境には隆帯が一条置かれていて、胴部は太い縄文が施文される。16は大型品と思われるもので、磨耗が進んでいるが、口唇部分の隆帯の爪形文、右端では縦に区画する半隆起線文を見ることができる。23は円柱状の突起を持ち口径約16cm、現器高7cm をはかる。胴部以下にも半隆起線の文様で埋めつくされているようだ。色調は暗褐色を呈し、胎土に大きな砂粒が含まれ、本類のなかでは最もよくない。22には焼成後に穿孔しようとした痕が見られる。円錐状を呈し、底部は円く平坦に見える。19・21が中型品で、22は小型品であろう。

第3群土器

口縁部に縦方向の半隆起線文を持つものを一括した。そのなかで、曲線文、半隆起線山形文、区画文、縄文地文の有無、半隆起線の間隔等を考え細別を行なった。

キャリパー器形を呈し、縄文地文の口辺部に縦方向の平行半隆起線文を主文様とするものをまとめたが、口辺の形状に微妙な違いや平行線の間隔、突帯・突起の有無、胴部に施文される縄文や撚糸文など細かく見れば、細分類ができそうである。新保式期との違いは平行半隆起線の間が狭くなる事があげられよう。

1類A（第13図24～26、図版11）

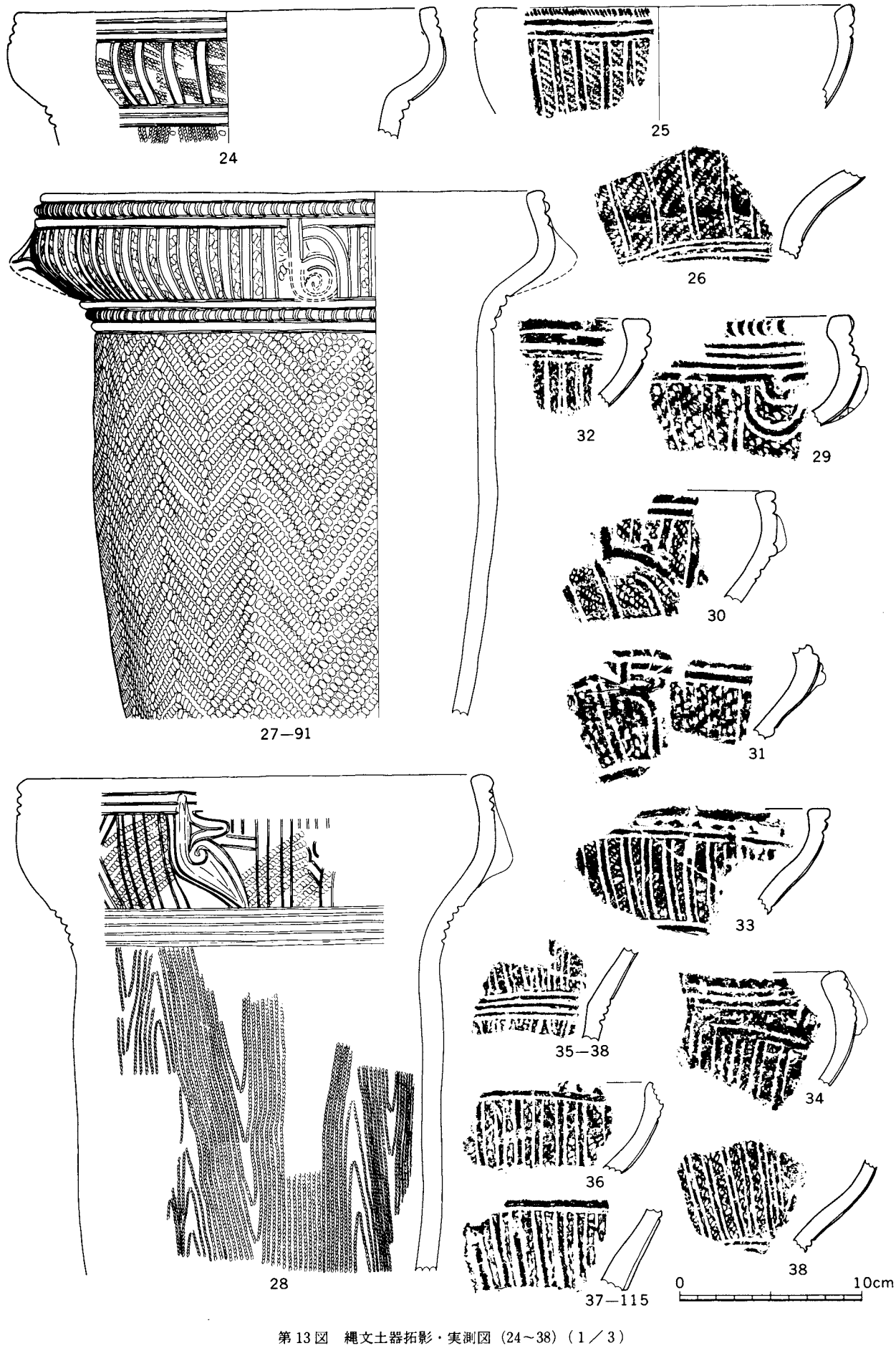
24～26は平行半隆起線の間隔が比較的広くなっているもので、本遺跡においては少数例である。24は器厚1.3cmの厚手の土器で、内屈気味の口辺部には横方向の撚糸文が施され、頸部以下では縦の撚糸文となっている。内面の調整は粗雑であり、胎土には砂粒が多い。口径約23cm。25は口唇部分が肥厚するもので、爪形文や竹管の引き方は丁寧である。黒褐色を呈し、内面の調整は入念である。口径約21cm、現器高5.7cm をはかる。26は頸部片で、細目の半截竹管を使用している。

1類B（第13図27～17図58、図版11・15・16）

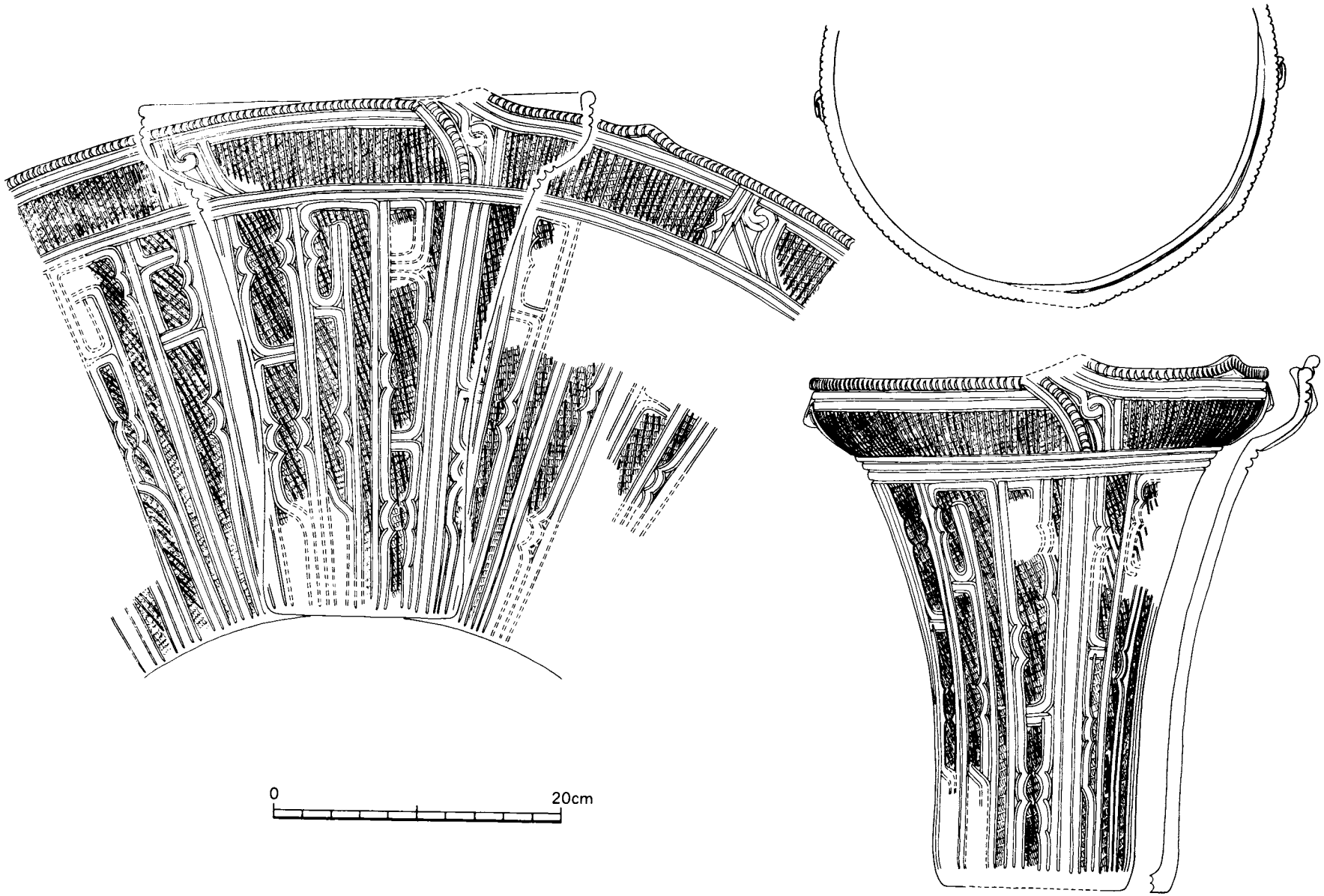
27は口径約28cm、現器高29cm をはかる。口辺部中央に頸部と口縁を結ぶ隆帯があり渦巻文をつけて突出する。4単位と想定してみた。頸部以下には羽状縄文がすきまなく施文される。

28は口径約26.5cm、現器高26.5cm をはかる。頸部と口縁を半隆起線で区画し、隆帯で縦につなぐ。本例を含めて縦の隆帯は直下ないしは右流れになる例が多く、文様の施文も右側に片寄る傾向が認められる。爪形文が全て「C」の字形になる事や、半隆起線文が上から下、左から右へと展開する点と共に注目に値しよう。区画内の半隆起線の文様の展開は判然としないが、曲線文を造り出すようだ。口辺部は縄文、胴部は撚糸文と分けて施文する。

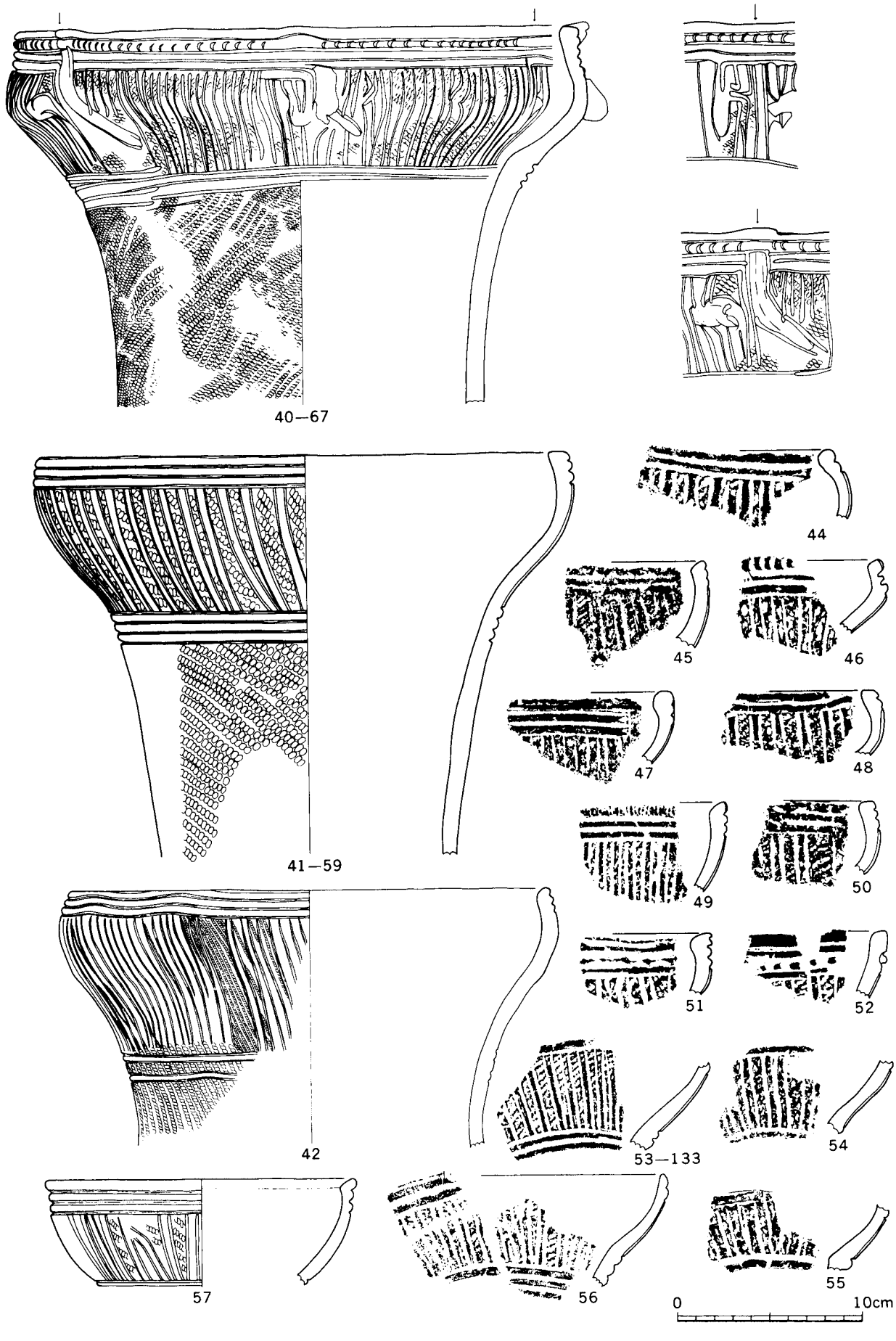
29～31は口辺部に突起を持つものであるが、30・31は口縁から小さく降下し右方向へ動くもので、29は横の半



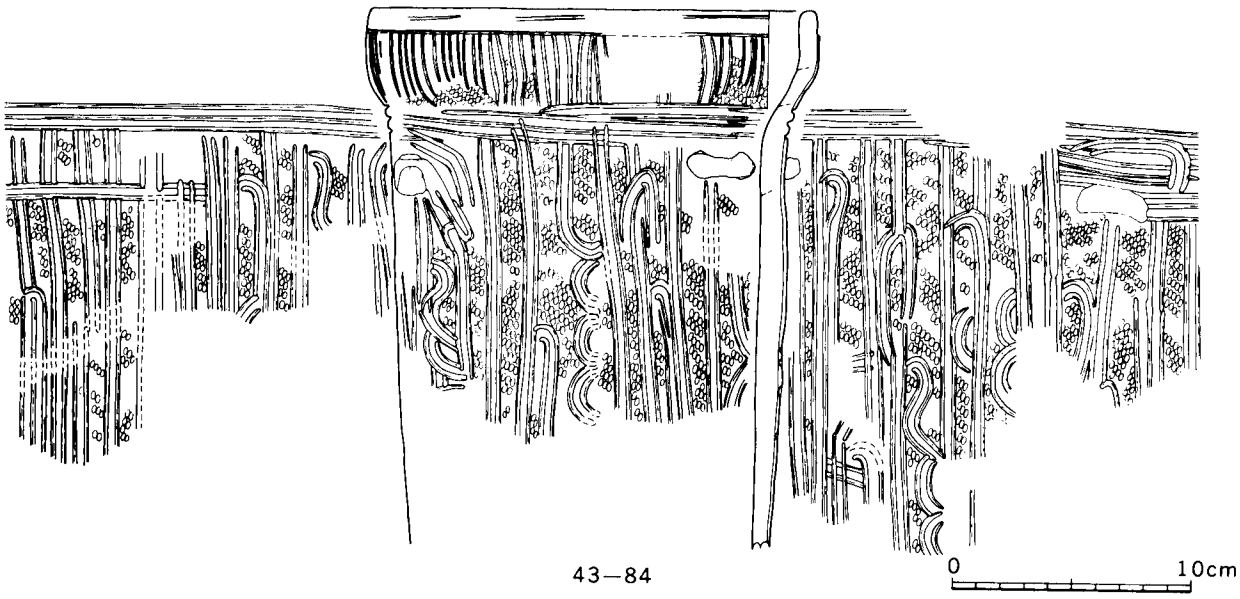
第13図　縄文土器拓影・実測図（24～38）（1／3）



第14図　縄文土器実測・展開図（39）（1／4）



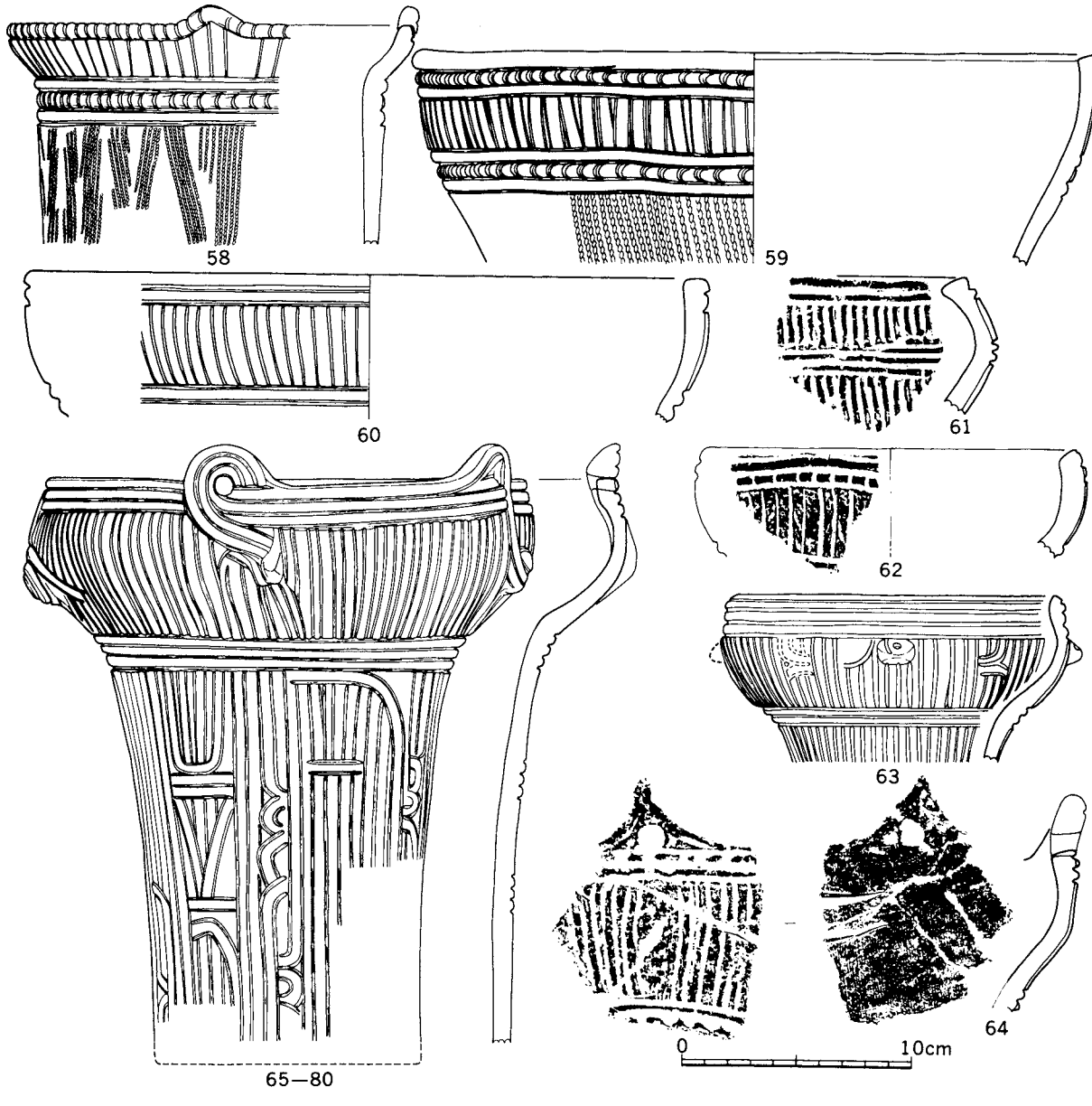
第15図　縄文土器拓影・実測図（40～42・44～57）（1／3）

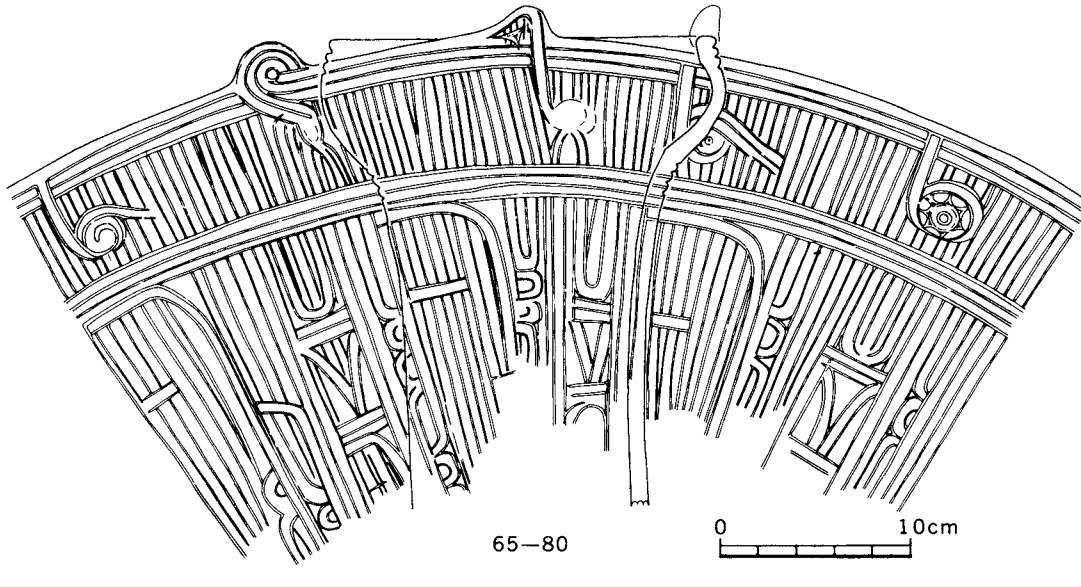


第16図　縄文土器実測・展開図（43）（1／3）

隆起線が小さな「し」の字を造り出し、それをとり囲むように半円を半隆起線で引く。突起部分はいずれも低いものである。33は縦の隆帯のつく口唇部が、より厚く盛られており、全体に前方へせり出すようになる。爪形文は小さく切るのではなく、引きのばすようにしてつくられる。34にも縦の隆帯が置かれている。35には胴部の撚糸文施文が見られる。32・34は器肌は荒れているが、他の資料の内面は丁寧なナデ調整が入れられている。

39は全体をうかがえる資料で、口径約32cm、器高37.5cmをはかる大型品である。文様帯を頸部を境に上下に分け、口辺部に基隆帯を中心にして密に竹管を引きおろす。右下りの爪形文を持つ基隆帯は胴部の半隆起線とつながり、胴部文様を4分割する。さらに点々とはねる縦の半隆起線によって4分割される。縄文地文の残る区画内には斜めの沈線が引かれる。口縁は2個の小波状を呈しているが一方の形状は不明である。口縁の爪形文を持つ隆帯下の半隆起線が、縦の隆帯を境にして上下に1条ずれているのが注意される。色調は口辺部、暗褐色、胴部褐色を呈し、胎土には粗砂粒が多く混じる。40は口径約31cm、胴径約24cm、現器高約20cmをはかる。口縁部破片として約2分の1が接合できただけなので、破片として孤立した突起1個を含め4個の突起・突帯を知るが、4個以上になる可能性も考えられる。突起は4個それぞれで異なる形を示し、図示した左端は口辺の突起と口縁から「し」の字状に降りる隆帯でなり、中央のは口辺と口縁の上下に突起をつけ連結しない。右端のは口縁まではのびずに半隆起線の下から一方が下がり、他方は右方向へ流れる。図示しなかったものは口縁から太目の隆帯をおろし右へ流れるもので、左方向の突起との間に横方向の半隆起線をのばす。他の器面では見られない施文である。頸部の半隆起線にズレが認められるが、右方向に引きまわしたようだ。41は口径約29cm、胴径約20cm、復元器高22cmをはかる。口縁は全体の2分の1ちかくを得ているが、縦の隆帯を想定する事ができない。同じ器形パターンを持つ42は全体の4分の1強ではあるが、隆帯は存しないようだ。口辺部内面の調整は入念だが、頸部以下の調整は粗いナデで止めている。口辺部と胴部の撚糸の太さが異なるのが注意される。口径約27cm、現器高13.5cmをはかる。43は底部を除いて全形を見れる資料である。口径19cm、現器高22.5cmをはかる。口縁、胴部ともにＲＬの斜縄文を施し、頸部で文様帯を上下に分ける。口辺の施文は縦平行半隆起線文のあとに口縁部の施文を入れる。隆帯、突起はつけられてはいない。胴部には3個の突起が貼付されるが、剝落している突起から横に半隆起線がのびて、胴部を横に区画しようとしている。曲線文の施文は比較的自由で、単位を見る事ができない。外周での色調は淡黒褐色を呈し、内面は茶褐色を呈する。口辺部、頸部内面は横方向のナデ調整を行ない、胴部以下は斜めにナデ調整を施す。胎土、焼成とも良好。44～52は中・小型品の口縁部である。46は内傾度が強いようだ。49の爪形文は器面に当てる角度を小さくして引きのばすタイプで、52は器面に直に当てて右へねじるようにし、小突起を並べたようにするタイプである。46の爪形文は丁寧に引かれている。縦の隆帯を





第17図　縄文土器拓影・実測図（58～65）（1／3・1／4）

想定させるものに47が上げられる。内画の調整は48・51をのぞいて入念に行なわれている。

53～55は口縁端部を欠いているもので、55では胎土に粗砂粒が目立つ。

56は口縁端部が薄くなってゆくタイプで、やや特異な器形である。

57は口径約17cm、胴径11cmをはかるもので、口縁端部が外へのびるようになり、内面に稜ができる。胎土、焼成とも良好。

58は図上復元をした土器で、口径約18cm、現器高10.5cmをはかる。口辺部分にも撚糸文がかすかに見る事ができる。外周には煤の付着がある。

第1類C（第17図59～65、図版11・15・16）

縄文、撚糸文を口辺部に施文しない類をまとめた。

59は口径約30cmをはかる頸部がゆるくくびれる器形で、頸部以下に撚糸を施文するもの。60も同様のタイプと見られ、口径もほぼ同じである。61は内傾する口縁部を持ち、口唇部側が肥厚する。内傾する位置に横方向の半隆起線をまわし、上下二段に分けているが、縦方向の半隆起線は別々に引かれたものである。62は口径約16cmをはかる。64は三角形の突起をつけ、円形に窓をつけるもので、その直下の口辺部に突帯を持つようだが、剝離のため形は不明である。63は口径約15cm、現器高約6.2cmの小型品で、全面を半隆起線で飾る。口辺部上部に突起がつけられ、上向きに刺突が加飾される。

65は底部を欠いて逆立した状態で発見されたもので、口径約21cm、胴径14.5cm、現器高26cmをはかる優品である。三角形と半円形の突起を持つが、全体で2個のみであり、口辺部隆帯の5個のうち2個とつながるだけである。三角形の突起には三角形の彫去がなされ、沈線が引かれる。半円形の突起には穿孔が施こされる。口辺部は5個の突帯がつけられているが、磨耗のため1個の加飾を見るだけであった。円形の突起は中央に円を描き、三角形を連結して彫去を施す。頸部には半隆起線を引いて胴部と画し、胴部には3単位と想定できる縦の分割を行なう。施文は左から右方向になされ、1単位として次の文様が考えられる。頸部から右へ孤線をのばし胴部に下がる。その間を縦半隆起線でうめ、一部に横方向のそれで分断する。これらの右側にB字状文でうめ、その隣に三区画に分け、上から縦長の「U」の字状、「V」の字状の半隆起線を引く。口唇からの単位は2、5、3単位と数えられるものの、最も単位を意識しているのは頸部以下の3単位と見る事ができる。胴部単位を上にのばし口辺・突起を見ると、展開図の左から突起1、突帯2、胴部文様帯1、中央は1・1・1、右は0・2・1となっている。単位の文様については、別の視点を立てる事も可能であろう。

1類D（第18図66～68、図版16）

曲線文を施文するタイプをまとめたが、量的には少ない。

66は口辺に山形文をつけ、上から下へ曲線文を施文する。地文にLRの縄文が見える。66は口径約24.5cmをはかる。口縁から隆帯をおろし、周囲に曲線文を引く。肌面の荒が著しく、地文の状態は不明である。68は頸部片であるが、LRの縄文地の上に向い合せの孤線文が認められる。

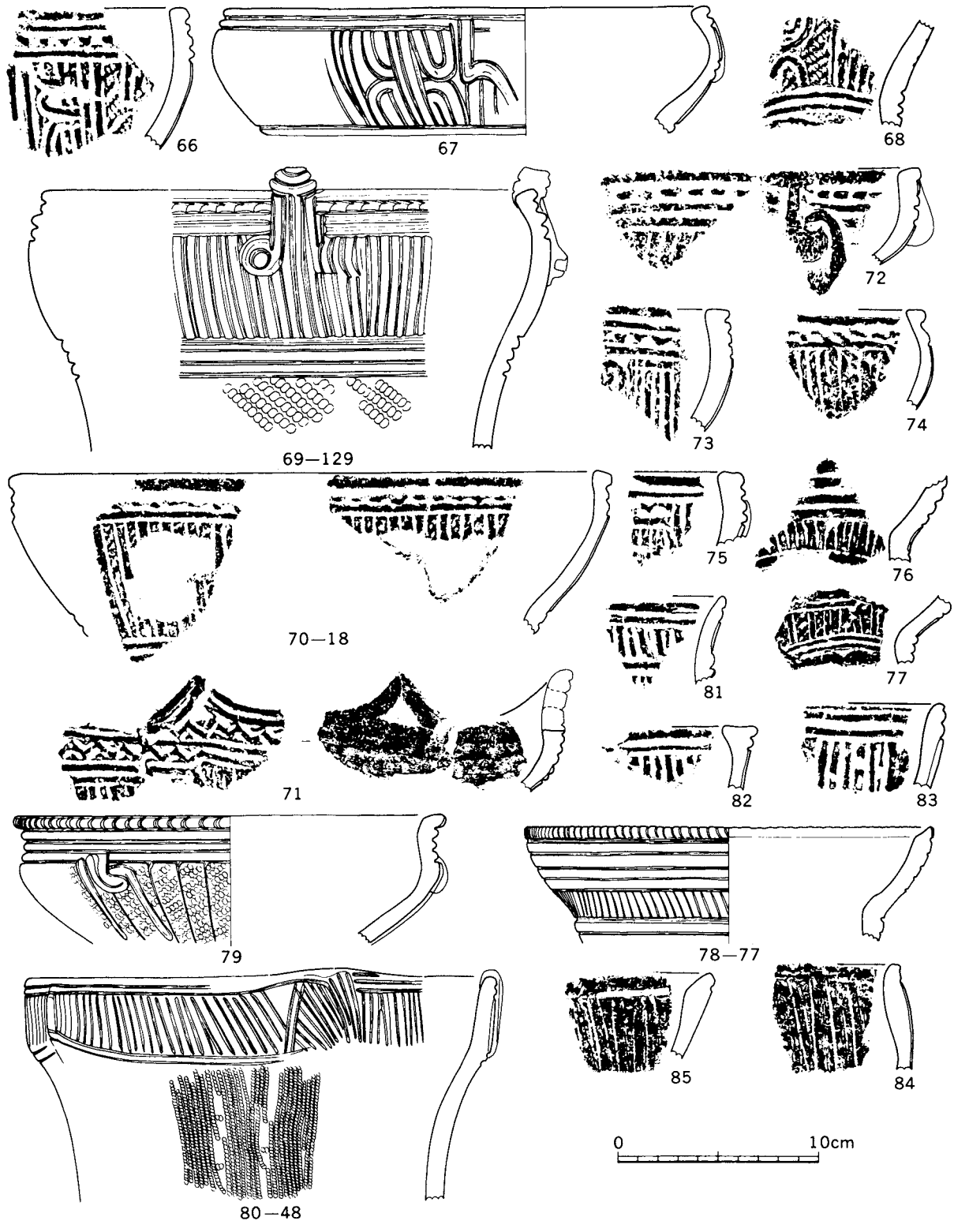
1類E（第18図69～75、図版16）

口縁部に山形文が見られるものをまとめたが、爪形文に近いものも含めた。量的には少ない。

69の山形文は右方向へねじり込むようにして引かれていて、縦平行半隆起線文を山形文の下付近から引きはじめており、後で横方向の半隆起線を引き足している。口縁突起から口辺へ2本の隆帯をのばし、左右に異なる突起につながる。頸部以下には太目の縄文を施文する。口径約25cm、現器高13cmをはかる。色調は暗灰褐色を呈し、胎土に砂粒は少ない。70は口径約30cmで69と同じような山形文を施文する。縄文はLRと見られる。70はジグザグに半截竹管を引き、明確な山形文をつくり出すもので、三角形の突起を口唇につける。窓はやはり三角形となる。口縁を見ると山形文の入る位置にズレが生じているのが認められ、小波状の突起がつく場合のひとつの特徴とすることができよう。72・75には突起が貼付されている。

1類F（第18図76～78、図版16）

口辺部に横方向の半隆起線文を主文様とするタイプをまとめた。



第18図　縄文土器拓影・実測図（66～85）（1／3）

78は口径約20.5cmをはかる。口縁部が外展し、端部が尖り気味になるもので、半截竹管で引く縦の沈線が密に引かれる。76では縦の沈線部分が、全体にくぼむような状態となっている。黒褐色を呈し、砂粒は少ないが焼成は良くない。

1類G（第18図79、図版16）

口径約21.5cmをはかる。口縁端が外へ肥厚し、口辺部の縄文地にヘラ先による縦の沈線を間隔を置いて引きおろす。上端には小さな三角形の彫去を施す。粘土紐を貼付した隆帯2本を垂下させ上端に突起を付す。暗茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良。本遺跡では1例のみの出土で、周辺地域との関連を考えるうえで重要な意味を持つ。

4－5区土器集中個所の下層から出土している。

8類（第18図80、図版16）

口径約23.5cm、現器高11cmをはかるもので、口辺がわずかに外にひらき、口縁が直立して立ち上がる。口辺の縦の隆帯は2個までを見る事ができるが、全体では4個ではないかと思われる。縦の隆帯間をゆるくカーブした半隆起線がつなぎ、区画内を細身の半截竹管（4mm）を使い密に半隆起線を引く。頸部以下は撚糸文を施文する。淡黒褐色を呈し、胎土は良好である。器表面は磨耗が進んでいる。本類も1点だけの出土であった。

1類H（第18図81～85、図版16）

その他の類をまとめた。83・84の口縁部片は先端部が薄くなるものではあるが、半隆起線の引き方が弱く擦痕状の沈線となっている。

第4群土器

口縁部に狭い横走する文様帯をつくり、ヘラ先を使用して細く縦の沈線を入れて横走する沈線で等分に断ち、所々に三角形の印刻を施すもので、軌軸文と仮称する。連続した三角形の印刻を施した場合は蓮華状文の祖形と考えられる文様をつくり出す。それはほとんどの場合、逆転した蓮華状文である。厳密に分類するならば、逆位蓮華状文と軌軸文とは分離すべきであろう。本遺跡での軌軸文を見ると、爪形文をともなう例が少ない傾向を知る事ができる。

1類A（第19図86～104、図版16・17）

口辺がキャリパー型を呈する深鉢で、横走する無文帯を持たず縦半隆起平行線文をともなうものをまとめた。

88～90は口縁が内屈し口唇部が肥厚するもので、87では文様帯を丁寧に描出している。半隆起線文にはさまれた0.9cmの無文地に、縦位沈線を引き並べ正位三角形印刻文を置く。4個並置した横に横走沈線で縦位沈線を上下に分断し、横走沈線に沿って逆位三角形印刻文を施す。89では横走する沈線が2～4本見られ、半截竹管を使用しているようだ。89では粗雑な引き方をしている。

86は大型土器で口径約44cmをはかる。頸部がわずかにくびれて口縁が内屈気味となるもので、縦位沈線と正位三角形彫印刻で成っている。逆位の蓮華状文である。口唇部から幅広の貼付隆帯上にも同様の施文が入る。縦平行半隆起線は両側面を同じ力を入れたものではなく、右側の引く力を加減しているのが注意される。口縁部はLRの斜縄文、頸部以下は撚糸文を施す。器厚1.3cm、竹管幅は0.7cm。色調は黒褐色を呈し、胎土は良好である。口縁内面は横ナデ、光沢を持つ部位も見られる。87の文様は粗く、左流れの沈線文に逆位三角形印刻文を施す。縦位平行半隆起線文は85と同じタイプである。頸部以下は撚糸文が施文される。

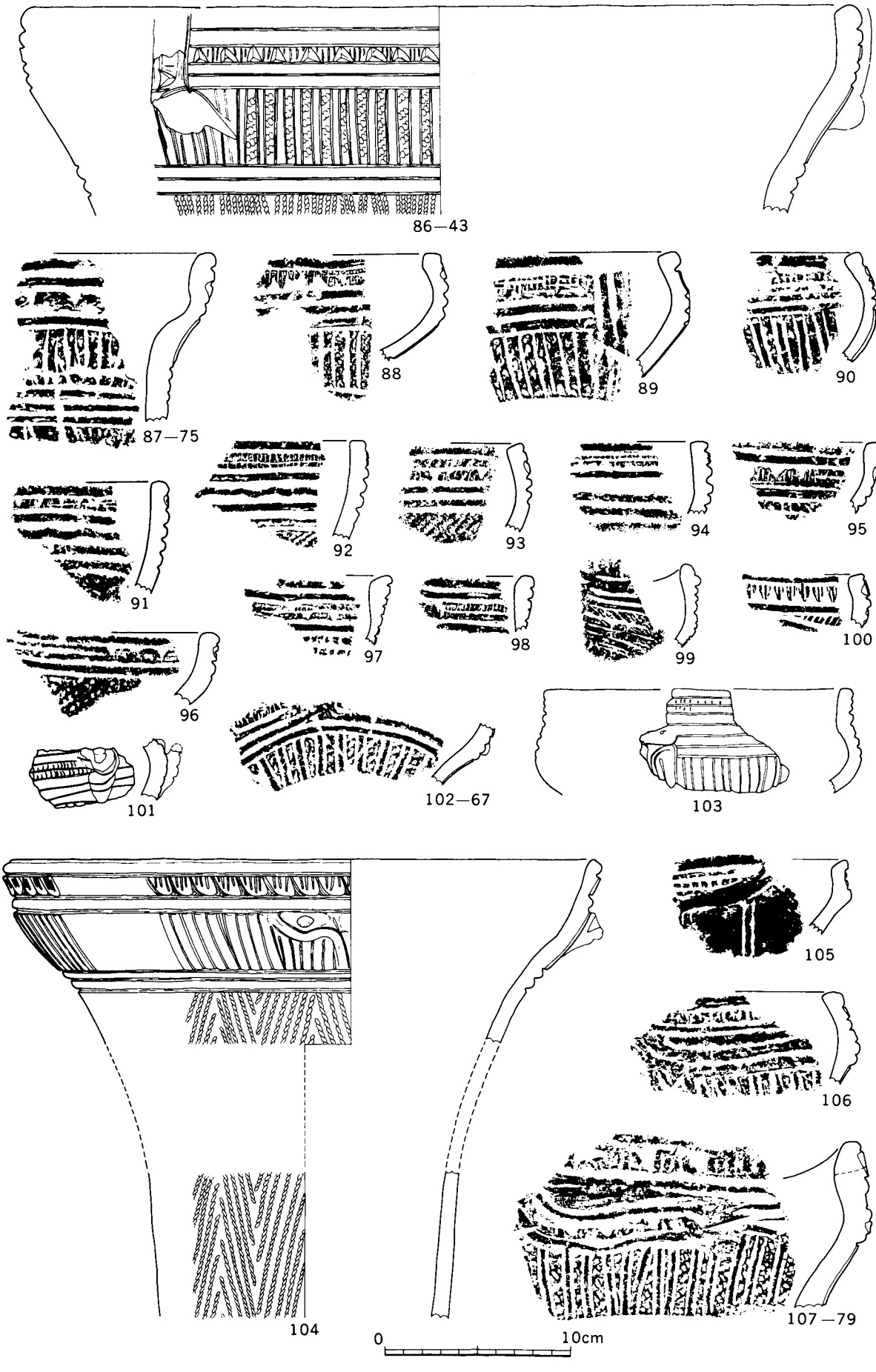
91～100は口縁部片で、91・92には蛇行する半隆起線文が、94では半隆起線文1条分が半截竹管で印刻され、表側を利用してナデ調整を施している。95・97には爪形文が見られる。99は小型品と見られ、小波頂をつけているようだ。縦位沈線が右下りに流れている。100は逆蓮華状となるもので、斜行する半隆起線文との間隙には沈線が埋められている。

101は口縁部を欠いている突起を貼付するもので、両側に軌軸文をめぐらす。突起には上からの刺突が入る。102はやはり突起を貼付するタイプである。

103は口縁部が直立するもので、口径約16.5cmをはかる。突起は横位に粘土紐を貼付し、さらに粘土紐を垂下させる。104は胴部に撚糸文をつけるもので、口径約32cmをはかる。口縁部には縦位短線を引いて、正位三角形印刻文を並置する逆蓮華状文をつくり出す。突起は上向きに貼付し、円錘形状に彫り込む。暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒が目立つ。

2類（第19図105、図版17）

1点だけであるが、口縁が「く」の字形に内屈する深鉢である。口唇部が外へ肥厚し、口縁からのびる隆帯に区画された所に軌軸文を施文する。隆帯両側面に刺突列点文状に見えるものは、半截竹管の両端部圧痕であるが、



第19図　縄文土器拓影・実測図（86～107）（1／3）

爪形文を意図したものではないようだ。口辺部には間隔をもって半隆起線文を垂下させ、間は無文部とする。灰褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。

1類B（第19図106・107、第20図108～119、第21図137～139、図版17）

口辺がキャリパー状を呈する深鉢で、軌軸文、六角形鋸歯状文、逆位蓮華状文を口縁に刻み、横位無文帯をともなう類をまとめた。

106は縦位沈線を半截竹管で引くもので、他の施文は加わっていない。横走する隆帯との間に狭い無文部がつくり出されているもの。107は大型品で、同じように横走する隆帯との残部を無文部として処理するものである。口辺部文様帯を二段に分け、口縁に縦位沈線と逆位三角形印刻文を組合せ、口縁からの貼付隆帯が「し」の字状に下がり、端部が横に長く伸びて突起を付すが、剝離している。貼付隆帯上には三角形、円形刺突が加えられる。器厚14mm、竹管幅6mmをはかる。地文にはLRの斜縄文が施文される。

108～114では文様帯としての無文帯が明快となっている。108・114ではヘラ調整を施しているのが観察できる。115でも隆帯に伴なう残部処理的な無文帯ではないようだ。108には「U」の字状の突起が貼付され、沈線と三角形印刻文で半隆起線のなかをうめる。口縁部の軌軸文にはヘラ先を器面に向けて角度が小さくなるようにして入れ、押圧するように三角形印刻文をつくり出す。無文帯には横方向のナデ調整を入念に施している。暗褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。109では円形の突起から右方向へ隆帯が流れ、細長の隆帯間には口縁部と同じ三角形印刻文が描出されている。無文帯部分は器面を削り取ってつくり出しているのが認められる。110は口唇部が肥厚するもので、無文帯をはさんで二段の逆位蓮華状文が付されている。内面の調整は丁寧である。111もやはり口唇の肥厚するタイプで、口辺部文様帯を軌軸文、横位無文帯、縦位平行半隆起線文の三段に分ける。口縁からの貼付突起の両側面には刺突がなされている。内面のナデ調整は入念である。112は半円突起を持つもの。114の三角形印刻文はヘラを器面に対して角度を大きくして彫去したもので、深く削りとられ、はっきりした花弁状となるもの。

116は口径約23cmをはかる。口縁部が肥厚し、口唇に橋状突起をつけるもので、橋状突起上面にも、口縁部と同様の施文を入れる。口縁の無文帯には貼付突起がつけられ、橋状突起との間を半隆起線でつなぐ。口縁部は黒褐色、口辺部下半が茶褐色を呈し、煮沸の状況をうかがわせる。口辺部内面には炭化物が付着している。117は口径約22.5cmをはかり、全体に磨耗が進行していて細かな文様、調整等は観察できないが、口縁と口辺部下の三角形押圧文を見る事ができる。無文帯上には2個1対の粘土紐貼付による突起がつく。

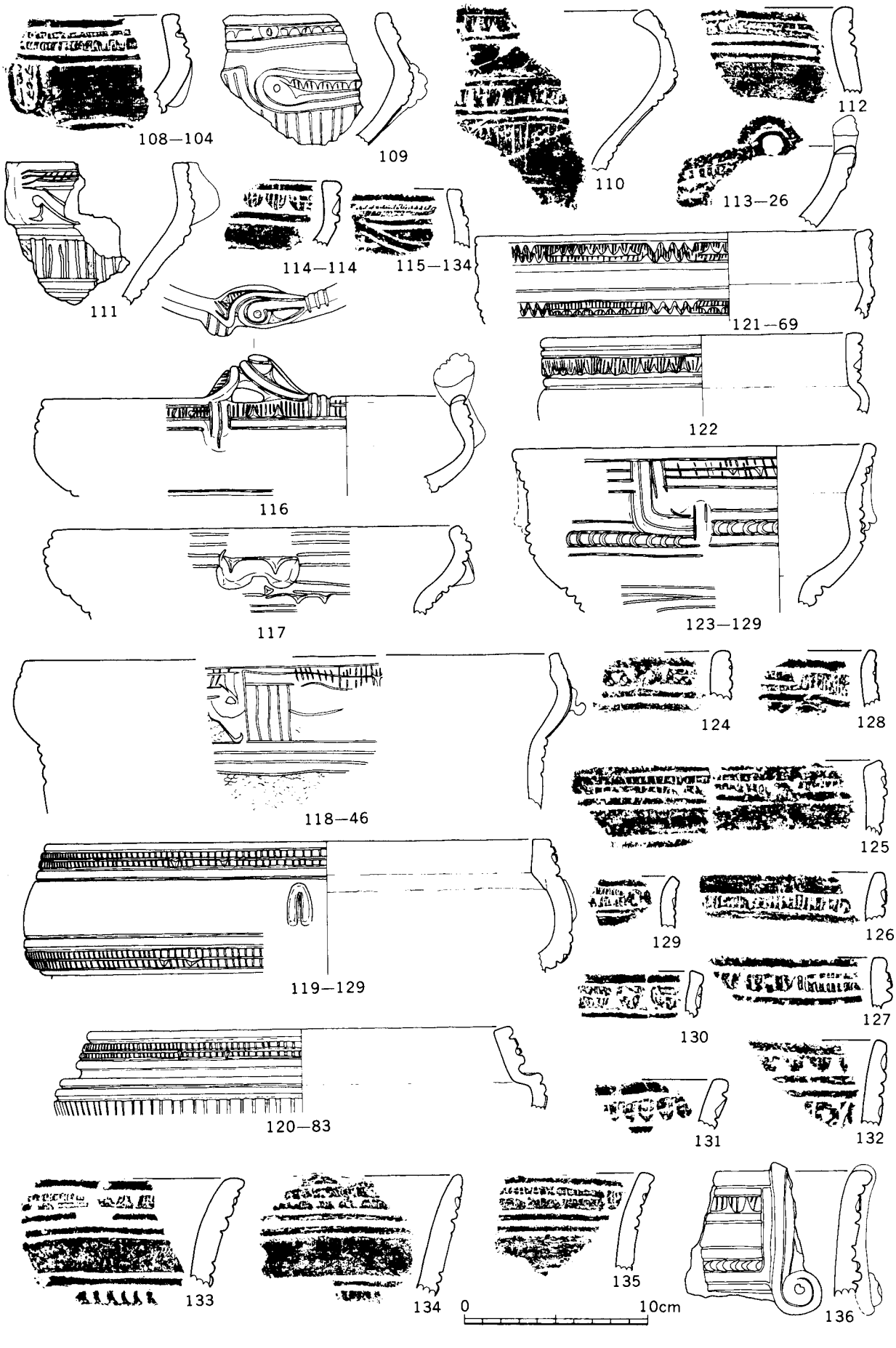
118は口径約29cmをはかるもので、突起の片側が剝落している。口辺部に縄文地文が一部残るが、無文帯をつくる際に落したものであろう。胎土に砂礫が混じり良くない。

119は口径27.5cmをはかる。口縁端部が肥厚して口唇に幅広の平坦面が形成されるが、粘土帯を口縁内側に厚く、外側にうすくという具合に覆うようにしてかぶせているものである。口縁および口辺部下端に軌軸文をめぐらし、無文帯をはさむ。無文帯の突起は逆U字状に粘土紐を貼付したものである。色調は茶褐色を呈し、内面の調整は横方向にナデ調整を丁寧に施している。

137は半隆起線文の区画内に軌軸文を入れ、無文帯に円形刺突をかこむ三角形文を施文するもので、138・139とは胎土、色調の具合から同一個体と思われるものの、半隆起線を引く竹管の幅が大きく異なる点が指摘される。138・139の軌軸文には縦位沈線が欠けている。138には突起の剝落痕が見られる。ともに、胴部には木目状撚糸文が施文されている。器壁の厚さは本遺跡出土品中もっとも厚いもので、1.5cmをはかる。胎土は砂粒は少なく良好である。

6類（第20図120～122、図版17）

口辺がキャリパー形を呈し、口縁部が直立ないしは内屈する深鉢で、軌軸文、逆位蓮華状文を持つものをまとめたが、全形をうかがう資料がなく深鉢以外の器形になり得る可能性も考えられる。120は口径約23.2cm、最大径約27cmをはかる口縁が大きく内屈するタイプで、軌軸文の下位が大きく外へせり出して段をつけてしぼり込むような器形を持つ。凹線状になる部分は削り取りによるものではなく、口縁部分に粘土帯を貼付しているので段



第20図　縄文土器拓影・実測図（108～136）（1／3）

がつくようになったのであろう。軌軸文の下段には刺突文が加えられ、1個所では上下向い合せの三角形印刻文が彫り込まれている。121は口径約21.5cmをはかる。口縁部分が直立するタイプで、無文帯をはさんで軌軸文を上下に配する。無文帯は断面ではくぼむようなかたちが見られ、削り取りがなされたものと想定される。軌軸文には三角形印刻文が施文され、右から軌軸文の上位に正位三角形が、隣には交互に、その隣には正位三角形印刻文が配されている。口辺部下位のものはその逆の三角形が置かれている。122は口径約17.5cmをはかるもので、直立する口縁から無文帯がせり出すようにふくらむ器形で、胴部まで至っていないと想像されるが確実とは言えない。口縁には逆位蓮華状文が見られるものの、通有の軌軸文を推定させる沈線も認められる。

7類（第20図123、図版17）

口辺部がキャリパー形を呈し、口縁が大きく外傾するタイプで1類を設定した。1点の出土。6類にまとめたものが、本器形となるようにも推定される。

123は口径約19.5cm、現器高8.5cmをはかるもので、口縁が長くのびて外傾するためにくびれ部分が頸部と合せて二段となる特異な器形をしめす。口辺部文様を4段に区分し、無文帯を爪形文をはさんで上下に配する。口縁から垂下する隆帯は「L」の字形に折れ、爪形文とつなぐ。隆帯を狭んで、半隆起線文が1条分ズレているのが注意される。濁黄褐色を呈し、胎土に小砂粒を混和している。内面の調整は粗雑である。

3類A（第20図124～136、第21図、第22図149～153・155、図版12・18）

口辺部が直立ないしはわずかに外反する円筒形器形を持つものをまとめた。

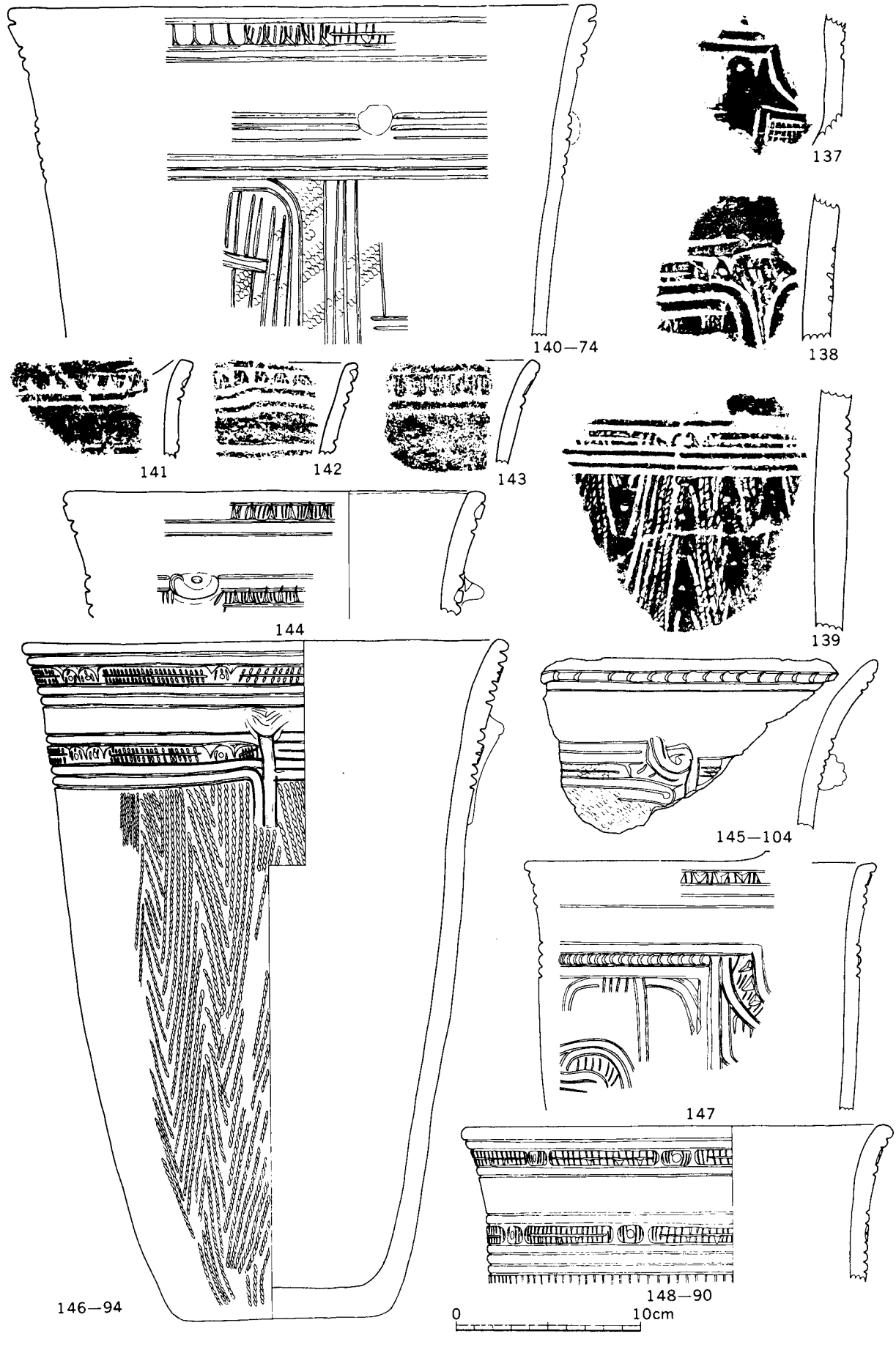
124～136は大型、小型品を含む口縁部片である。口縁上端に軌軸文、逆位蓮華状文等をつけ、おおむね下位に無文帯をつくり出すものである。124は三角形印刻文を両脇におき、中に刺突を加えるタイプで、六角形鋸歯状文の文様が単独につけられているものと見え、127・129・130にも同様の施文が認められる。126は縦沈線のみが引かれたもの。131・132・137は逆位蓮華状文となるもので、137では口縁から貼付隆帯が垂下し、渦巻文を形成するようだ。横位無文帯は横方向にナデ調整が入れられ、125・134では無文帯部分が若干ながら器厚を減じているように見られる。

140は口径約32cm、現器高17.5cmをはかる。口縁には軌軸文と逆位蓮華状文をめぐらし、横位無文帯、隆帯を施文する。胴部以下には縄文地文の上に半隆起線による区画文をめぐらす。口縁内面は横方向、胴部には斜行するナデ調整を丁寧に施す。突起が剥離した痕が見られる。濁黄褐色を呈し、胎土は良好。

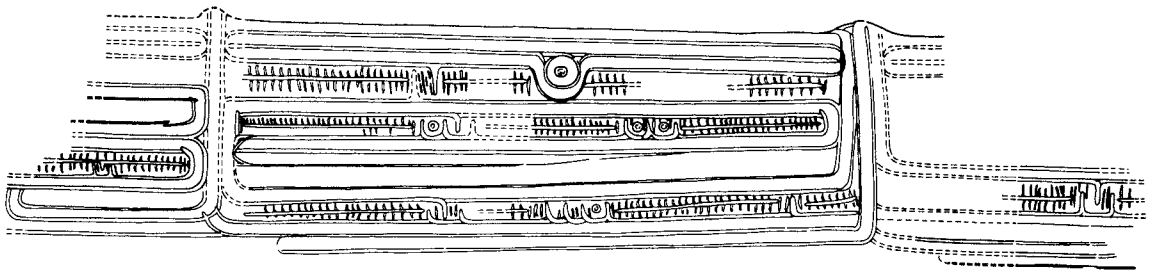
141～143は逆位蓮華状文、通有の蓮華状文を持つもので、141は口唇に小突起が付されていたようだ。144は口径約23cmをはかるもので、横位無文帯をはさんで逆位蓮華状文を施文する。無文帯へ入らずに紐状突起を貼付し、上からヘラ先による刺突が入れられている。無文帯には横ナデの調整が良く観察できる。145は突起部を半截竹管で加飾しているが、上から見ると中心の刺突に向けて渦文をつくり出している。突起の両側の半隆起線文が左右で1条ズレているのが注意される。半隆起線間に軌軸文が付されているが、口縁近くでの施文がなされていない点に、これまでの資料と大きな差異を認める事ができる。

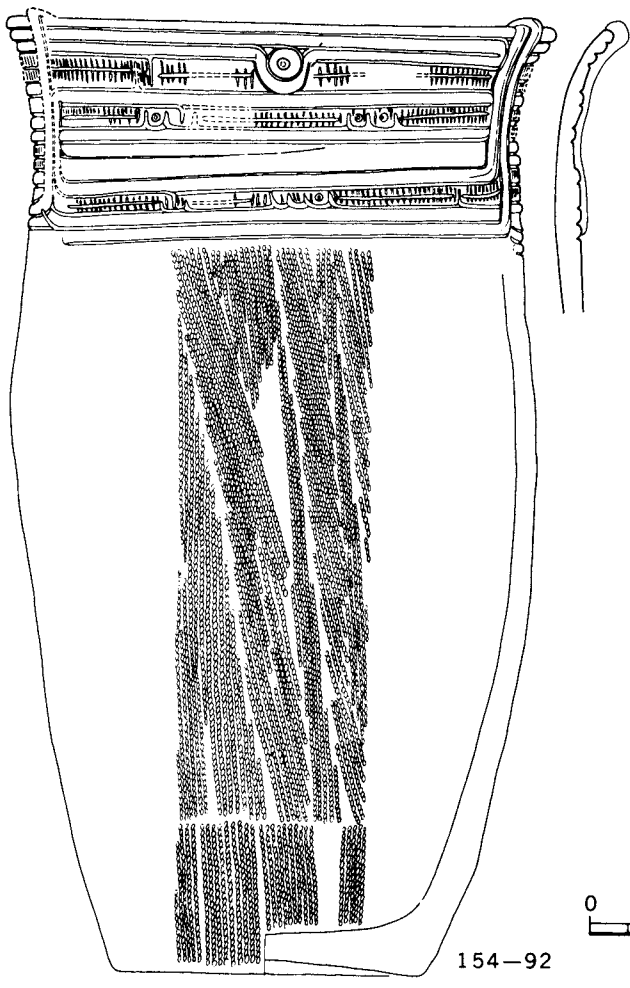
146は口径約26cm、器高36.3cmをはかるが、復元土器は大きく傾いてしまった。無文帯をはさんで上下に軌軸文を配置し、口辺部文様帯を三段に区画する。横位無文帯には突起が付され、体部にまで垂下する隆帯をつける。軌軸文には逆位三角形印刻文を並べ、中間部分に円形刺突を加えている。軌軸文の流れを解く鍵を持つものと考えられる。すなわち、蓮華状文に至るまでの間を考える上で、土器全体のなかでの施文位置や突起および無文帯の在り方等をからませていく事によってたどる事ができるように思われる。147は口径約19cm、現器高13.5cmをはかる。口唇に突起をつけるもので、横位無文帯だけではなく体部にも無文部を持つ。口縁および隆帯脇には逆位三角形印刻による蓮華状文が付されていて、先の想定に手がかりを与えてくれる。横位無文帯は横方向、体部無文部は縦ないしは斜行するナデ調整が入れられている。黒褐色を呈し、胎土、焼成とも良。148は口径約23cm、現器高8.5cmをはかる。軌軸文に単位が読み取れるもので、刺突の両脇を削りとり軌軸文を配し、処々に小さな三角形印刻文をつける。無文帯下部の軌軸文と同じ手法をとる。

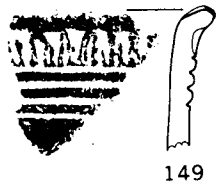
149は口縁端部が外展するタイプで、蓮華状文が付される。ヘラ先による彫去が花弁状となるものの、花弁上端

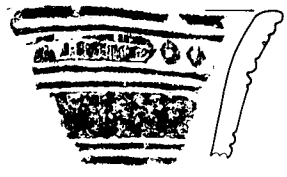


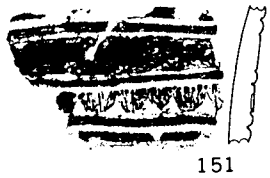
第21図　縄文土器拓影・実測図（137～148）（1／3）

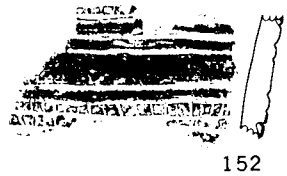


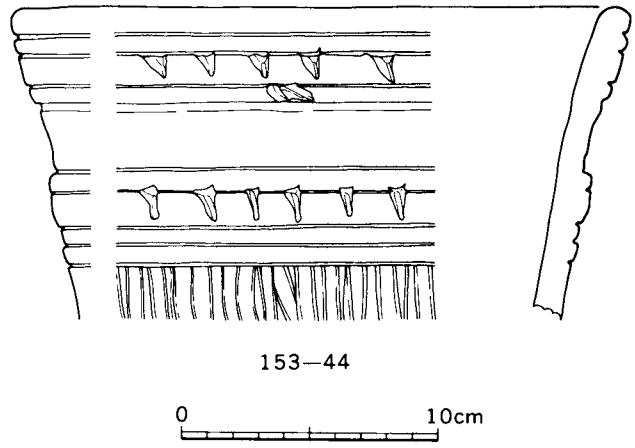




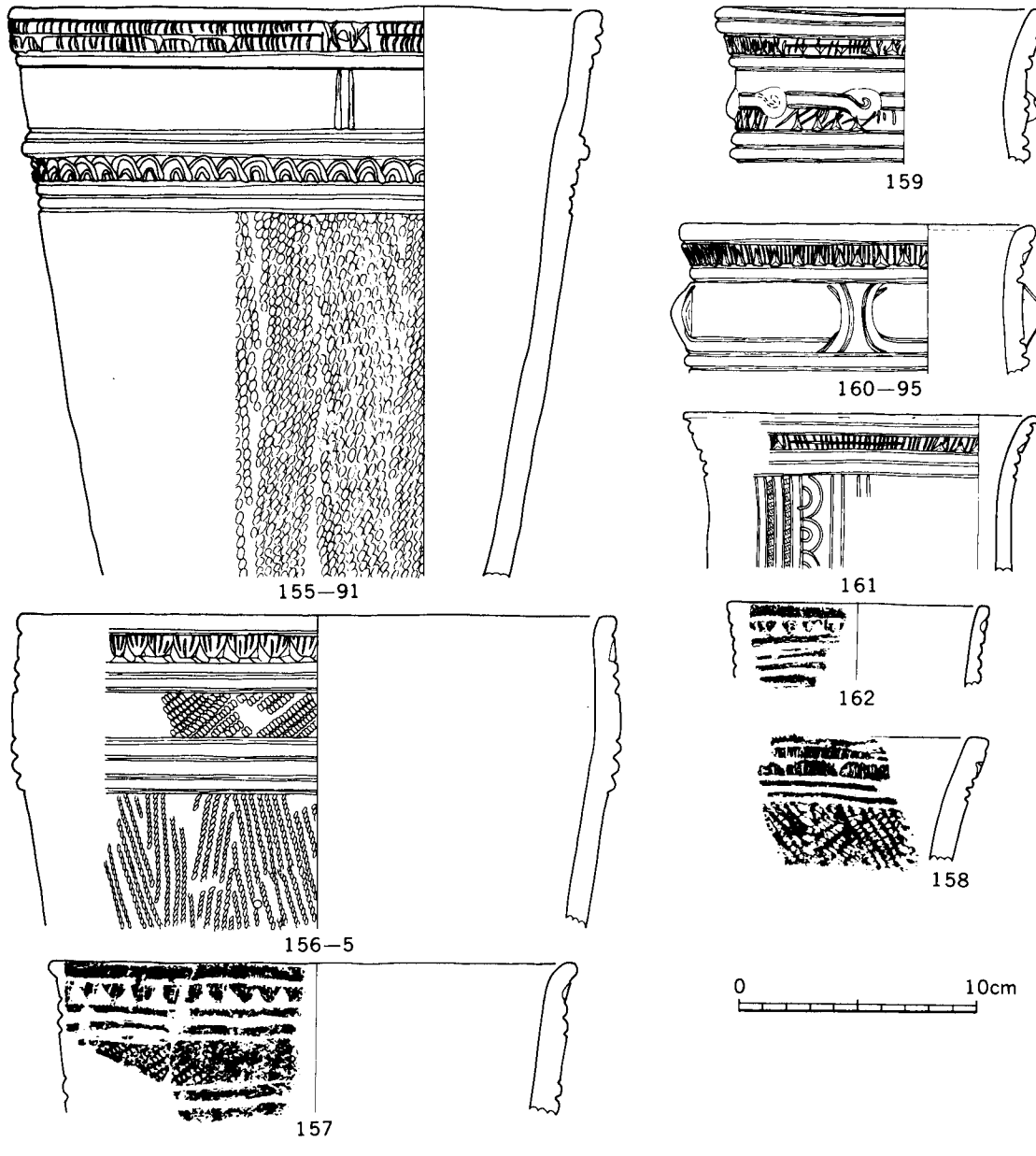








第22図　縄文土器拓影・実測図（149～154）（1／3・1／4）



第23図　縄文土器拓影・実測図（155～162）（1／3）

にまでヘラ先が届いてはない。150は六角形鋸歯状文と軌軸文を配するもので、151・152は口辺部下位で軌軸文が付されているもの。

153は口径約24.2cm、現器高12.5cmをはかる。口縁および無文帯下位の隆帯は貼付してあるもので、無文帯部分が削り取られたように見える。口縁および隆帯には斜行する粗雑な沈線が入れられ、ほぼ等間隔に逆三角形印刻文が配されている。ヘラ先は器壁に対して直に近い位置で動かしている。

155は口径約25cm、現器高23.7cmをはかる。隆帯で文様帯を割りつけ、上二段が軌軸文と横位無文帯、下一段に半截竹管を孤線状に引き連ねる文様（波形文？）を施文し、胴部は撚糸文をころがしている。無文帯部には縦位に半隆起線を引き区画をつけるが、全周では何個になるかは不明である。色調は濁褐色を呈し、胎土に1～2mmの砂粒を多く混和している。器厚は1.1cm。

5類（第22図154、第23図159・160、図版12・18）

口辺がわずかに外反するタイプで、3類Aに含めたものに属する可能性もある。

154は口径約29cm、器高50.5cmをはかる大型品である。口辺部が外反するためにくびれがあらわれ体部でふく

らみを持ち円筒形に底部につながる。口唇から伸びる隆帯で縦に文様帯を区画し、半隆起平行線文で横方向に狭い小区画を設定する。小区画内には無文帯や軌軸文三条を施文してゆくが、縦の隆帯を境にした他の区画とは施文位置に違いを見る事ができる。口縁近くには円形突起が貼付されている。軌軸文と組み合う施文は、円形刺突文と小三角形印刻文との組み合せを見るだけである。無文帯にはナデ調整がなされている。器厚は約1.0cm で、底部近くでは1.9cm をはかる。底部径16cm。

159は口径約14cm、現器高6.5cm をはかる。無文帯をはさんで逆位蓮華状文を刻むもので、横ナデ調整の無文帯に2個1対の突起を貼付する。暗茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。160は口径約15cm、現器高6.3cm をはかる。口縁に逆位蓮華状文をつけ、横位無文帯には縦位置にブリッジ状突起を貼付する。頸部以下には半隆起線文で区画文をつけているようだ。口辺部内面は横ナデ、頸部以下は縦方向にナデている。

3類B（第23図156～158、図版18）

口辺部が直立する深鉢で、無文帯ではなく縄文を施文したものをまとめたが、資料は少ない。

156は口径約25.5cm、現器高13cm をはかる。口縁に逆位蓮華状文、横位の縄文帯を設け、胴部は撚糸文を施文する。暗茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。157もほぼ似た施文を行なう。口径約22.5cm をはかる。158は軌軸文をつけ、結節縄文を施文している。

3類C（第23図161・162、図版18）

無文帯を持たないものをまとめた。161は外展する口縁をつける円筒状土器で、半隆起線で口縁を横方向に区画し軌軸文を施文する。体部は半隆起線で縦位置に区画をつけ、B字状文を施文する。暗褐色を呈し、胎土は良い。162は口径11cm の小型品で、逆位蓮華文を施文し半隆起線を横走させ、胴部には縦位の半隆起線が引かれるのであろう。

第5群土器

口辺部に半截竹管で「U」の字状、逆「U」の字状の半隆起線文を引き重ねるものをまとめた。連続孤線文と仮称したが、蓮華状文の一種として考える事もできる。

1類A（第24図163～171・176、図版18）

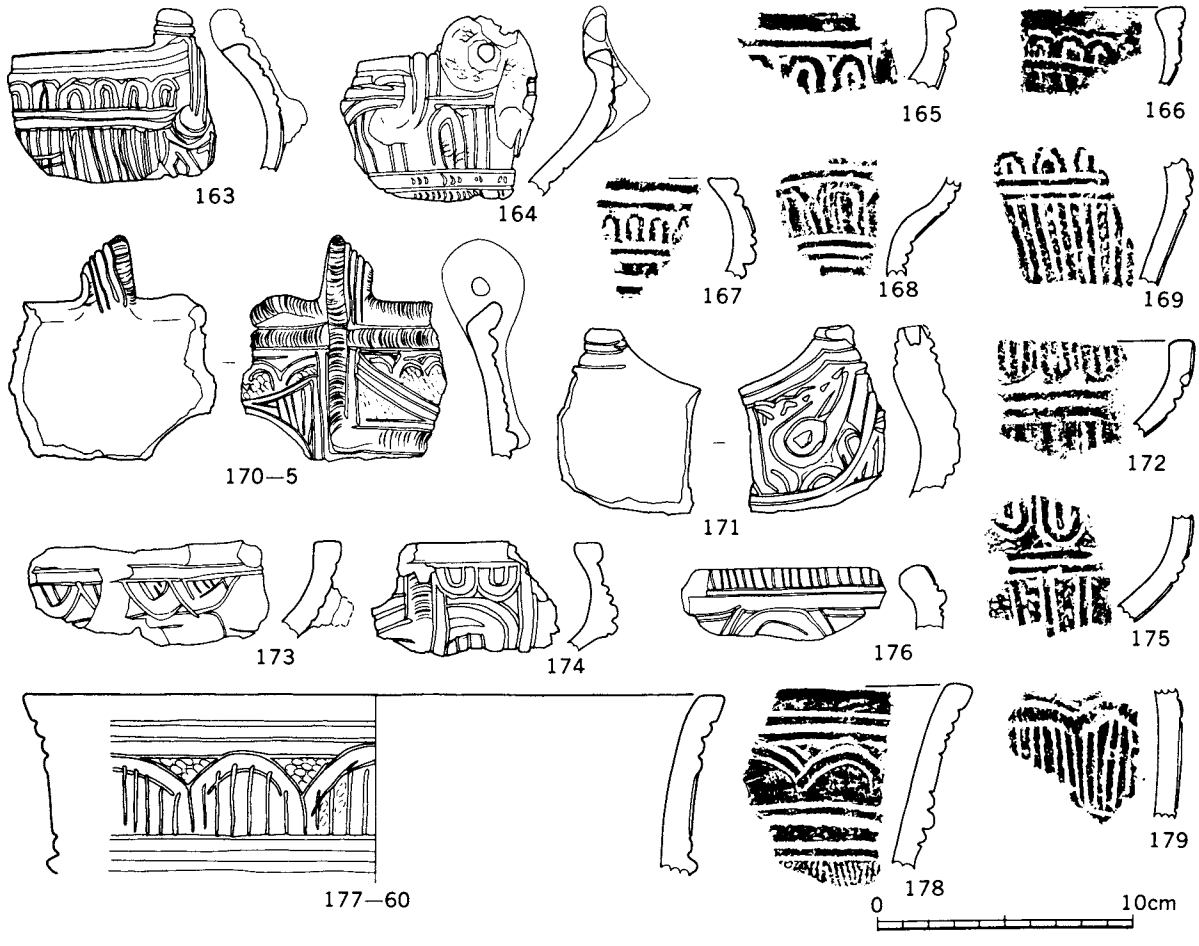
163は口唇に突起をつけ、その右脇から半隆起線を下げて、口辺部中央の円形突起とつなぐ。口辺を横二段の文様帯に区画し、口縁に連続孤線文を、下段に縦位平行半隆起線文を引くが、突起を起点にする文様が引かれているようだ。口唇部分がわずかに肥厚し、使用された半截竹管の幅は比較的小さくなるもので、約4mm である。内面の調整は丁寧である。164は口唇部が肥厚し、窓のあけられた半円形突起をつけ、口辺部にも2個の貼付隆帯を付す。2個とも口縁部とつながっている事に注意したい。165～167・169は163と同様の施文を行なうもので、168が口辺下段の文様帯へ施文されている。逆「U」の字状の上端部にヘラ先による調整が行なわれているのは、163・167・168の3点を見る。

170は口唇部が大きく肥厚し、細かく爪形文を刻み込む。口唇部突起は横方向に穿孔が施され、口縁へ垂下する基隆帯となる。縄文地文の口辺部文様帯は細かく曲線、直線を引いて小区画を形成し、文様帯上位に連続孤線文をめぐらしてゆく。半截竹管の幅は3mm と7mm の2種類を使用している。171は突起部片で、口辺部は広い範囲で粘土を貼付し、コブ状に盛り上がるようになっている。口唇部突起の頂部に、半截竹管を回転させて穿孔を施す。口辺突帯の円形文の周囲を連続孤線文でうめている。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土に砂粒が目立つ。

172は細い半隆起線文を縦に引き、下端をヘラ先によって彫去を施す。口縁部に半隆起線を引かずに直接施文する例は本資料だけであった。濁黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。器表面は若干荒れている。本例は第4群に含めるべきとも考えられる。

1類B（第24図173～175、図版18）

「U」の字状に半截竹管を動かすタイプをまとめた。



第24図　縄文土器拓影・実測図（163～179）（1／3）

173は口唇部を肥厚させるものであるが、粘土の貼付は外周部分で、剥離状況がよく観察できる。口縁半隆起線に接して、左から右へ孤線文を引いてゆき、内側に沈線を加える。文様帯は二段に分けられているようで、中程に円形突起が貼付されている。174も口唇が肥厚するタイプで、2本の隆帯の間が大きくせり出しており、「く」の字形に内屈する口縁に見られるが、隆帯のない部位は通有のキャリパー器形である。隆帯上の爪形文は密に施されている。175は縦平行半隆起線文を口辺文様帯の下位につけるタイプである。

3類（第24図177～179、図版18）

連続孤線文をつけ、直立する口辺を持つものをまとめたが、量は少ない。

177は口径約27.7cm、現器高7cmをはかる。横位の隆帯から上の文様帯に、孤線文を引いた後に、縦位平行半隆起線文を並べる。地文には撚りの太いＬＲが施文されている。濁黄褐色を呈し胎土に砂粒を混和させるが、大きな砂粒は少ない。口縁内面は横ナデ調整。178は基隆帯と半隆起線で横位無文帯をつくり、連続孤線文を左から右方向に施文してゆく。胴部には撚糸文が施文されている。暗褐色を呈し、胎土に小砂粒を混和させる。

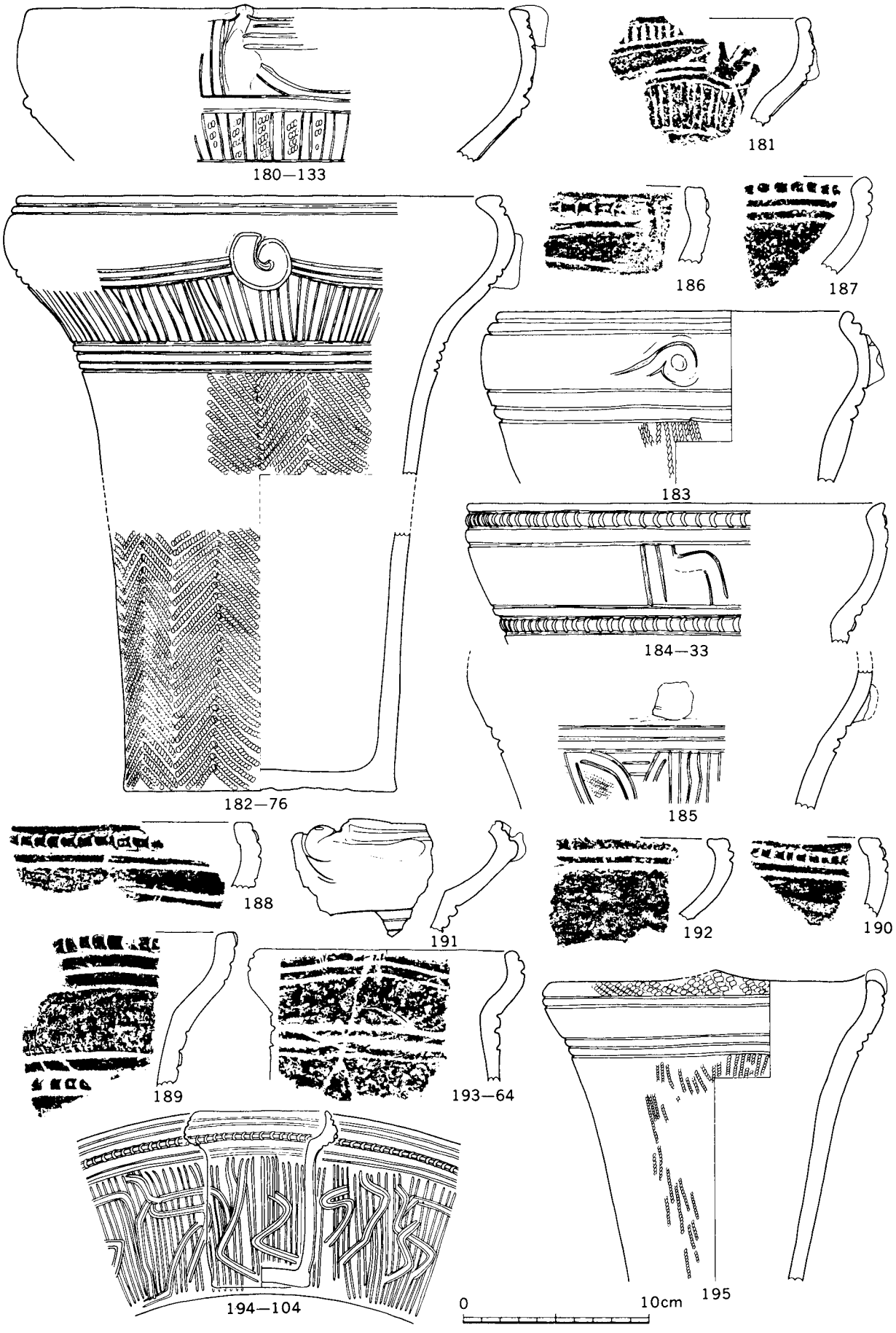
179は爪形文をつける隆帯が孤線状となるものであるが、類例が見当らないところから本類に含めたものである。孤線文の内側に半隆起線文を細かく引き並べる。濁灰褐色を呈する。

第6群土器

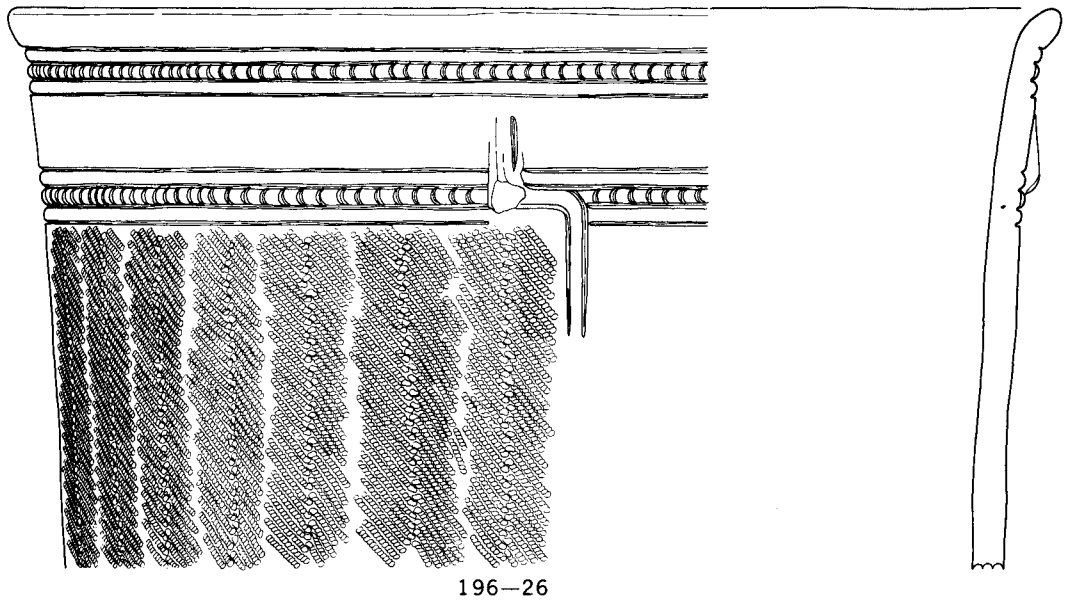
口辺部の主要文様として、横位無文帯を持つもので1群を設定した。第4群土器にも数多く認められる文様であるが、口辺部上位置にあり軌軸文等も持たない群で、円筒形器形をとるものが多くなる傾向を示している。

1類（第25図180～195、図版19）

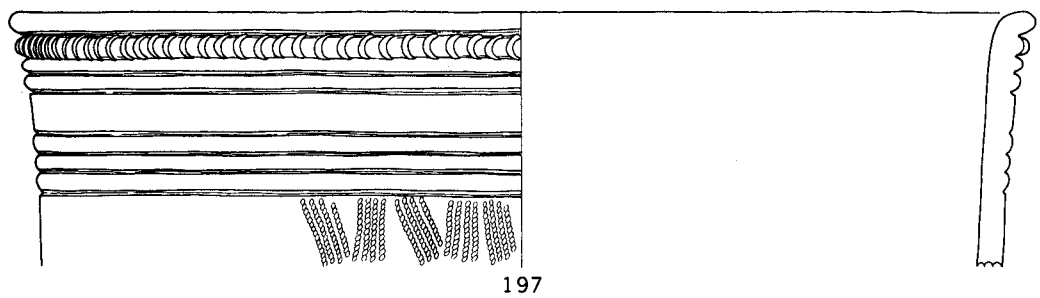
口辺部がキャリパー形を呈する深鉢をまとめた。口辺部文様帯を二段以上に構成するものと無文帯のみでなる



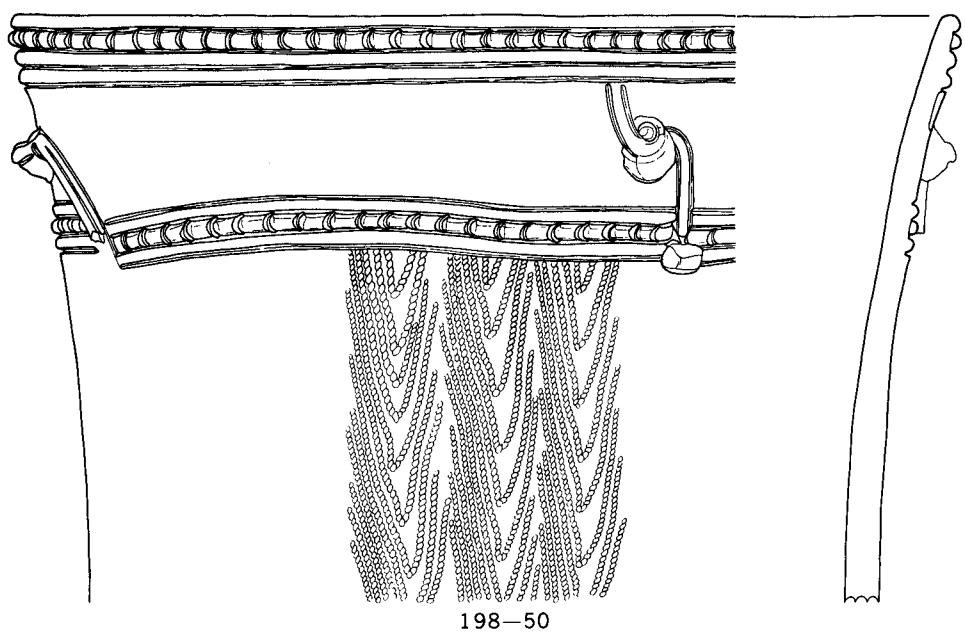
第25図　縄文土器拓影・実測図（180～195）（1／3）



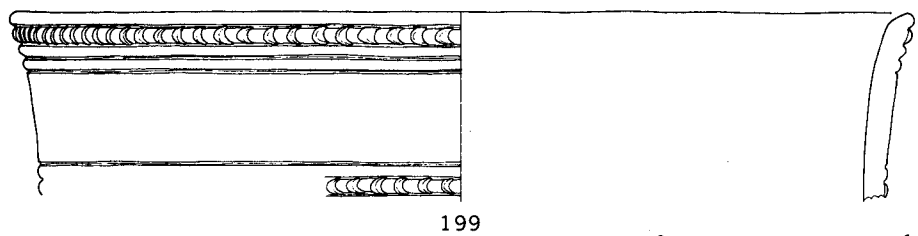
196—26



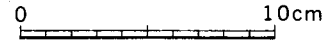
197



198—50



199



第26図　縄文土器実測図（196～199）（1／3）

ものの2種に細別できる。

180～182は口辺部下位の文様帯に、縦位平行半隆起線文を施文するもので、180は肥厚する口唇部から貼付隆帯が下がり無文帯部分で止める。橙褐色を呈し、胎土はよく精選されていて他地域からの搬入品の可能性が高い。181にも無文帯部に小突起が貼付されている。182は口径約26.3cm、胴径19cm、復元器高約32cmをはかる。口唇が内側に肥厚するもので、口辺部文様帯を二段に分け、境界部分に大きな「し」の字形突起を貼付する。胴部には羽状を呈する結束縄文を底部まで施文する。底部径は14.8cmをはかる。口辺部分は灰褐色、底部は橙褐色を呈し2次的加熱の変化を示している。胎土には砂粒は少なく良好である。

183～195は口辺部文様帯が無文帯と突起、半隆起線で構成されているものである。183は口径的19.2cmをはかる遺存状況の悪い資料である。口辺に円形貼付、胴部に撚糸文が施文されている。184は口径約22.4cmをはかる貼付突起が剥離しているもの。185は口縁部分を欠いているものである。無文帯の貼付突起先端を欠損している。胴部にはＲＬの縄文が付され、半隆起線で曲直線を引く。胎土には砂粒は少なく良好である。186～192は大型品となる口縁部片で、186･191には貼付隆帯が認められる。193は口径約14cm、現器高7cmをはかる。器表面の磨耗のため細部の文様、調整は判然としない。口縁内面は炭化物が付着し黒褐色を呈している。

194は口縁の約3分の1を欠いているだけの完好品である。口径7.2cm、器高9.6cmをはかるミニチュアにちかい小品である。竹管幅4mmのもので、口辺と胴部に半隆起線文、爪形文を施文する。施文は粗く引かれ、文様の割り付けもなく自在に引かれていて、縦平行半隆起線を引いた後に、曲線文を左から右方向に施文する。暗褐色を呈し、胎土･焼成とも良。195は口径約18cm、現器高16.2cmをはかるが、底部はほぼ現況の位置にとりつくであろう。器表面の磨耗が著しく、無文帯の一部をかろうじて見る事ができる。口唇の小突起は1個を推定させるだけで、全体では何個になるかは不明。口縁部はＲＬの縄文、体部は撚糸文が施文されている。

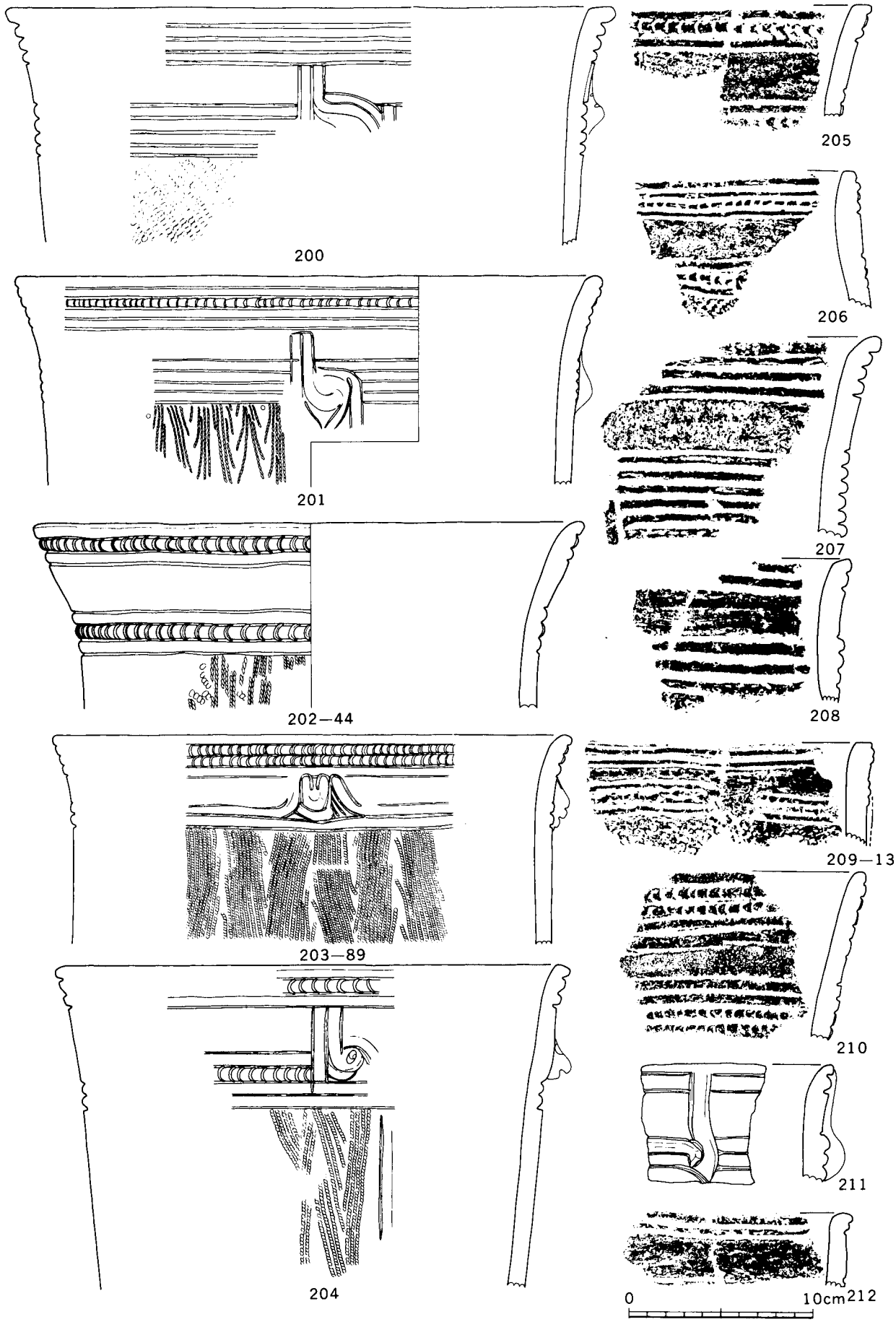
3類A（第26～28図、第29図236～251、図版19・20）

口辺部が直立ないしは口縁端部でわずかに外反するもので、円筒形を呈する深鉢器形をまとめた。口辺部は半隆起線、爪形文で横位に区画し、無文帯をつくり出すもので、胴部に縄文、撚糸文を施文するもので3類Aとした。大型、中型品となるものが多い。

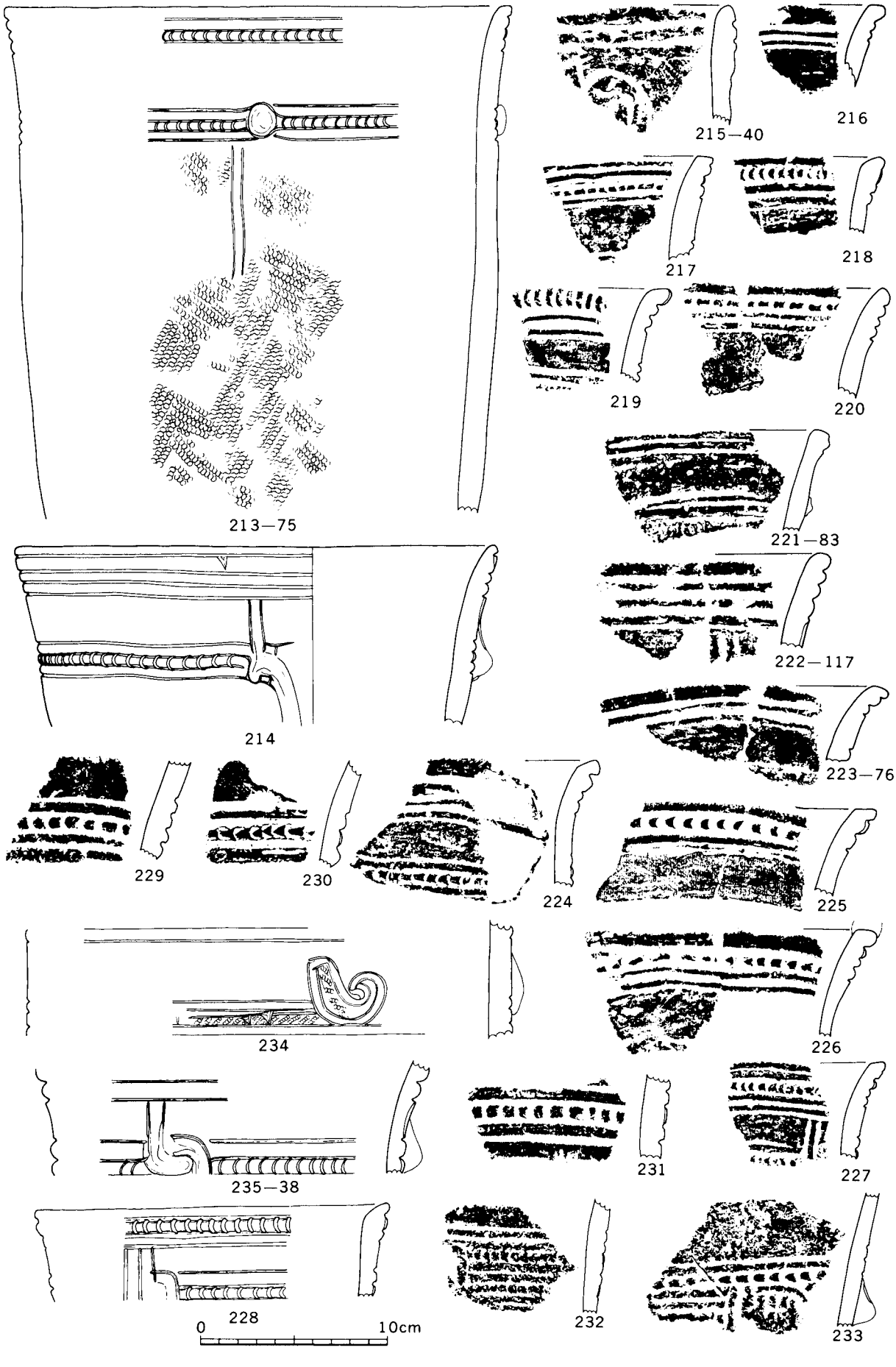
196は口径約41.7cm、現器高21.8cmをはかる。口縁端は粘土紐を貼付させ外展させるもので、爪形文1条と半隆起2条を単位として幅広の無文帯を区画する。無文帯の下位に小突起が貼付され、逆「Ｌ」の字状（鍵状）の半隆起線を胴部に下げる。胴部には結束縄文を施文する。内面のナデ調整は丁寧に行なわれている。197は口径約40.7cmをはかるもので、胴部には撚糸文を施文する。胎土には小砂粒が多く含まれ良くない。器表面の磨耗が目立つ。198は口径37.5cm、現器高23cmをはかる。幅広の無文帯に突起を付し、上下に半隆起線を伸ばし、下端には小突起をつける。突起部は2個を確認したのみで、全体では幾つになるかは不明。199は口径約36cmをはかる。横位無文帯は上下の半隆起線で区画された後にナデ調整を施している。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土は良好。

200は口径約33.6cm、現器高12.7cm、器厚0.9cmをはかる。口唇は粘土紐を貼付して肥厚させ平坦面を形成する。無文帯下部に貼付突起を付し、鍵手状に半隆起線をのばす。横位無文帯は突起の位置で区割を行なう。胴部は斜縄文を施文する。暗褐色を呈し、内面のナデ調整は粗い。201は口径約32cm、現器高11.3cm、器厚1.1cmをはかる。下段の半隆起線文のなかに突起があり、鍵手状に半隆起線をのばす。202は外反する口縁を持つもので、口径約30.4cm、現器高10cmをはかる。無文帯は上下の半隆起線文を引いた後に、ナデ調整でつくられたものである。203は無文帯上の調整は前者と同様の順序で行なうもので、口径約28.6cm、現器高11.3cmをはかる。口縁の爪形文が2条になっているのが注意を引く。無文帯内の貼付突起の上位置にU字状に半隆起線を入れ、両側に流し、全体では山状を呈する。撚糸文の片側の幅1.7cmをはかる。器表は磨耗が進行している。204は口径約28.3cm、現器高17.7cmをはかる。口唇に平坦面をとり、突起の上には刺突が加えられている。胴部撚糸文の中へ、縦の半隆起線が加わる事が注意される。

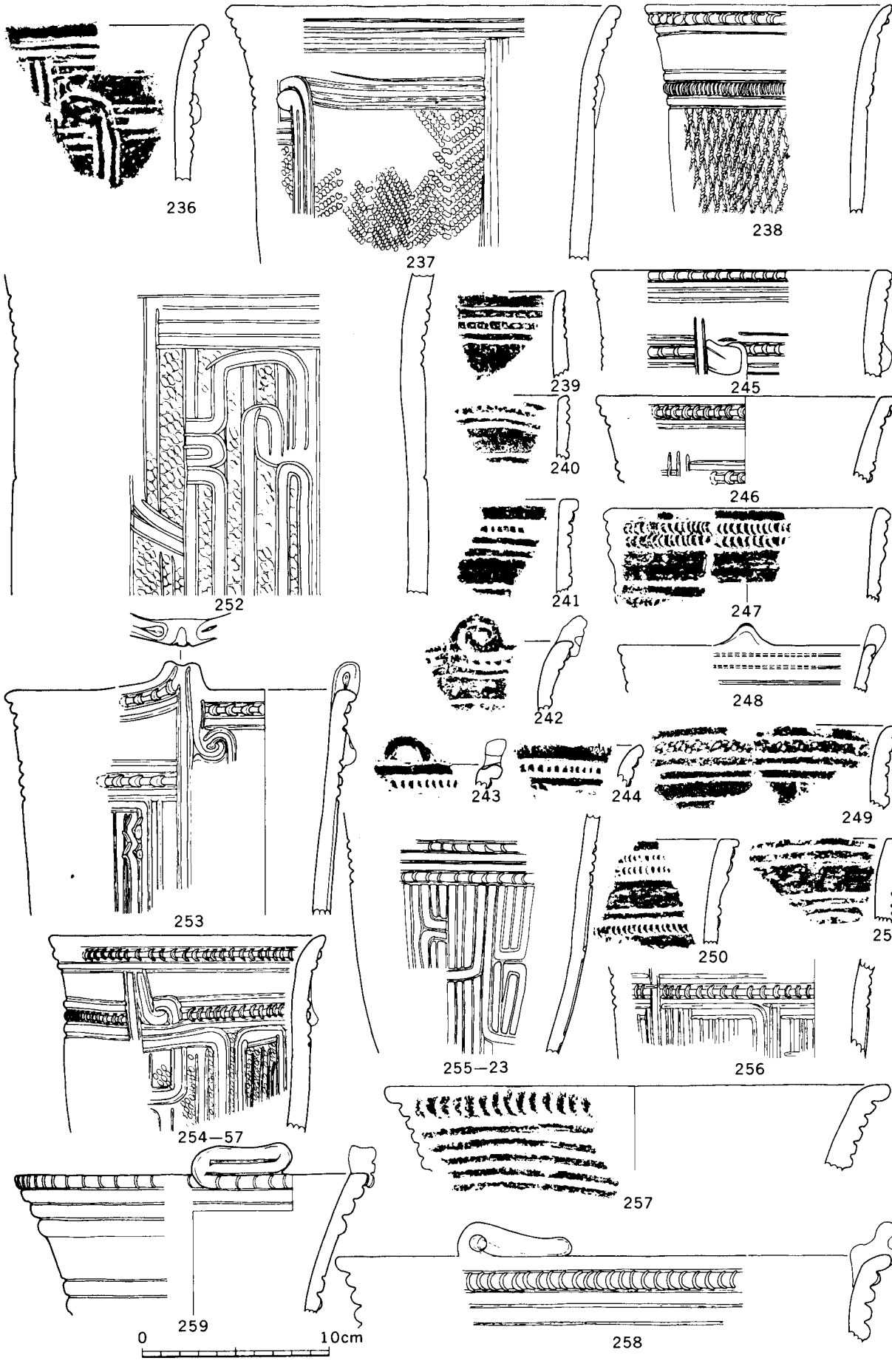
205～212は大型・中型品の口縁部であるが、205・206・208・212には口唇部に平坦面が形成され、206・212には突起が付されている。207･210は爪形文を含む半隆起線が4条以上となり後出する印象をうける。209の爪形文



第27図　縄文土器拓影・実測図（200～212）（1／3）



第 28 図　縄文土器拓影・実測図（213～235）（1／3）



第29図　縄文土器拓影・実測図（236～259）（1／3）

は波形を描くように引いている。

213は口径約27.2cm、現器高26.7cmをはかる。口唇に平坦面をとるもので、半隆起線で横の無文帯を区画する。下段の半隆起線上に小突起を貼付するが、突起をはさんで半隆起線が左右で1条ずれている。突起の左下から胴部に半隆起線が1条下げられている。胴部は斜縄文が施文されている。暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒をかむが量的には少ない。

214は口径約26cmをはかる。口縁部に1個、三角形の刻みがなされるが、全体の文様はつかめない。灰褐色を呈し、磨耗が進んでいる。

215～227までは無文帯をつける口縁部片で、中・大型品となるものである。口縁の直立するのは215のみで、他の口縁は外反する度合が高くなり、あるいは1群を設定すべきであろうが、胴部を想定できるものがなく、仮に位置づけた。隆帯、突起を持つのは215・222・227で、口唇部に突起をつけるのは226である。215の半隆起線上の爪形文には、半截竹管による押引きが付されているもので、特異な施文であろう。器表面に凹凸が見られ粗い調整ですましているが、内面の調整は丁寧である。口唇部分が外反するものには、219・223～226が上げられ、226を除いて平坦に調整されるという特徴を見る事ができる。無文帯は横ナデ調整がなされる。221の隆帯は粘土紐を貼付したもので、竹管の幅が粘土紐に比べて狭い。さらに竹管を引く力が弱いために沈線状となっている（器面が乾燥したためか？）。

228は口縁内側に平坦面がつくられ、内そぎの状況となるもので、口径約19cmをはかる。

229～235は頸部片で、233～235には貼付突起が付されている。233は明るい茶褐色を呈していて、胎土も精良である事から外来の土器の可能性が大きい。234は径約26cmをはかり、「U」の字状の大きい突起を貼付し、周囲を半隆起線でかこむ。軌軸文状の刻みがつけられている。235は口唇部の半隆起線文を欠くもので、径約21cmをはかる。「U」の字状突起がつく。

236・237は同一個体で、口径約21.3cm、現器高13.6cmをはかる。無文帯下位に突起をつけ、鍵手状に半隆起線をのばし胴部縄文部を縦位に区画する。縄文は結束羽状縄文が施文される。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く焼成は良くない。238は口径約13cm、現器高11cmをはかる小型品である。口縁の半隆起線爪形文は右ひねりを加えて引き、胴部と区画する隆帯上の爪形文と異なる方法をとっているのが注意される。横位無文帯は半隆起線文で区画されたのちに、ナデ調整を施しているものである。胴部縄文は単軸絡条帯第6類（山内清男　1979年）に類するものと見られる。口縁部横ナデ、胴部は縦方向のナデを行なう。淡褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。

239～251は胴部施文が不明の中・小型品の口縁部分である。口唇部がナデによって平坦面を持つものが多い。242・243は口唇の半円突起で穿孔が施されている。245は口径約16cmで、半隆起線文様帯に突起を貼付し、無文帯へ半隆起線を中途まで引く。246の施文・突起も同様の状況でなされているものと考えられる。口径約15.8cmをはかる。247・250は同一個体と見られるが、接合する事はできなかった。口径約15.3cmをはかり、無文帯上位の半隆起線の沈線を、ナデ調整でうめてしまう手法をとるもので類例の少ないものである。248は口径約13.7cmの口唇に突起をつけるものであるが、口縁の文様は剝離のためつかめない。249では半隆起線文の間に縄文帯と無文帯が置かれるもので、無文帯の縄文をナデ調整によって消している事を推定させる例である。

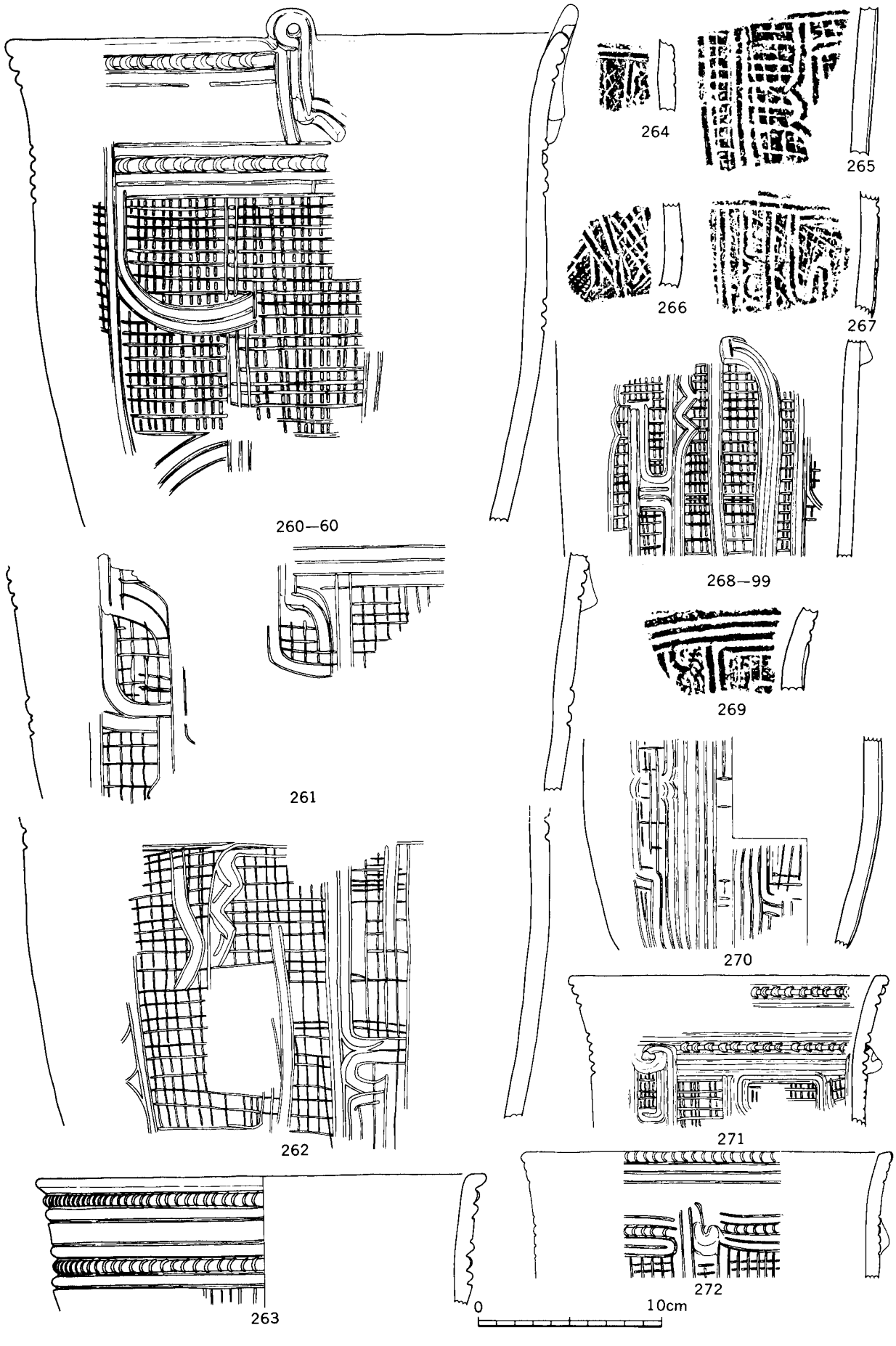
3類B（第29図252～256、図版20・21）

口辺に無文帯をつけ、胴部に半隆起線による区画文を施文する類をまとめたが、第8群土器としたものとのつながりが深いものである。

252は頸部がわずかにくびれ、胴部中央がふくらむ器形をとり、無文帯を想定されるが口辺がキャリパー状を呈する可能性も考えられる。頸部径22.8cmをはかる。施文順序としては、他の区画内曲・直線文と同様で、縦位の半隆起線文は左から右方向へ、区画内の曲線文は上から下方向に半截竹管を動かしている。

253は口径約18.7cm、現器高11.8cmをはかる。口唇に突起をつけ肥厚するものであるが、口縁部の半隆起線文にズレが生まれているのが注意される。無文帯状の突起は、口唇部突起から下がる半隆起線の脇に置かれる。

254は口径約14.6cm、現器高10.4cmをはかる。横位無文帯は区画された後で、横ナデが施されつくられたもの



第30図　縄文土器拓影・実測図（260～272）（1／3）

で、二次文様と見なされる。255は口縁部分を欠いているもので、頸部径13.8cmをはかる。256は頸部片で、頸部径13.8cmをはかる。

4類（第29図257～259、図版21）

口辺部分が外傾する深鉢で、半隆起線幅が広く多条傾向となるもので4類としたが、3類Aの216～226の口縁部のいくつかは本類に含むべきかもしれない。

259は口径約19cm、現器高7.5cmをはかる。口唇突起は粘土紐を折り曲げたのちに口唇にのせ、半截竹管で調整を施すもので、258では刺突を施している。竹管幅7～9mmをはかる。ともに、色調は灰黄褐色を呈し、胎土には砂粒が目立たない。

3類C（第30図260～272、図版21）

口辺部が直立する円筒形の深鉢で、口辺に横位無文帯をつけ、胴部に格子目状文を施文するタイプをまとめたが、口辺に無文帯を持つとは決め難いが、胴部に格子目状文を施文している例をも含めてみた。正位格子目状文でほとんどが占められる。

260は口径約30.6cm、現器高26.2cmをはかる。若干外傾気味の口縁を持ち、半円状突起を口唇につけ無文帯上の貼付突起とつなぐ。胴部を縦方向に半截竹管で沈線状に引いた後に、横方向に施文する。半隆起線の曲線文は格子目状文が出来た後に引かれたものである。灰褐色を呈し、胎土に砂粒が目立つ。

261・262は胴部片だけの資料である。胴径31.7cm、28.6cmをはかる。格子目状文と半隆起線の施文順序は259と同様になされ、261の貼付突起が頸部以下に在るのが注意される。また、貼付隆帯が置かれた後に格子目状文が施文されている事から、胴部文様には文様単位を意図した可能性が考えられる。263は口唇部が肥厚するタイプで、口径約24.6cmをはかる。灰黄褐色を呈し、胎土には微砂粒が多量に混和している。半隆起線の彫込みが深くなるのが注意される。

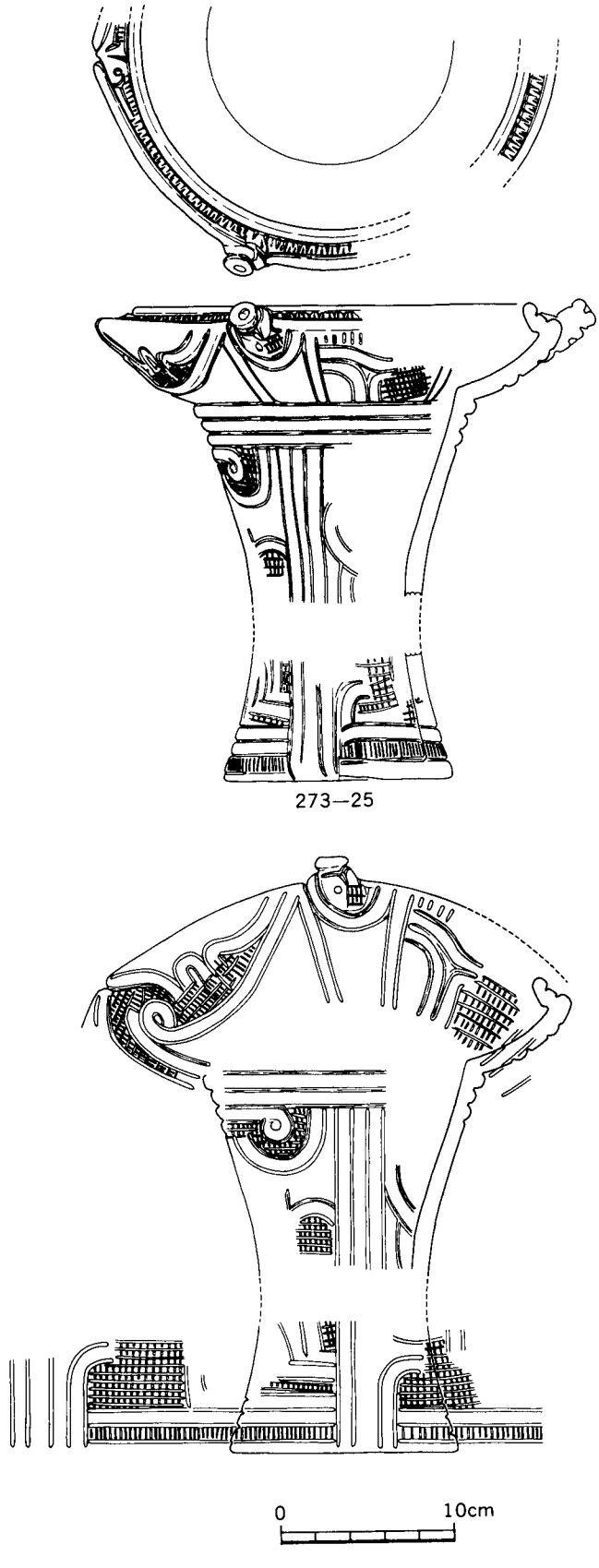
264～267は胴部破片で、265は底部に近い部分である。265をのぞいて斜位の格子目状文が施文されているが、264・267は粗い施文となっている。268は格子目状文を引いた後に、半隆起線文で縦位に区画をつくるもので、貼付した小突起が見られる。胴部径約16.4cmをはかる。黒褐色から暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒が目立つ。269は縄文地文に縦の沈線が引かれるが、横方向には施文されていないもの。270は胴径約16cm、現器高11.5cmをはかる。器表面の磨耗が著しくて、細かな調整は不明であるが、格子目状文の引き方は粗い。内面は縦方向にナデ調整が施されている。

271は口径約17.4cmをはかる。口唇部を平坦に調整し、半隆起線文で区画した横位無文帯をつくる。胴部には小突起を貼付した後に、正位格子目状文を引き、半隆起線文で仕上げる。272は磨耗が進行していて確実とは言えないが、同じ施文順序をとるものであろう。口径約20cmをはかる。

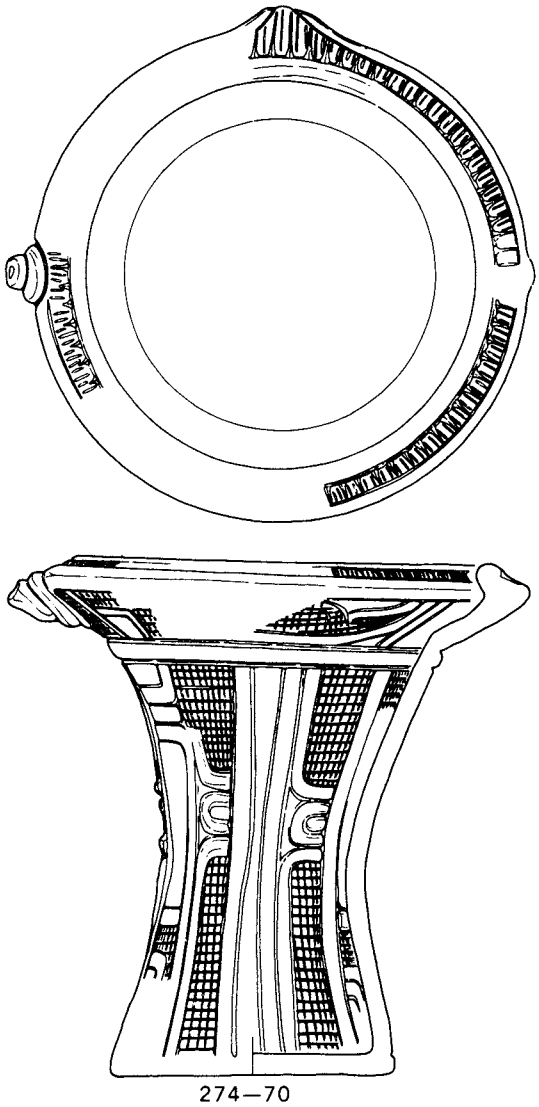
9類（第31～33図273～278、図版12・21）

鼓形の胴部を持ち、外傾する口縁の端部が内屈する特異な器形をとるものをまとめた。無文帯は横位無文帯を形成するものではなく、区画文の残部が無文となる。全形をうかがう資料として2点があり、ともに復元を行なった。胴部施文として区画内に正位格子目文を充填しているところから、胴部片の4点を含めた。

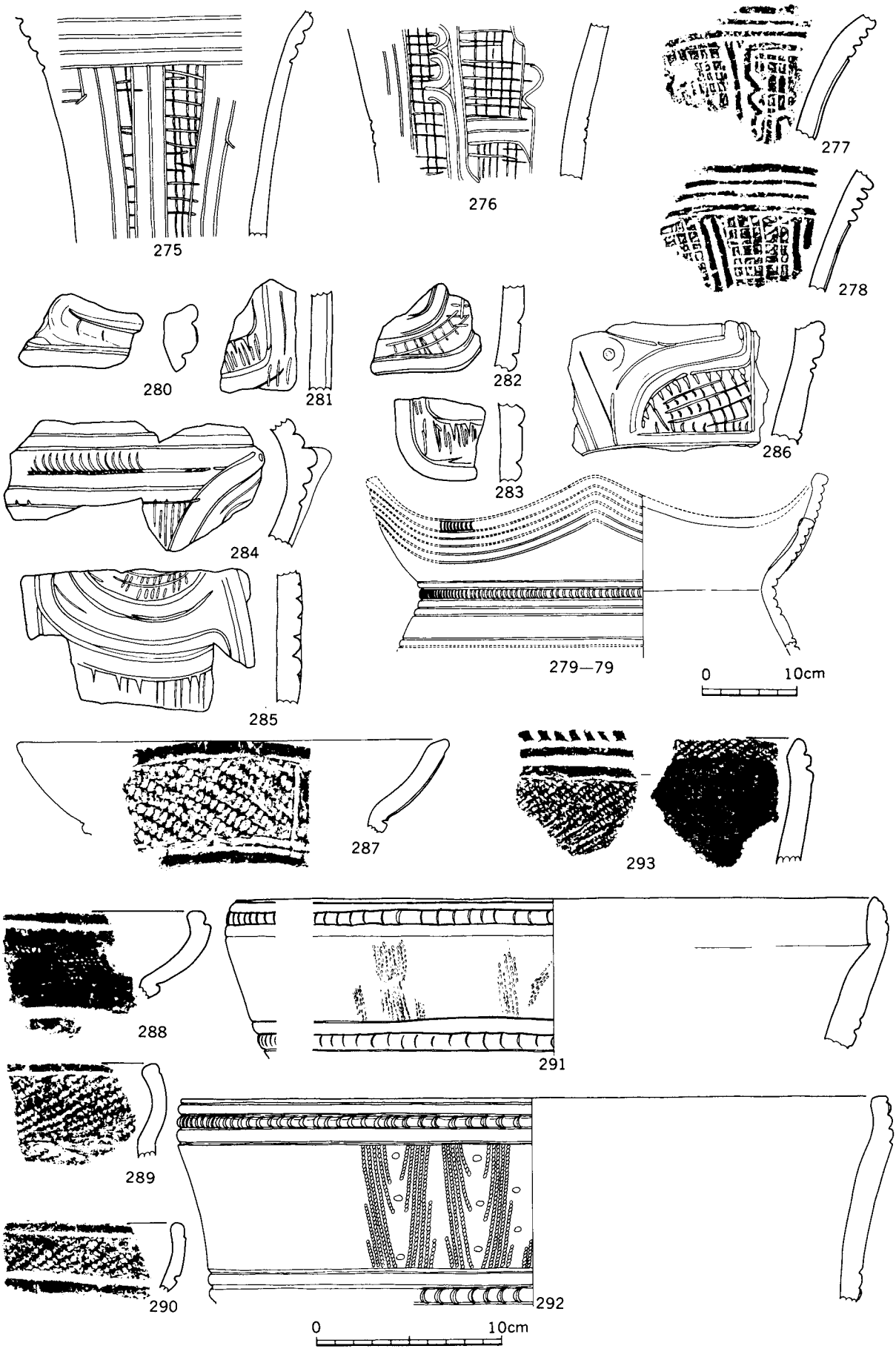
273は底部片との直接の接合ができなかったもので、図上復元を行なった。口縁部が大きく外傾してひろがり、口縁部では大きく内屈して止め、口縁帯を形成する。頸部は内面に稜ができる程に折れ胴部につなぎ、胴下半に向けて胴径をしぼり上げる。底部に向けては径をひろげて安定感を持たせている。口縁部径23.2cm、口辺部最大径26.7cm、頸部径16.2cm、胴部最小径9.8cm、底部径17.2cm、推定器高27cmをはかる。屈曲する口縁帯には2個の突起が認められ、刺突を施す円柱状の突起と切れ目をつくるものであるが、全体での数はつかめない。口縁帯には沈線と小三角形彫去文を組み合せた逆位蓮華状文と玉抱き三叉状文が施文される。玉抱き三叉状文は円柱状突起の側面にも施文されている。口辺部は頸部に引かれる横方向の半隆起線文で区切られ、半隆起線文で直線・曲線を組み合せて区画をつくり、格子目状文を充填する。胴部は縦に区画されるようだが、判然とはしない。格子目状文は口辺部と同じように充填文として施文されている。



第31図　縄文土器実測・展開図（273）（1／4）



第32図　縄文土器実測・展開図（274）（1／4）



第 33 図　縄文土器拓影・実測図（275～293）（1／3）

274は273に比較して欠失している部位が少ないところから、復元を行なったところ若干のひずみが生じて器体が若干傾むいている。口縁径22.4cm、口辺部最大径26cm、頸部径16.6cm、胴部最小径10.8cm、底部径15cm、現器高26.8cmをはかる。口縁帯には沈線で蓮華状文が施文され、突起は3個までが得られ、うち1個が注口状に突出している。口辺部は半隆起線文で区切られ、無文部と格子目状文部を充塡する。胴部も同じように縦長に区画を施す。頸部から底部へ直線で走る半隆起線間にははっきりと無文部をナデ調整で仕上げているのが認められる。頸部近くに半截竹管を押圧した個所を2個所見る事ができる。全体に磨耗が進行している。濁茶褐色を呈し、胎土は他の土器に比して良というものではなく通有のものである。

275～278は同一器形をとるものと想定した胴部片であるが、確実とは言えない。

10・11類(第33図279～285、図版21)

279は波状口縁となる大型品で、推定口径約49cm、頸部径38cmをはかる。「く」の字状に外傾する口縁端部を肥厚させる。頸部には半隆起線と爪形文を引いて、口辺部無文帯と肩部無文帯とを区切る。器壁厚1.4cm、竹管幅0.9cmをはかる。無文帯は半隆起線文を施文した後に、横ナデ調整を施してつくり上げている。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土に若干の砂粒を混和させるが、比較的良好と言える。280～286までは同一器形をとると見られるものであるが、280は口唇部突起片で、284は頸部あるいはキャリパー状の口縁部片と考えられる破片である。281～285は渦巻文が施文されているのが知られる。半隆起線文の残部に沈線と半截竹管の押圧により蓮華状文がつくられている。283には隆帯が入れられ、渦巻文をめぐって下降する。286は隆帯にはさまれた部分に、円形突起が貼付される。格子目状文が施文され、半截竹管での押圧が列点状に配されている。

第7群土器

口辺部に半隆起線文で区画し、縄文地文が残されているもので、1群をもうけた。キャリパー状口辺を持つものは少なく、円筒形器形をとるものが多い。

1類A (第33図287～290、図版21)

287は口径約23.2cmをはかる。太目の斜縄文がころがされ、半隆起線で区画する。口縁および縦位の半隆起線は弱く引かれるが、頸部のそれは深く施文される。色調は茶褐色を呈し、胎土に0.7mmにおよぶ砂粒が混和している。288は撚糸文が施文されているものであるが、無文帯調整の残存とも想定される。289・290はともにLRの斜縄文が施文されている。以上の4例の口縁部の半隆起線が1条だけで、さほど目立たないという共通点を上げる事ができる。

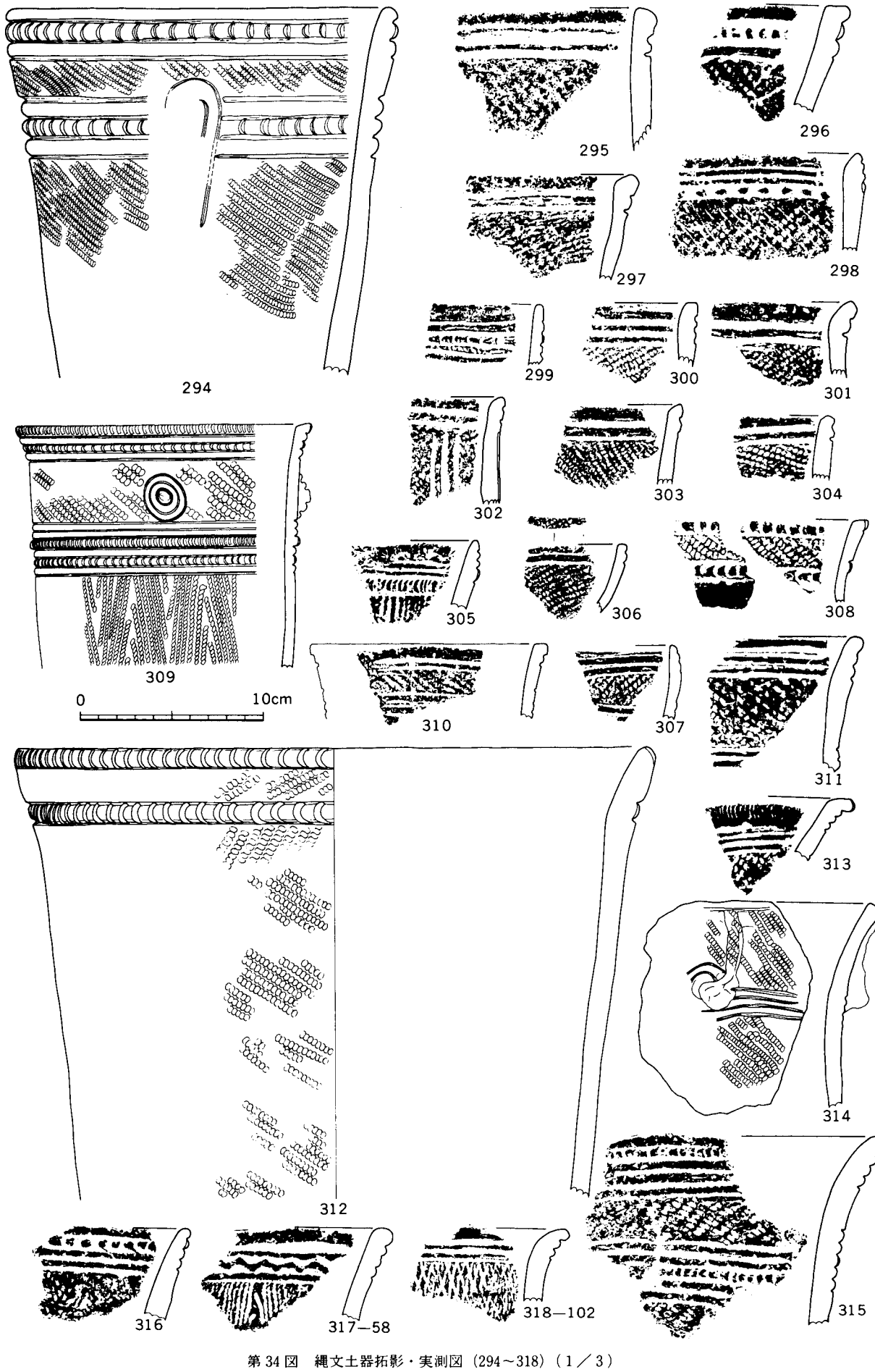
1類B (第33図291～293、図版21)

ゆるく外反して立つ口辺部の端部を小さく内屈させるもので、291は口径約34.2cmをはかる。灰褐色を呈し、遺存状況が良くないために、施文されている撚糸文をかろうじて判別できる程である。頸部と口縁に半隆起線3条と爪形文で1単位のものを引き、口辺部を区画する。292は口径約37.6cmをはかる大型品で、木目状撚糸文がはっきりと残る。頸部までの高さは、約11cmをはかる。293は口縁内面に縄文を施文するものである。

3類 (第34図294～312、図版21)

294は口径約20.7cm、現器高20cmをはかる。1次文様として縄文を入れた後に、半隆起線文を引く。竹管の幅は1cmをはかる。横位縄文帯に突起が貼付されていたようで、それをめぐる半隆起線が胴部へ下がる。暗茶褐色を呈し、胎土、焼成とも普通である。295～307までの口縁部片は半隆起線、爪形文等で口縁を飾るが、胴部との境での半隆起線を確認する事のできないものであるが本類に含めた。298は縄文帯に斜行する沈線を入れたもの。302は縄文帯に縦位半隆起線を引く。305は隆帯上に爪形文がつけられ、下位に撚糸文を施文している。306は口唇に縄文が付されるもので、あるいは小型の鉢になる可能性もある。

309は口径約16.2cm、現器高13cmをはかる。口唇部に平坦面をつくるもので、外側に貼付した状況が良く観察される。口縁帯はRLの斜縄文、体部は撚糸文が施文されている。口縁縄文帯には粘土紐を円心円状に積み上げる



第 34 図　縄文土器拓影・実測図（294～318）（1／3）

突起を付す。内面は横ナデ、体部は縦方向に丁寧に調整されている。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。308は爪形文で横位2段に文様帯を分け、上が縄文帯、下が無文帯となる。無文帯は削りとったように器壁が薄くなる。暗褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。内面の調整は入念に行なわれている。310は口唇部が外側に肥厚して平坦面をつくる。口径約13cmをはかる。

312は口径約34.6cm、現器高24.5cmをはかる大型品である。半隆起線爪形文が口縁と頸部に施文し、縄文帯を区画するもので、下位の半隆起線の位置で口縁が外反するようになっている。頸部の半隆起線爪形文は口縁と平行な位置で周るのではなく、蛇行したようになっている。器壁厚1.2cm、竹管幅1cmをはかる。縄文は太目の撚りであるが、体部での押圧が弱いのか、さほど目立たない。黒褐色から灰褐色を呈し、胎土に微砂粒が多い。

5類（第34図313～326、図版22）

口辺部分がわずかに外反傾向にあるもので5類としたが、3類に含めたもののなかにも含まれる資料があるようだ。

314は沈線状となった半隆起線文で頸部を示し、口縁から隆帯をのばして突起をつける。口縁部に平坦面をおくものであるが、口縁に加飾をしない本遺跡では希有の資料である。器表面の調整は粗雑であるが、内面のナデ調整は入念である。317は山形文と撚糸文を施文するもの。318は撚糸文であるが、小片のため原体の形状がつかめない。

319は口径24.5cm、頸部径20.3cm、胴部最大径21cm、底部径10cm、器高37.5cmをはかるもので、復元完形となった。口辺が外傾し、頸部でくびれ胴部下半に最大径を置く。半隆起線文を口縁と頸部に引いて口縁帯を区画する。貼付突起を口辺帯につける。内外面とも暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く良くない。内面調整は器表面の磨耗がすすんでいるため判然としない。

320は口径約23cm、現器高20.4cm、器壁厚1cmをはかる。半隆起線と爪形文は頸部に集中するかたちで粗雑に引かれ、口辺と胴部を分けている。施文される縄文は無節のもので、置かれていない部分が目立つ。胎土には粗砂粒が目立つ。内面の調整は頸部付近までが横ナデ、下半では斜行する強いナデ（ケズリに近い）が入れられ、器面に凹凸ができている。

321は口径約18cm、現器高11cmをはかる。半隆起線文で区画された縄文帯に縦位半隆起線4条で小区画をつくる。中央の半隆起線には「U」の字状の区切りを加える。器表には砂粒が目立つが、内面は丁寧に調整され、砂粒が器壁に沈みあまり目立たない。

322は口径約20.6cm、現器高12cmをはかる。口唇には半円状の突起と切れ目を持つ三角形状突起の2個までを確認できる。突起と頸部の突起とはつながるものと、そうではないものとがある。半隆起線文は器面深くにまで喰込んでいるように強く施文され、横位区画文を形成する。縦の半隆起線の近くに貼付突起が付けられている。突起の間にも密集して半隆起線文で埋める。

324は口径約18cm、現器高6.5cmをはかる。外へむけて口唇を肥厚させ、平坦面を形成する。半截竹管の幅は0.4cmと細身のもので、横位基隆帯で区画した口縁縄文帯を間隔をおいて縦位に区切る手法は、第3群土器1類Aと同様の手法をとるものである。縦位の隆帯が在るものと想定できるが、剥落していて細部は不明である。胎土に砂粒は少なく精良である。

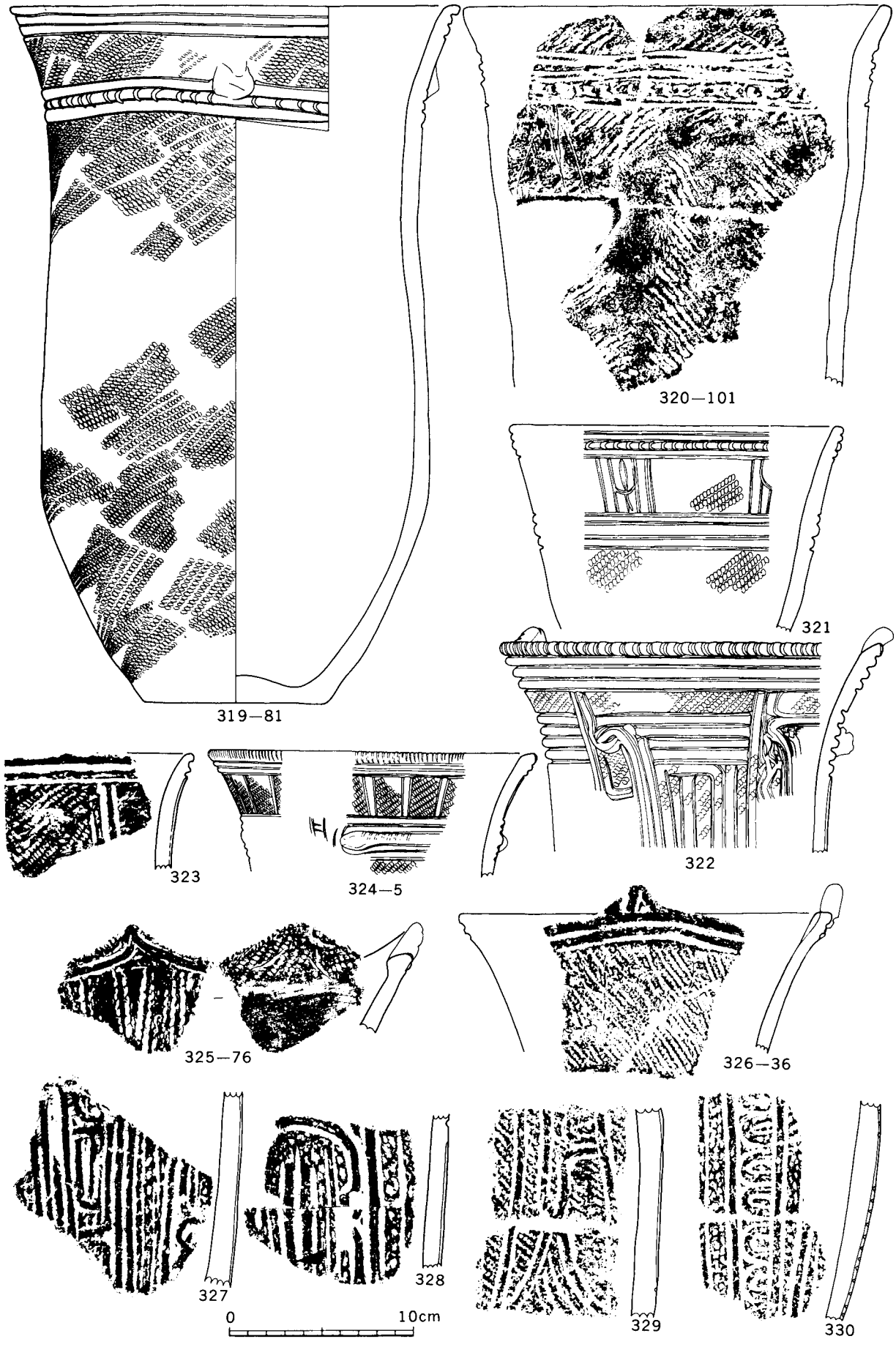
325・326は突起を持つタイプで、325は肥厚して段を持つ内面に縄文を施文する。326は口径約20.2cmをはかる。

第8群土器

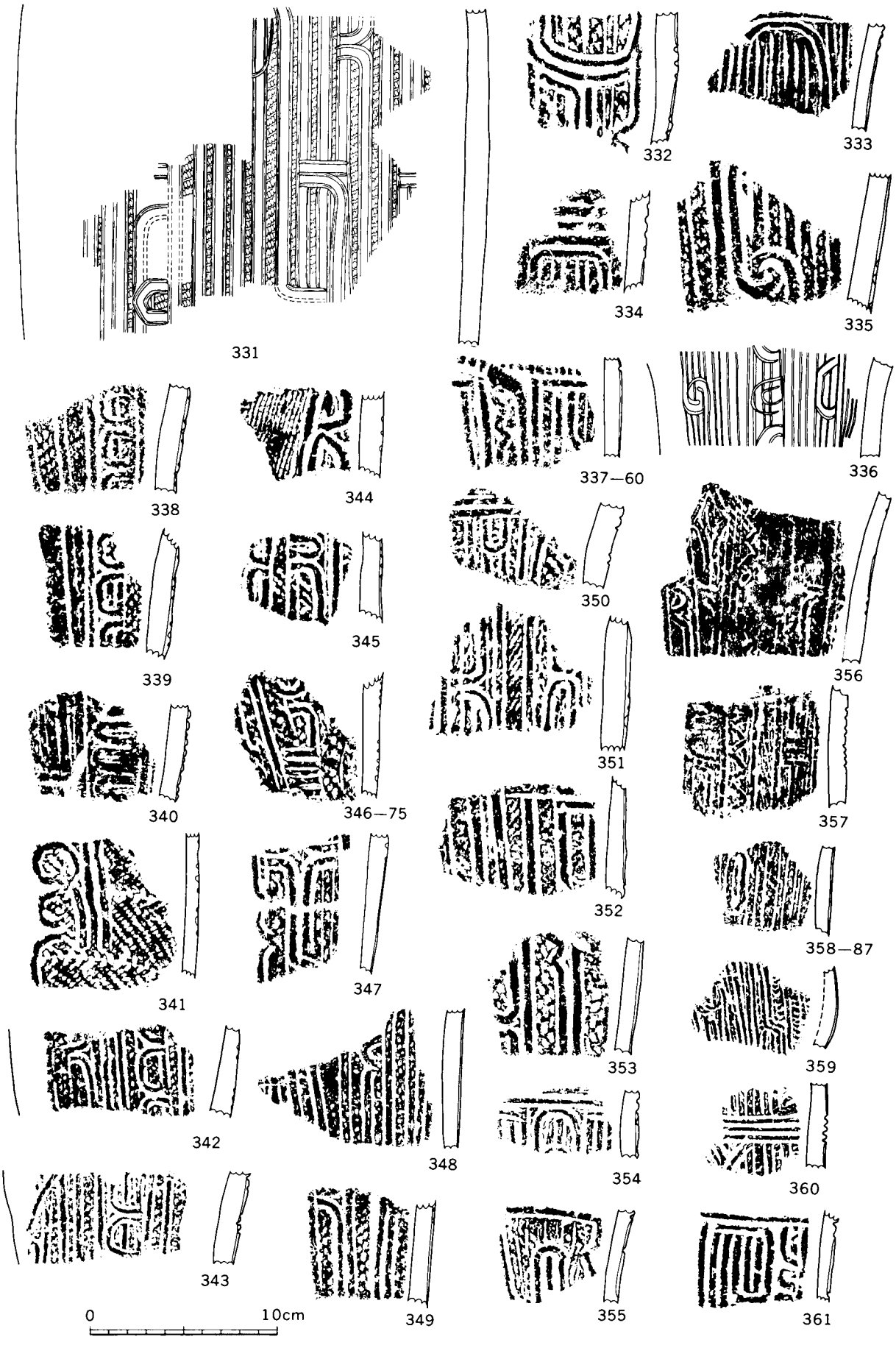
胴部に施文されている直・曲線文を見るものだけで1群をもうけた。口縁の形状が不明のためで、当然のことながら第3～7群土器の胴部片である。

A（第35図328、第36図332～334、図版22）

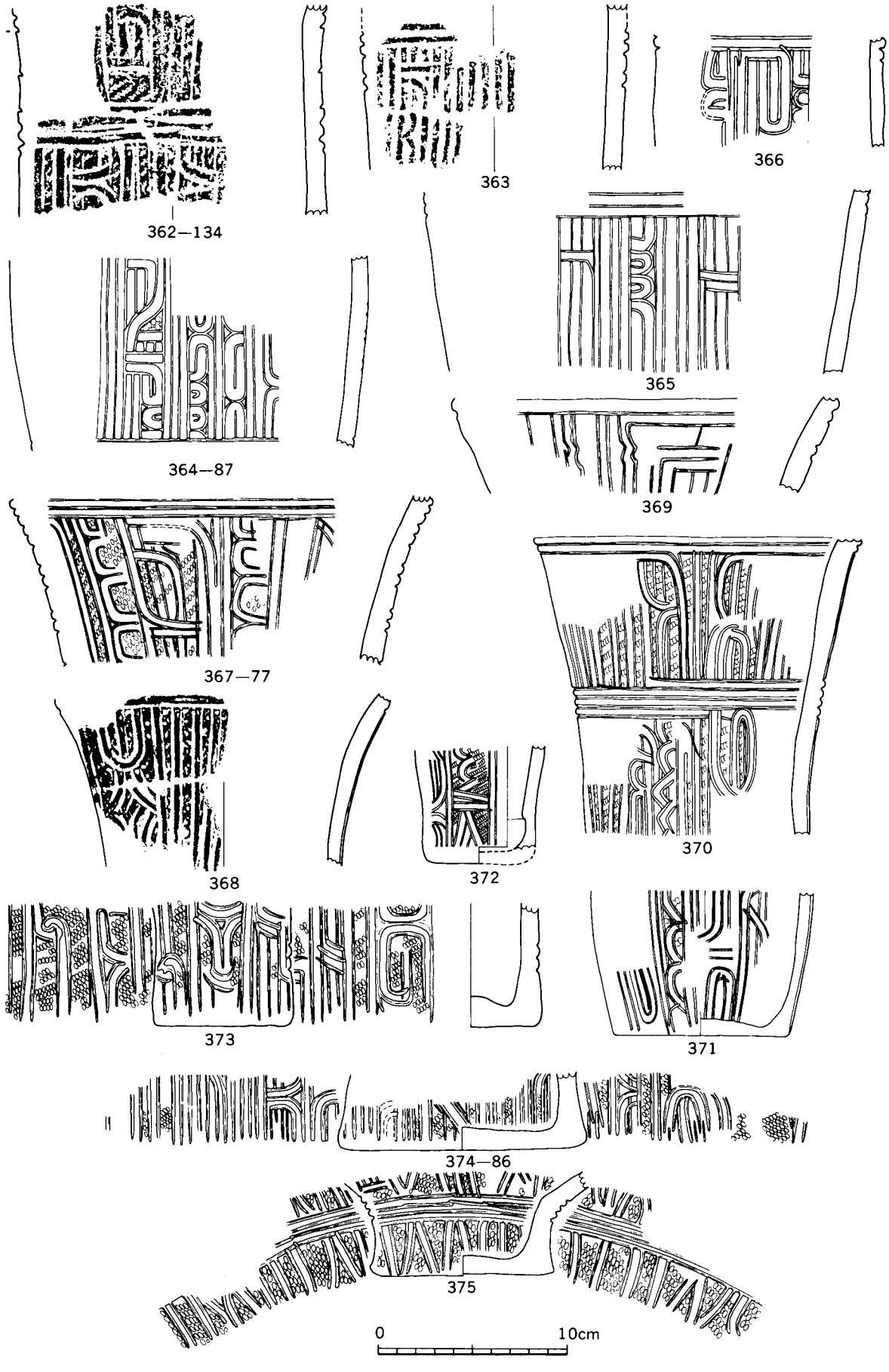
半隆起線文で弧線文を引き、内側に縦方向の半隆起線文が入れられるもので、332では縦の線はヘラ先による沈



第35図　縄文土器拓影・実測図（319～330）（1／3）



第36図　縄文土器拓影・実測図（331～361）（1／3）



第 37 図　縄文土器拓影・実測図（362～375）（1／3）

線となる。334は胎土、焼成とも良くなく、黒褐色を呈している。

B（第36図335・336、図版22）

半隆起線文の端部が「し」の字状にカーブし、それを「の」の字状にかみ合わせて受けるもので、渦巻文状をなす。335は器壁が厚いところから、中型品以上であろう。336の胴部径は13cmをはかる。

C（第35図327・330、第36図331・338～349、図版22・23）

縦位の半隆起線の間に、D字状または逆D字状に弧線をめぐらせるもので、B字状文と呼ばれているものである。が、B字状になるものは少なく、逆D字状になるものが多い。330・338～340は逆D字状の弧線文を縦列につないだもので、340は横幅があるために扁平に見える。341は地文に結束縄文が施文され、円形になる半隆起線文が認められる。内面のナデは丁寧である。344は地文の撚糸文をころがした後に弧線文を引く。器厚1.3cmをはかる。

D（第36図337・350～355、図版23）

半隆起線が縦長の「し」の字状、逆「U」の字状を呈して引かれるタイプで、337は口頸部に近い破片で小突起が付されている。明るい茶褐色を呈し、胎土は良い。354・355はやはり頸部近くの破片で、前者の弧線文を重ねているようだ。

E（第36図356～359、図版23）

間隔をおいた半隆起線内に山形文を縦に引くものや、小区画をつくり文様を充填するものである。半截竹管の幅がせまく、器面の掘り込みが浅い。356は二次的加熱を受けて橙褐色を呈している底部近くの破片である。356は地文に撚糸文が施文されているようだ。

F（第36図360・361、第37図362～364・370・371、図版23）

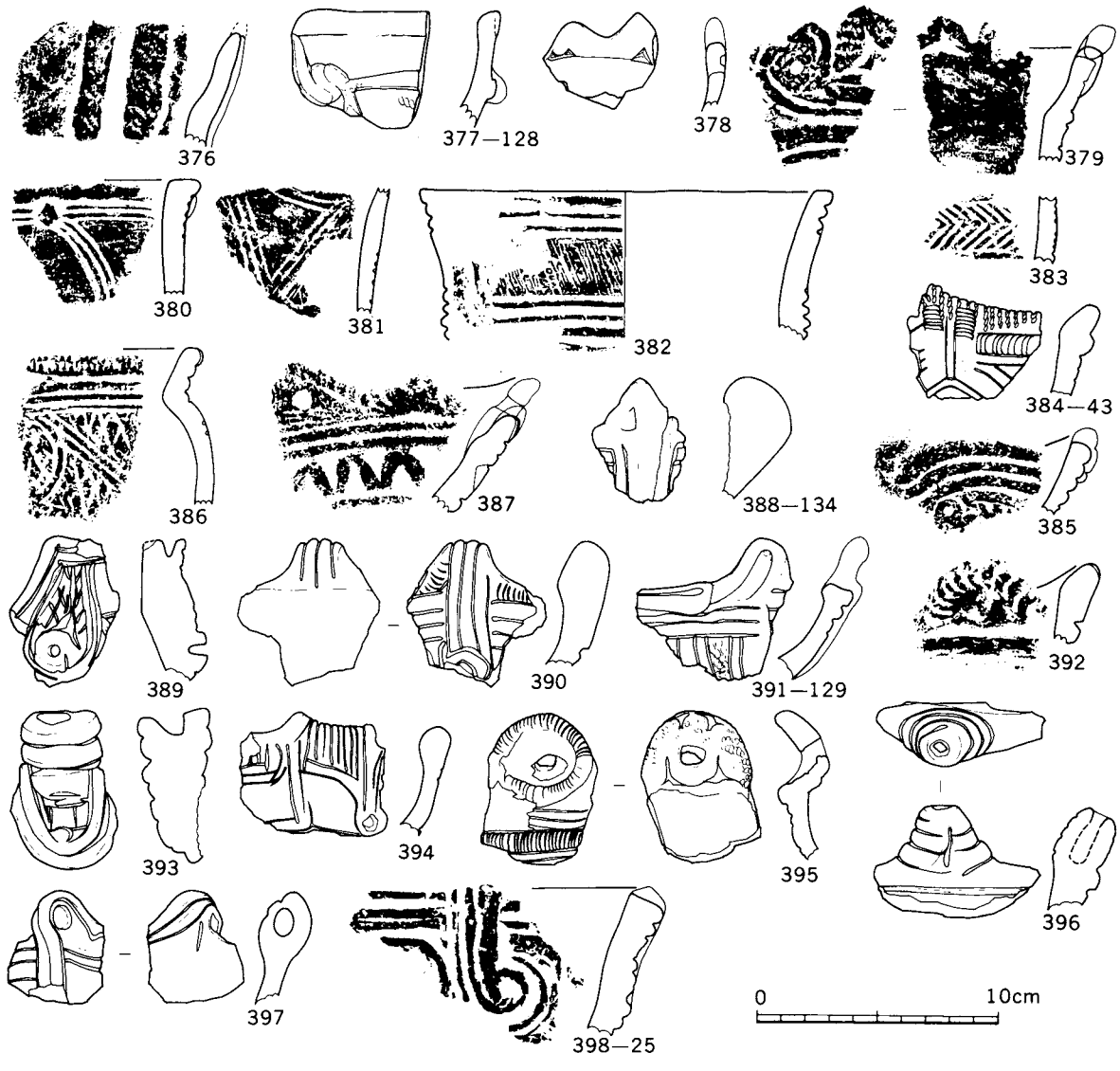
半隆起線が胴部で横方向に分割する構成を施すもので、本遺跡だけではなく概期においても特筆すべき胴部文様分割とされている。362は胴部径約16.3cmをはかる。LRの縄文地文のうえに、上半部分の半隆起線文を引き、横位に区画したのちに下半の半隆起線文をめぐらす。竹管の引き方はやや粗い。明るい茶褐色を呈し、二次的加熱によるものであろう。363は胴径約14.2cmをはかる。364は胴部下半を欠いているもので、胴径約18.8cmをはかる。半隆起線の残部に縄文が見えるところから、一次文様としてころがされていたと見られる。半截竹管の幅は5.5mmをはかるもので、極めて入念に施文を行なう。内面の調整も丁寧である。茶褐色を呈し、胎土は精選されていて、焼成も良好。

G（第37図369～371、図版23）

口辺部にむけて外傾する胴部を持つもので、いずれも口頸部下半の部位になるものである。367は径約22.3cmをはかる。内外面とも磨耗が進んでいる。368は口頸部径約17.7cm、現器高9cmをはかる。半隆起線の間隔をわずかにあけ、縄文地文を生かしている。区画文では菱形をつくる文様が注意される。 369は磨耗が著しいもので、口頸部径約20.3cmをはかる。370は胴部文様帯を二段構成にするもので、371の底部片と同一個体と見られる。頸部径17cm、現器高15.4cmをはかる。底部径は9cmで、網代痕はナデ調整が入れられていて判然としない。内面の炭化物は底面から約2cm上がったところから付着している。横方向の半隆起線文は左から右方向に向かって引かれ、上下で1条づつずれているところから、平行線ではなく連続したものの可能性が高い。底部近くは二次的加熱による変色が見られ、明るい茶褐色をなすが、口頸部は灰褐色を呈する。器壁の厚さが口頸部1.1cmであるのに、底部近くでは5.5mmと薄くなってゆくのが注意される。

底部（第37図372～375）

372・373は小型土器の底部で、それぞれ6.5cm、7.5cmをはかる。文様の単位については判然としない。373の底部には網代圧痕が認められる。374は底径13.2cmをはかる大型品で、胴部にむけて径をせばめていくのが注意される。375は底径9.8cmをはかるもので、直立して立ち上がり、大きく外展して伸びてゆく器形を持ち、本遺跡では唯一のタイプである。鉢器形となるのであろう。外見上は台付土器と見間違える。くびれ部の半隆起線文は左から右へ、一定程度の移動距離を持って引かれ（約2.5～3.5cm）た後に、胴部施文、底部施文が行なわれてい



第38図　縄文土器拓影・実測図（376～398）（1／3）

る。内面はよく調整され平滑となる。色調は灰褐色を呈し、胎土は良好である。

第9群土器

記述してきた8群中へ含め難い例および、口唇部分突起をまとめて第9群とした。本来ならば各例ごとに分類を立てるべきだが、煩雑になるものと思われ行わなかった。

A（第38図376、377、図版23）

376はキャリパー状口縁を持つ、無文地に粘土紐2本を縦位に貼付するもので、濁黄褐色を呈し胎土に砂粒がかむ。377は暗褐色をなし、粘土紐をねじり上げて突起とする。本遺跡通有の突起の手法である。口縁部は貼付して肥厚させた状況がよくわかる。内面の調整は入念である。

B（第38図378、379、図版23）

口唇部分に三角形の突起を2個連続させてつけるもので、378は無文に調整されている。口縁に沿う三角形のくぼみは、ヘラを使用したものではなく、粘土紐をつける際に当初から意図したものと推定される。379は突起に半隆起線をめぐるもので、円形刺突のものは半円状突起になるものであろう。三角形突起には表裏ともに三叉状文を施し、円形刺突も表裏ともに行われていて、口縁部分は無文帯に調整されている。

C（第38図380、381、図版23）

口縁が肥厚する3類の器形をとるもので、同一個体片である。細身の半截竹管で、無文地に円弧、三角形に区画を施す。口辺部では半隆起線の交わる部分に小突起が貼付されている。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。

D（第38図382、図版23）

口縁から隆帯をおろし、半隆起線で横位無文帯を口辺部につくるもので、無文帯にヘラ先による斜位の沈線を引く。口唇は平坦にならされる。

E（第38図383、図版23）

細身の半截竹管（4mm）で、「く」の字状に屈折する文様をつける。どの部位であるかについては不安がのこる。暗茶褐色を呈し、胎土には微砂粒が多い。第1群土器に含め得るものと想定している。

F（第38図384、図版23）

片側の立ち上がりが急の山状突起を持つもので、突起口唇部に撚糸の押圧を施す。突起から下がる2条の貼付隆帯が途中で剝落している。

G（第38図386、図版23）

「く」の字状口縁を持ち、口唇を外側に肥厚させる。頸部以下には網目状となる単軸絡条体で1次施文を施す。

H（第38図387、図版23）

三角形彫去を交互に繰りかえし鋸歯状をつくり出す。口唇には三角形と半円形の突起がつき、半円形突起には穿孔が施され、周囲にはヘラ先による格子目状文がつけられる。内面には段がつくられる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土は良好。磨耗が進んでいる。

I（第38図385、388～398、図版23）

口唇部突起と降帯部の破片で、388・397は断面三角形状のねじれた突起で、前者には刺突が左側に、後者には穿孔が施される。393・396には円形刺突と三叉状文が加えられ、395の背面には穿孔部分の周囲に4個の三叉状文が施されている。390・394・398には口縁から下がる隆帯が付されている。391は第2群土器1類に含めてよいであろう。392は半円突起の縁に爪形文がつけられたもの。

口唇部突起として目を引くものとしては、半円状突起と396のように渦巻状に調整されたものの2種が上げられ、小型土器片にまで同様の装飾が施されている。口辺部突起には「し」の字状をなすもの、および刺突を入れる円形突起が多いようだ。

第10群土器

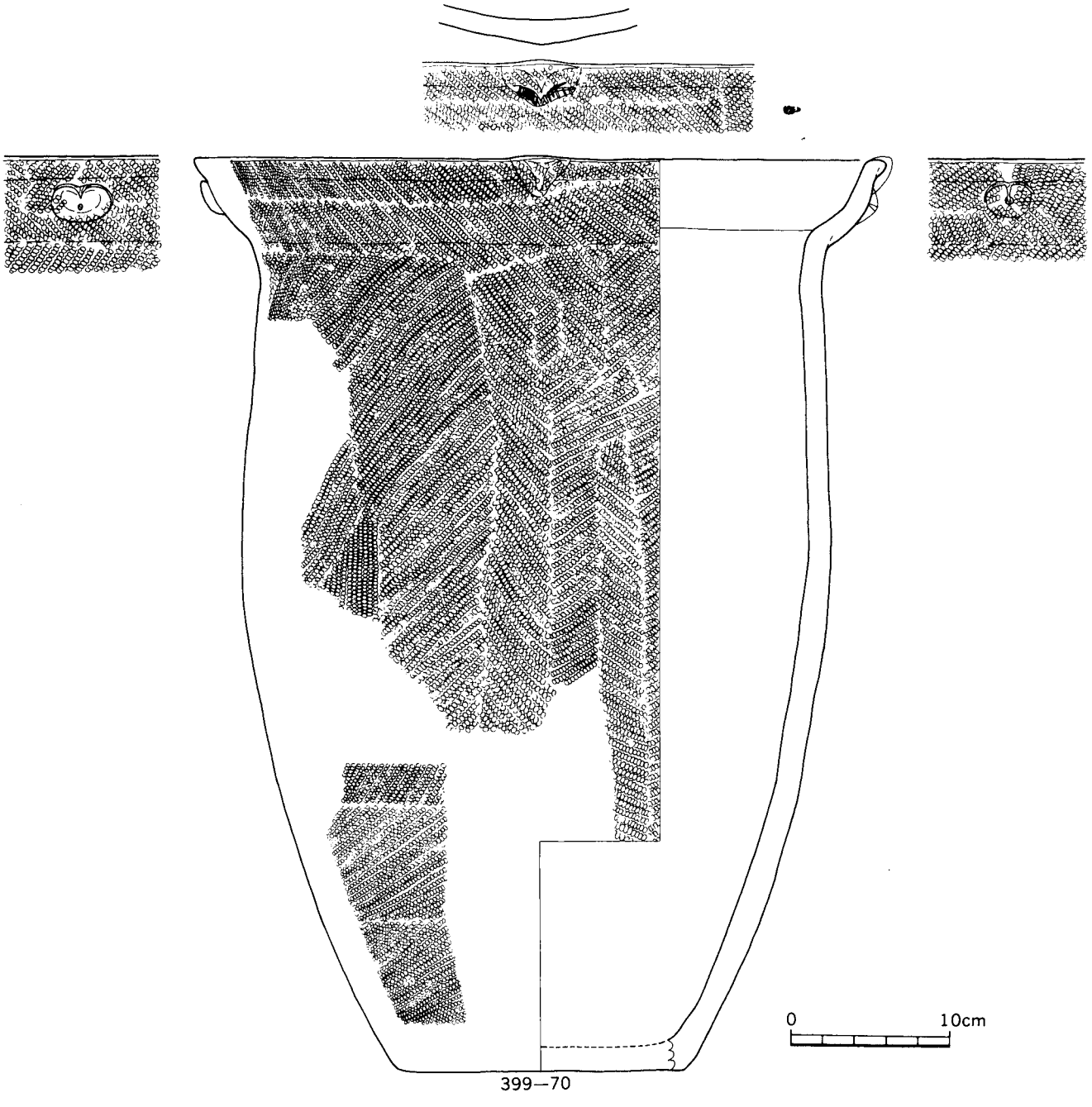
器面を縄文施文のみで終えているもの、いわゆる粗製土器として分類されているもので、第10群土器とした。

1類A（第39図399～第44図427、第46図485、図版13・24）

外反してのびる口辺が端部で直立ないしは外傾気味に立ち上がるもので、キャリパー型のように口縁が内傾するものは極めて稀であるが、広義の意味でキャリパー型のなかへ含めて考えた。口唇部分で平坦にするもの、内そぎ気味のもの、尖り気味のものと細かく見れば小異が目立つが大・中・小型の三器形に大別されるようである。口径が30cmを越えるものを1類Aとした。

399は底部および底部近くの胴部を接合するまでには至らなかったが、全形態をうかがえる好資料である。口縁径約44.2cm、推定器高57cm、底部径18cmをはかる。胴部中位に若干のふくらみをつけ、円筒形状に頸部につなぐ。頸部内面には稜ができ、外展してのびる口辺の端部はゆるやかに立ち上がる。口縁には4個の突起が付され、4等分されているようだ。2個は口縁から貼付され逆三角形状に調整され、1個の下端には刻み目が入れられる。残りの2個は口縁から1段下がった位置に上方が開いている円形突起が付され刺突が加えられている。全面に斜縄文がころがされ、羽状縄文と見える点もあるが、結束が見られない。茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多くかむ。

400は口径約42.2cm、現器高26.6cmをはかる。頸部には竹管と思われる工具で沈線が引かれていて、1条のも



第39図　縄文土器実測図（399）（1／4）

のと2条になるものがある。胴部には結束縄文がおかれ、口唇部分にも縄文が見える。灰褐色を呈し、全体に粗雑な調整である。401は口径約41.4cmで、結束縄文が施文される。402は口径約35.7cmをはかる。口唇平坦面が内側を向いている。403は口径約38.4cm、胴部径31cm、現器高18cmをはかるもので、筒状の胴部となっている。口縁端部には「L」の字状の貼付を施し、ヘラ先によって三叉状に沈線が加えられる。突起は3個まで確認できるが、等間隔におかれたものかは不明。頸部には胴部と分ける沈線が1条引かれている。頸部付近での器厚は特に厚くされ、1.5cmをはかる。口唇上と口辺の縄文は同じLRの原体で、胴部施文原体とは異なる。404は口径約38cm、現器高18cmをはかる。内そぎとなった口唇を持ち、口縁には上を開けた円形突起が貼付され、LRの斜縄文が口縁、胴部ともにころがされる。内面色調は明るい茶褐色を呈しているが、外面は黒褐色から濁灰色を呈する。405は口径約37cmをはかるもので、口唇端部をつまみ上げて内屈させる。口頸部には結束縄文、胴部には原体端部をしばり上げた結節縄文が施文されている。406は口径約37cmをはかる。口唇の押さえによって、粘土

が突出している。縄文原体は結束縄文のようだ。407は口径約38cm、胴径32cm、現器高12.3cm をはかる。口辺部がゆるく外湾するタイプで、頸部に横方向の沈線を入れて胴部と分け、さらに縦の沈線をほぼ等間隔に引き出す。口辺部、胴部とも同一の結束縄文を施文する。408は口径約32cm をはかるもので、口辺に2条の粘土紐を貼付した後に縄文を施文している。409は口径約34cm、現器高17cm をはかる。口辺部の外湾は弱くなり、筒状の胴部との内面での境には、はっきりとした稜がつくられる。縄文施文は口辺と胴部とを分離する通有の方法ではなく、口縁から胴部へとつづけて結束縄文をころがしている。内面のナデ調整は丁寧である。410は口径約38cm としたが、さらに大きくなる可能性が高い。口辺部はゆるく外反させる程度であり、粘土を口辺に貼付する事によって、かろうじてキャリパー状に見える。器壁は厚く1cm を越えている。

411～413は口縁部分に円形突起を付すもので、411には右上に三角形の彫去が加えられ、他2点は左上に少し突起をのばすようにしている。411、413の胴部には結束縄文が施文されている。414は口辺に横方向に2条の沈線が加えられている。416、419は口辺と胴部とで縄文原体を異にしているもの。420は器表面磨耗のため判然としない。421、422は口唇上に小突起がつけられ、422ではさらに口辺に突起が貼付されている。423～425は結束縄文を持つ胴部片で、胴部径約34cm、33.5cm、32cm をそれぞれはかる。内面の調整は外周に比較して丁寧で、425は固く焼きしまっている。

426は口径約31cm をはかるもので、口唇に平坦面を置かずに尖り気味の口縁をつける。貼付突起は磨耗のため判然としないが、右側にヘラ先による沈線文が見られる。

485は口径約37.4cm、現器高21.5cm をはかる。口辺内側に稜をつけるところからようやくキャリパー状を呈すものと判断した。外周は撚の太い縄文であるが原体長さなど判然としない。内面は頸部以下までヘラナデ調整が入れられ、砂粒を内部に沈み込ませているが、胴部下半は砂粒の移動が見られる粗いナデ調整である。胎土に金雲母が含まれている。器壁の厚さは11mm をはかる。

1類B（第44図428～451、図版25）

口径が30cm を越えない中型品を1類Bとした。

428は口径約27.7cm で、口辺部分に上方の開いた円形突起を貼付する。429は口径約27.5cm、現器高15.2cm をはかる。口辺と胴部の縄文原体は異なるようだ。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く磨耗が進んでいる。430は口径約28.2cm をはかる。胴部は原体端部をまげる結節縄文と想定される。431は口唇に平坦面をつけ、頸部に稜のつくタイプで、口径約27cm、現器高15cm をはかる。短い口辺部に径2.1×3cm の楕円形突起が貼付されている。口頸部までの内面調整は丁寧であるが、胴部の調整は粗い。432は口唇に縄文を持つもので、口径約25.7cm をはかる。435～437、440～442は口唇に平坦面をつけるもので、435と436には撚糸文を施文する数少い例である。441、442、444、445には口辺に貼付突起がつくが、441をのぞいて小型品の可能性が高い。

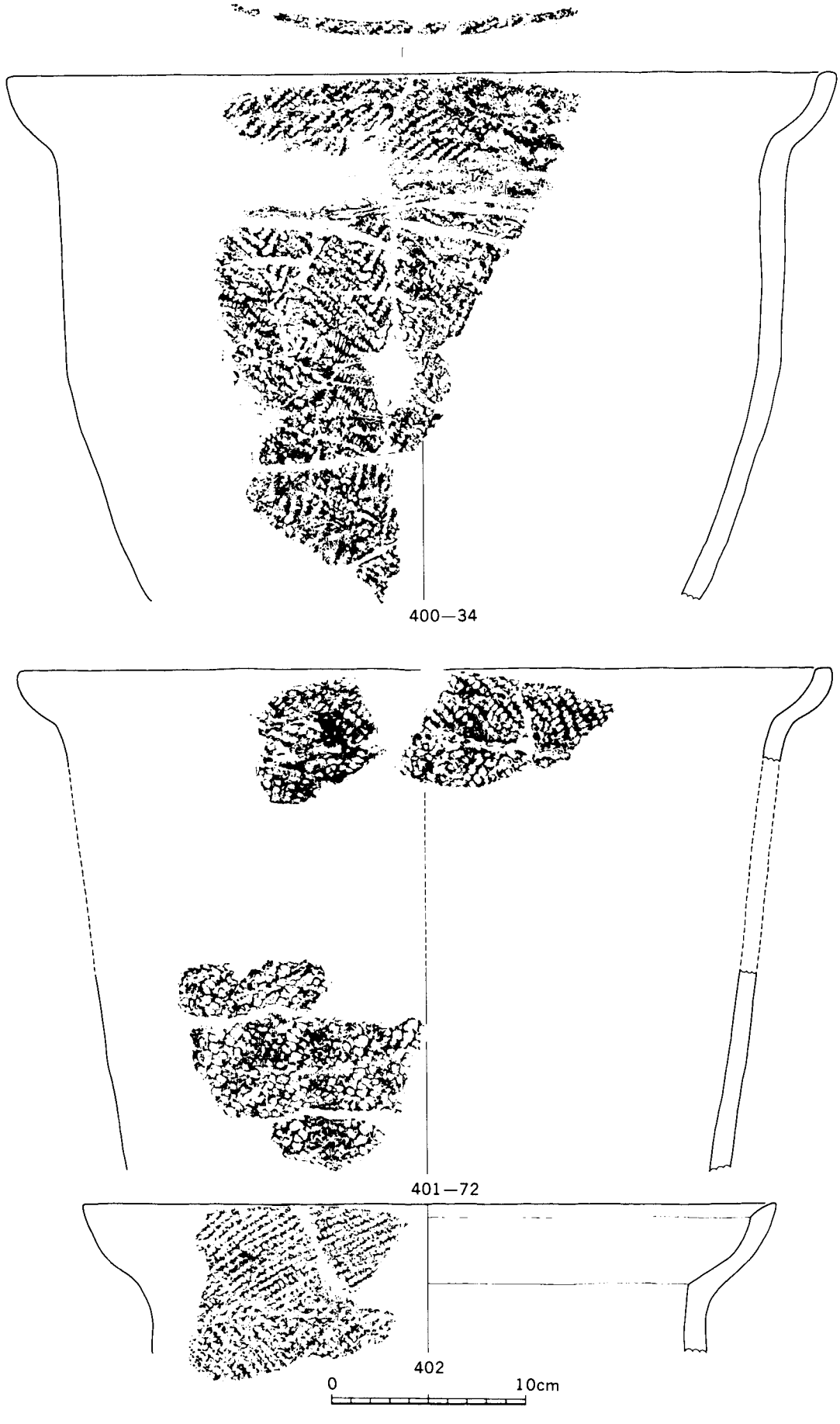
447は口径約29cm、現器高22cm をはかる。448は口径約27cm、現器高22.5cm をはかる。器表面には凹凸が多く、縄文施文もやや粗雑である。器表面は淡黒褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。449～451は口径約25.3cm、24cm、22cm をはかるもので、451は口唇を平坦にならし、口辺に右上のあいた円形突起がつけられている。

1類C（第45図452～第46図471、図版25）

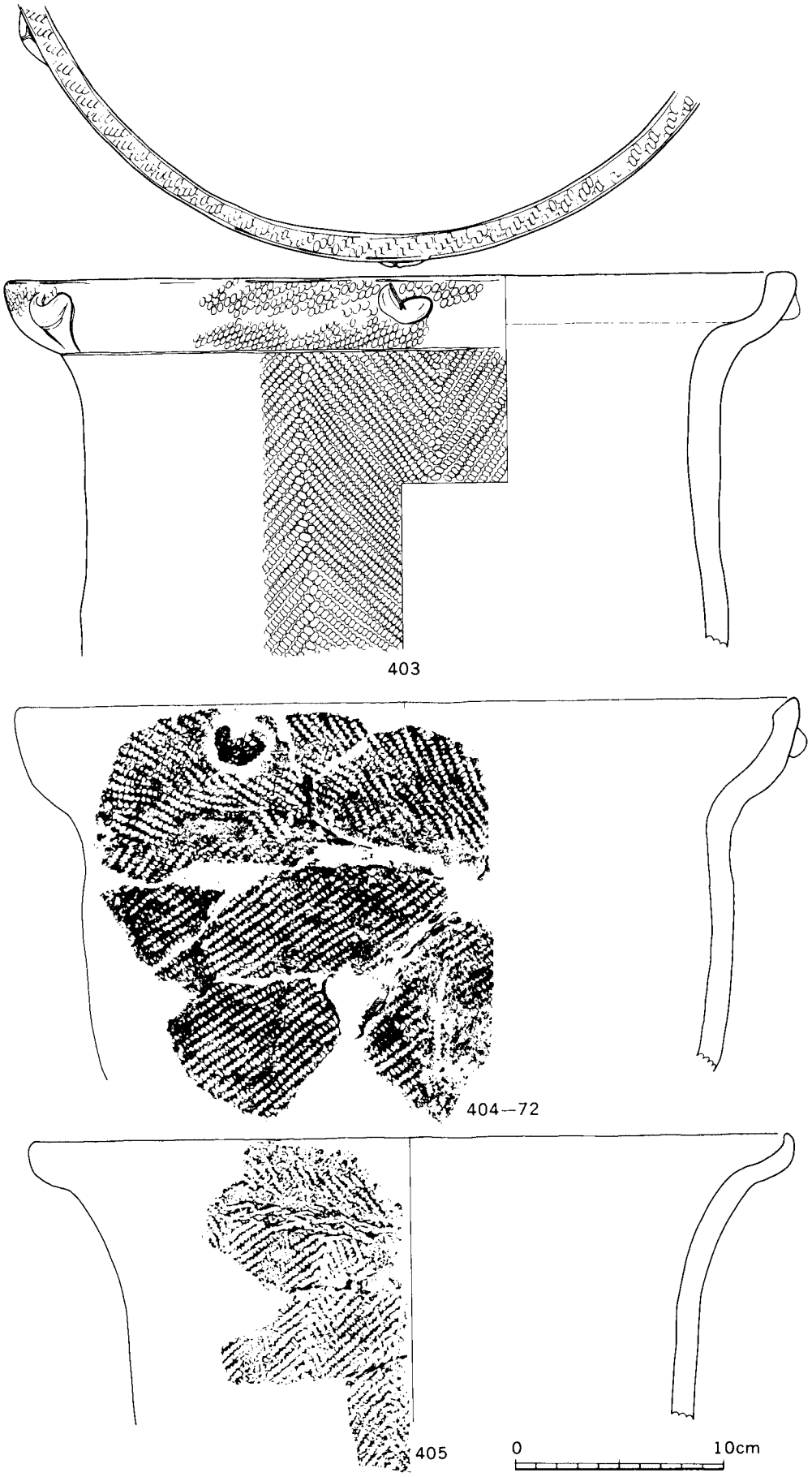
口径が20cm 以下のもので1類Cとした。

452は口径約19.5cm、胴径16.5cm、現器高10.6cm をはかる。全体にLRの斜縄文を施文する。453は口径約18.2cm、現器高10.8cm のもので、口唇内側に平坦面をおき、口辺に1.7×1.4cm の上方の開いた円形突起を貼付する。縄文は結節をもつもので施文する。内面では継ぎ目ごとに凸部ができている。約1.8cmの間隔を見る。454は口径約19cm、現器高16.5cm をはかる。口辺部内外面に炭化物の付着が認められる。縄文は結束のもので、きれいな羽状を呈す。褐色から茶褐色を呈し、胎土には砂粒は少なく、内面の調整も丁寧でヘラの跡がよく見てとれる。455～457は口径約17cm、17cm、17.2cm をはかる。口唇はナデ調整が入れられ、457では平坦面がつくられる。なお、457の頸部が無文地となっているのが注目される。ともに暗茶褐色を呈し、455には煤の付着が認められる。

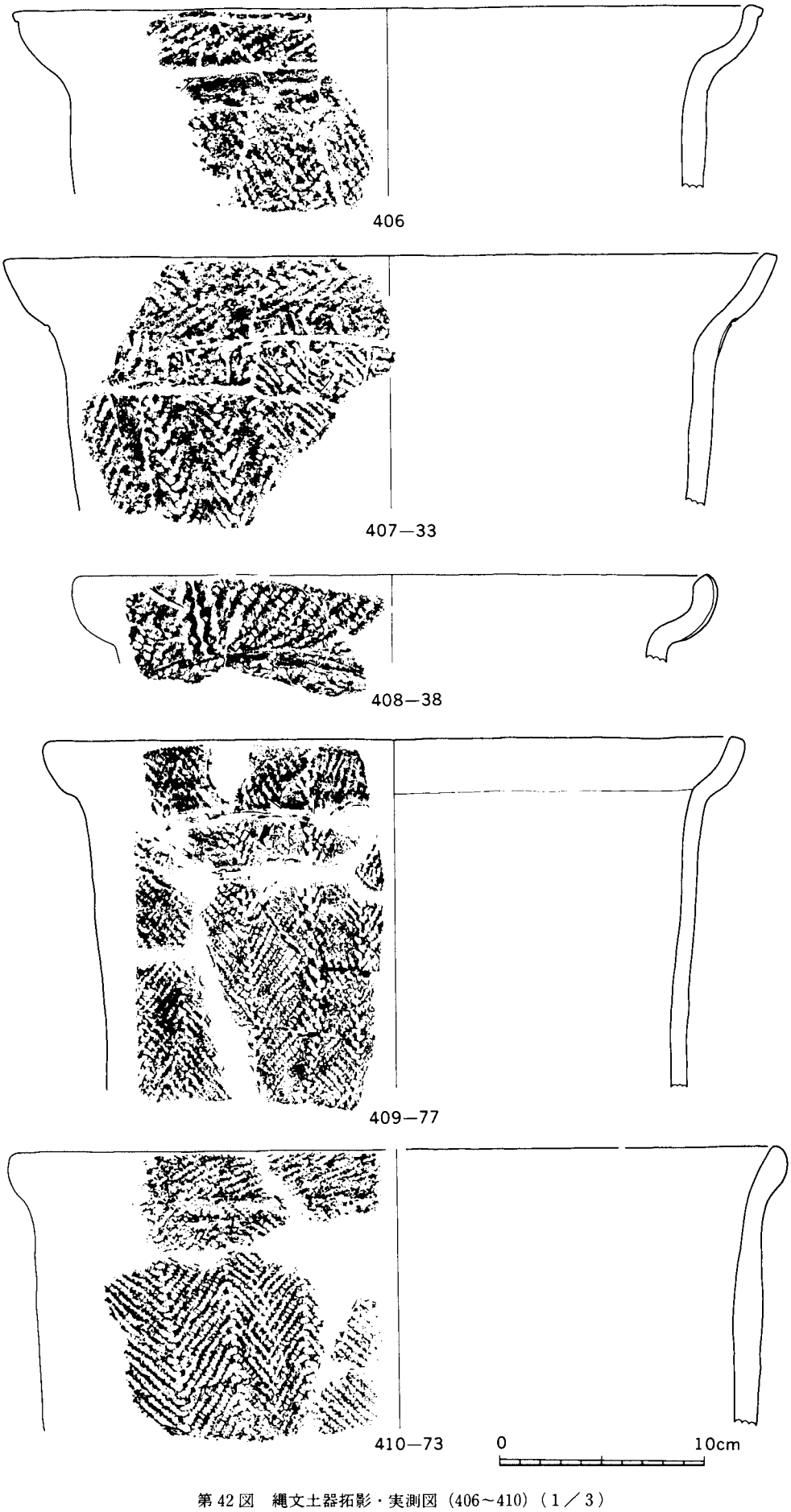
458は口径約18cm をはかる。口唇部は平坦にされ、内面の調整も横方向に行われる。暗褐色を呈し、胎土、



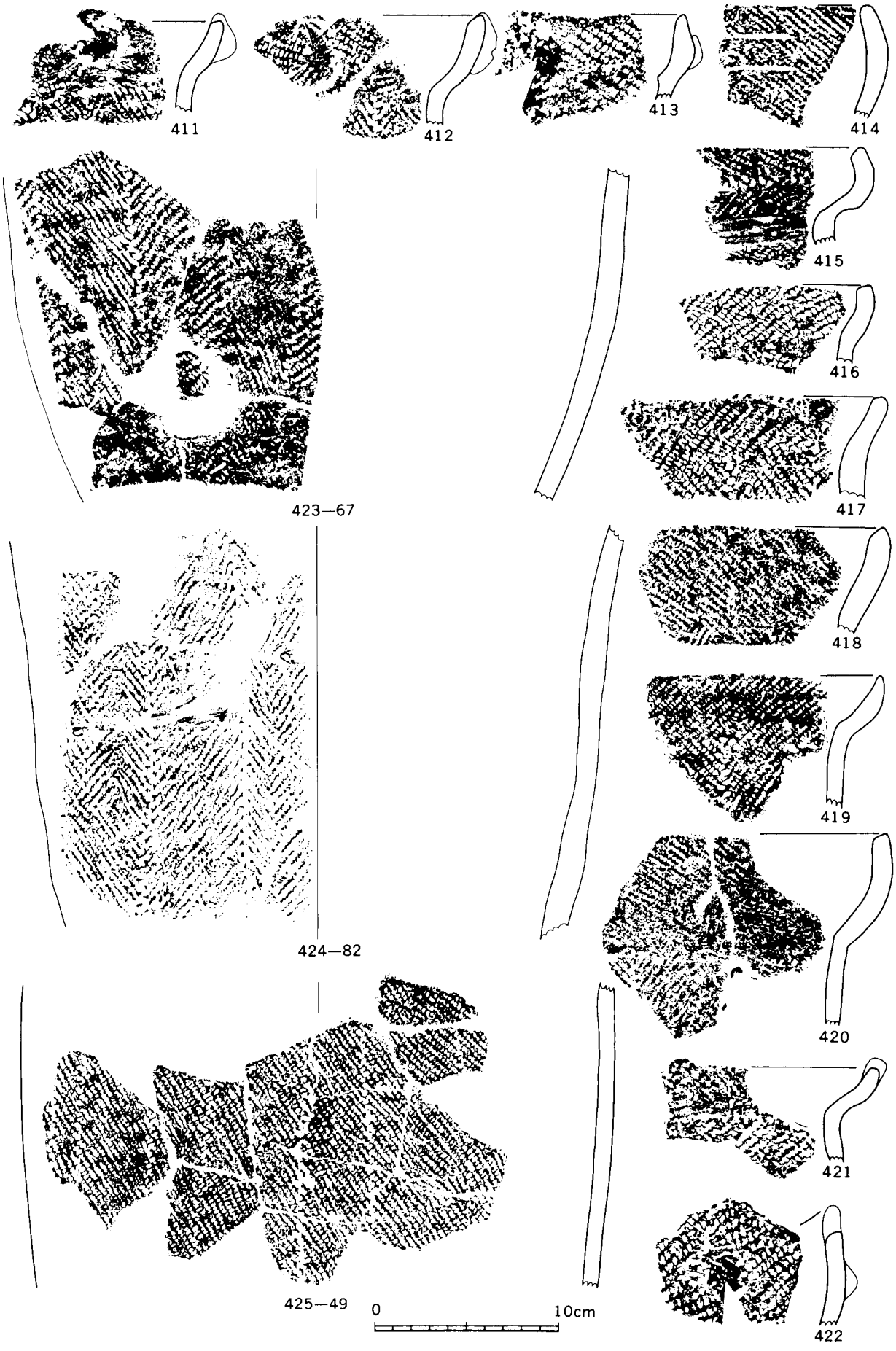
第40図　縄文土器拓影・実測図（400～402）（1／3）



第41図　縄文土器拓影・実測図（403～405）（1／3）

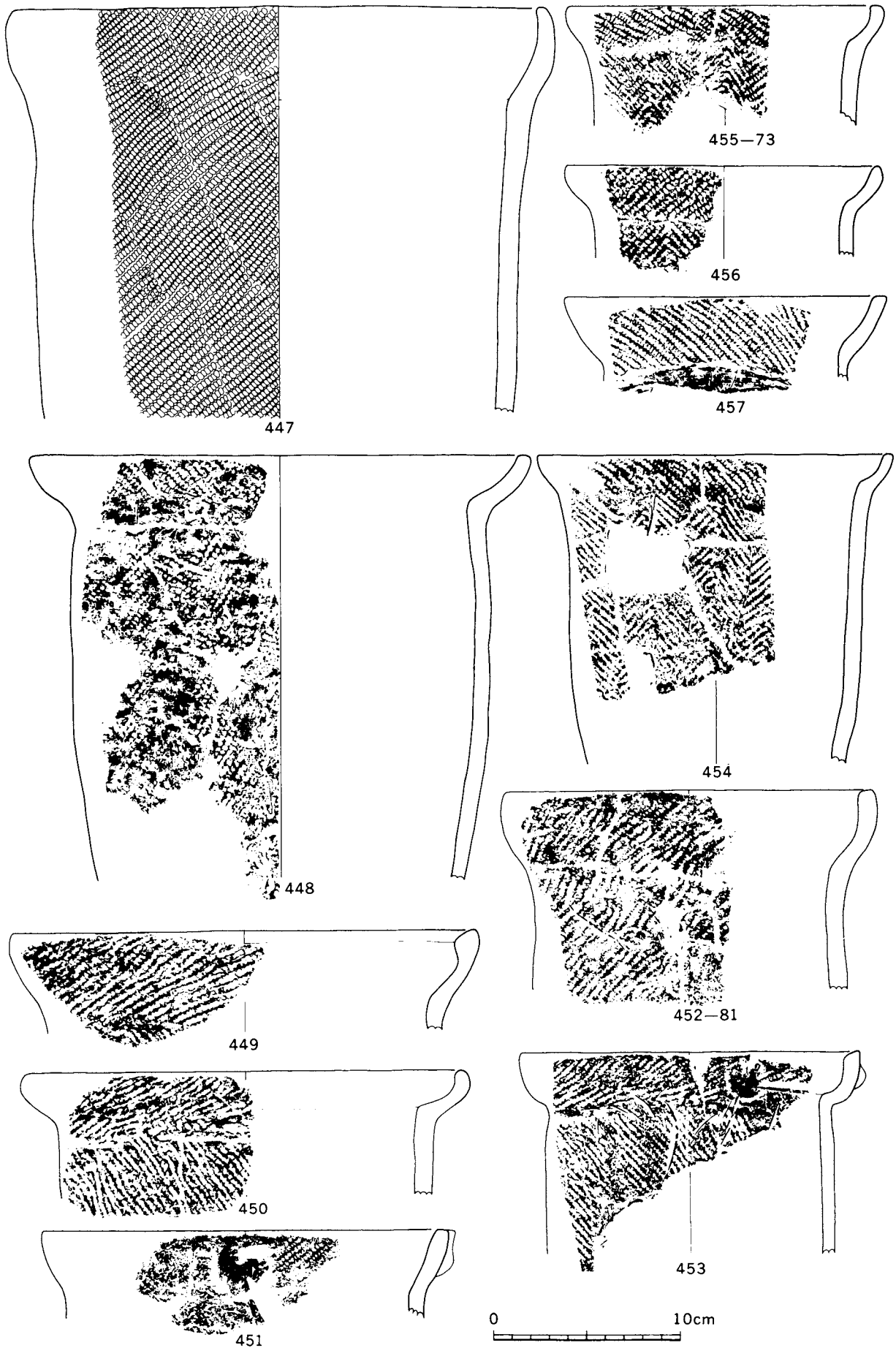


第42図　縄文土器拓影・実測図（406～410）（1／3）



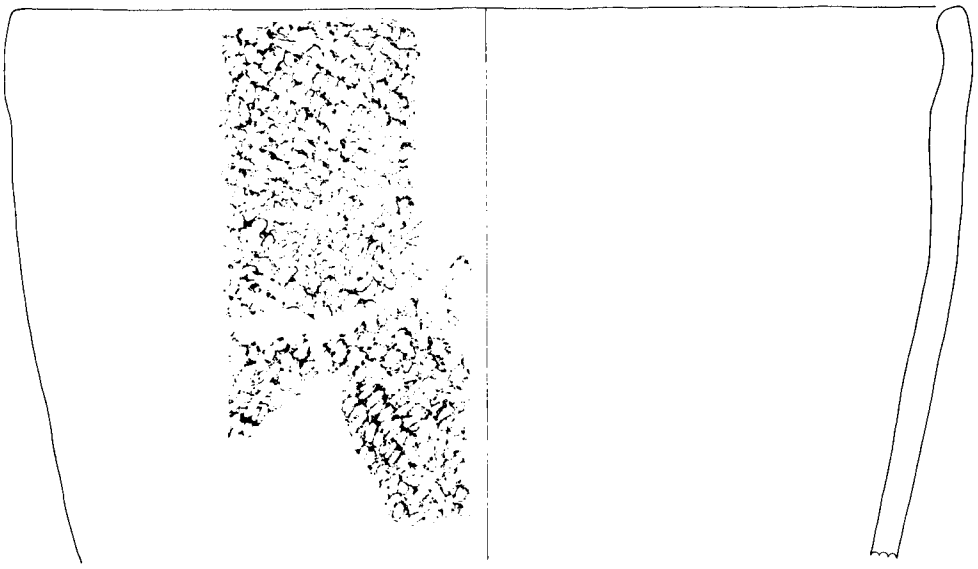
第43図　縄文土器拓影・実測図（411～425）（1／3）

第44図　縄文土器拓影・実測図（426～446）（1／3）

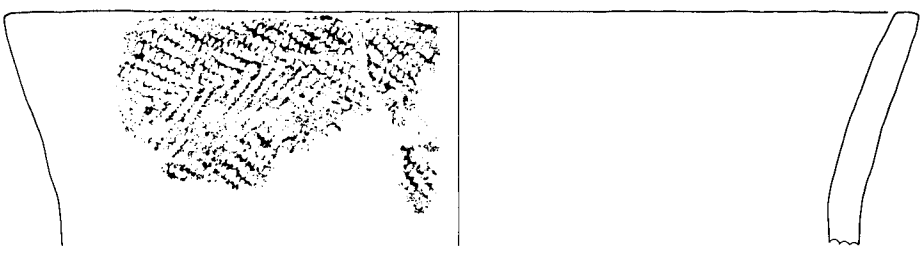


第45図　縄文土器拓影・実測図（447～457）（1／3）

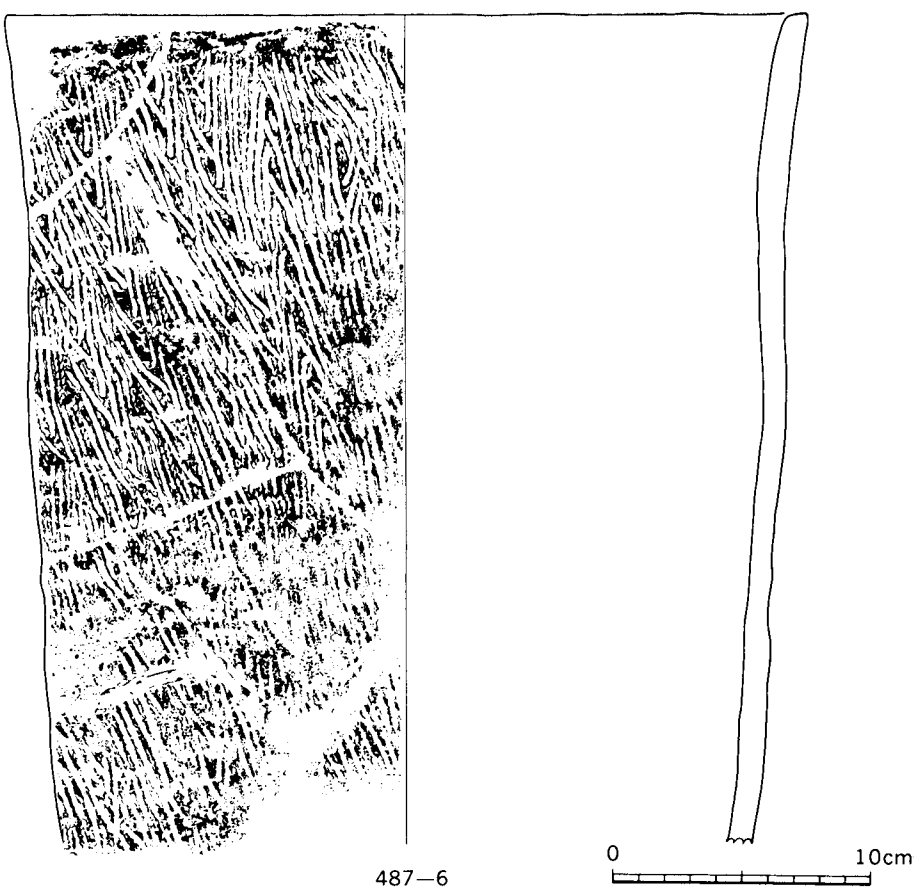
第46図　縄文土器拓影・実測図（458～484）（1／3）



485—14

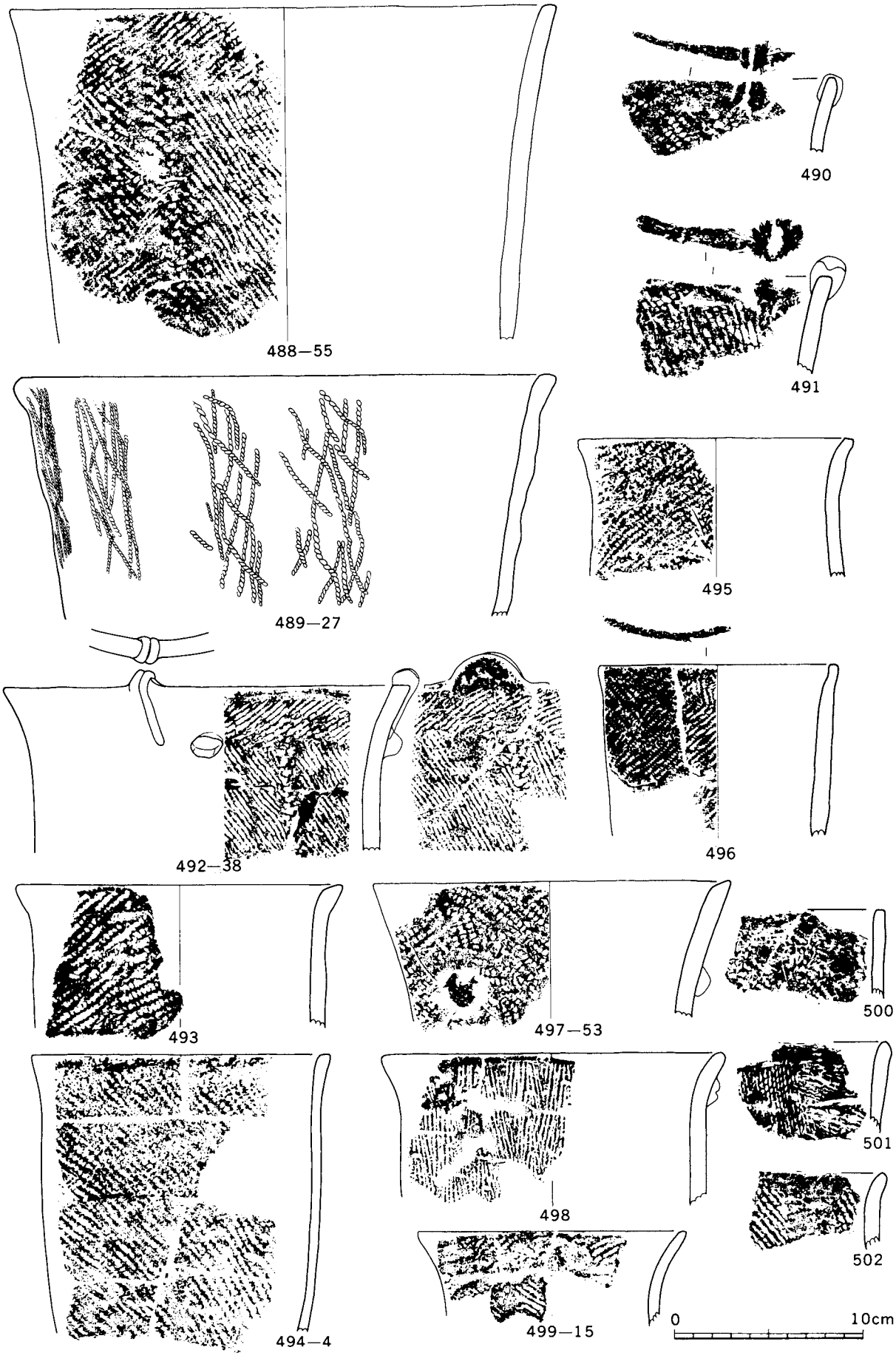


486—98



487—6

第47図　縄文土器拓影・実測図（485～487）（1／3）



第48図　縄文土器拓影・実測図（488～502）（1／3）

焼成とも良。縄文施文はやや粗雑で、原体がつかめない。459はわずかに外反して口縁の立ち上がるもので、口径18cmをはかる。口辺と胴部の縄文原体は異なるようだ。460は幅の狭い口辺に円形突起をつけ、頸部はヘラ先による沈線を横に引いて胴部との境をきわ立たせている。結束縄文を施文する。口径約16.6cmをはかる。462の口縁内面はゆるく外反するだけで、稜線が消えている。口径約17.4cmをはかる。463は外反する口辺部分で粘土を接合している状況をよく観察できるもので、口唇上に半円状突起が付けられている。口径約16.6cm、現器高10.3cmをはかる。胴部にはＬＲの結節縄文が施文されるが、空白部分が目立つ。414は口径約17cmをはかるもので、口縁と胴部施文の原体が異なるようだ。466の口縁は極端に短くなる。468の口唇には粘土紐、469の口縁には円形突起が貼付されている。470の口縁突起の上には指頭と思われる押圧が入れられている。口径約13cmをはかる。471は口径約20cm、器高27.4cm、底部径8.8cmをはかる復元のなった例である。短い口辺部には1.5×1.4cmの「し」の字状突起がつけられているが、３個までは見られるが、４個ではないかと想定される。器表面は底部近くになる程、磨耗がすすんでいて縄文施文等の調整は不明である。頸部以下の縄文は結節をもつ短い縄文と想われるが判然としない。なお、結節の部分は水平方向に移動し、縦位置にも動くようだ。淡黒褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。

１類Ｄ（第46図472～475、図版25）

口径が10cm前後のミニチュア土器に近いタイプで１類Ｄとした。

472～475は口径が9.6cm、9.6cm、10cm、8.2cmをはかる。472は口縁に突起を貼付する。473は口唇に縄文が、胴部には結束縄文が施文される。474、475は口縁部に粘土を貼付するもので、無文とするところから分けて考えたほうが良いかもしれない。

10類（(第46図476～478、図版25）

口辺部が「く」の字状に外反するもので、口縁の立ち上がりを持たないものと判断したが、１類Ａ・Ｂのなかへ吸収して考えるべきかもしれない。

１類Ｅ（第46図479、図版25）

キャリパー状を呈する口辺部から口縁部が直立して立ち上がるタイプで、１例のみの検出であった。軌軸文をつける群のなかの１類Ｂに相似した器形が見られる。口径約20cmをはかる。口縁部分は外側に粘土を貼付した状況がよく見られる。縄文原体は無節縄文と見られる。

５類（第46図480～484、図版25）

口縁部がわずかに外反する器形で、粘土紐を貼付して段をつけ口縁帯を持つのが特色である。

481は口頸部分が無文で、482は口縁帯が無文である。483は口径約15.2cm、現器高6.9cmをはかる。ＲＬの斜縄文が施文され、口唇上にも行われる。内面のナデは横方向の粗いものである。484は口径約12.8cm、現器高８cmをはかる。

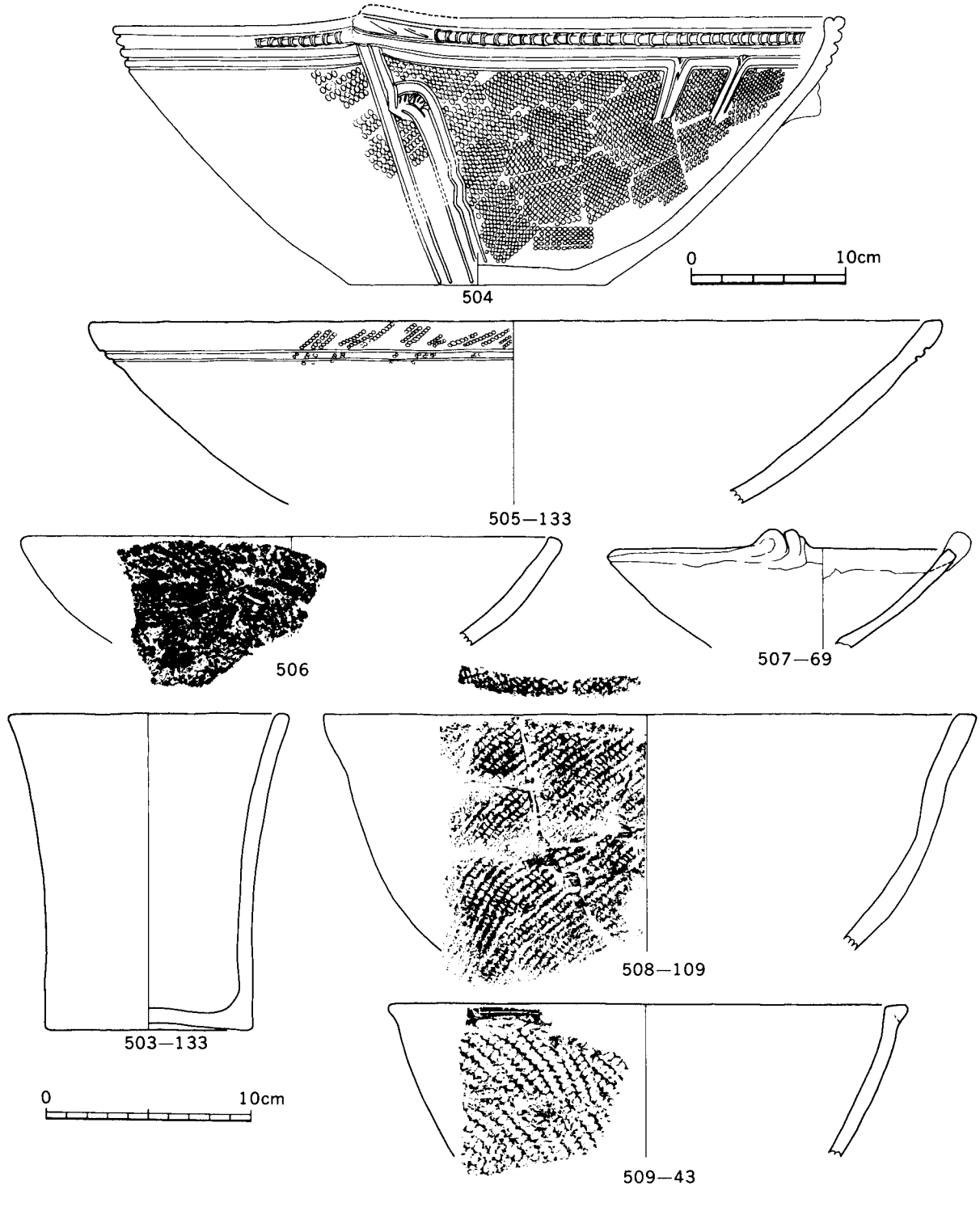
３類（第47図486、487、第48図488～502、第49図503、図版26）

口辺部が直立する深鉢で、いわゆるバケツ状を呈するタイプである。

486は口径約36cmをはかる。口辺がゆるく外反する。口唇上はなでられ平坦面をつくるが、内側に向いている所も見られる。濁黄褐色を呈し、胎土に砂粒が少なく、焼成も良い。

487は口径約31.6cm、現器高32.7cm、器厚９mmをはかる。口唇は平坦で、口縁端部を若干あけて撚糸文を施文する。内面の胴部下半に炭化物の付着が見られる。

488は口径29.4cm、現器高17.7cmのもので、結束縄文が施文されている。内面は著しく磨耗がすすんでいる。濁黄褐色を呈し、胎土に砂粒が多い。489は口径約29.2cm、現器高13cmをはかる。器表面は継ぎ目の凹凸が目立ち、簡単なナデ調整で終えている。撚糸文の巻き方は乱雑なもので、間隔をおいて施文していく。暗褐色を呈し、胎土には砂粒が少ない。490～492は口唇部に粘土を貼付するもので、492には半円状突起、口頸部に楕円形状の突起がつく。口唇から下がる隆帯上に縄文が見えるが、口頸部の突起には認められず、縄文施文の後に貼付したものと推定できる。縄文は無節と思われる結束縄文であろう。暗褐色を呈し、砂粒は少ない。493は口径約17.5cmを



第49図　縄文土器拓影・実測図（503～509）（1／3）

はかる。494は口径約16cm、現器高15cmをはかる。口唇部は平坦で、シンプルな器形をもつ。破片は横方向に割れているところから、粘土紐の積み上げ部分から剥離している事と想定できる。内面での調整は粗く、底部近い部分では斜め方向のナデが施されている。器表面は磨耗が進んでいる。495は口径約14.8cmをはかる。496は口径約12.8cm、現器高9.1cmをはかるもので、口唇部にも縄文が施文されている。497は頸部に小突起がつく、口径約19.3cmをはかる。498は外傾する口縁の頸部に、刺突を施す円形突起を貼付するもので、撚糸文が施文されている。口径約18.4cmをはかる。499は外反する口縁をつけるもので、口径約14.4cmをはかる。

503は口径13.8cm、器高15.5cm、底部径10.2cmをはかる無文の土器である。内面はヘラによる横ナデが入れられる。茶褐色を呈し、焼成は良好。胴部内面に炭化物が見え、器表は二次的加熱を受けて明るい橙色をなす。

第11群土器

浅鉢器形となるもので1群（第49図、図版14、26）をもうけた。大型品と小型品があり、深さも深鉢に近いものも含んでいる。

504は大型品で復元完形となった。口径約48cm、器高17cmをはかる。口唇に沈線を入れ、肥厚した口唇に突起が付されるが欠失している。口唇突起から底部にむけて直線的に半隆起線が下ろされ、口辺部に円錐形の小突起が貼付され鍵の手状に半隆起線が引き下ろされる。突起にはヘラにより蓮華状文が加飾される。縦位の半隆起線をはさんで、横方向の半隆起線文にずれが生じているが、口縁に沿うかたちでめぐらされたためであろう。色調は暗茶褐色から茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。内面は丁寧なナデが施されている。

505は口径約41.6cm、現器高8.8cmをはかる。全体に粗雑なつくりで、粘土の接合面からの割れ口が目立ち、口縁部の粘土の貼付痕がはっきりと見える。口縁部付近だけ縄文がころがされ、半截竹管で2条の沈線を引く。黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれていて良くない。506は口縁に斜縄文がうすく見られる他は、素文となる浅鉢で、口径約26.5cmをはかる。外周は磨耗がすすんでいて調整がつかみ難い。内面は横ナデを施す。507は無文の小型品で、口径17cmをはかる。口縁部全体の4分の1程度の欠損であり、口唇上の突起は1個だけの可能性が高い。粘土紐2条をとなり合せに貼付した後に、内外面のナデ調整を施している。調整は粗く、輪積み痕がよく観察できる。明るい茶褐色を呈し、胎土、焼成は良い。

508・509は浅鉢というよりは、鉢器形と考えたほうが良いかもしれない。前者では口径約32cm、現器高11.5cm、後者で口径約25.3cmをはかる。508の口唇平坦面には縄文が施文されている。509の口唇は外側に貼付を施して肥厚させる。507は磨耗が進んでいるが、508は焼成堅緻である。

第12群土器

口縁部形状、文様構成等がつかめない胴部と底部とをまとめて第11群とした。（第50図～第51図）

510はキャリパー状口辺部を持つものと解される大型品で、口辺部径約53cmをはかる。縄文原体は本遺跡では類例の少ないタイプで、附加条縄文と見られる。茶褐色を呈し、胎土に砂粒は少なく良好。511・512の胴部径は37cmと32.5cmをはかる。単軸絡条体第1A類に分類されるもので、517は網目状を呈する単軸絡条体第5類、520は同第6類と想定されるが磨耗のため判然としない。518は爪形文をつける縦の隆帯を間にして、横方向の爪形文が段違いとなる。519は隆帯上に横方向に半隆起線を重ねて施文し、無文帯に向いた頂部に刺突を加える。ともに暗茶褐色を呈し、遺存状態は良好。

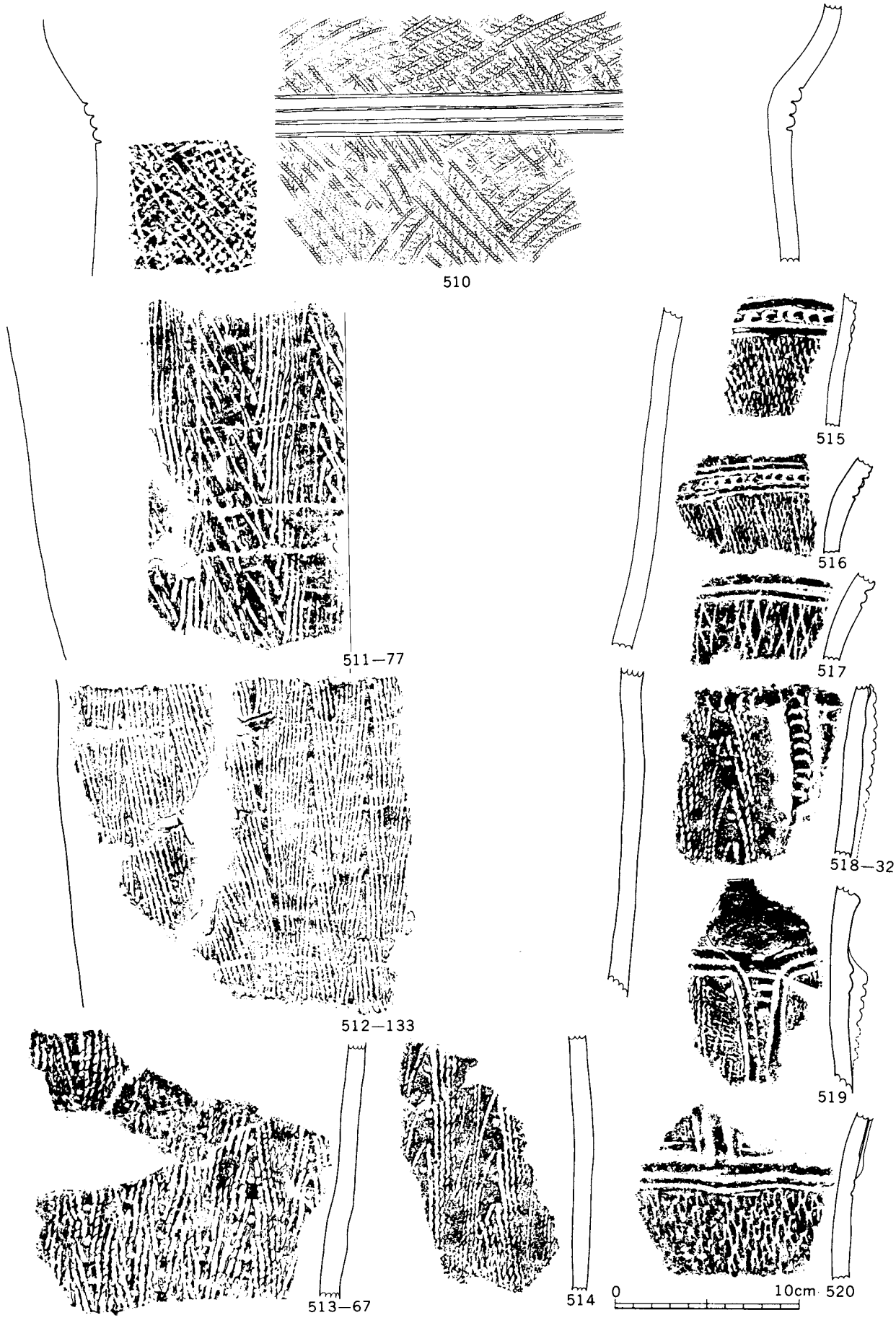
521～523は口頸部近くまでをうかがうもので、口辺部の外反する器形をとるものと想定され、頸部に半隆起線文を持たないところから、第10群土器1類Cにつくものと考えている。521は頸部径13cm、現器高16.5cm、522は頸部径12.5cm、現器高18cmをはかる。523は胴部中位がふくらむ器形を持つ、現器高18cm、胴部最大径13cmをはかるもので、結束縄文を施文している。内面は縦方向にナデ調整を施す。

524・525は縦の半隆起線が胴部中程まで引き下ろされる。524の2個の単位まで確認され、ほぼ全周の4分の1であることから4単位と考えられる。胴径24cm、現器高18cmをはかり、RLの斜縄文を施文する。茶褐色を呈し、胎土は良。

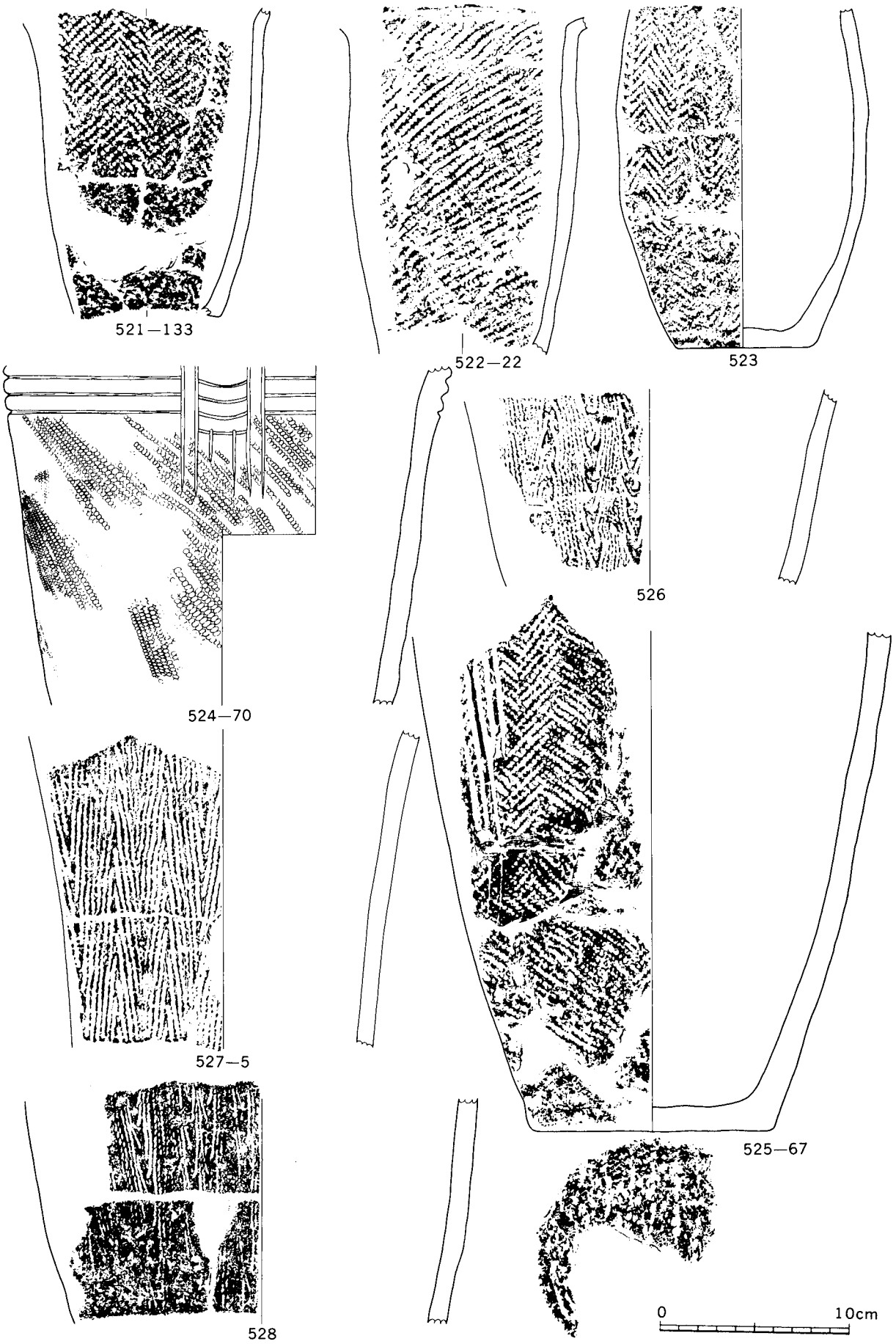
底部（第52～55図）

底部の出土は小片を含めて集成をおこない、682個の多数にのぼったが、重ねて計測しているものと想定され実個体数は大きく減小するものと思われる。底部の形態で見ると深鉢器形となるもので占められ、浅鉢器形となす例は図示するには至らなかった。なお、第3次調査出土品のなかに台付底部が数点含まれている。

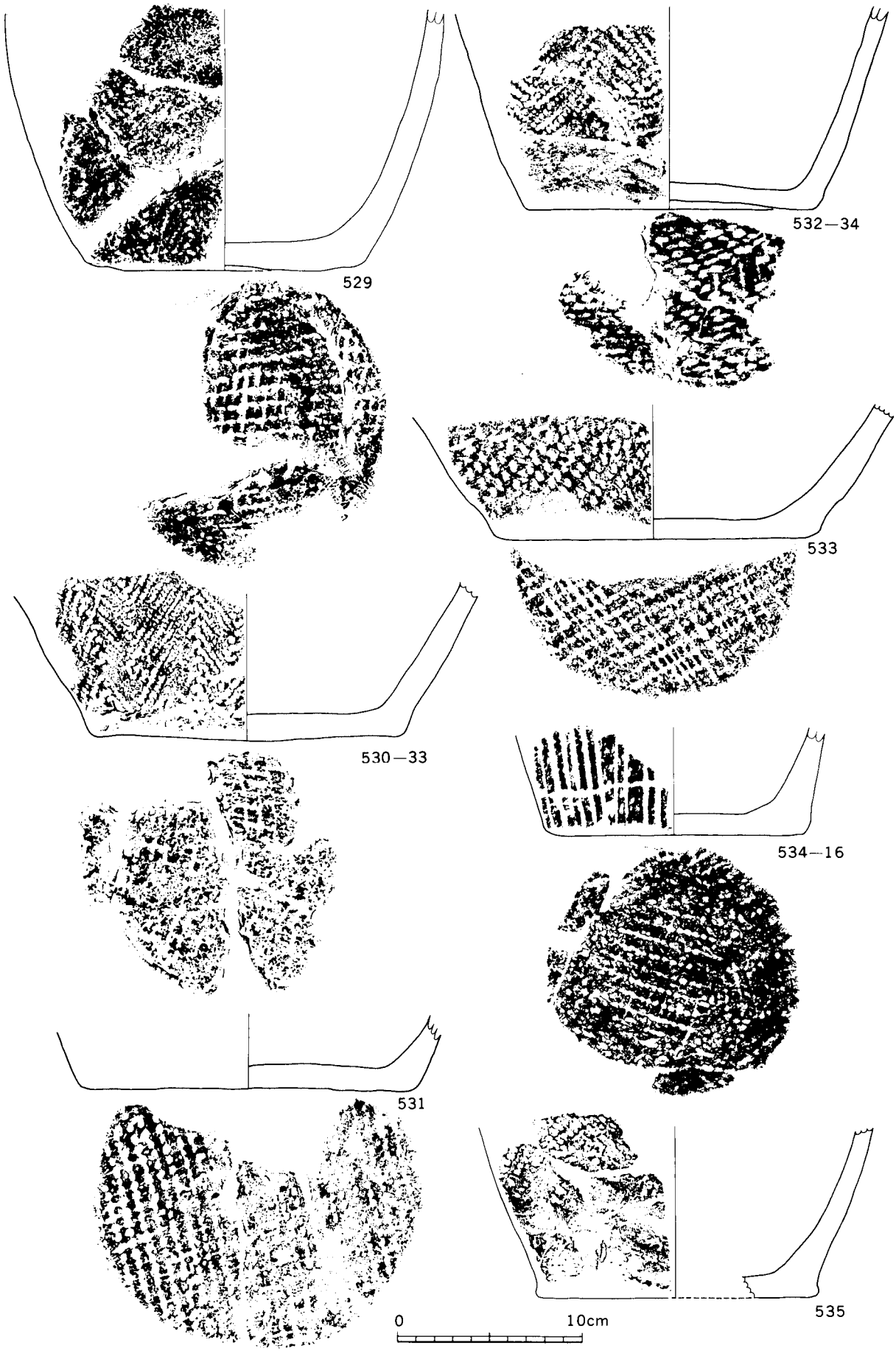
底部径は最小4cmから最大26.8cmまでの幅があり、8cmから12cmまでの範囲のものが31%を占めている。さらに細かく見れば底径10cmのラインで分割できるようだ。なお、底径が不明の例を除いた底径8～12cmの占



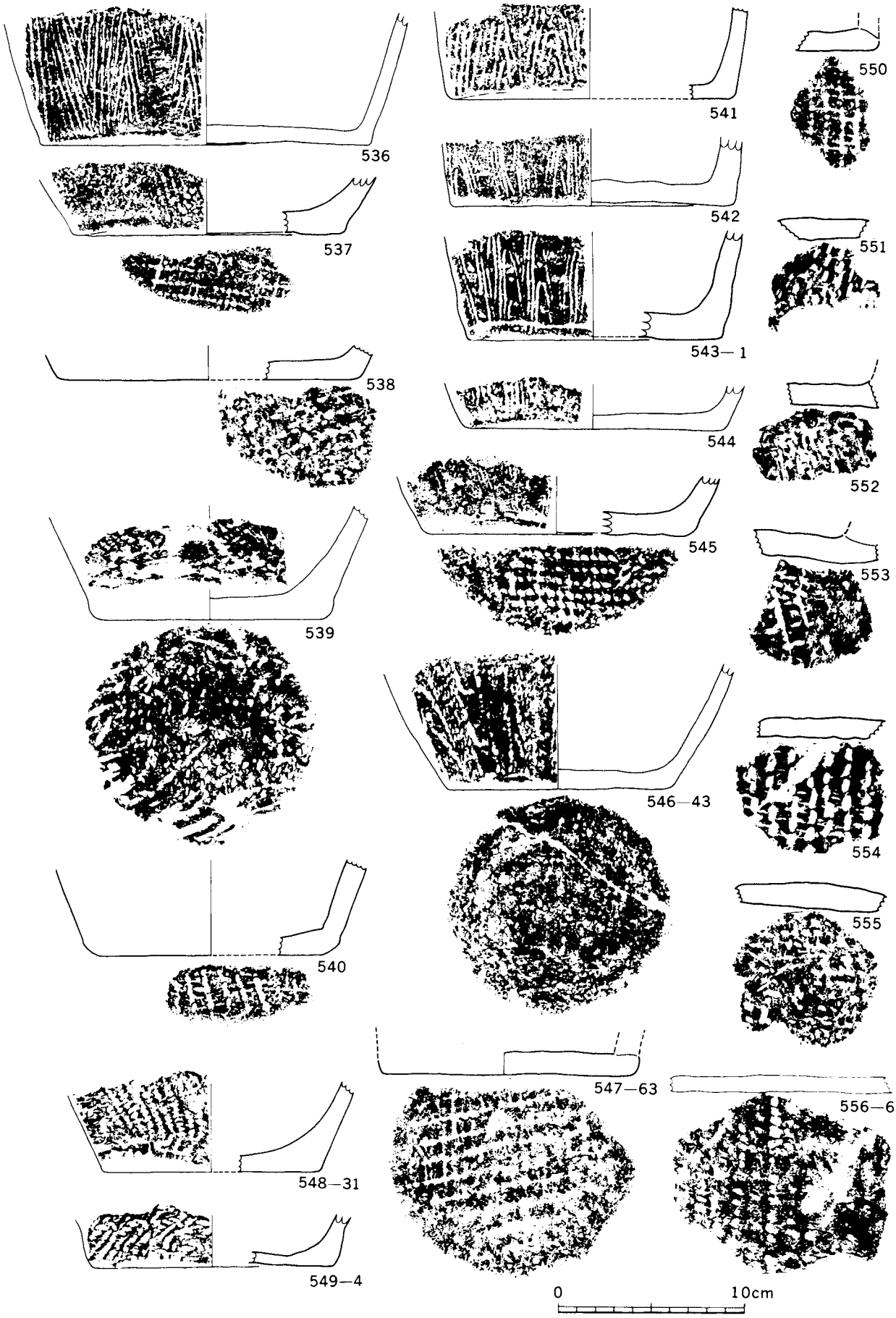
第50図　縄文土器拓影・実測図（510～520）（1／3）



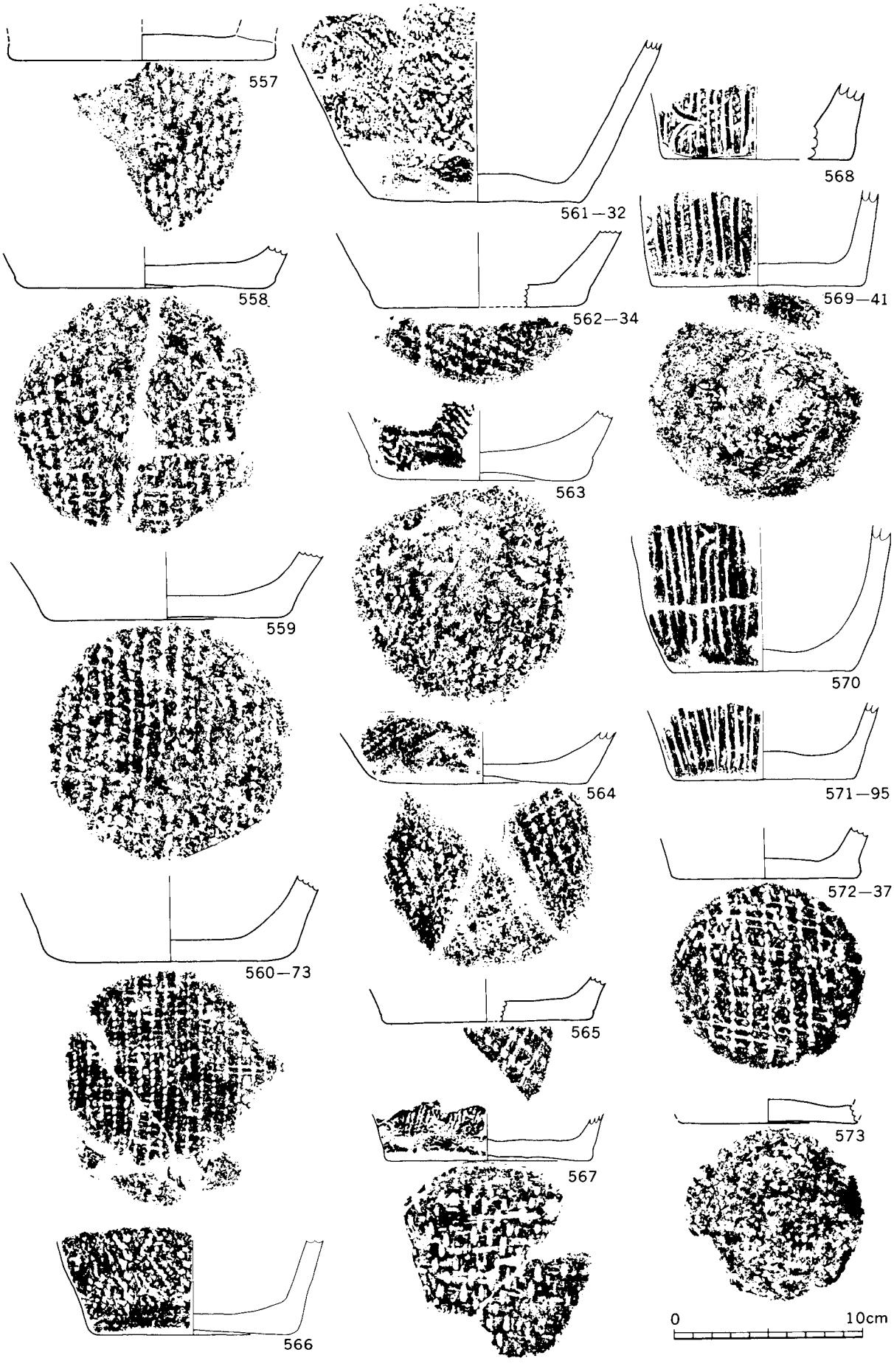
第51図　縄文土器拓影・実測図（521～528）（1／3）



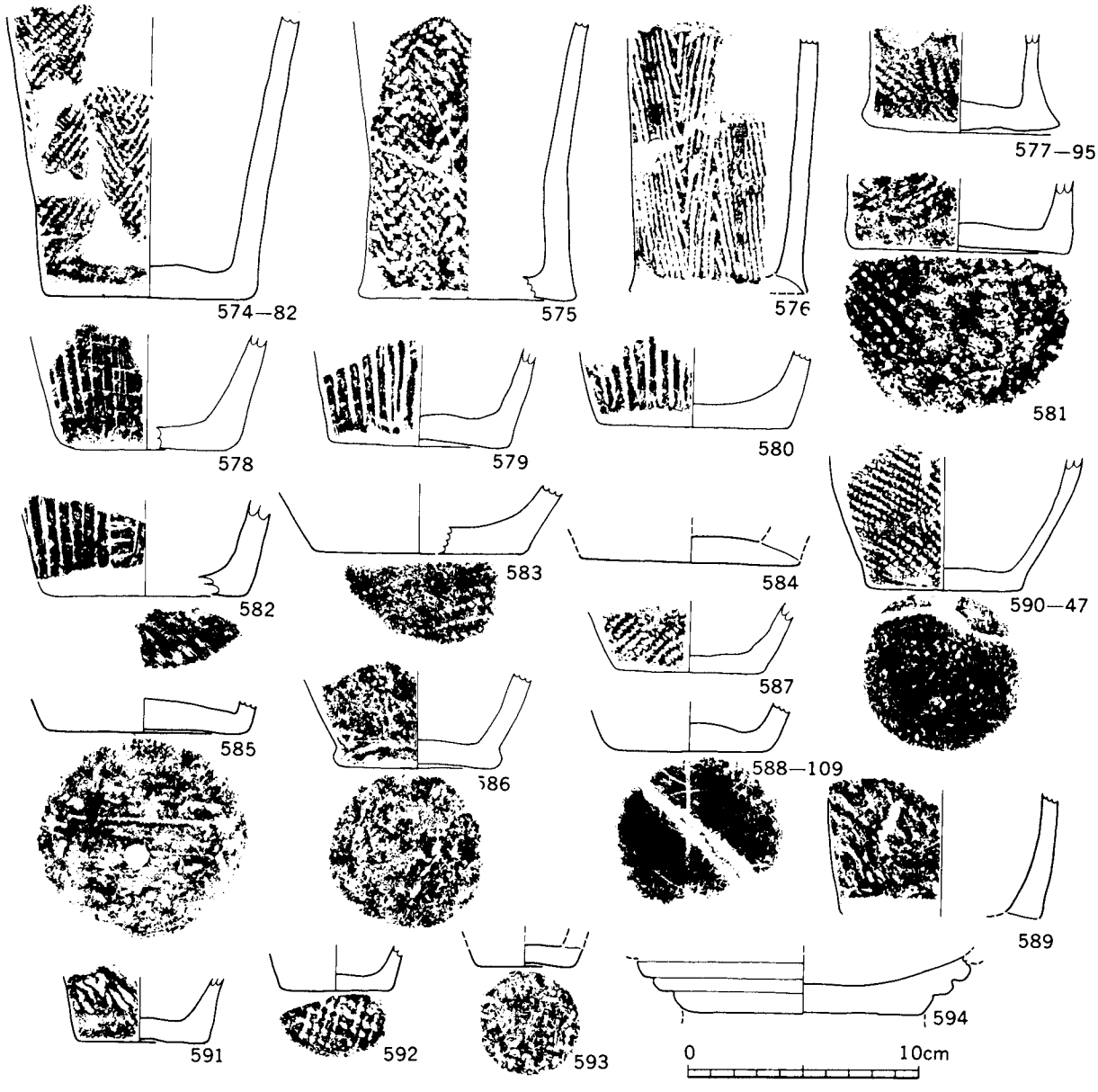
第52図　縄文土器底部拓影・実測図（529～535）（1／3）



第53図　縄文土器底部拓影・実測図（536～556）（1／3）



第54図　縄文土器底部拓影・実測図（557～573）（1／3）



第55図　縄文土器底部拓影・実測図（574～594）（1／3）

める割合は、48%となり過半近い数となる。

底部の立ち上がりは、角度5～35度の範囲におさまり、そのなかでも20度前後の急角度の例が多い。これは円筒状を呈する深鉢器形が大半を占めている事を裏づけるものであろう。底部の立ち上がり集成図のなかで、胴部にむけて若干内傾して胴部へひろがるタイプが見られるが、小型品が対応するもので、第6群土器9類の彭形胴部を持つものが中型品となるのであろう。

胴部に施文されている半截竹管文、縄文、撚糸文、無文とを分類してみると、全数量682個のうちで、不明（磨耗のために判別できない）とするものが最も多く37%であり、竹管文が22%、縄文が20%、撚糸文が16%、無文土器が5%となる。不明の例を除くと、竹管文35%、縄文32%、撚糸文25%、無文8%の割合となり、竹管文が引かれる例が多くなっているのが注意を引く。また少数ではあるが、無文の類が大きな割合を占めはじめているのも注目して良いであろう。

底部圧痕文でみると、682個のうち不明のもの361点（52.9%）を引いて考えると、無文とするタイプが234点（73%）と大多数を占める。スダレ状圧痕をつけるものが70点（22%）、網代痕を持つもの11点、木葉痕6点と少なく、合わせても5%となるにすぎない。底部への調整が入念であった事をうかがわせる。

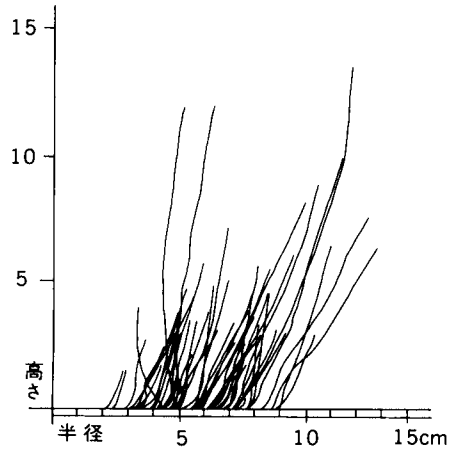
底部の集成・実測にあたっては、川端敦子さんの助言を受け、小林なお子さん、山岸康子さんがこれを行っている。

胴部	竹管									縄文										撚糸										無文										不明										合計
底部	網代			木葉痕		スダレ	無文	不明		網代			木葉痕		スダレ	無文	不明			網代			木葉痕		スダレ	無文	不明			網代			木葉痕		スダレ	無文	不明			網代			木葉痕		スダレ	無文	不明		
タイプ	1-1-1	1-2-1	不明瞭	網状	平行			不明瞭	欠	1-1-1	1-2-1	不明瞭	網状	平行			不明瞭	欠	1-1-1	1-2-1	不明瞭	網状	平行			不明瞭	欠	1-1-1	1-2-1	不明瞭	網状	平行			不明瞭	欠	1-1-1	1-2-1	不明瞭	網状	平行			不明瞭	欠		
3.0～3.9																																															
4.0～4.9							2											1																	2										2			7
5.0～5.9						1										1																												2			4
6.0～6.9							4		2						1	7		2							3	2							1		1								1	6	2	1	33
7.0～7.9						2	3	1	2							2	1								4	1	2						2		2									8	3	2	35
8.0～8.9						2	8	1	2						1	6	4	5								3	1						1										1	1		8	4	3	51
9.0～9.9			1			1	9	5	5						1	7	4	4			1			1	1	1	3						1		3							1	2	6	5	1	63
10.0～10.9						2	5	3	4			1			3	2	1	4						1	2	1	4								3							1		1	5	5	2	50
11.0～11.9						1	7	2	5						4	3	4	1						2	5	3	2								1									4	4	1	49
12.0～12.9						1	2	4	3			2			1	3	5	1						2	3	2	1						2		1	1								3			37
13.0～13.9						4	6	4							1	4	1	1							3	1	4						1		2							1	2	5	1	1	42
14.0～14.9						2	3	1	1						1	2	3	1						2	3	1	4								1								1	1	3	1		32
15.0～15.9						1	1	1	1	1	1					2		1						1	3								1		1									1		1	7
16.0～16.9							1		3						1																					2									2		7
17.0～17.9							1																	1	1		2																1				6
18.0～18.9																																															
19.0～19.9																																															
20.0～																		1																										1			2
不明							2	10	17						2	3	7	23							2	3	25							1	8						1	1	18	43	53	28	247
単位cm																																															
小計			1			17	54	32	45	1	1	3			16	42	30	45			1			10	30	18	48					1	11	6	17	1		3	5	1	26	97	80	40	
合計									149									138									107								35										253	682

第2表　底部集成表（作製小林・山岸　1982）

529～535は大型品で、529は撚糸文がかろうじてうかがえる。底径15cmをはかる。530･531は底径17cm、18cmをはかるもので、上記3点の底部圧痕はスダレ状原体と想定される。532は網代痕を残すもので、1本越え・1本潜り・1本送りと考えられる。533の底径は15.6cmで、縄文原体は、複節のＬＲと見られるが、前々段反撚とも考えられる。534には1個所だけに縄をかけたためにすり減って溝状を呈しているのが見られるが、判然とはしない。上記2例にはスダレ状圧痕が認められる。

536、537、541～546は胴部施文に撚糸文を持つものであるが、立ち上がりの角度が急角度となっているのが注目される。549には結節縄文がころがされている。底部圧痕は不明瞭なものも含まれるが、スダレ状原体と想定される。



第56図　底部立ち上がり集成図（1／3）

536の底部は比較的薄くつくられ、底部外周に一部圧痕文を見るものの全体にナデ調整が入れ消しているもので、底部中央を中心にして渦巻状にナデを施している。濁黄褐色を呈し、胎土に含まれる砂粒は均質化している。539は粗雑な調整で、立ち上がり部分が丸くなっている。底面は横方向に棒状具に類するもので粗くナデが入れられる。底部内面の立ち上がりは斜め方向にナデが入るものの粗く凹凸が目立つ。底部平面は楕円形状を呈し、11.5×12.5cmをはかる。540の胴部は横方向にナデを施し無文とするものである。圧痕への調整は見られない。543は胴部との接合面が観察できるもので、底部端が若干器厚を減じ

て成形された状況が認められ、接合は底部内面の境界に粘土を足して補強する方法をとる。内面のナデは粗雑であるが、底部の調整は丁寧である。砂粒は少なく、胎土は精選している。547は外周が磨耗していて胴部に竹管文を持つもので、底部内面に指頭を使いナデを施しているのが見られる。内面には赤色顔料状の付着がある。548の内面は擂鉢状に中央がくぼんでゆくタイプで、底部器表面へもナデを施すが、調整も丁寧である。一部で剥離している所があり、アンペラ状圧痕が明確に見てとれる。現器表から2～3mm下の位置にあり、粘土を足しているものであるが、圧痕文が中央にむかってせり上がり、胴部の厚みで途切れている事から、胴部を作製した後に内面から粘土を足して底部をつくり、器表へ出た部分をナデ調整を施すという手順と、底部をととのえるために粘土を足して調整したというふたつの手順が考えられる。前者であれば、本遺跡でも通例認められるごとく円盤状底部の貼付という方法とはまったく異なると言える。

557～560は底径が14～13cmをはかるもので、スダレ状圧痕が良く見えるが、遺存状態は比較的よくない。胎土には砂粒が多く混じている。560の底部は胴径にあわせてはめ込んだものと想定できる。胴部への立ち上がり部分の調整はきわめて粗雑である。

561～564、566は底径が11cm前後となるタイプで、566では傾斜が強くなった一方に粘土を足してナデ調整を施していると見られる。立ち上がりで見ると限界にまで縄文が施文されている部分とナデ調整が下端になされている部分とがあり、底部調整のあり方と対応している。内面は粗い横ナデが入れられている。567は胴部に撚糸文がころがされる底径11.2cmのもので、網代は一本越え・二本潜り・一本送りと見られよう。

568～571は底径9.3～11.4cmのもので、胴部に半截竹管文を持つもので立ち上がりはいずれも急角度である。572は胴部が無文となるものであるが、立ち上がり部分が少ないため、全体が無文となるかは疑問が残る。ナデは丁寧である。

574～577は底径8.6～9.6cmをはかるもので、筒状の胴部を持つ小型品である。575の内面は縦方向にナデが入れられ光沢を帯びている。574、575は結束の羽状縄文がころがされ、底部はナデが施されている。577は底部が胴部より大きくなるタイプであるが、底面が著しく磨耗しているために、台となる可能性も考えられる。576は底部が接合面から剥落しているもの。

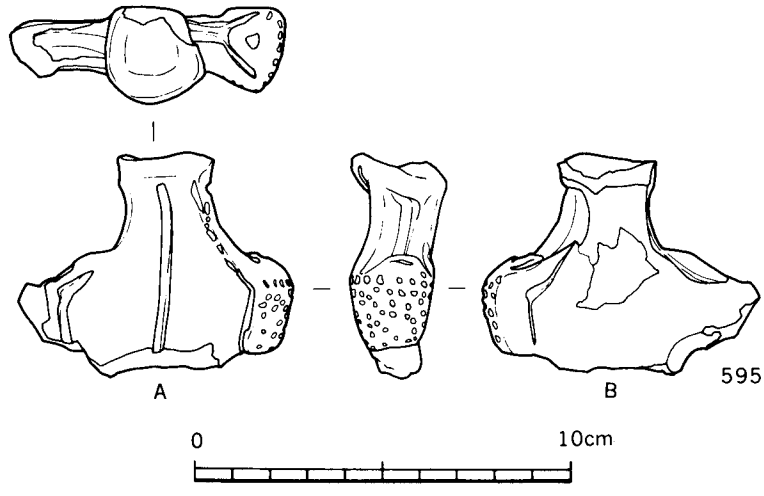
578～582は7.6～9.2cmまでの底径をはかる、胴部に竹管文を持つものである。582をのぞいて底面はナデ調整が施され、578、582の内面調整は丁寧である。

585は平行脈を持つもの、588は木葉痕をはっきりとのこすもので、本遺跡での少数例である。591～593は底部径5～5.8cmをはかるミニチュア土器の底部片である。592、593にはスダレ状圧痕文がのこる。

594は台部分が剥落している浅鉢型土器ではないかと思われるもので、半隆起線文で区切りをつけている。内面は磨耗しているものの丁寧なナデ調整痕がうかがえる。暗褐色を呈し、胎土に含まれる砂粒は均質化している。焼成はやや不良。

土　偶　（第57図595、図版28）

土偶の出土は1点が5区の土器だまりから出土しているが、土器洗浄の過程で気がついたものであり、出土状況の詳細は不明である。第3次調査時においても1点出土しており、本遺跡では2例目である。十字形板状土偶で、頭部および胴部以下を欠いている。横幅7.3cm、長さ5.7cm、厚さ1.8cmをはかる。板状に十字形につくり出した後に、肩部および頭部をつぎたして成形したもので、せり出している頭部との接合面には剥離痕が認められる。第57図で図示したA面が表となるもので、首から沈線が垂下している。沈線の断面は箱状を呈し、筋状の線が何本か見えている。左胸部に乳房が剥離したと考えられる円形の変色部が見られるが、右胸は器表面を欠いているので判然としない。左首から左腕にかけては沈線によって画し、刺突文を充填する。肩部には円形刺突と首から下がる三叉状文が線刻され、玉抱き三叉文をつくり出している。右腕は剥落のため不明。背面であるB面には、左腕を画する沈線が引かれているのみで素文となっている。色調は茶褐色から濁黄褐色を呈し、胎土に含ま



第57図　土偶実測図（595）（1／2）

れている砂粒は少ない。

（2）　石　器

石器の出土量は土器に比較して少ないもので、総数で29点を上げるにとどまる。出土状況は土器と混在するかたちであり、特別の出土状況を示すものは見られない。石器の種類についても、かたよりが見られ、打製石斧11点、磨製石斧5点、石皿9点の3種類が目立つ程度で、石鏃、磨石類が少ない事が注意される。石鏃は1点の出土もないが、輝石安山岩の石核や黒曜石の剝片が数点づつ得られており、製作は行なわれていたものと考えている。出土した石皿の全てが、土器群のなかに散在して発見されているが、手を加えたとは認め難い礫も数多く土器群のなかに散っていた事や、風化しやすい原石が多い事とを考えあわせると、石皿にともなう磨石類は風化を受けやすい礫岩、粗粒砂岩質のものが使われたと考えている。

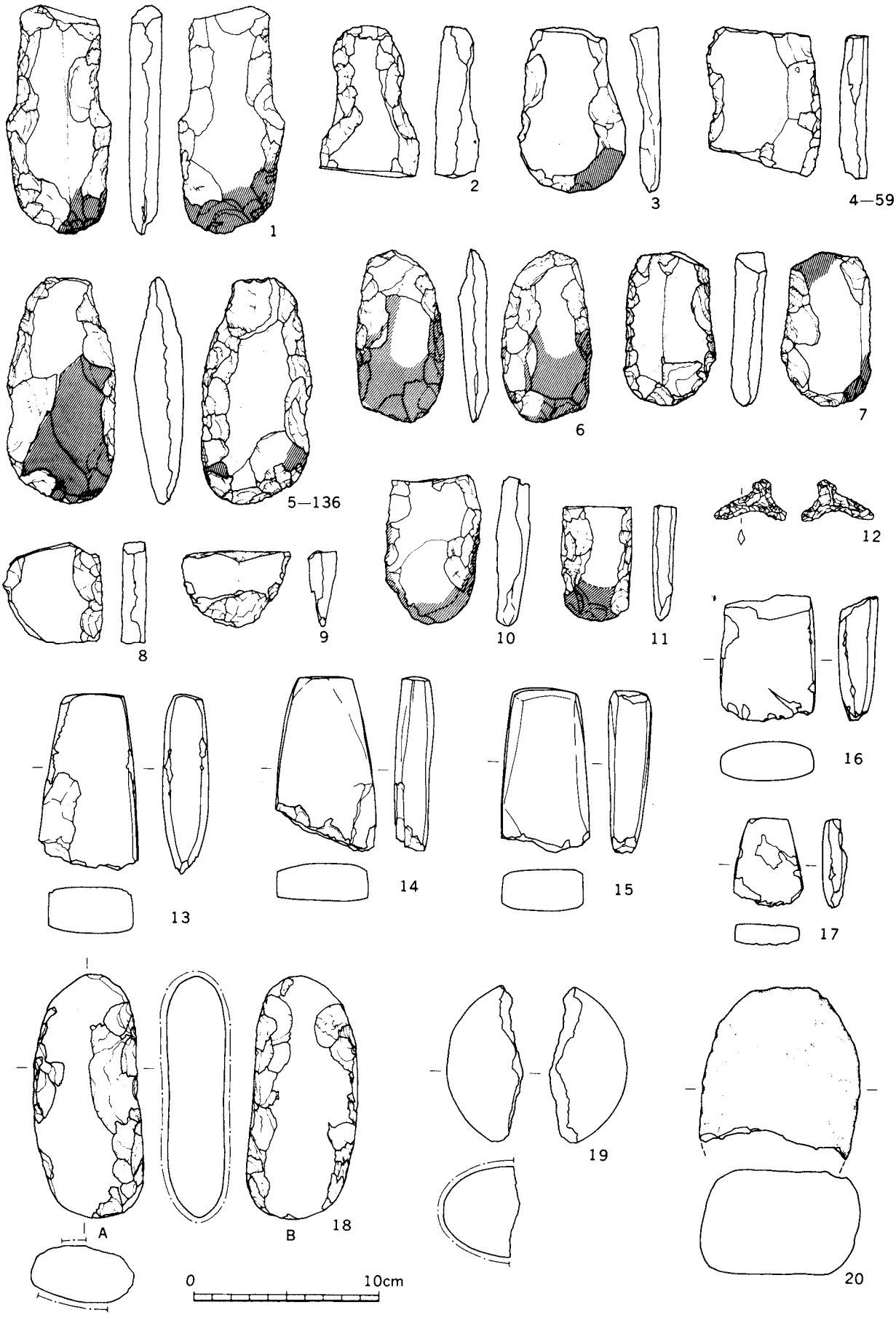
打製石斧（第58図1～11、図版28）

打製石斧は11点の出土があり、2点が完形品である。石材は全て輝石安山岩質で占められ、両面ともに自然面が遺存しているタイプである。石質によるものであろうか、使用によって磨耗している面を持つ例が7例出土しており過半数をこえる。図では斜線のスクリーントンで表示した。

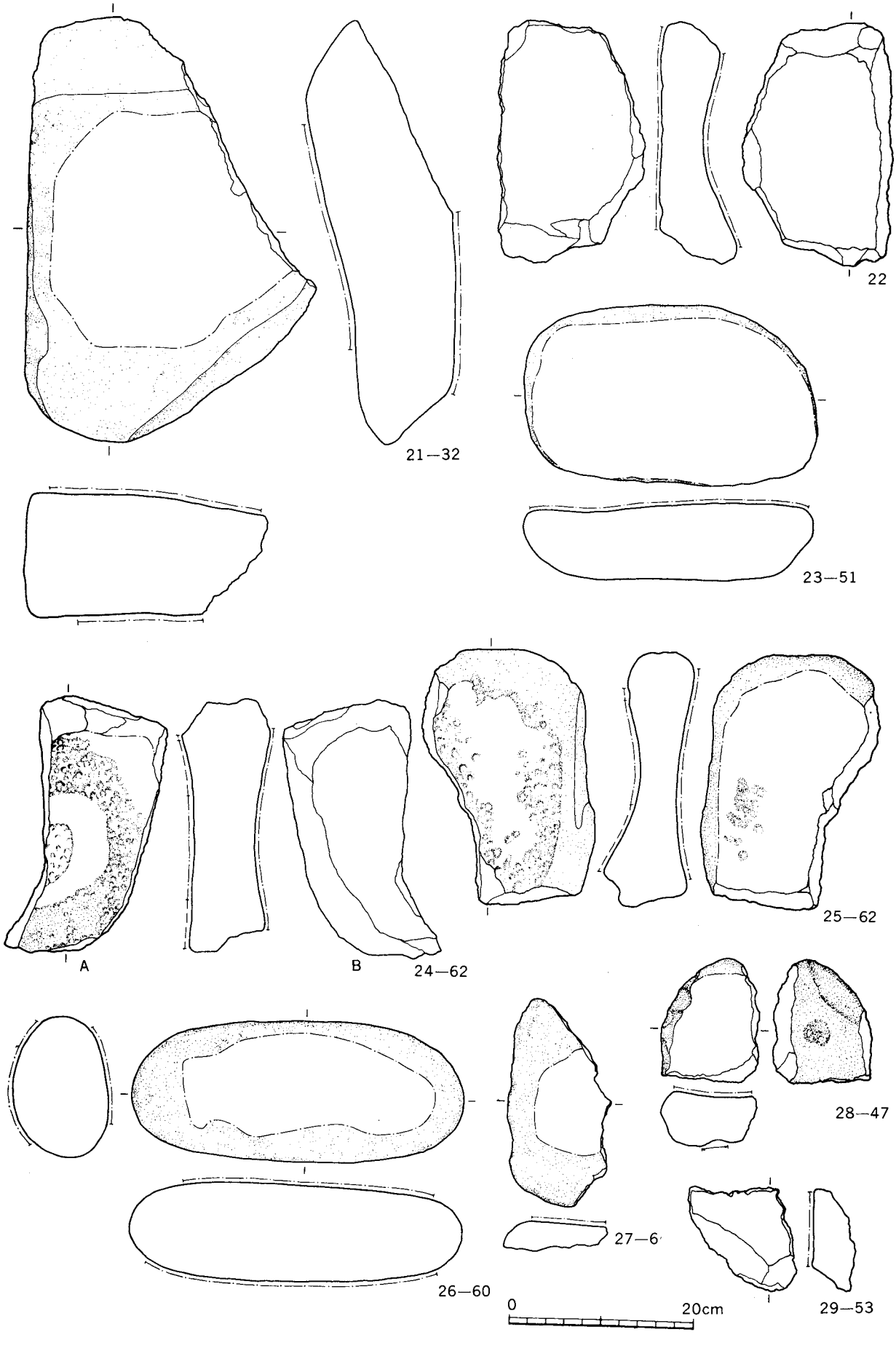
平面形態で分類すると、胴部にくびれをつくり出すものと短冊状を呈するものに大別される。

A類（1～3）は基部が刃部幅より狭くなるもので、敲打を施してくびれ部をつくり出す。1は頭部側端の一部を欠くもので完形に近い資料である。くびれ部は基部から刃部に向けて敲打を加えて作り出す。刃部および側縁に擦痕が走る。2は基部が大きくくびれるもので、側縁にツブシの敲打が加えられる。3は厚みが薄くなるもので、図示した背面での調整はわずかで止めている。刃部は当初から円弧状につくられている。

B類（4～11）は大小を含めて短冊形をなすものである。細かく見れば頭部に向けて幅を減じているものが目立つ。5は完形品で頭部が刃部と同じように薄く調整している。胴部に厚みがあり、重量感がある。側縁での敲打は上から下に向かって行われ、最も幅の広がる部分にはツブシがなされている。使用による擦痕や磨耗は長軸に沿う平行線として認められる。6も完形品で、5に比較して小振りとなる。磨耗痕が刃部全体にわたって見られる。7は頭部を欠いているもので、側縁の敲打は自然面が生きている片側については粗くなされるが、他方は丁寧に刃をつくり出している。頭部近くにある磨耗痕は刃部とは性質を異にするものであろう。10は頭部を欠くもので、刃部の磨耗を顕著に見てとれる。なお、断面図は作図しなかったが、片面の中央付近に長軸線に平行して稜が残される例が、10を含めて5例に認められる（1・4・7・9）。断面での形状は扁平な三角形となる。11は幅が3.8cmとなる小型品で、頭部を欠損している。片側の側面は磨製石斧の定角式のようになるが、一方は刃



第58図　縄文時代石器実測図（1～20）（1／3）



第59図　縄文時代石器実測図（21～29）（1／6）

部をつくり出すまでに敲技を施している。磨耗痕が刃部、側縁を含めて見られる。

石匙（第58図12、図版28）

12は完形品の石匙と推定した。わたくりを持つ大型石鏃ともとれるが、全面にわたって丁寧な調整があり、つまみ部の基部に小さなくびれがあるところから想定した。刃部の長軸方向に沿ってわずかに湾曲している。刃部の幅は0.83cm をはかる。

磨製石斧（第58図13～17、図版28）

5例の出土があり、中型品と小型品の2種に大別される。いずれも定角式のもので、刃部に比較して頭部幅の狭くなるタイプで、完形で遺存する資料は見られない。13は側面形の状況から刃部に近いところで欠損している事がわかる。基部の側面角にツブレが生じており、着柄の際についたものと想定される。14は刃部の上位置から欠損しているもので、基部近くの側面が角をすり消し、断面楕円形となっているのが注意される。15は頭部の器肉が最も厚く、刃部にむけて薄くなってゆく。頭端部を中心にして、側面の角を小さく磨いて角度を小さくしようとしているのが見られる。16は風化が進んでいるもので、基部を欠いている。刃部は平面弧線を描いているが、破損が片側に寄るようにも見える。17は刃部を欠いているが、完形に近い状態のものであろう。風化が進んでいて、剝落している部分が背面に認められる。

磨石類（第58図18～20、図版28）

磨石類は3点の出土にとどまる。石皿を含めて、磨面を持つ面には一点破線、敲打面を持つ面には破線を引いて、石器断面図に表示した。

18は珪質岩で磨製石斧にも選択できるような石材で、実測図A面で見た場合に右側は敲打痕のみであるが、左側面には磨面をも認める事ができる。A、B面とも敲打痕のはいらない部分では、光沢を持つ磨面を全面に見る。両端部での敲打痕はさほど目立たない。19は残欠品で、全体にわたる磨面を見る。19は砂岩である事からか、全体に風化が進行していて顕著な使用痕を見るのは困難であるが、側面部での断面形状から一定の面を持つところから本類に含めた。

石皿（第59図21～29、図版28）

石材は砂岩、凝灰岩等の比較的軟質の石質が選択されている。23と26は完形品であるが、他の7例は欠損しているか残欠品であった。

21は中央部分の磨面は楕円形状2面に分離するようである。

23は片面だけが使用されているもので、図で示した左端部に突出部があり、さらに突出部分が2個所に分断されている。一方の突出部を起点として放射状にのびる擦痕が見られ、片側はなめらかな磨面を持つ。中央部分から3方向の端部にかけてはわずかな傾斜をつけて磨面が広がる。

22、24、25は中央部分が大きく深くくぼむもので、両面とも使用している。礫岩を選択している22の例では磨面と敲打痕との差は認め難いが、24、25では磨面の周辺部分に顕著な敲打痕が認められ、特に24のA面では中央に長径5cm の敲打痕があり、その周辺に長径12cm の磨面をおき、周辺部分は段がつくほどに敲打痕を見せている。

26は両面ともに磨面を持つ完形品である。27～29は残欠品で、28の背面には径2.5cm のくぼみがつけられている。

No.	名　称	石　　質	長	幅	厚	重　量	遺存状況	図版No.	遺物No.
1	打製石斧	輝石安山岩	12.18	5,69	1,70	140.2	頭部欠	28	
2	〃	〃	8.1	5.4	2.4	107.0	刃部欠	〃	
3	〃	〃	10.64	5.73	1.40	54.3	頭部欠		
4	〃	〃	7.8	6.2	1.5	82.8	胴部片	28	59
5	〃	〃	12.19	5.78	2.55	200.1	完　形	〃	136
6	〃	〃	9.27	4.85	15.4	76.2	〃	〃	
7	〃	〃	8.28	4.89	1.49	69.6	頭部欠	〃	
8	〃	〃	5.5	5.4	1.3	58.1	胴部片	〃	
9	〃	〃	4.1	5.8	1.6	28.6	刃部片	〃	
10	〃	〃	8.2	5.1	1.8	76.2	〃	〃	
11	〃	〃	6.2	3.8	1.2	42.6	〃	〃	
12	石　匙	〃	3.9	2.2	0.5	2.1	完　形	〃	
13	磨製石斧	蛇紋岩を含む珪質岩	9.5	5.4	2.5	23.27	刃部欠	〃	
14	〃	珪化した白色凝灰岩	9.4	5.5	2.0	170.0	〃	〃	
15	〃	蛇紋石を含む岩石	8.8	4.7	2.3	135.5	〃	〃	
16	〃	珪化した白色凝灰岩	6.8	5.0	2.0	112.2	〃	〃	
17	〃	白色凝灰岩	4.7	3.7	1.4	29.5	〃	〃	
18	磨石類	緑泥石を含む珪質岩	13.12	5.85	3.20	354.0	完　形	〃	
19	〃	角閃石安山岩	8.21	4.12	5.00	190.8	残　欠		
20	〃	細粒砂岩	9.2	8.5	5.6	451.6	〃		
21	石　皿		45.78	31.2	13.7	23 kg	一部欠		32
22	〃	礫岩	26.12	15.45	8.2	3520	〃	28	
23	〃		31.35	19.19	8.4	7285	完　形		51
24	〃	中粒砂岩	27.76	13.81	9.5	3810	一部欠	28	62
25	〃	粗粒砂岩	27.55	18.00	11.50	5550	〃	〃	62
26	〃	花崗閃緑岩	36.30	15.19	10.50	9700	完　形		60
27	〃	緑色凝灰岩	22.48	6.35	3.19	735	残　欠		6
28	〃	凝灰質砂岩	13.3	10.5	5.9	929	〃	28	47
29	〃	緑色凝灰岩	17.7	11.28	4.75	540	〃		53

第3表　石器計測表（単位、cm、g）

第2節　弥生・古墳時代の遺物

第4次調査で出土した該期の遺物は、調査区全域に広がる黒色包含層中出土のものがその大半を占める。この黒色包含層は、第1次調査から第3次調査にわたり確認されているもので、今回の調査区でも同一包含層を確認したものと考えている。出土遺物についてみても、第1次調査で報告されている下層出土の遺物とほぼ同一時期の所産と考えられる遺物が多量に出土しており、徳前C遺跡における該期の広がりが相当広範囲に及んでいたことが判明したといえよう。

また、第1次調査では確認出来なかった該期の遺構を今回の調査で確認しえたことも価値ある成果の1つであろう。以下、遺構に伴って出土した遺物をも含めて説明していく。

※　遺物の説明にあたり便宜的に行なった分類・細別は、次の3要素を踏まえたものである。

○器種による分類（第1次的要素）……壺・甕・鉢・高坏・器台etc

○器型による分類（第2次的要素）……成形技法etc

○調整による分類（第3次的要素）……ハケ・ケズリ・ナデ・ミガキetc

壺形土器A（第60図1～3）

頸部が直立あるいはやや外反気味に立ち上がる長頸壺で、端部は丸味を帯びる。1は口径13.6cm、残存高8.9cm。調整は内面ナデ、外面はハケの後上半部のみナデ。2は口径12.3cm、残存高8.5cm、調整は内面ハケ、外面ナデ。残存基部において体部との接合痕が看取できる。いずれも石英や長石などを多く含んだ胎土を使用している。焼成は普通。

壺形土器B（4・5）

頸部がやや外反気味に立ち上がる長頸壺で、端部はナデ調整により面取りがなされる。4は口径14cm、残存高6.1cm。調整は内外面共にナデ。内面中位で指頭による圧痕が観察される。5は復元口径17cm、残存高5.7cm。調整は内外面共にナデであるが、端部に施されたナデ調整は強いもので、面を形成することを明らかに意識している。

壺形土器C（6）

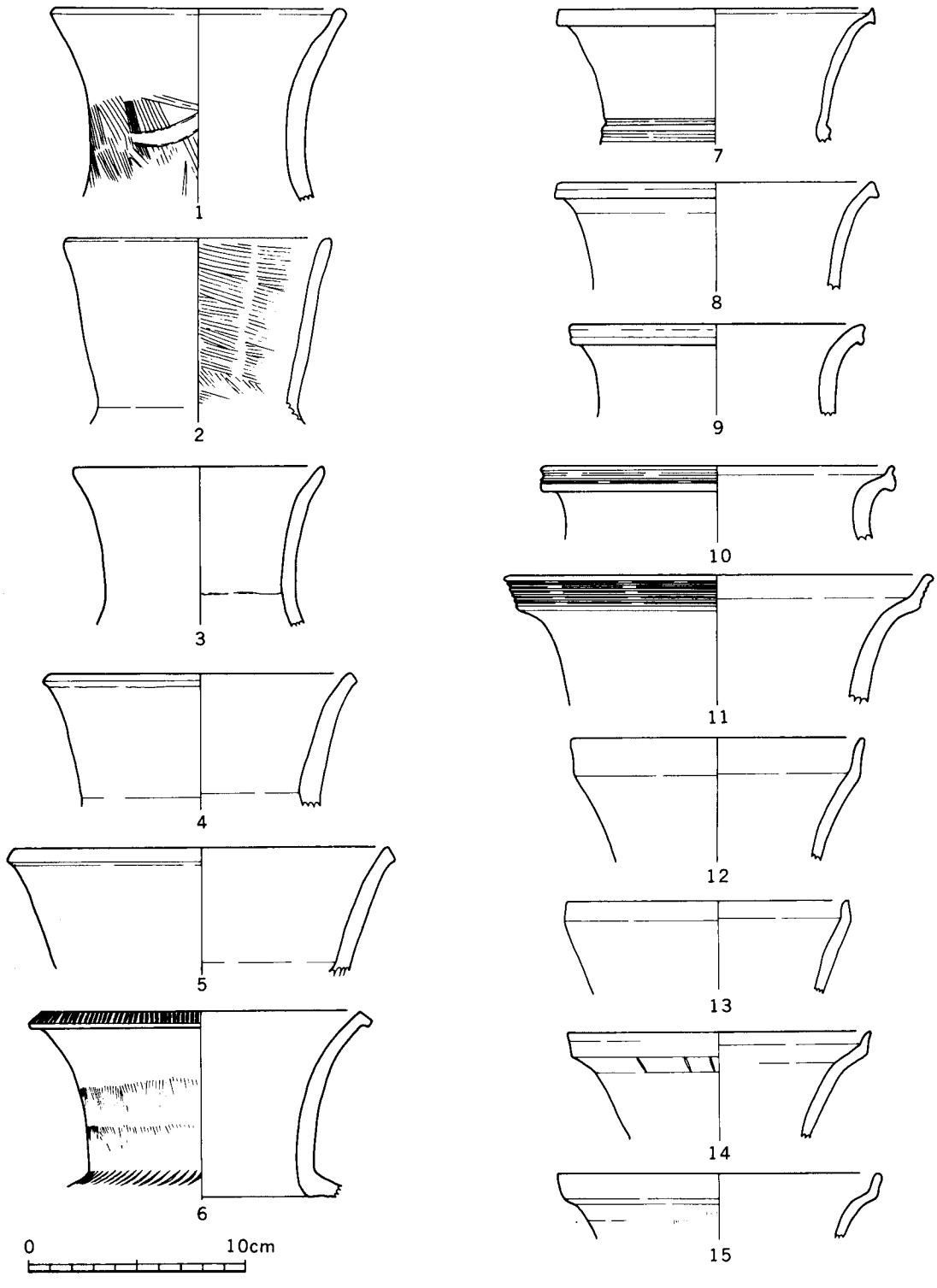
頸部中位から大きく弓形に外反する長頸壺で、端部を下方に折り曲げることにより口縁帯を形成している。口縁帯にはヘラ状具による刻み目文が施される。また、頸基部にはハケ状工具による斜行刺突文が施され、体部との接合点を装飾している。調整は内面ナデ、外面は縦ハケの後上位を主とした横ナデ。特に口縁屈折点におけるナデは強いものである。口径は14.8cm、残存高8.6cm。焼成は良好である。

壺形土器D（7・8）

頸部がやや外反気味に立ち上がる長頸壺で、端部は上下あるいは下方向に肥厚する。これはB類と同じく、端部に面を形成することを意識した強いナデ調整による所産ではあるが、ここではより強く口縁帯の形成を意図したものと考えている。7は口径14.4cm、残存高6.2cm。口唇部は上下に肥厚する。頸基部には細い粘土紐を貼付し、ナデ調整により断面三角形の隆帯を形成している。この隆帯による装飾地点が頸部と体部との接合点にあることは、C類と共通する。調整は内外面共にナデ。内面中位には指頭圧痕が看取できる。

壺形土器E（9・10）

頸部はほぼ直立し口縁部で大きく外反する長頸壺で、端部を肥厚させて、口縁帯を形成する。9は口径13.6cm、残存高4.1cm。肥厚する口縁端部には一条の浅い凹線をめぐらしている。調整は内外面共にナデであるが、内面において粘土接合痕を留める。10は復元口径16.2cm、残存高3.4cm。肥厚する口縁端部は粘土紐貼付により形成される。明らかに口縁帯の形成を目的としたものであり、その口縁帯には2条の凹線がめぐる。調整は内外面共にナデ。



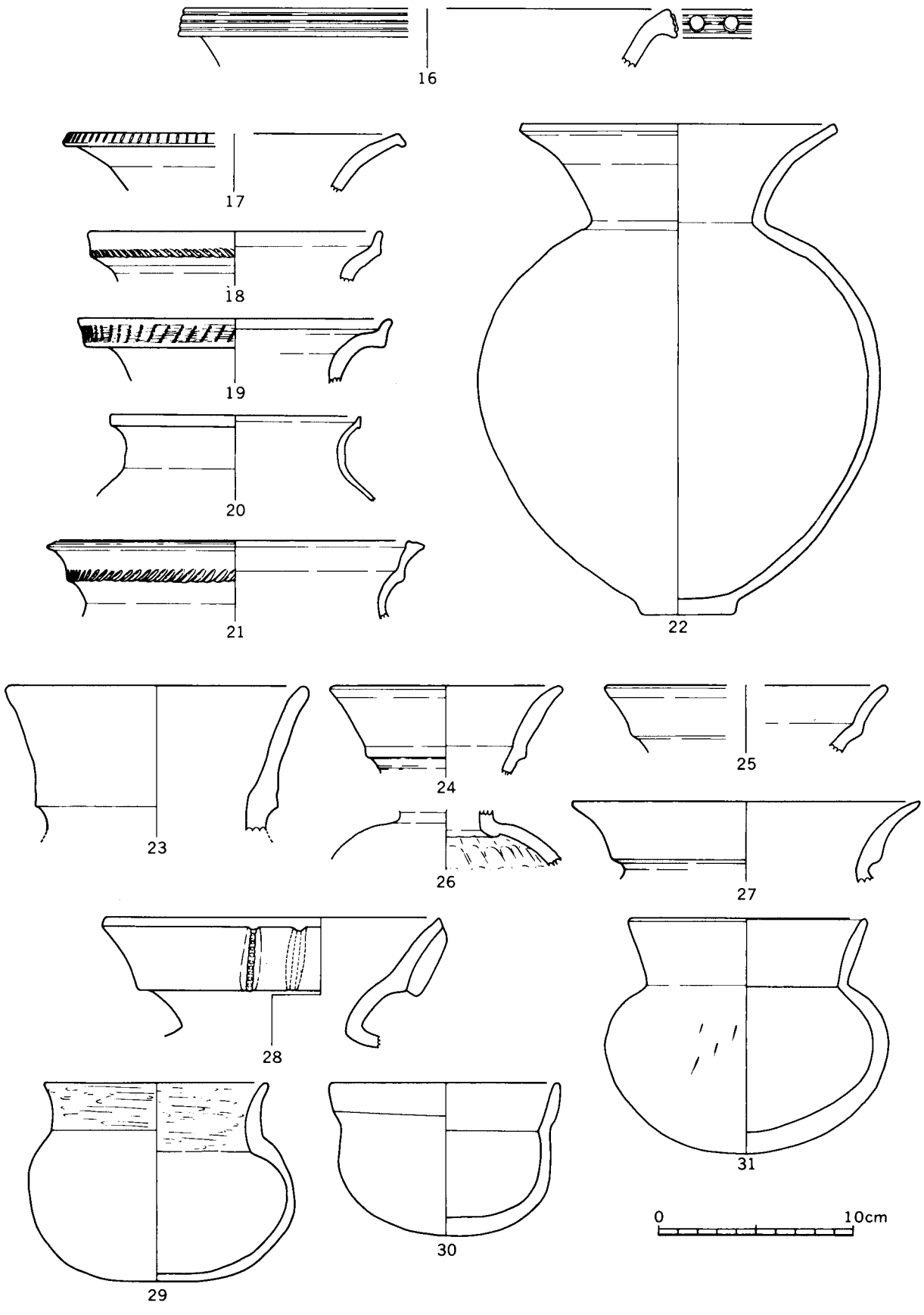
第60図　弥生・古墳時代前期の遺物（壺）1/3

壺形土器F（11～15）

頸部外反度の大きい長頸壺で、口縁部が内傾・直立あるいは受口状を呈することにより口縁帯を形成する。11は口径19.6cm、残存高5.8cm。口縁部は受口状を呈し、口縁帯には5条の擬凹線が施される。調整は内外面共にナデ。口縁帯の成形も粘土を継ぎたすものではなく、口縁部を屈折させ、強いナデを施すことにより形成している。13は口径12cm、残存高4.3cm。口縁部は若干内傾する。口縁帯は11・12に比べて狭く施文はしていない。調整は内外面共にナデ。

壺形土器G（第61図16）

外反する口縁端部を下方に折り曲げ、口縁帯を幅広くする広口壺である。口縁帯には3条の擬凹線が施され、



第61図　弥生・古墳時代前期の遺物（壺）1/3

その上に2個の貼り付け浮文がある。浮文の単位については3個一単位となる可能性もある。調整は内外面共にナデ。

壺形土器H（17・18）

いわゆる受口状口縁を有するもので、甕になる可能性もある。ただ、頸部の締まり方が強いことから一応壺形土器として扱うことにした。17は口径15cm、残存高2.6cm。口縁帯下端にはヘラ状工具による斜行刺突文を施す。調整は内外面共にナデ。砂粒を多量に含んだ胎土を使用しており、焼成は不良。18は口径16cm、残存高3.3cm。口縁帯には中空の草本茎を5本一単位とした施文具により斜行刺突文が施される。

壺形土器I（19）

直立する短い頸部に外反する口縁が付く広口短頸壺である。口径は13cm、残存高4.4cm。口唇部をつまみあげることにより狭い口縁帯を形成している。器壁は薄く仕上げられるが、残存部ではケズリ調整痕は認められない。

壺形土器J（20）

外反する口縁部が弱い有段状を呈する広口短頸壺である。口縁上端にはヘラ状工具による強いナデが施され、水平な面を形成する。そのため端部は外方に肥厚し、断面は逆三角形状を呈する。口径は19cm、残存高4.0cm。口縁帯下端にはヘラ状工具による斜行刺突文がめぐる。調整は内外面共にナデ。胎土・焼成は共に良好。

壺形土器K（21・22）

倒卵形の体部に大きく外反する長い頸部が付く広口壺で、端部はナデ調整により面取りがなされる。21は口径不明の口縁片であるが、傾きやその形態からみて同類と考えられる。端部を下方に折り曲げることにより口縁帯を幅広くしている。口縁帯にはヘラ状工具による刻目文を施す。口縁端部を下方に折り曲げ、そこに刻目文を施こす技法はC類に共通するものである。胎土・焼成は共に良好。22は口径16cm、頸基部内径7.6cm、器高25.4cmの完形品である。胴部最大径はほぼ中位に求められ20.8cmを測る。底部は径4.6cmの平底。調整は内外面共にナデ。煤の付着は認められない。

壺形土器L（23～27）

丸味を帯びる体部に有段口縁の付く広口壺である。口縁帯は幅広く形成されるが施文はしていない。有段部内面における屈曲は外面より緩く、擬有段口縁と称してもかまわぬ程である。23は口径15.4cm、残存高7.4cm。器表の摩滅が著しいため明瞭さを欠くが、調整は内外面共にナデと考えられる。

壺形土器M（28）

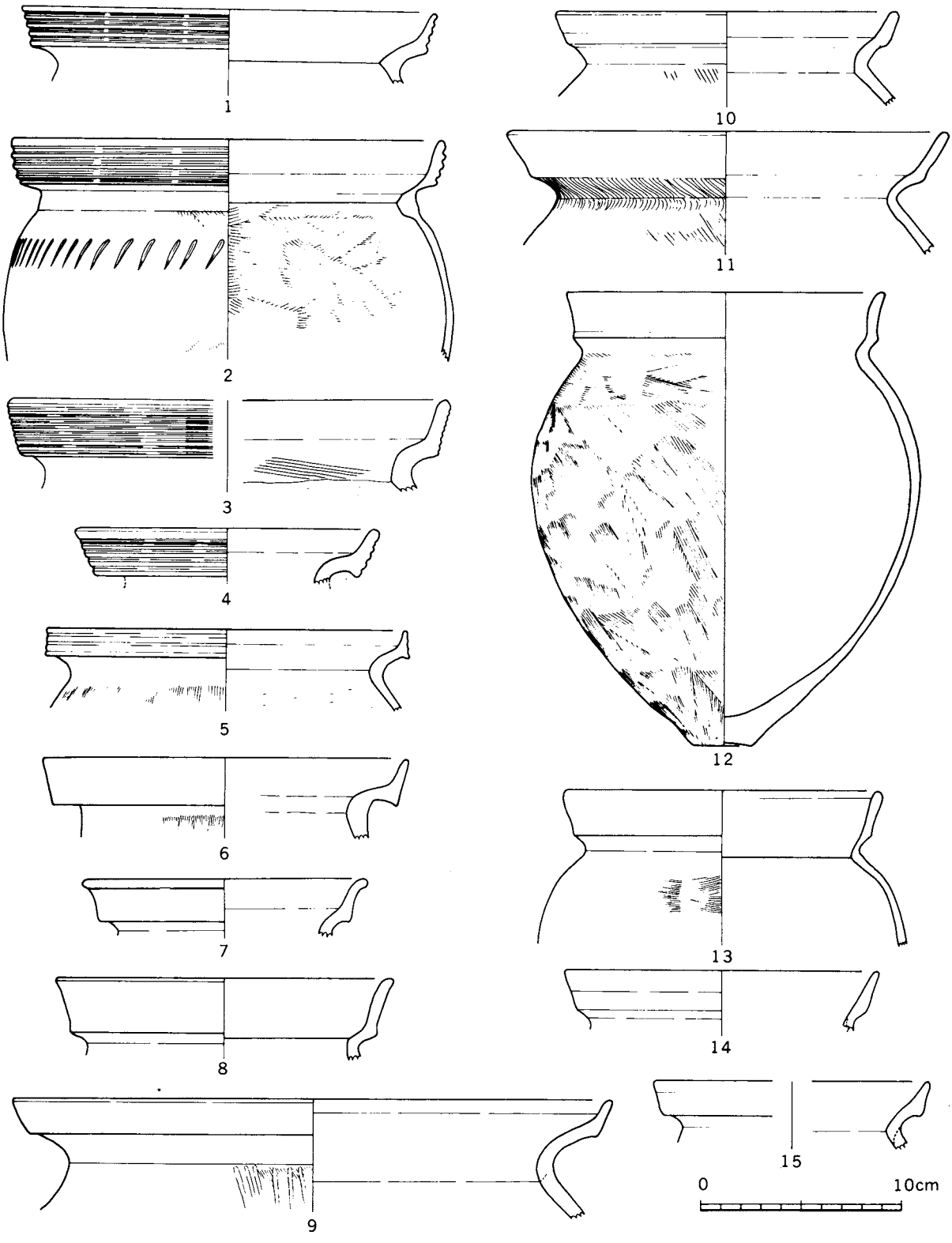
有段口縁の付く広口壺で、口縁は大きく外反する。口縁帯の幅はL類同様広く作られ、棒状浮文で装飾する。浮文には刻み目が施されている。確認できる棒状浮文は1箇所1本ではあるが、2本1単位で数箇所となる可能性が強い。口径17.4cm、残存高6.7cm。口縁端部はナデ調整により面取りされる。

壺形土器N（29～31）

丸味を帯びた体部に直立あるいはやや外反する口縁が付く広口の壺である。29は口径11.6cm、器高10.3cmの完形品で、胴部最大径はほぼ中位に求められる。底部は丸味を帯びてはいるものの、5cm程度の可接面を有する。また、可接面から体部下位にかけての部位で2箇所の穿孔が認められる。頸基部外面には赤彩痕らしきものが看取できるが全面に及んでいたものかどうかは不明である。調整は外面および内面頸部以上はヘラミガキ。体部内面はナデ。30は口径11.6cm、器高8.0cm。口径が胴部最大径を上回わるものである。頸部の屈曲は緩やかではあるが、口縁の形態は有段口縁を意図したものと考えられる。調整は底部を除く外面と内面頸部以上がヘラミガキ、底部および体部内面はケズリである。底部外面には煤が付着していることから、甕として機能していた可能性が高い。31は口径12.2cm、器高12.2cm。胴部最大径は上位に求められ、14.6cmを測る。器表の調整は摩滅が著しいため不明瞭ではあるが、体部内面はナデ、内外面頸部以上についてはヘラミガキ。体部外面は不明である。29と31は共に第7区包含層中から並んで出土したものである。

甕形土器A（第62図1～4）

やや外反気味に立ち上がる有段口縁の甕で、口縁帯は数条の擬凹線で装飾される。1は口径20.8cm、残存高3.6



第62図　弥生・古墳時代前期の遺物（甕）1/3

cm。口縁帯には4条の擬凹線が施される。頸基部内面の屈曲部はナデ調整により整形され、画然としている。2は口径21.6cm、残存高11.1cm、胴部最大径は22.8cm。口縁帯には4条の擬凹線が巡る。また肩部にはヘラ状工具による斜行刺突文が施されている。調整は体部内外面をハケ、口縁の内外面をナデにより仕上げている。胎土・焼成は共に不良である。3は径不明の口縁片である。口縁帯には7条の擬凹線が施される。外面頸部および内面はヘラ状具によるナデ調整で仕上げている。器壁は1・2に比べ厚く、焼成も良好である。4は口径15cm、残存高2.8cm。口縁帯には5条の擬凹線が施される。調整は内外面共にナデ。口縁帯下端は若干下方に突出している。

甕形土器B（5）

大きく外反する口縁の端部を上方につまみ上げて口縁帯を形成するものである。口径18cm、残存高4cm。口縁帯は若干内傾している。口縁帯の調整は内外面共にナデ。体部は外面が縦方向のハケ、内面はケズリである。胎土には1～2mm程度の砂粒が多量に含まれ、いたる所で露出している。また、口縁部外面で煤の付着が認められる。

甕形土器C（6）

頸部上端の屈曲が大きく、口縁部の形状が受口状を呈するものである。口径は18.4cm、残存高4.0cm。口縁帯の幅は広く形成されるが施文してはいない。調整は頸部外面をハケで、その他はナデにより仕上げている。

甕形土器D（7・8）

やや外反気味に立ち上がる有段口縁の甕である。器形はA類に近似するが、有段部の形状が若干異なるものである。7は口径14.0cm、残存高2.9cm。有段部内面の屈曲はA類よりも緩い。また、口縁帯も幅広く形成してはいるものの施文はしていない。調整は内外面共にナデ。8は口径17.0cm、残存高4.1cm、口縁帯の幅は広い。しかし施文はせず、ナデ調整により仕上げている。口縁帯には煤の付着が認められる。

甕形土器E（9）

大きく外反する頸部に受口状の有段口縁が付く甕である。口径30cmの大形品で、残存高は6.0cmを測る。残存基部の形状から、体部は肩の張ったプロポーションが推定される。調整は内面ナデ、外面は頸部以下がハケの後ナデ、口縁帯はナデ。内面頸基部で粘土接合痕が看取できる。

甕形土器F（10）

外反気味に立ち上がる有段口縁の甕で、有段部内面の屈曲は緩い。また、頸部屈曲部内面には一定の区画面が形成される。このことはA類の3やC類にも共通する。口径は17.0cm、残存高4.6cm。口縁帯の幅は1.7cmでさほど広くはない。調整は内面および口縁部外面をナデ、外面頸部以下は斜方向のハケで仕上げている。

甕形土器G（11・12）

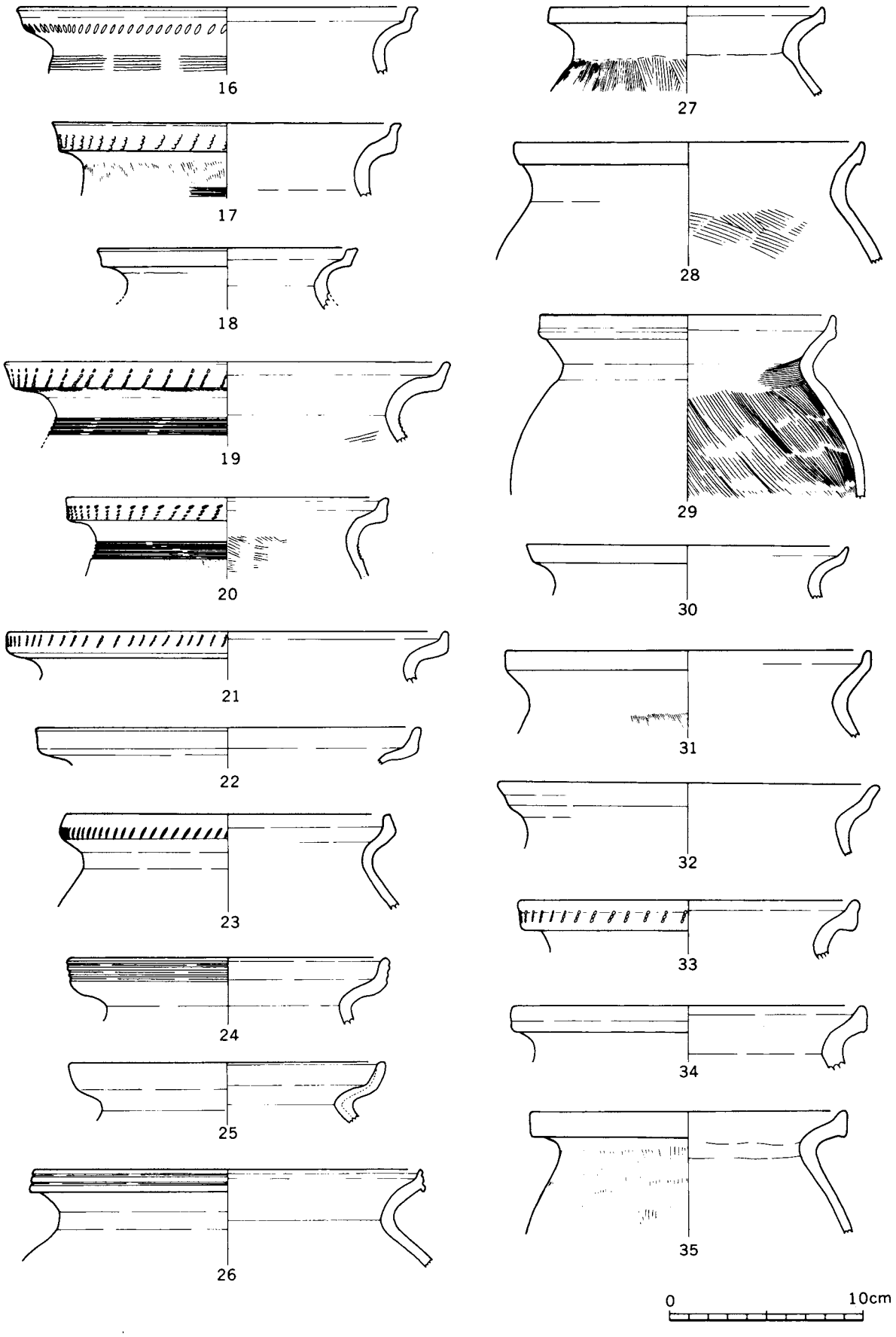
丸味を帯びた体部に、直立あるいは外反気味に立ち上がる有段口縁が付くものである。有段部内面の屈曲はD類に比べ総じて緩い。口縁帯は幅広に形成されるが施文はしていない。11は口径22.0cm、残存高6.1cm、口縁の外反度が大きいものである。調整は内面および口縁帯をナデ、外面頸部以下をハケで仕上げている。外面頸部以上には煤の付着が認められる。12は口径16.0cm、器高22.7cm。倒卵形の体部に有段口縁が付く完形の甕形土器である。口縁部の立ち上がりは直立に近いもので、有段部内面の屈曲は緩い。底部は径3cmの平底で、周囲にはヘラ状具によるケズリ取り整形が施されている。調整は内面および口縁部外面をナデ、外面頸部以下をハケで仕上げている。ただ、内面胴部中位以下については板状具によりナデ上げていることから若干砂粒の動きが目立つ。また、外面肩部に施されるハケは全面に施された斜方向のハケ調整の後で再度施された横位のものである。外面胴部下位から口縁部にかけて煤の付着が認められる。

甕形土器H（13～15）

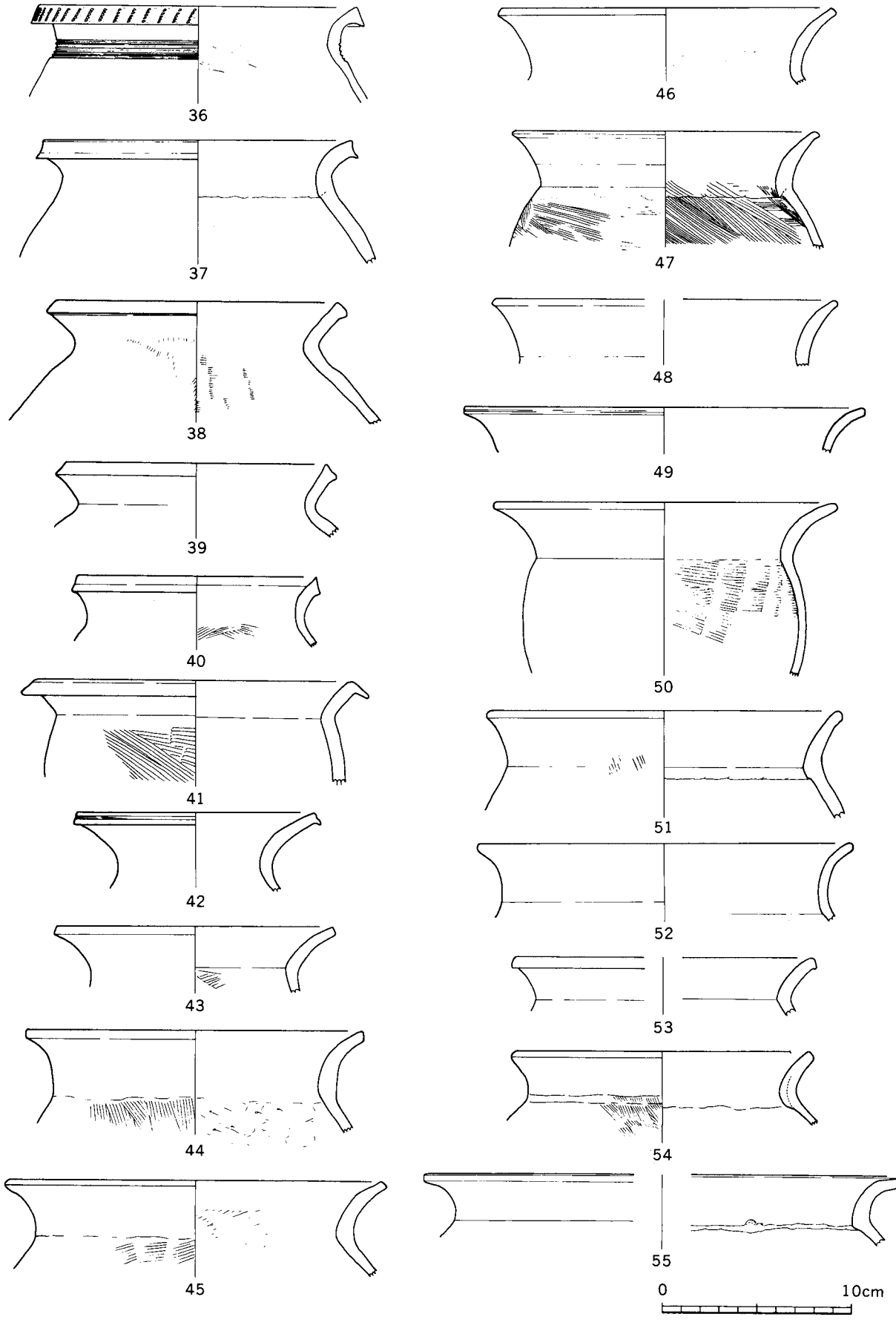
やや外反気味に立ち上がる有段口縁の甕形土器であるが、有段部内面には屈曲が認められない。そのため口縁部内面の形状は「く」の字状を呈している。13は口径15.6cm、残存高7.8cm。口縁帯は幅広く形成されるが施文してはいない。頸基部での屈曲はさほど大きいものではないが、外面に有段を形成しながら内面を直線的に仕上げているため、頸基部の器壁は薄くなり器体の弱点となっている。調整は内面および外面頸部以上をナデ、外面頸部以下は横位のハケで仕上げる。外面の全面に煤の付着が認められる。14は口径15.5cm、残存高2.9cm。13同様外面を有段に仕立てながら内面は直線的に形成する。調整は内外面共にナデ。

甕形土器I（第63図16～23）

大きく外反する口縁の端部が内傾・直立あるいは若干外反気味に立ち上がる、いわゆる近江系受口状口縁甕形土器と称されるものをここにまとめた。器形および調整等には若干異なるものもあるが随時説明してゆくことにする。16は口径19.8cm、残存高3.4cm。やや外反気味に立ち上がる受口状口縁の端部には強いナデ調整が施され、



第63図　弥生・古墳時代前期の遺物（甕）1/3



第64図　弥生・古墳時代前期の遺物（甕）1/3

平坦な面が形成される。狭い口縁帯の下端には櫛状具による刺突列点文が、また肩部には4～5条の櫛描き沈線が横位に施されている。調整は内外面共にナデ。胎土・焼成は共に良好である。17は口径18.3cm、残存高3.9cm。口縁端部には面取りがなされている。口縁帯には草本茎を4本単位に束ねた櫛状具による斜行刺突文が、また肩部には櫛状具による横位の沈線がそれぞれ施されている。調整は外面頸部以下を斜方向のハケで、内面および外面口縁帯はナデで仕上げている。頸部外面には煤の付着が認められる。18は口径13.4cm、残存高3.3cm。やや小形のものである。口縁端部にはナデ調整により面取りがされる。また、内外面共にナデ調整で仕上げられ、口縁帯にも施文してはいない。19は口径23.0cm、残存高4.2cm。外反する口縁端部の形状は摩滅が著しいため不明瞭である。調整は内外面共にナデであるが、外面の口縁帯下端から頸部にかけてのみハケ調整痕を留めている。また、口縁帯には草本茎を5本単位に束ねた櫛状具による斜行刺突文が、肩部には5条の櫛描き沈線がそれぞれ施されている。20は口径16.8cm、残存高4.2cm。直立する口縁帯上端部には強いナデが施され、やや内傾する面を形成する。口縁帯には草本茎4本を1単位として束ねた櫛状具による斜行刺突文が、また肩部には5条の櫛描き沈線文がそれぞれ施される。調整は口縁部内外面をナデで、頸部以下内外面をハケで仕上げている。なお、肩部内面において粘土接合痕が看取される。胎土・焼成は共に良好である。21は口径23.0cm、残存高2.6cm。22は口径20.0cm、残存高1.9cm。共に口縁帯は直立するもので、端部はナデにより丸く仕上げられている。21の狭い口縁帯には20と同様の施文具による斜行刺突文が施されている。調整は内外面共にナデ。22は内外面共にナデ調整で仕上げられており、口縁帯には施文していない。口縁部外面には黒斑が認められる。23は口径16.8cm、残存高4.9cm、唯一口縁帯が内傾するものである。口縁帯下端には板状具による刺突列点文が施されている。調整は内外面共にナデ。口縁帯外面には煤の付着が認められる。

甕形土器J（24・25）

口縁の形状は受口状を呈するものの、近江系の受口状口縁甕形土器とは様相を異にするものである。24は口径16.4cm、残存高3.4cm。直立する口縁帯には3条の擬凹線が巡る。口縁帯下端から頸部に至る受部下面はやや丸味を帯びる。調整は内外面共にナデ。受部内面には煤の付着が認められる。25は口径16.4cm、残存高3.2cm。口縁帯はやや外反気味に立ち上がる。器表の摩滅が著しいため調整は不明瞭ではあるが内面についてはナデと考えられる。頸基部において粘土接合痕が看取できる。

甕形土器K（26・27）

丸味を帯びた体部に「く」の字状に大きく外反する口縁が付く甕で、端部にはつまみ上げるような強いナデが施されている。このため口縁端部は若干上方に肥厚し、幅の狭い口縁帯を形成する。26は口径20.2cm、残存高5.1cm。若干内傾する口縁帯下端には細い粘土紐が貼付される。これは、より幅広でかつ明確な口縁帯の形成を意図したものと考えられる。口縁帯には2条の擬凹線が施される。調整は器表の摩滅が著しいため不明瞭である。27は口径14.1cm、残存高4.6cm、口縁帯下端には細い粘土紐が貼付されるが一部剥落している。口縁帯は板状具によるナデで仕上げられ、施文はしていない。内面および口縁部はナデ、頸部以下は縦方向のハケ調整である。口縁部外面には煤の付着が認められる。

甕形土器L（28・29）

丸味を帯びた体部に「く」の字状に大きく外反する口縁が付く甕で、端部は上方に屈折して口縁帯を形成する。口縁帯下端にはK類同様粘土紐が貼付され、口縁帯をより明確にしている。28は口径18.0cm、残存高6.3cm。口縁帯下端に貼付された粘土紐は一部剥落しており、所々で旧形状を露呈している。調整は外面および口縁部内面がナデ、内面頸部以下はハケで仕上げている。口縁部外面には煤の付着が認められる。29は口径15.0cm、残存高9.4cm。口縁帯は上半に施された強いナデ調整により下半と区分される。器面の調整は外面肩部以上および内面頸部以上はナデ、体部内外面は共にハケで仕上げている。体部および口縁部外面には煤の付着が認められる。

甕形土器M（30～32）

「く」の字状に外反する口縁が付く甕で、端部は上方に屈折し受口状を呈する。口縁帯には粘土紐等の貼付は認められない。30は口径16.6cm、残存高2.7cm。口縁帯はやや外反気味に立ち上がる。調整は内外面共にナデ。

32は口径19.6cm、残存高3.7cm。口縁部の屈曲は緩い。外反気味に立ち上がる口縁帯の下半に断面三角形の粘土紐を貼付すれば、まさにN類と同形態を呈するものとなろう。調整は内外面共にナデ。外面には煤の付着が認められる。

甕形土器N（33～35）

口縁が「く」の字状に外反する甕で、端部は外方から押圧されたごとく肥厚し口縁帯を形成する。ただ、口縁帯形成にあたってはその下半において粘土紐を貼付している可能性が高い。33は口径17.4cm、残存高2.9cm。口縁帯には草本茎を3本単位で束ねた櫛状具により斜行刺突文が施される。残存部における調整は内外面共にナデである。35は口径16.4cm、残存高6.4cm。頸部の屈曲が大きいものである。調整は口縁部内外面をナデ、体部外面を斜行するハケで、また体部内面はケズリの後その調整痕を消しきらない程度のナデで仕上げている。口縁部外面には煤の付着が認められる。

甕形土器O（第64図36・37）

丸味を帯びた体部に大きく外反する口縁が付く甕で、端部は強いナデ調整により面取りされ内傾する口縁帯を形成する。口縁帯下端は下方につまみ出され、より幅広の口縁帯の形成を意識している。36は口径17.0cm、残存高5.0cm。口縁帯には草本茎を5本単位に束ねた櫛状具による刺突列点文が、また頸基部には同施文具による櫛描き沈線文が施される。調整は外面および内面頸部以上がナデ。体部内面については不明瞭である。口縁部外面には煤の付着が認められる。37は口径16.4cm、残存高6.4cm。口縁帯には強いナデが施される。器表の摩滅が著しいため、調整は不明。頸基部内面には粘土接合痕が看取される。

甕形土器P（38・39）

大きく肩の張る体部に「く」の字状に外反する口縁部が付く甕で、端部には押圧により面が形成される。38は口径15.0cm、残存高6.4cm。調整は口縁部内外面をナデ、外面頸部以下を縦方向あるいは斜行するハケで、また体部内面は横位のハケで仕上げている。外面口縁部から体部にかけて煤の付着が認められる。胎土・焼成は共に良好。39は口径14.0cm、残存高3.9cm。口縁端部には強いナデが施されている。調整は器表の摩滅が著しいため不明瞭である。

甕形土器Q（40）

肩の張りが弱い体部に緩く外反する口縁が付く甕である。口径は12.8cm、残存高3.7cm。口縁端部は若干上方につまみ上げられ、口縁帯を形成する。口縁帯下端は明確な稜により頸部と区画される。この稜は口縁帯下端をつまんで形成するものと考えられるが、K類やL類のように粘土紐を貼付している可能性もある。調整は外面および口縁部内面がナデ、内面頸基部以下にはハケ調整痕が看取できる。外面の全面に煤の付着が認められる。

甕形土器R（41）

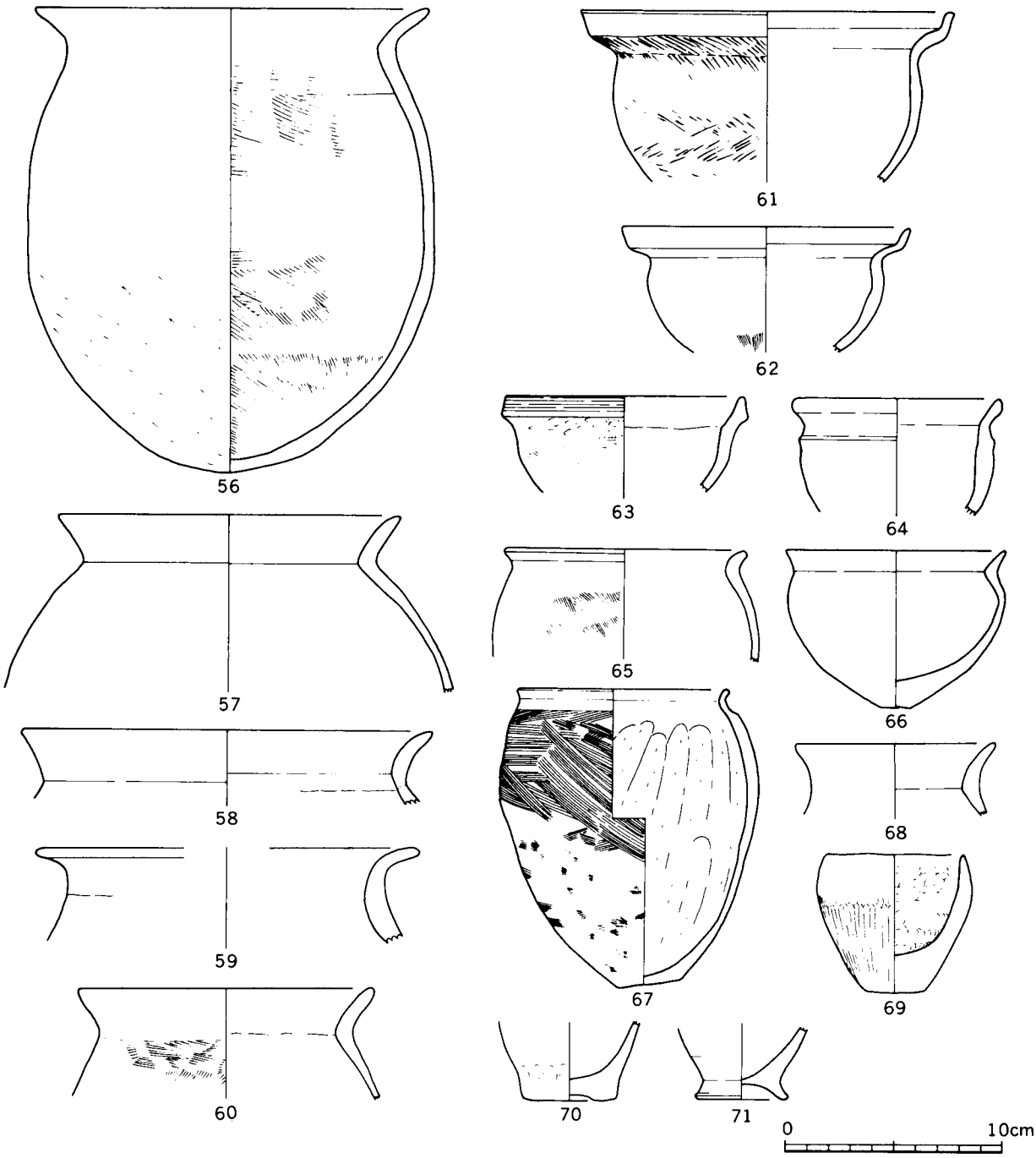
張りの弱い体部に外反する口縁が付く甕で、口径は胴部最大径を上回る。口縁端部は外方に引き伸ばされ、幅広の外傾面を形成する。口径17.0cm、残存高5.3cm。内面および口縁部外面はナデ調整で、頸基部以下体部にかけては斜行するハケ調整で仕上げている。口縁端部の外傾下面において煤の付着が認められる。

甕形土器S（42）

口縁が大きく外反する甕で、端部は面取りされ強いナデが施される。ただ、頸部の締りが強いことから広口の壺になる可能性も考えられる。口径12.8cm、残存高4.2cm。調整は口縁部内外面をナデ、頸基部から体部にかけての外面は斜行するハケで仕上げている。

甕形土器T（43～46）

張りの弱い体部に外反する長い口縁が付く甕で、端部はナデにより面取りされる。44は口径17.8cm、残存高5.3cm。口縁部には上下二段のナデが施されており、外面中位で若干屈曲する。調整は口縁部内外面をナデで、外面頸基部以下をハケで、また体部内面はヘラケズリで仕上げている。45は口径20.0cm、残存高5.0cm。口縁は「く」の字状に大きく外反する。端部には強いナデが施され、面を形成する。調整は口縁部内外面をナデで、頸基部以下体部内外面をハケで仕上げている。外面に施されたハケは雑なもので、残存部からはその方向性を判断できな



第65図　弥生・古墳時代前期の遺物（甕）1/3

い。口縁部外面には煤の付着が認められる。

甕形土器U（47～52）

張りの弱い体部に外反する長い口縁が付く甕で、T類とほとんど同形態のものである。ただ、口縁端部で形成される面の有無によりあえて区分することにした一群である。47は口径16.0cm、残存高6.1cm。口縁端部はナデにより薄化し、若干外方へ伸び出している。調整は口縁内外面をナデで、体部内外面をハケで仕上げる。しかし、頸基部内面には粘土接合痕が明瞭に残されている。50は口径18.0cm、残存高9.2cm。胴部最大径はほぼ中位に求められ、15.0cmを測る。口縁端部は摩滅しており面の形成については不明瞭である。一応当類に含めたがT類になる可能性もある。調整は口縁部内外面をナデで、体部内外面をハケで仕上げている。口縁部および体部外面には煤の付着が認められる。

甕形土器V（53～55）

やや肩の張る体部に外反する短い口縁が付く甕で、端部はナデ調整により面取りされる。54は口径15.4cm、残

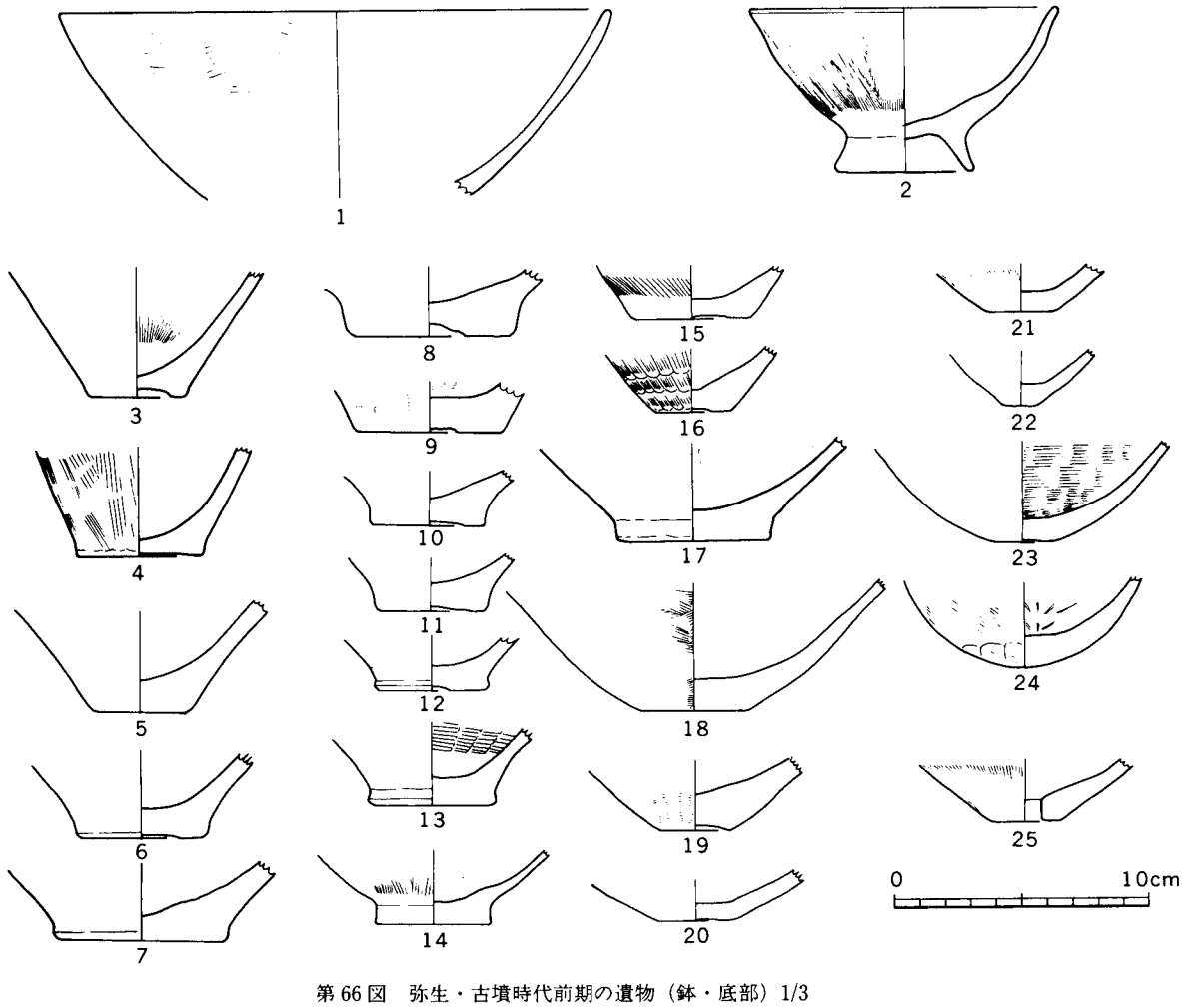
存高3.9cm。調整は内面および口縁部外面をナデで、体部外面は斜行するハケで仕上げる。頸基部内面には明瞭な粘土接合痕が残り、調整の雑さが目立つ。胎土には2mm前後の砂粒が多量に含まれている。55は口径不明の口縁片である。口縁部下半における立ち上がりは緩やかであるが、上半に至り急激に外反する。端部は若干上方に肥厚し受口状を呈する。これは端部面取りの際、ナデ上げられた粘土を利用して形成したものと考えられる。調整は内外面共にナデ。頸基部内面で粘土接合痕が看取される。胎土に2mm程度の砂粒を多量に含むが焼成は良好である。

甕形土器W（第65図56～60）

「く」の字状に外反する短い口縁に張りの弱い体部が付く甕で、端部はナデ調整されて丸味を帯びる。中には胴部の張るものもあるが、底部は概ね丸底になると考えられる。56は口径18.4cm、器高21.6cmを測る完形品で、胴部の張りは弱い。器壁の厚さは部位により若干の差異は認められるもののほぼ均等で、丸底の底部においても変ることはない。調整は外面胴部下半がケズリ、上半はナデ。また、内面口縁部と胴部中位をナデ、他はハケで仕上げている。外面胴部中位には煤の付着が認められる。57は口径16.0cm、残存高8.2cm。体部の張りは大きい。調整は摩滅が著しいために不明瞭である。60は口径13.8cm、残存高5.2cm。やや小振りの甕である。調整は内面および口縁部外面をナデで、体部外面は横位のハケで仕上げる。内面に施されるナデは非常に丁寧なものである。

甕形土器X（61・62）

いわゆる受口状を呈する甕形土器である。体部の張りはI類に比べ弱く器高も低いことから、どちらかといえば鉢に近い形状を呈する。61は口径17.0cm、残存高7.9cm。やや外反気味に立ち上がる口縁端部には強いナデにより面が形成される。調整は内面および外面口縁帯をナデで、頸基部以下体部外面はハケの後、ハケ調整痕を消しきらない程度のナデが施されている。62は口径13.2cm、残存高5.8cm。外反気味に立ち上がる口縁帯の端部は丸味を帯びる。調整は内外面共にナデ。外面体部から口縁部にかけて煤の付着が認められる。



第66図　弥生・古墳時代前期の遺物（鉢・底部）1/3

小型甕形土器・その他（63～71）

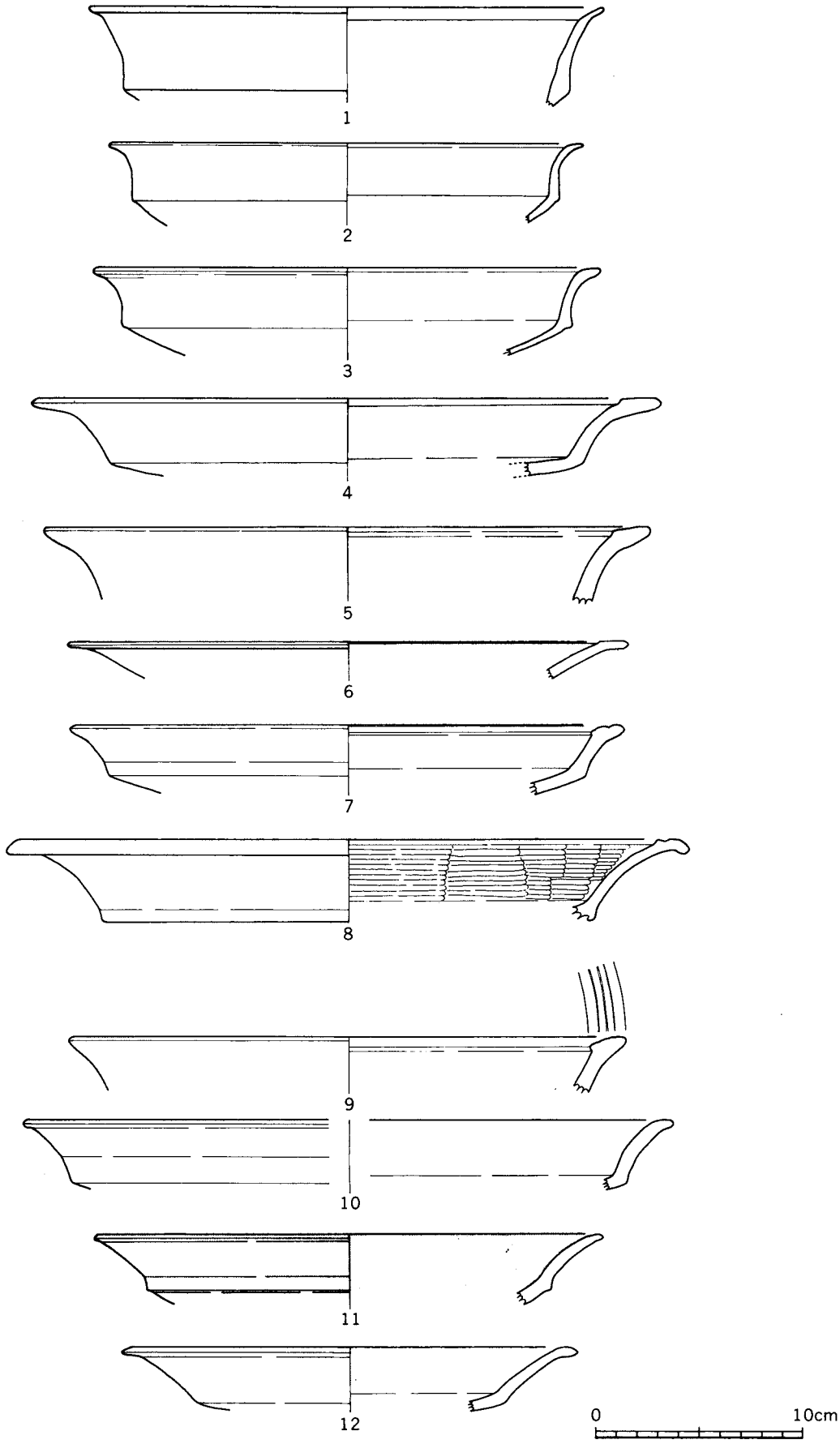
63は口径11.0cm、残存高4.5cm。張りの弱い体部にやや外反する口縁が付く甕で、頸部の屈曲は緩い。口縁端部には外方からの強い押圧とナデが施され、外傾する面が形成される。この面取りは明確な口縁帯の形成を意図したものであり、その下端は稜により区画されている。調整は口縁部内外面をナデで、体部内面はケズリの後、その調整痕を消しきらない程度のナデで、また体部外面はヘラミガキで仕上げている。65は口径11.2cm、残存高5.1cm。やや丸味を帯びた体部に外反する短い口縁が付く甕である。体部の形状は67程度の長胴スタイルを呈するものと考えられる。調整は内面および外面口縁部をナデで、体部外面は斜行するハケで仕上げている。外反する口縁の端部上方にはヘラ状具を利用したナデが施されており、狭い面が形成されている。66は口径10.0cm、器高7.3cm。肩の張る体部に外反する短い口縁が付くものである。頸部の屈曲度は大きい。口縁端部にはつまみ上げるような強いナデが施されている。底部は径1.5cm 程度の平底であるが、中央で若干凹状を呈する。胴部下位から底部に至る外面にはヘラ状工具によるケズリ取り整形が施されており、器表には多面の整形痕が観察できる。調整は内面および口縁部外面がナデ、体部外面については摩滅が著しいため不明瞭である。67は口径9.8cm、器高13.8cm。一部欠損はするものの全形を窺うことができる甕形土器である。外反気味に立ち上がる口縁部は短いもので、屈曲部外面に施された強いナデにより体部と区画できる程である。底部は径３cm 程度の平底で、若干偏向している。胴部はやや長胴気味であるが、最大径は肩部に求められる。調整は口縁部内外面をナデ、体部外面を横位あるいは斜行するハケで、体部内面は荒いヘラケズリで仕上げている。体部から口縁にかけての外面には煤の付着が認められる。69は口径6.4cm、器高6.5cm。小型のぐい呑み形土器と称してよい製品である。底部は径2.6cm の平底で安定性は良い。調整は内面ナデ、外面はミガキで一部ナデ。外面約1/4の範囲に黒斑が認められる。

鉢形土器（第66図１・２）

１は口径21.8cm、残存高7.3cm、残存基部径9.0cm。やや大型の深鉢形土器である。底部は欠損しその形状については不明。調整は内外面共にナデであるが、外面のナデはハケの後に施されるもので、ハケ調整痕を完全には消しきっていない。胎土・焼成は共に良好。２は口径12.1cm、器高6.4cm。調査区北西隅で検出した住居址内ピットから出土した。完形の台付鉢である。口唇部は丸味を帯びる。口縁部外面には強いナデが施され、端部を強調している。高台は接面径5.3cm、接合部内径3.0cm、高さ1.3cm を測るもので断面は「ハ」の字状を呈する。鉢底部の形状は若干丸味を帯びるものである。調整は内外面共にナデで仕上げられるが、外面体部に施されたナデはヘラ状によるもので細かい柾目痕が看取される。胎土・焼成は共に良好。

底部（３～25）

いずれも破片であるため上部形態については不明である。ただ、底部から直接体部へつながるものと、底部が突出するものとが存在することから壺・甕の両器種の底部が混在していることは間違いない。３は底径3.8cm、残存高4.9cm。甕形土器の底部片である。底面中央部には径約2.7cm の円形の窪みが遺存する。体部の立ち上がり角度が大きいことから、胴部最大径はおそらく上位に求められるものとなろう。調整は内面ハケ、外面はナデ。胎土・焼成は共に良好。８は底径6.2cm、残存高2.5cm。壺形土器の底部片である。底面中央部には径3.0cm 程度の不整円形状の窪みが看取できる。また、内面には底面調整の際に補充された粘土の接合痕が認められる。調整は内面ハケの後、調整痕を消しきらない程度のナデ、外面は指頭によるナデ。14は底径4.6cm、残存高3.0cm。特異な甕形土器底部片である。残存する体部の器壁は薄く仕上げられ、その立ち上がり角度は小さい。突出する底部は乳白色を呈し、茶褐色を呈する体部とは明瞭に色別される。調整は内面がナデ、外面は体部をハケ、底部をナデで仕上げている。外面体部には煤の付着が認められる。23は底径2.2cm、残存高5.0cm。甕形土器の底部片と考えられる。底部の形状は平底であるが形骸化したもので、若干凹状を呈する。体部は丸味を帯びる。調整は内面ハケ、外面はナデで仕上げている。ただ、外面が赤彩されていることから当器が儀器として用いられた可能性が強い。25は甑の底部片である。底径2.5cm、残存高2.5cm。底部中央には径1.2cm の孔が穿たれている。調整は内面ナデ、外面はハケで仕上げている。胎土・焼成は共に良好。



第67図　弥生・古墳時代前期の遺物（高杯）1/3

高坏形土器A（第67図１～３）

口縁は直立に近い立ち上がりを呈するが、端部は外方に折り曲げられ、若干外反気味になる。体部はやや深味のある皿状を呈する。１は口径25.0cm、残存高4.7cm、口縁部立ち上がり高4.1cm。高坏形土器の口縁部片である。端部は若干外方に折り曲げられ、強いナデが施される。そのため器壁は薄化するとともに、端部内面には内傾する面が形成される。胎土・焼成は良好であるが、器表の摩滅が著しいため調整については不明。３は口径24.8cm、残存高4.2cm、口縁部立ち上がり高2.9cm。口縁端部は外方に折り曲げられ、強いナデが施されている。そのため端部は水平化し、面が形成される。体部の形状は深味のある皿状を呈する。口縁の立ち上がり基部外面には稜が形成されており、体部との界を明確にしている。器壁は総じて薄い。器表の摩滅が著しいために調整は不明である。

高坏形土器B（４～９）

口縁の立ち上がり角度はA類に比べ小さく、やや外反気味に立ち上がるものである。外反する口縁の端部は外方に屈曲し、水平な面を形成する。この水平面はA類とは異なる明確なもので、面の内側は稜をもって画される。体部の形状は総じて浅い皿状を呈するものと考えられる。４は口径30.6cm、残存高3.7cm。外反する口縁の端部は若干肥厚する。器表の摩滅が著しいため調整については不明であるが、内外面共に赤彩痕を留めている。胎土・焼成は共に良好。６は口径27.4cm、残存高1.8cm。高坏形土器の口縁片である。器壁は薄手で、内外面共にヘラミガキ調整されている。胎土・焼成は良好。内外面共に赤彩痕を留めている。８は口径33.4cm、残存高4.0cm。体部以下を欠損する口縁片である。外反する口縁の端部はやや下方に湾曲し巻き込む様相を呈する。そのため端部は丸味を帯び、面の内側を画する稜も鋭いものとなっている。調整は内面ミガキ、外面は摩滅が著しいために不明。胎土・焼成は共に良好。

高坏形土器C（10～12）

口縁の立ち上がり角度はA類に比べ小さいものの、坏部はやや深味のある皿状を呈する。端部は外方に屈曲するがB類のような面は形成しない。10は口径24.8cm、残存高3.5cm。外反する口縁の端部には強いナデが施され、外傾する狭い面を形成する。口縁立ち上がり基部外面には稜が形成され、体部との界を明確にしている。しかし、同部内面における屈曲は緩く、体部と口縁の界は不明瞭である。調整は内外面共に摩滅しており不明。ただ全面に赤彩痕を留めている。胎土・焼成は共に良好。

高坏形土器D（第68図13）

口径31.0cm、残存高6.7cm。外反する口縁は長く、端部にはナデにより面が形成される。坏部の形状は浅い鉢状を呈する。口縁の立ち上がり基部外面には３条の沈線とヘラ状具による刻目文が施されている。器表の摩滅が著しいため調整は不明。ただ全面に赤彩痕が認められる。

高坏形土器の脚部（14～30）

14・15は共に脚裾部片で端部は大きく反転肥厚する。肥厚部上端には強いナデが施され、ほぼ水平に平坦な面が形成される。15の肥厚部上端に形成された面には２条の沈線が施されている。16～19は裾部中位あるいは上位において段を形成する、いわゆる有段の脚裾部片である。柱状部の形態は概ね棒状を呈するものと考えられる。16は裾部径19.6cm、残存高4.1cm。有段部外面には上方へ突出する稜が形成される。稜部内外面には綾杉状の刺突列点文が施される。また、稜部直下には径約0.9cmの孔が穿たれるがその箇所数については不明である。裾端部は面的に反転肥厚する。肥厚面の内側には鋭い稜が形成される。稜部内外面には有段部同様綾杉状の刺突列点文が施されている。また、肥厚部上面においても同様の刺突文が施され、稜部外面の刺突文と綾杉状に対応させている。刺突調整具はいずれも木目の細かい櫛状具を使用している。器面調整は内面ナデ、外面は摩滅のため不明。17は裾部径22.0cm、残存高4.4cm。16同様有段部外面には上方へ突出する稜が形成される。稜部直下には径約1.3cmの孔が穿たれている。穿孔箇所については４箇所と推定できるが、５箇所となる可能性もある。裾端部は若干上下に肥厚し、ほぼ直立する面を形成する。面には３条の擬凹線が施されている。器面の調整は摩滅が著しいために不明である。19は裾部径20.0cm、残存高3.5cm。裾部上位で段を形成するものである。有段部外面に

施される稜は鋭い。稜部直下には径約1.0cmの孔が穿たれるが、箇所数については不明。裾端部は上下に肥厚し外傾する面を形成する。外傾面の下位には1条の沈線が施される。調整は外面ミガキ、内面はナデで仕上げられている。胎土・焼成は共に良好。20は裾部径21.4cm、残存高3.3cm。残存部から段の有無は判断できない。ただ穿孔の位置が低いことや裾部の立ち上がりが緩いことなどから無段となる可能性が強い。裾端部は上下に肥厚し外傾する面を形成する。調整は内面ナデ、外面はミガキ。端部外傾面に赤彩痕が認められる。21～27は高坏形土器の柱状部片である。21は坏底部から裾部上半を含むものである。柱状部の形態は円筒形でかつ中空。坏底部との接合部は剝離、欠損するが、円板充塡法により形成されたものと考えられる。残存高10.5cm。残存部下位には径0.8cmの透孔が遺存する。調整は不明瞭であるが外面はミガキ、内面はナデと考えられる。ただ、器壁の薄さや胎土・焼成がA類とした3に類似することから、同一個体となる可能性が強い。22・23は脚部上端に5～6条の沈線が巡るものである。22は坏底部を若干含む柱状部片で、残存高9.0cm。柱状部の形態は21よりやや裾広がりである。坏底部との接合部で半球状の剝離痕が認められることから、接合は円板充塡法によるものと考えられる。脚部上端に施される沈線は5条。1条ごとにヘラ描されたものと考えられる。残存基部では3箇所に穿孔痕が認められる。器面の調整は摩滅が著しいため不明。胎土・焼成は良好。23は残存高5.8cmを測る柱状部片である。上端に施された沈線は6条。ただ線のつながりから一筆描きされた可能性が強い。柱状部の形態は円筒形でかつ中空。坏底部との接合法については不明。胎土・焼成は良好であるが調整については器表の摩滅が著しく不明である。28～30は脚部がラッパ状に開くものである。28は裾部径10.2cm、残存高7.2cm。坏底部との接合部は欠損する。裾広がりの柱状部下端には径約0.3cmの透孔が4箇所で認められる。透孔部以下の裾部は大きく広がり、端部で丸味をもって終息する。外面調整は摩滅のために不明であるが、赤彩痕は看取できる。内面は柱状部がヘラ状具によるケズリ、裾部はナデ調整である。胎土・焼成は共に良好。29は裾部径8.0cm、残存高4.8cm。短脚の小型高坏形土器である。ごく短い柱状部に大きく開く裾部が付くもので、内部は円錐状に中空となる。残存部上端には半球状の剝離痕が認められる。調整は不明瞭ではあるが、外面ミガキ、内面ナデ。外面には赤彩痕が観察される。30は残存高4.4cmを測る小型高坏形土器の脚部片である。坏底部から直線的に開く脚部中位には、径約1.2cmの透孔が4箇所に穿たれている。器表の摩滅が著しいため調整は不明。胎土・焼成は良好である。

器台形土器A（第69図1～6）

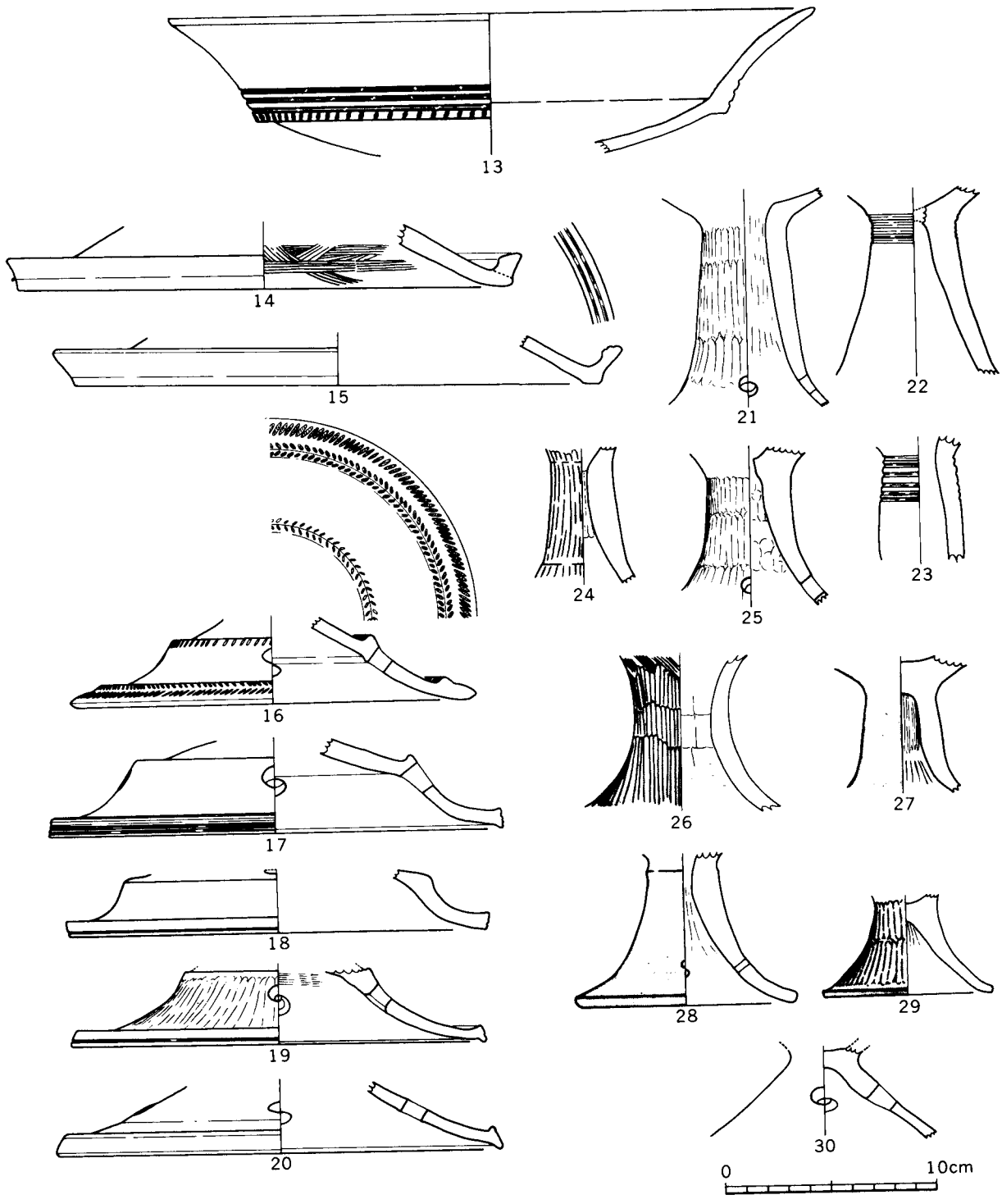
口縁部が直線的に外反するもので、端部は上下に肥厚する。いずれも口縁片であるため脚部形態は不明。1は口径18.0cmの器台形土器口縁片である。端部は上下に肥厚し、狭い口縁帯を形成する。口縁帯には3条の擬凹線が施される。口縁帯の上下端はナデ調整され丸味を帯びている。器面の調整はヘラミガキ。口縁帯において赤彩痕が認められる。胎土・焼成は良好。2～4はいずれも径不明の口縁片である。2の口縁帯には強いナデが施され、2条の浅い凹線が形成されている。上段の凹線と口縁帯内面には半截竹管による列点文が各々方向を逆にして施されている。5・6は肥厚する口縁端部が若干上方へ伸び上がるものである。5は口径17.4cm、残存高2.7cm。口縁帯には2条の擬凹線が施される。調整は内面ミガキ、外反は摩滅しており不明。胎土・焼成は共に良好。

器台形土器B（7）

A類同様口縁部が直線的に外反するものである。端部は面取りされ2条の擬凹線が施される。また、擬凹線の上には径約0.5cmの円形浮文が貼付され、口縁端部を装飾する。口径12.0cm、残存高3.2cm。器表は摩滅しており調整は不明。ただ内面に赤彩痕を留めている。残存基部には接合痕が看取されることから破損部は脚部との接合部と考えられる。胎土・焼成は共に良好。

器台形土器C（8）

口径16.8cm、器高15.5cm。調査区へ—126グリッドで検出したピット出土の完形品である。出土状況は口縁部を下にする、いわゆる転倒した状態であった。口縁部はほぼ直線的に外反する。端部は下方に引き伸ばされ幅広い外傾面を形成する。外傾面には3条の擬凹線が施される。口縁部から脚部にかけての屈曲度は大きいが、明確な稜を形成してはいない。脚部の形状は屈曲部以下、ほぼ直線的に開くもので、裾部径は14.6cmを測る。脚部中位には径約1.0cmの透孔が4箇所に穿たれている。調整は不明瞭ではあるが、外面および口縁部内面をミガキ、



第68図　弥生・古墳時代前期の遺物（高杯）1/3

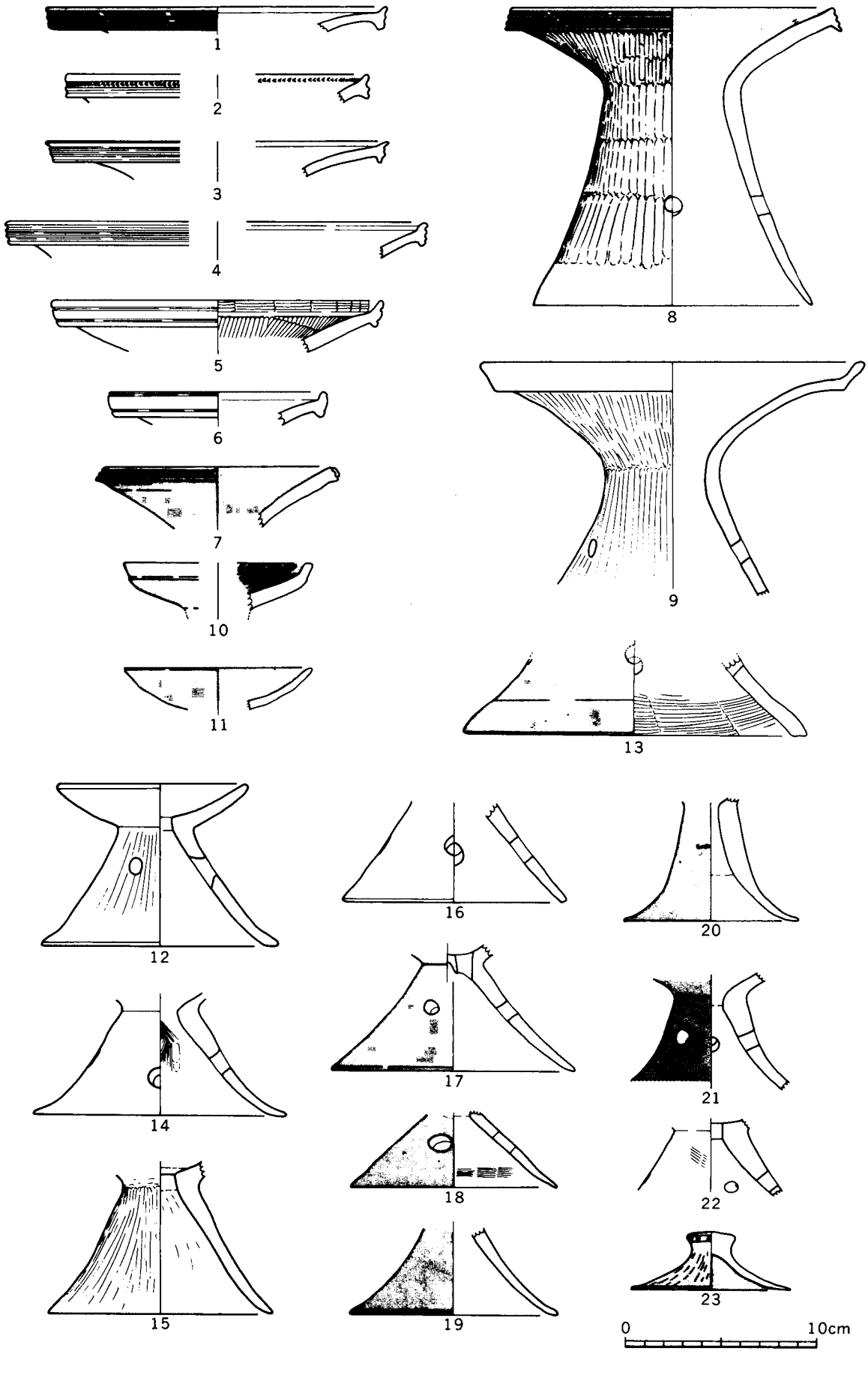
脚部内面をナデで仕上げている。口縁部内面・口縁帯および脚部下半には明確な赤彩痕が看取される。胎土は精選され、焼成は良好である。

器台形土器D（9）

外反する口縁の端部を上方に折り曲げ、受口状とするもので、口縁部から脚部にかけては曲線的かつスムースに移行する。口径20.0cm、残存高12.1cm。脚部中位には径約1.0cmの透孔が3箇所に認められる。調整は外面ミガキ、内面は摩滅しており不明。口縁部外面には赤彩痕が認められる。胎土・焼成は共に良好。

器台形土器E（10～12）

器受部が皿状を呈する小型器台形土器である。10は径不明の口縁片である。端部は若干上方に折り曲げられ、



第69図　弥生・古墳時代前期の遺物（器台・蓋）1/3

強いナデが施される。調整は内面ミガキ、外面は磨滅しており不明。内外面共に赤彩痕を留める。12は口径9.8cm、器高8.5cm。完形の小型器台形土器である。脚部は器受部底からほぼ直線的に開くもので、裾部径は口径を大きく凌ぐ。脚部中上位には径約1.1cmの透孔が3箇所に穿たれるが、透孔の内面には孔径を巡る剥離痕が認められる。調整は不明瞭ではあるが外面ミガキ、内面はナデとケズリで仕上げられている。胎土には1mm程度の砂粒が多量に含まれるが、焼成は良好である。

器台形土器の脚部（13～22）

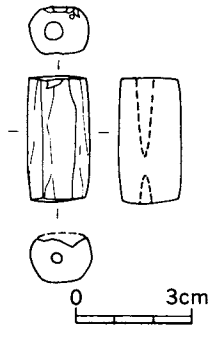
13は裾部がやや内湾する脚部片で、端部に0.7cm程度の可接面を有する。裾部径18.1cm、残存高3.9cm。残存部上端には穿孔痕が遺存する。調整は外面ミガキ、内面ハケ。外面には赤彩痕が認められる。胎土・焼成は共に良好。14～22は各々脚の開き具合や透孔の有無の違いが認められるものの、ほぼE類に含めて考えることのできる脚部片である。

蓋形土器（23）

口径8.4cm、器高3.1cm。壺用の蓋と考えられる。つまみ部上端にはヘラ状具による刻み目が施されている。調整は外面ミガキ、内面ナデ。外面と内面の一部で赤彩痕が認められる。胎土・焼成は共に良好。

包含層出土管玉未成品（第70図）

長径1.60cm、短径1.35cm、長さ3.25cm、重さ11.4gを各々測る。石質は緑泥石を含む珪質岩。器面は研磨され平滑ではあるが多面を遺存する。両端には穿孔痕が認められるが完通してはいない。



第70図　管玉（1/2）

古墳時代後期以降の遺物

出土状況については、前節でふれたように、遺構に伴なって検出されたものではない。その大半は須恵器で占められ土師器類は皆無に近い。古墳時代に属すると思われる土師器では坏2点、須恵器においては、坏蓋2点、坏3点、甕2点がある。奈良時代では、土師器2点（盤甕）、須恵器の坏蓋91点、坏身45点、壺4点、甕5点、甕・壺胴部片44点、鉢3点、長頸瓶（壺）2点、薬壺2点がある。平安時代に属するものでは須恵器3点があり中世のものは珠洲1点（鉢1点）がある。以下に順を追って図化遺物について諸特徴等について簡単に説明する。

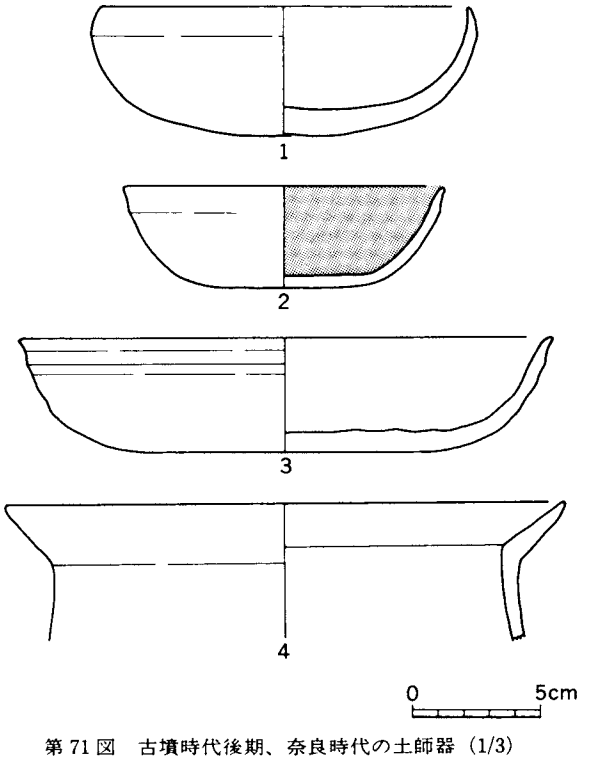
土師器（第71図1、2）

坏2点がある。1は、口径14.3cm、器高5.0cmを測るものである。内外面に赤色顔料の塗布の痕跡がわずかに見うけられる。表面が磨耗しており詳細な調整手法は観察できない。2は口径12.4cm、器高4.1cmを測るもので、内面は黒色研磨されている。口縁端外面は強い指ナデのため稜をつくる。

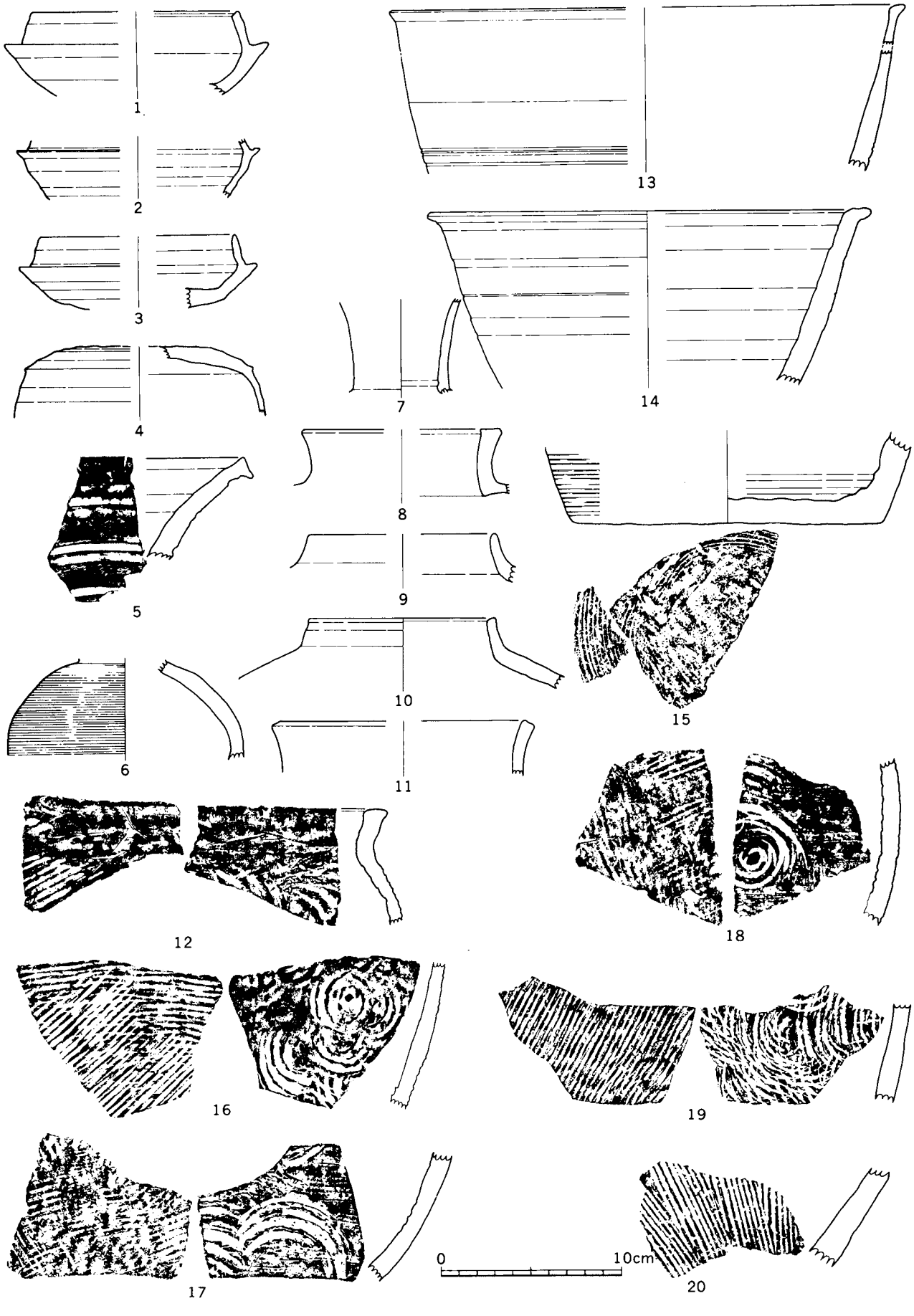
須恵器

坏身（第72図1～3）

復元口径11.4cm、残存器高2.6cmを測る約1/5片である。底部約2/3位は篦削り（逆時計まわり）で他はすべて横ナデ調整である。全体に器肉は厚く造りも雑である。灰白色を呈し、胎土には砂粒をやや含み、焼成は普通である。2は、細片のため詳しい観察はできないが、器肉も非常に薄く仕上げられ、造りも全体に丁寧なものである。灰青色を呈し、胎土は緻密で焼成は良い。3は、復



第71図　古墳時代後期、奈良時代の土師器（1/3）



第 72 図　古墳時代後期・奈良時代の須恵器、珠洲焼（1／3）

元口径10.8cm、残存器高4.0cmを測る約1/5片である。底部1/2以下には箆削り（時計まわり）を施すほかは横ナデである。灰青色を呈し、胎土は緻密で焼成も良い。

坏蓋（第72図４）

３点存するが、図化し得たのはわずか１点である。口径14cm程度、器高4cm以上に復元できるものである。細片のため詳しくは述べないが、やや天井部の高まりをもつやや大振りの類と推定できる。天井部2/3は箆削り（逆時計まわり）の他は横ナデである。灰白色を呈し、胎土にはやや砂粒を含み焼成は良い。

甕（第72図５）

口頸部のみの破片である。二条の太い沈線で区画された二区画内に波状文を施す。波状文は17～18本の細い櫛状具によるものとみられる。灰青色を呈し、胎土も緻密で焼成もよい。

第３節　奈良時代の遺物

土師器（第71図３、４）

３は、口径20.8cm、器高4.5cmを測る盤である。内外面ともに赤色顔料塗布が認められる。内面では成形の際の指頭圧痕が残るが最終調整でややその痕跡が残る程度である。底部ではヘラケズリ（逆時計まわり）、腰部でヘラミガキ、他は丁寧なヨコナデを施す。４は甕の口縁部の破片であり外面には煤の付着が甚しい。

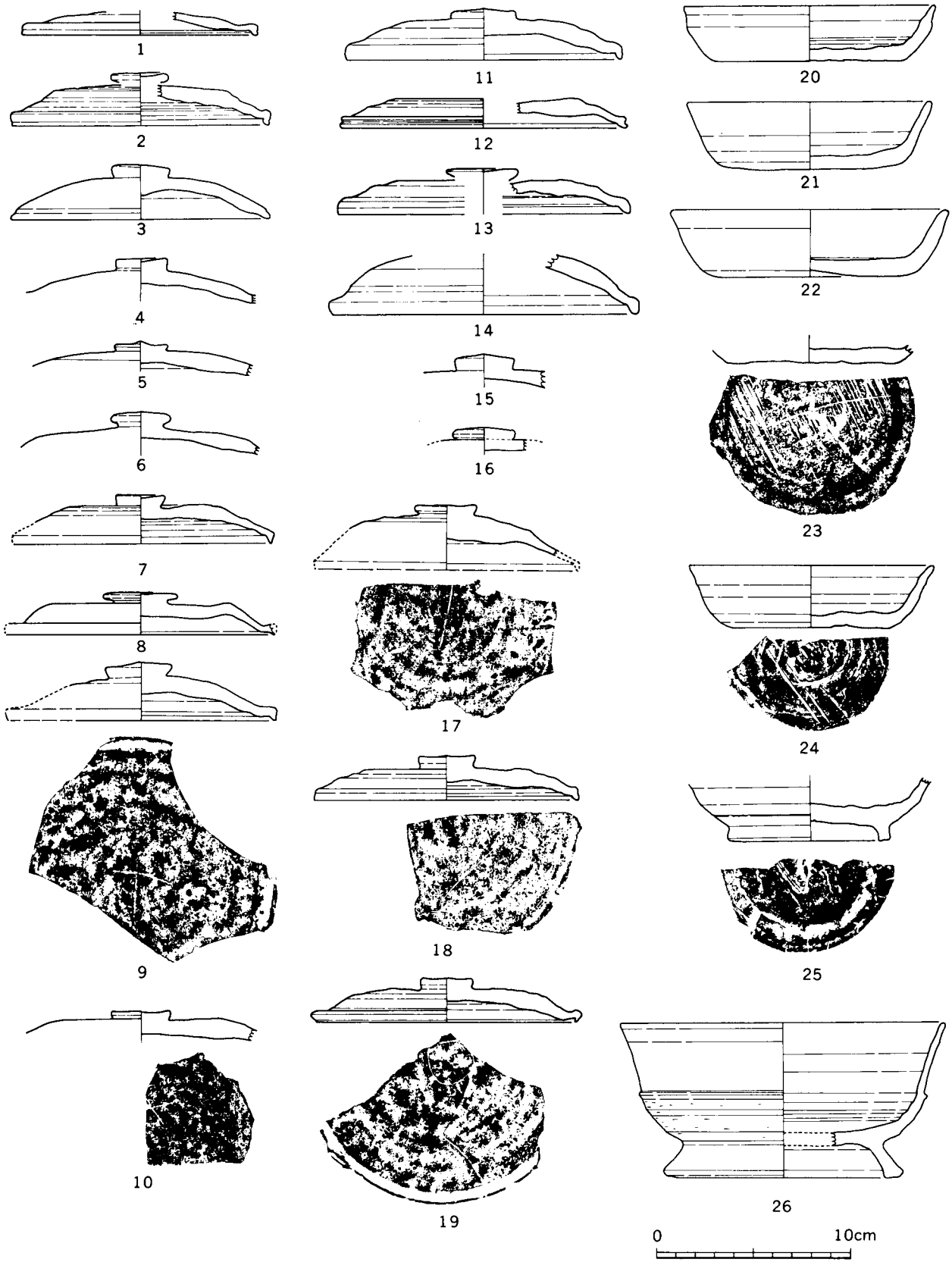
須恵器

坏蓋（第73図１～19）

口径14cm前後、器高2.5cm前後を測る割り合いと扁平なタイプのものが多い。また、つまみに関しても全体に扁平なものが多く、径３cm前後のものと、４cm前後のものとの大きく二つのタイプがある。１は、口径12.3cm、残存器高1.2cmを測るもので中では最も扁平なタイプのものである。器肉も薄く仕上げられ、天井部には降灰釉がかかる。今回の調査の中では、最小の部類に属する。２は、口径13.4cm、残存器高2.1cmを測る約1/4片である。天井部は割り合いとフラットで箆削りがなされているようであるが厚い降灰釉のため判断しにくい。３は、口径13.4cm、器高2.8cmを測るもので、頂部から口縁端にかけては曲線的で、このようなタイプは本例のみである。口縁端の屈曲はなく、わずかに内外面からつまみ出す程度のものである。器肉も全体的に厚い。４、５も同様の器形をなすものと推定されるが、口縁部を欠失しており確定はできない。５は、天井部の約1/2に箆削り（逆時計まわり）を施し他はすべて横ナデである。つまみは径2.8cm、厚さ0.6cmのボタン状のものを貼り付けている。７は、口径13.6cm、器高2.6cmを測る約2/3片である。口縁端の処理も断面三角形で鋭利である。天井部は、フラットで降灰釉が甚しく調整手法については観察できない。また、天井部に他器種の口縁端（？）の附着の痕跡が認められる。８は、径４cm、厚さ0.3cmの本遺跡で最大のつまみを有するものである。胎土、焼成ともに良く灰青色を呈する。天井部はフラットに箆削りされているが、ややくぼむ。また、つまみの中央部もくぼむ。11は、口径14.4cm、器高2.7cmを測るものである。胎土、焼成ともに悪く、造りも雑である。12は、口縁端部は屈曲し、外面に凹部を有する。胎土、焼成ともに良い。内面に重ね焼の痕跡が見られる。14は、口径13.9cmに復元できるものでやや大振りの部分に入る。口縁部は強い引き出しにより屈曲し、天井部も丸みをおびて高いものとなる。天井部約半分に逆時計まわりの箆削りを施す。９、10、17～19の内面には箆先による刻文がみられる。17の天井部に箆削り（逆時計まわり）を多用し丸く仕上げる。以上が坏蓋のおおよその概観であるが出土状況、資料の大きさなどの点から言って多くを語れるものではない。つまみのタイプでは、大小で二種類、形状で三種類、口縁形態でもおおづかみに三種類、などと多くに分類できるものであるが、それらは時期的な差異なのか、単なる手法的な違いのみなのかは、後に若干ふれることとする。

坏（第73図20～24）

図化できたのは５点であった。20は、口径7.0cm、器高2.0cmを測るものである。底部は平坦で体部と底部の境界は明瞭であり、箆切り痕を留める。また、口縁端は指頭による強い横ナデのためやや内屈する。胎土、焼成



第73図　奈良時代の須恵器（1／3）

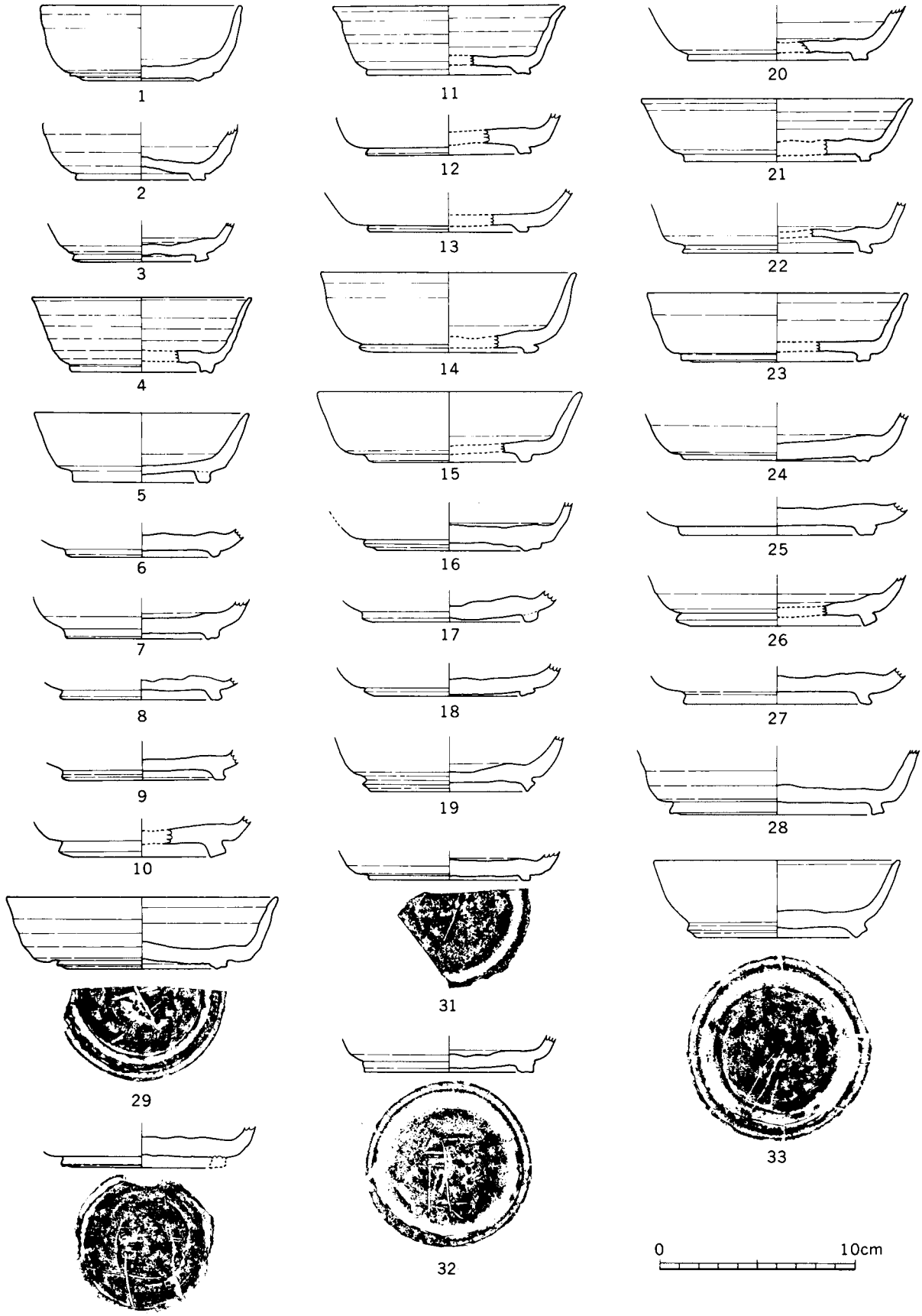
ともに良く灰白色を呈する。21、22は器肉も厚く、体部の立ち上りも強い。23、24の底部には篦先による刻文がある。

高台坏（第74図１～33、第73図25、26）

１は、口径10.2cm、器高4.9cmを測り本遺跡出土品の中では最小のグループに属する。低平な高台を貼り付け、体部の立ち上りは強い。口縁近くでロクロナデの凹部がやや強くみられる。内面に甚しく降灰釉がみられる。なお、本例のような低平な高台を有するものには、16がある。底径7.6cmを測り１よりは大形になる。２、３は底径5.4cm前後に復元でき、体部も直線的で傾斜も強い部類と思われる。また口径も10cm前後となろう。４は口径11.2cm、器高3.9cm、底径6.0cmに復元できるものである。器壁は薄く仕上げられ、口縁端部をやや外反させている。高台は、中央部がやや凹む。胎土、焼成ともに良く、内面に降灰釉が認められ、灰青色を呈する。このタイプに近いものとしては、11があげられる。口縁端部も強い横ナデのために４よりも強い。４、11ともに焼成も良く本遺跡においては優品の部類に属する。５は、口径11.1cm、器高3.5cm、底径6.0cmを測るものである。底部と体部の境界には判然とした稜をなし、高台もやや中央に寄って貼付しているために高台と稜の間に平坦面を有している。器肉も厚く、胎土には長石粒をやや多く含んでいる。本例のようなタイプはこれのみのようである。14は口径13.4cm、器高4.1cm、底径8.0cmを測るものである。腰部にふくらみをもち、立ち上りも強く口縁端でやや外反するものである。胎土、焼成ともに良く暗灰青色を呈する。15もほぼ同様な器形をなすが体部がやや直線的である。19は底径8.2cmを測るもので断面三角形の高台を貼付するものである。底部には明瞭な篦切り痕（逆時計まわり）を留める。21は口径13.8cm、器高3.3cm、底径8.6cmに復元できるやや大形の部類に属するものである。高台には断面四角形の巾の狭い（0.3cm）のを貼付する他は14などと同様ややや口縁端近くでゆるく外反する。23は口径13.3cm、器高3.5cm、底径8.2cmに復元できるものである。直線的にのびる体部が口縁端近くで外反はしないが凹凸を残すものである。焼成は良く、胎土には長石粒を多く含み灰青色を呈する。25、26は巾広な高台（0.8cm前後）を貼付するものである。底径も8.5cm前後を測り口径もおそらく15cm前後を測る大形のものとなるであろう。10もほぼ同様のものであろう。29は、５に近いタイプの大形のものであろう。体部と底部境の腰部で稜をなすものである。29～33は底部に刻文を有するものである。図示はしなかったが、27の底部にも「－」の刻文が認められる。刻文には「－」、「＝」、「×」と32のように判然としないものとがある。器形では、中から大形のもので口縁端がやや外反するものに多いようである。33の高台は19に近い。第74図25は底部に「又」の篦先による刻文を有する。全形を知ることができないが26のような形をなす可能性が高い。腰部に時計まわりの篦削りを施し、内面では横ナデによる凹凸を残している。26は、口径16.7cm、器高8.0cm、底径10.4cmを測り体部中位やや下った部分に明瞭な稜を有するものである。巾0.8cm、長さ1.8cmの長く外方に張り出す高台を付す。稜部分から腰部にかけては時計まわりの篦削りを施す。他は全て横ナデである。胎土にはやや多目の長石粒（１～２m程度）を含んでいる。25についても稜の部分が欠失しているので不明であるが体部から腰部にかけての成形手法など似通った点が多いことから同様の器形をなすものと考えられる。この器形は、佐波理鋺を模したものと思われる。あるいは金銅製の仏器等を模したものであろう。隣県の富山県では11遺跡で佐波理鋺を模した坏が紹介されている。（平桜岡山３号窯跡、小矢部市教育委員会1981）実見していないので不明の点は多いが、26については富山県で報告されている資料よりは大ぶりでまた、稜の造りにおいても差異が認められる。本例の稜は削り出しによっておりやや空帯に近いものである。本県においては、出土資料に恵まれず僅かに金沢市浅川１号窯（灰原）の報告資料の中に一点類例が認められる。

壺　　甕（第72図６～12、16～19）

６は長頸瓶（壺）の肩から胴部の破片である。最大胴径13.0cmを測り器表ではカキ目が施され、内面は横ナデである。７は長頸瓶（壺）の口頸部の破片である。頸部で径は5.4cmに復元できる。内外面ともに横ナデである。胎土には砂粒を含み茶褐色を呈する。８は横瓶の口頸部の破片であろう。口径11.0cm前後のものと推定される。口縁端は上からの強い押えのため水平をなすがやや内面が凹む。内外ともに濃緑色の自然釉が付着する。９、10は薬壺の口縁部片と思われる。おのおの口径10.0cm前後を測るものである。細部については小片のため不明であ



第74図　奈良時代の須恵器（1／3）

る。12は甕の口頸部である。口頸部はほぼ直立し、口縁端は水平に近くやや外方に丸みをもつ。胴部外面では粗い平行タタキ、内面でも粗い同心円状のタタキを施しているようである。15は底径17.0cm を測る甕か鉢の底部片である。底部から胴部にかけては巾広なカキ目が施され、内面については横ナデを施す。可能性としては鉢の方が大である。16～19は甕の胴部片である。16～18は内面にかなり特徴的な同心円状の粗いタタキを有している。外面ではいずれもやや粗な平行タタキを施している。19は内面に細い同心円状のタタキ、外面でも細い平行タタキを有しており古墳時代に属する可能性のあるものである。

鉢（第72図13、14）

13は口径28.0cm、14は24.0cm を測るものである。13は器壁も薄く口縁端は強い押えのため水平をなしやや外方に丸みをもって張り出す。両者ともに胴中位に一条あるいは二条の沈線を有する。残存部では内外面ともに横ナデである。

なお平安時代に属する須恵器は図示できなかったが、底部には糸切り痕を残し、器壁も薄く、軟質で灰白色を呈するものである。

珠洲（第72図20）

擂鉢の胴部片である。８～９条の櫛状具による下し目が器内全面に施こされる。胎土、焼成ともにあまく灰白色を呈する。

第3節　縄文時代について

本遺跡から出土した土器は器種構成、文様構成等から推定して、縄文時代前期末から中期前半にかけての特徴を備えているものと見なされ、さらに細別するならば、大部分の土器は新保式に後続し、新崎式に先行する位置にある中平式土器に極めて近い土器群とする事ができる。そして、本遺跡出土土器と中平遺跡出土土器の主要文様、器形等をからみ合せて比較すると、量的な差異は措くとしても地域差、時期差を考慮せざるを得ないものが浮かび上がってくる。それは、縄文時代中期にかぎらず各遺跡ごとに時期差としてとらえられていて、標準的型式間の過渡的な在り方と位置づける傾向が大きくなっている。各遺跡において層位学的に裏付けを持つものではなく、型式学的方向での模索としての細密化はやむを得ないにしても、遺跡の個有性、地域性を等閑視しているきらいがあるように思われる。これは該期遺跡の資料不足の面は否定しえないが、各遺跡ごとの標準型式設定に遺跡の個有性を大きく扱い過ぎている結果として生まれたのではないかと考えられる。そのために北陸地域における標準型式そのものが判然としなくなり、出土量の多い遺跡によって肉づけされるのではなく、かえって曖昧にされる傾向を近年の調査事例報告から窺う事ができる。

本遺跡出土土器の編年的位置づけは、中期前半の北陸における研究史をあとずけ、既定の標式土器のまとめを記述したのちに行っていきたい。

a　中期前半の諸形式の内容について

珠洲郡松波町新保遺跡の調査が行われたのは昭和26年であるが、翌年には高堀勝喜氏(註1)によって報文がまとめられている。面積にして約4坪の発掘で、リンゴ箱3箱にのぼる資料が得られ、大きく3類に分類している。器形はキャリパー状と円筒形の深鉢があり、三角状の小突起や円孔を穿った半円形小突起を付すものがあり、第1類は「地文として絡縄文、又は縄文を押捺するが、頸部から上に絡縄文を印した場合、胴部も亦絡縄文をとるのを原則とするが、縄文の場合は縄文を押捺するとは限らない。」「口頸部から上は地文に半截竹管によって縦方向をとる平行線を密に、或は疎に施したり曲線を描いたりして装飾とする。」とするもので、第2類は口縁に斜格子目文を引き、頸部以下を絡縄文とするタイプである。第3類は格子目文以外の施文をするものと記述され、関東の御領台に類似しながら前期末に編年すべきと記述している。

昭和30年の九学会編『能登』の「先史文化」(註2)には、長野県の踊場式土器との関連を格子目文から想定している。また、地文としての絡縄文と斜縄文の対比は3対2となり、新保式の特色を絡縄文においていて、東北の円筒下層d式の影響下にある東日本的な土器と位置づけている。

昭和32年には沼田啓太郎氏が新保式(註3)をまとめられていて、「単純な典型的な見事さを持った注目すべき遺跡」として新保遺跡を評価している。

昭和40年に、嵯峨井亮氏・村井一郎氏・松永清氏(註4)等による「石川県高松町押水町入会・東間坂手山縄文遺跡概報」が発表されている。新保式土器を持つ単純遺跡としてはいるが、横位無文帯、逆位蓮華状文を持つものをぬき出し、新保式を前半と後半に大別しうるものととらえているのは、本遺跡出土土器の大半部分や中平式を予察したものとして高く評価される。後半に分けたものをとおして、新崎式への移行がスムーズであるとされ、新保式そのものを前期末と考えてよいか、どうか、の疑問を提示している。

同年には、「縄文文化の発展と地域性―北陸―」(註5)を執筆された高堀勝喜氏は、前期最末に朝日下層式をあて、新保式を中期初頭においた。本文中に小島俊彰氏の主張する説をとり上げている。「新保式の編年的位置づけには、木目状撚糸文よりも、器形・文様にみられる五領ヶ台式土器との関連性を重視すべきである。」とし、長野県の中期初頭、梨久保式に対比されるものととらえられた。

昭和46年には富山県上市町野島大門遺跡(註6)出土土器の紹介があった。新保式の単純遺跡と考えられ、新保遺跡の第3類を含まない土器群である事が注意される。

昭和49年に小島俊彰氏は「北陸の縄文時代中期の編年」[註7]のなかで、野島大門遺跡出土資料で新保式を記述されている。朝日下層式の半隆起線文土器と、器形や文様構成はほとんど同じであるが、格子目文を持つ点、粗い施文手法から時期差をとらえている。口唇に突起を持つが、装飾把手はなくなり、厚手の大型土器はキャリパー状口縁を持つものが多く、口辺は縄文地文で太目の半截竹管で施文する。前期後半には見られない手法として、口辺部の文様を縦位隆帯で区画する手法を上げておられる。

昭和52年には新保遺跡出土資料に再検討が加えられた[註8]。昭和51年に沼田啓太郎氏の報告した金沢市大桑町中平遺跡[註9]のとらえ方が各研究者によって若干の齟齬をきたしたところから、新保式の標準遺跡の資料再見というかたちで、新保式以降を探ろうとしたものである。小島氏は文様の他に器形の違いを分類にとり入れ、形式と型式を組み合せた手法をとられている。発掘当時の高堀氏の3分類を細別し、11型式を設定している。主体となるのはキャリパー器形をなす縄文地文に縦位半隆起線を引くもので、89点（第II 1型式）中44点、約50%を占めている。口辺がゆるく外傾するいわゆるバケツ状器形（第II 4型式）のものを含めると52%となる。格子目文を口縁に持つものは（第Ⅰ2・Ⅰ3型式）、両器形を合せて20点、23%、口辺に半隆起線で曲・直線を組み合せたもの6点（第III 3・III 5型式）、6%である。そして、三叉状文、軌軸文（細線文）、横位無文帯を持つもの12点（第IV 2・IV 3・IV 5型式）、13%の組成比率を示す。鉢その他は5点（第II 6・II 7型式）である。キャリパー器形と「く」の字状に内屈する口縁をまとめると68%を占めるのが注意される。新保式のまとめとして、小島氏は第Ⅰ2・Ⅰ3・II 1型式の系列に入る土器群を主体とするものを、朝日下層・新保様式としてとらえ、第1様式に富山県朝日貝塚出土のもの、第2様式に新保遺跡や富山県野島大門遺跡のもの、第3様式に東間坂手山遺跡のものを上げている。そして、中平遺跡のものを新崎様式の第1様式としてとらえている。その主体となる第IV 2・IV 3・IV 5型式の出自については今後の研究課題としている。新保遺跡の再見は、文様の系譜の他に、器形の変化をもとり入れたもので、文様と器形が不可分に結びついている縄文土器を見る上では当然の方法なのであろう。時期差の問題点として、第IV文様系列（高堀氏分類第3類）のあつかいが浮び上がったと考えられる。

さて、中期新保式の次に編年されようとしているのが金沢市大桑町中平遺跡出土の中平式であるが、その編年的位置づけは近年高まってきたものであり、その研究史は短かいものであるところから、新保式につぐものとして研究されてきた新崎式土器についての把握をあとづけてゆく。

新崎式は穴水町新崎遺跡を標準とするもので、地元におられた清水省三氏によって採集・保存されていたものを、昭和27年の能登調査の際に山内清男氏によってぬき出され、中期初頭に編年されたのである。昭和28年の九学会総会に発表された編年表には登載されたのであるが、現在に至るまで正式の報告はなく、文様・文様構成が多種類にわたる事もあって新崎式の内容をめぐり研究者間で議論の絶えない形式である。

昭和28年の九学会能登調査の小規模発掘が新崎遺跡で行われ、同年の金沢市古府遺跡、羽咋郡中荘村上田通称地頭方遺跡の発掘、および、昭和29年の羽咋郡堀松貝塚の調査が矢つぎばやに行われている。新崎遺跡の報告はないまでも、後3者の報告がその内容を代弁しているとされている。昭和29年に発表された地頭方（いとがた）遺跡[註10]の報文（昭和28年5月21日稿了）で秋田喜一氏は、新保式と上山田式との間に位置づけた地頭方土器群を関東の五領ヶ台式に似たものと考えた。文様を主とし5類に分け、第4・第5類土器を地頭方遺跡の代表的なものと考えておられる。第4類は蓮華文を有するもの、第5類は隆線と沈線を組合せたもので、三叉状彫去文、B字状文、連続刻目文を指している。口縁形態には入字形を主とするとされ、穴水町新崎遺跡と同様の土器群と見られている。同時に発表された金沢市古府遺跡[註11]で高堀勝喜氏は、新崎式という形式名を使用し口能登内浦の七尾湾附近を中心に奥能登から加賀の一部にわたって分布するという。その特徴は秋田氏の指標とするものを上げ、絡縄文はないといってよいが、羽状縄文が残存すると指摘している。また、報分中には上山田式をA・B式に2分する案を出され、三角形の陰刻手法に注意を寄せている。昭和30年に堀松貝塚[註12]を報告した高堀勝喜氏は、新崎式と上山田式が層位学的に確かめられたと記述している。貝層および黒褐色土層中には新崎式、貝層上の粘土を踏み固めた特殊部分に少量の上山田式が出土したという。新崎式の内容は5類に分類する。縄文のみを施文するものは、入字形口縁を呈し、小波状になるものも見られる。羽状縄文が伴なうと思われるが、発見されなかった。

主要文様として、蓮華文、B字状文、連続小三角形沈刻文、綾杉文、弓形文を上げ、連続小三角形沈刻文は、施文の基本は蓮華文の三角形印刻と同じで、五領ヶ台式や信州の踊場式A類に源流を持つとされる。皿型土器が本期において急増するとの指摘がある。地頭方遺跡出土土器に隆帯上の綾杉文や隆帯による弓形文が加わる事となった。昭和30年に発刊された九学会編『能登』「先史文化」(註13)にも、ほぼ似た記述を見る事ができ、小島俊彰氏の指摘(註14)のように「新崎型式の内容は複雑化した。……、この結果、上山田貝塚の資料中にも新崎式がかなり多量にあるという見解が取られねばならなくなった。」と考えられる。それは、上山田式そのものの内容が、昭和25年の五領ヶ台式並行、昭和26年の五領ヶ台・勝坂並行と中期前葉から中葉までゆれ動いている事に端的にあらわれ、新保式、新崎式の内容や編年位置が固まる事によって勝坂期並行になったものとの指摘が小島氏によってなされている。

昭和41年には中島町田岸遺跡(註15)の報告が橋本澄夫氏によって行われた。出土土器を12類に分類し、新崎式の文様である蓮華文・弓形文・綾杉文等と共に、上山田式の特色である隆帯による渦文や隆帯上の連続刻文、器面全体を文様で埋めつくす手法等が出土しているところから、田岸遺跡の盛期を新崎式から上山田式にかけての位置に置いている。田岸遺跡の報告から小島俊彰氏が記述されているように、三角形連続刺突文や蓮華文の施文方法の違い等についてから新崎式の細分化の動きが高まっていった。それらを受けて、昭和45年高堀勝喜氏は『七尾市史』第4巻、赤浦遺跡(註16)の記述のなかで、蓮華文と入字状突起を持つ第1群土器a類を新崎式に、くずれた蓮華文を施文したもの、小三角形列点文（連続刺突沈文）を連ねるものや綾杉状隆起線を組合せるb類を上山田古式として細分した。新崎式土器を新旧に分けたのであるが、形式名の立て方から上山田式を細分したように受け取れ、さらに新崎式そのものが判然としなくなってしまったと考えられる。昭和28年の古府遺跡(註17)の報告に見られる三角形の陰刻手法をもとに上山田A・B式に分ける意図とは異なるものである。それは大方の承認を受けたのであるが、昭和47年の『富山県史』「縄文中期」(註18)、昭和49年の「北陸の縄文時代中期の編年」(註19)を記述された小島俊彰氏によれば、新崎式は一体どんなものを指すのかとの疑問が提示される事になったのである。小島氏の後者の文中で、資料が少なく図示できないと断わりながら新崎式の特色として、文様は口辺部と胴部に分けられ、口辺部文様が横走し、所々で縦の隆帯で区切り、横位無文帯や花弁の短かい小三角形の彫去を入れる蓮華文が入る。胴部は1単位ごとに区切りが入れられる堅い様相を持つ半隆起線で飾られ、沈線の格子目文が入る場合があると想定しておられ、押水町上田地頭方遺跡土器に近いものと筆者には思われるが、本遺跡出土にもあてはまるものとも言える。

土器実測図と共に展開図が図示されるようになり、複雑な中期土器の理解に画期をもたらした。展開図によって文様の割付パターンや隆帯の流れ、文様単位の把握が容易となり、とかく印象的な記述の目立った上山田式、古府式土器の内容がよほどはっきりしてきたものと言えよう。

昭和48年に発刊された「下山新遺跡第1次調査報告書」(註20)で、小島俊彰氏は展開図の文様単位を読み込んで上山田古式の説明をされている。天神山式は2単位性のものが多く、隆帯を斜行させ端部に渦文を持たせれば上山田古式からの流れとしてスムーズであるとされ、上山田古式を新道式に、天神山式を勝坂式に併行するのもうなずけると記している。

昭和51年に南久和氏は「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」(註21)を執筆している。昭和47・48年に行われた金沢市古府遺跡の遺物整理をとおして得られた成果をまとめられたものと考えられる。試論の基は同一器面内における異種文様を検討する事によって、編年を組み上げようとするもので、発掘資料の増加にともなって進められている編年細分化の流れに一定の基準を設定しようとするものであった。南久和氏が自ら指摘しているように、文様のみによって時期差を判断するところから、器形・器種の変化やセット関係が把握しきれないという欠点を持つが、文様の細密な観察をとおして、これまでの型式内容の説明のなかで言われてきた「A文様は何々式まで残る。」といった漠然としたものではなく、施文される場所や施文方法の変化までをもつかみきったものとして評価される。また、個別遺跡の報告のされ方を通して、遺跡個別の時間と標式時間の差をつける考え方もうなずかれるものがある。

「金沢市古府遺跡―第4・5次調査報告―」[註22]のなかで南久和氏は、新崎式をⅠ・Ⅱ式に、上山田式をⅠ～Ⅲ式に細分している。弓形文と組合せとなる連続刺突沈文をして、新崎式と上山田式を分ける手法としてとらえ上山田Ⅰ式とした。

昭和52年には同じく南久和氏は「北陸の縄文中期に見られる連続刺突沈文について」[註23]の報分を発表し、新崎式と上山田式に使用される施文具の比較をとおして、両遺跡の相違点を指摘している。新崎式は、「縦横方向の割付文と被割付文の盛行期」ととらえ、上山田貝塚の土器は、「自由な位置に置かれた区画文と区画内充填文である。」と文様パターンの在り方での違いを記述し、連続刺突沈文を付随してきた区画文手法が、新崎式の縦横割付パターンを変化させる大きな要素ととらえる。そして、連続刺突沈文をして「原上山田式」「古上山田式」「杉谷H式」のいずれかの名称で呼び、型式として独立させた方が良いとの提唱を行っているが、南氏が自ら指し示すように、土器の分布圏や併行関係にある土器群の把握をもってなすべきであろう。

七尾市赤浦遺跡、宇ノ気町上山田貝塚の正報告が、昭和55年頃に発刊された。赤浦遺跡[註24]で高堀勝喜氏は四柳嘉章氏提示の赤浦第Ⅰ期（上山田古式併行）の土器群をもって、能登地域における新道式系を含まない一形式ととらえた。四柳氏提示の資料から長弁蓮華文、横位無文帯連続刻目文をのぞき、入字状突起、半円形突起を付け、綾杉文、格子目文、横位縄文帯、三叉文をつけるもので、基隆帯が斜行する傾向を持ち、文様割付が4・2単位性となるものを、上山田Ⅰ式とした。上山田古式は名称のあり方や地域性を考え、さらに内容が不備であった点から編年案から徹回したわけである。そのうえで、上山田Ⅰ式で新崎期の入字状突起が動物意匠文に置き変えられ、また、区画隆線文とボタン状円形浮文が付け加えられたとし、地域性をからめて説明している事もあって、上山田Ⅰ式がきわめて豊富な文様要素を持つ事となった。赤浦遺跡の整理と併行して行なわれていた上山田貝塚[註25]の土器整理を担当された小島俊彰氏は、その報告のなかで新崎式を様式としてとらえⅠ～Ⅲ式に細分した編年案を提示した。Ⅰ式（新崎古式）を出土する遺跡として金沢市中平遺跡、新崎遺跡、古屋谷遺跡を上げ、Ⅱ式（新崎新式）では掘松貝塚を、Ⅲ式（上山田古式）では赤浦遺跡を上げておられる。上山田Ⅲ様式に加わる新しい文様として、上山田貝塚出土と限定しながら、「縦無文帯の縁を刻む手法、区画内横線切り、三角形の彫去、連続押引刺突文、隆帯上綾杉刻み」の五種類を呈示し、器形とからませて簡潔な説明を加えている。これは小島氏が指摘するように上山田古式の文様要素と類似するものであるが、赤浦遺跡で高堀勝喜氏は楔形刻目文様をもって新崎Ⅱ式として分離させており、上山田古式をほぼ受け継ぐかたちで名称を変えて上山田Ⅰ式を提唱している。北陸の代表的2遺跡の報告によって、中期編年の大綱はほぼ固まってきたと考えるが、中間型式の設定をめぐっての問題が如実に浮かび上がってきたとも言える。新崎様式から上山田様式、上山田様式から串田新様式にかけての型式を、新旧どちらの様式の始期あるいは終末期とするかについての共通理解が生まれるには、さらに多くの時間が必要であろう。上山田古式が提唱されてから、その内容の把握に至るまでには、昭和45年から54年までの9年が経過し、周辺地域では現在もなお型式名として使用されている事を見るならば、型式の提唱は慎重に行うべきであり、学史的な混乱が生じない方策を考えるべきものと思う。その方法としては、小島氏が北陸で適用した様式の把握から細別を行なう方法であり、南久和氏が行っている型式名称に付されるⅠ式、Ⅱ式とする方法であろうか。

富山県厳照寺遺跡[註26]の調査概報が発行されたのは、赤浦遺跡、上山田貝塚の報告と前後する昭和54年である。神保孝造氏は出土土器を「土器製作第2段階・第3段階の区分基準」[註27]で分類し、Ⅲ期に細別している。第Ⅰ期は中平遺跡、富山県西山B遺跡に並行するもので、Ⅱ・Ⅲ期は新崎式、上山田古式に相当するものとして記述している。土器製作時における施文方法の違いを厳密にとらえ、土器出土状況の検討を加えたもので、これまでの型式把握と異なり器形、器種、セット関係を一体のものとするもので、その正式報告の待たれるものである。

昭和57年に福井県西中遺跡[註28]の調査略報が発行され、松井政信氏は新保式併行のものを、キャリパー状口縁の文様帯が二段構成になるものをぬき出し、新保式の新しい時期のものとしてとらえているのが注目される。

さて、中平式土器は新崎式に先行する型式として、大方の承認を得たようである。中平遺跡[註29]の報告は昭和51年で、沼田啓太郎氏が「石川考古学研究会々誌　第19号」に発表されたものである。前期末から中期初頭にかかる

時期を想定し、撚糸文、格子目文やB字状文、蓮華文の祖形と思われるものを特色として上げておられる。そして、中平遺跡の土器を新保式と新崎式の間をつなぐものとして最初に注目したのは南久和氏で、同会誌の「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」[註30]のなかで位置づけ、横位無文帯、六角鋸歯文、彫刻蓮華文、格子蓮華文、（正位格子目文）をその特徴として上げている。

b　文様の受容と降下現象について

縄文土器の編年型式を判断する際には、層位が明確である場合を除いて、型式学的手法によっているが、V・G・チャイルド[註31]は型式学的編年の使用にあたって幾つかの注意点を上げている。その第一番目に、「連続の方向は実のところ検査では殆んど決定できないものだ。」とし、「いわゆる進化的もしくは退化的連続の方向は、……層位学のような一定の独自性を持つ基準に照合することが、実際には必要なのである。」と記している。縄文時代における型式学的編年は、標準型式の概念が個々人によって異なると言ってよいほど、その理解は繁雑になってきている。その問題点は連続の方向を検証しえない事と変化速度の差異となって現象しているものと考えられる。本節で記述するのは、型式学的編年のなかで連続の方向性を文様の器面における受容形態、降下現象として把握できるのではないかという視点である。

山内清男氏は「ある型式の文様帯は前代土器型式の文様帯と連続、継承関係を持っており、次代型式の文様帯の基礎となる。」[註32]ととらえられ、口縁の突起および把手を含めて精緻に後づけておられる。縄文土器は「1個の土器に他と区別される特殊性とともにいくつかの個体間に共通する普遍性が同居するという矛盾」[註33]をはらんでいるからこそ、縄文土器理解の手掛りがあると小林達雄氏は指摘し、範型と模倣型の関係を縄文社会における伝統、慣習、信念の反映としてとらえられ、型式が一集団の是とする表現形式＝集団表象としてとらえられると記述している。さきにかえって、個有性と普遍性が同居する矛盾をとらえて、南久和氏は文様を詳細に分類し「同一器面内同居異種文様」[註34]の検討をおこなっている。北陸の中期前葉の土器を資料として、文様が各型式においてどの位置に施文され、展開し消滅していったかを具体的にあとずけており、現在的な編年観との齟齬も少なく、かなりの有効性を持つものと考えられる。同一器面内同居異種文様の検討をとおして、南久和氏がその限界性として上げておられるように型式内におけるセット関係がつかまえにくい点や異系統文様を位置づけるのが困難であるなどを上げておられるが、器形、器種をもからみ合せる方向を検討するならば、より有効な方法として発展するのではないかと思われる。

南久和氏は「文化の伝播継承について」[註35]のなかで、さきの文様の在り方について、「新旧技法形態等の代謝現象」「時空的遠離点における技法形態等の退化現象」「異技法形態の共存現象」として発展させた考え方を示しているが、一面で言えば小林達雄氏の説く「緊張の解消、手抜きの論理」[註36]と相通ずるものであり、連続の方向性は遺跡によって検証されなければならない。

さて、文様の受容と降下現象とは土器に施文される文様が、最初は口縁部に施文され時期が下がるにしたがい口縁部から胴部へ移行するというきわめて単純な現象である。可児通宏氏の説く「マイナーチェンジ」[註37]にあたるもので、様式の交代といった大きな変遷ではないが、各遺跡において新しい文様の受け取り方とその変化形態の微妙な差異を考えてゆく上でひとつの視点となるであろう。

北陸の縄文中期は「地域的色彩の強い土器の消長が著しい。比較的後代まで古い文様を残す場合が多い」[註38]と土肥孝氏の指摘があるが、本遺跡出土土器で得られた概観で「伝統」の系譜を具体的に記すと、朝日下層式で見られるソーメン貼りによる格子目文が、新保式期では「手抜きの論理」で半截竹管、ヘラによる斜位格子目状文へと変化する。そして、中平式期、新崎式期では胴部へ降下し全面に施文されるようになり、上山田式期では南久和氏が呼んだように胴部文様間の残部処理文として施文され消滅する。蓮華状文は新保式期で口縁端部の狭長な軌軸文（細線文）として受け入れ、小三角形印刻文と組み合さって逆位蓮華状文に変化し、新崎式期では多様な展開をおこない、口縁部全面に施文されることになる。上山田式期では胴部へ降下し、残部処理的な位置に施文

され消滅する。玉抱き三叉状文は新保式・中平式期に口唇、突起、口縁部分に表現され、上山田式期には胴部に降下し大きく施文されるが、やがて残部処理的な位置に移行する。記述した3つの文様は長く用いられたもので、萌芽期、盛期、衰退期として生物学的な変様を見せるが、新保式期で取り入れられた横位無文帯手法は連続刻目文と組み合さって新崎式期に盛行するが、胴部への降下現象としては縦位無文帯として受けつがれるだけのようであり、それも少数例と見られるところから、胴部文様としては受け入れられなかったのであろう。北陸においては多用されなかった文様として「山形文」が上げられる。口縁文様帯を2段構成にして縦位半隆起線と組んで施文しているものが少数例見られるが、以後の降下現象がとらえられないところから、新しい文様としては受け入れたが、その展開は好まれなかったようである。(註39) 口唇部突起および口辺部突起も、同じように降下現象をなすようで、口唇部突起と口縁部突起が隆帯で結びあっていたものが分離し、無文帯の口辺部降下にともなって下がり、胴部の上端に位置するように変化してゆく。無文帯に多用される連続刻目文も、胴部文様として降下していくようだ。

文様の降下現象を具体的にあとづけてみたが、マイナーチェンジの方向性が裏付けられたと考えている。新しい文様は(当然器形と不可分であるが)、土器の最も眼につく口縁部分に取り入れられ新型を誇示し、一集団の表現型式として受け入れられると変様、多様化を見せる。それ以前の段階で否定されるものもある。そして、時間の経過につれて伝統・慣習として描出されはするが、やがて、忘れ去られてしまうという変遷である。マイナーチェンジの積み重ねがモデルチェンジを惹起する事もありうるのであるが、文様の降下現象は各遺跡、各地域における自立性をつかむうえでも有効ではないかと思われる。

なお、文様の受容と降下現象の記述は、地域と時期を限定したかたちでしかとらえきれていないが、各地域、各時代における検証は今後の課題としておきたい。

c　徳前C遺跡出土土器の考察

本遺跡の第4次調査で得られた土器片は、整理箱で30ケースにのぼる。底部片の概数が682個であり、底部を除いた口縁・胴部片で図示したのが528個であるところから、その差は150個強とはなるが、主たる破片はほとんど網羅したものと理解している。図示しなかった類のなかには小型土器につけられたと考えられる小突起が30数例近くあるのをお断りしておく。また、縄文を施文した胴部片が6,000点をこえ、格子目状文、B字状文を施文した胴部片が700片以上と多数となるが、図示は少数にとどめている。また、出土した全点に近いかたちで図示したのは、第1・2群土器として分類したものが上げられる。文様分類は既述した受容形態を考え、口縁部上位にあるものの系列を尊重する方法をとっている。以下、各群ごとの位置づけを検討してゆく。

第1群土器は前期末葉に属するものと考えた。3・4は三角形印刻文と口唇に粘土紐の貼付が見られ福浦上層式としてとらえられるが、浮隆爪形文がなく細半隆起線文で渦巻文をつくり、渦巻文の一部にえぐり取りを施している点に、金沢市中戸(註40)遺跡、富来町福浦ヘラソ(註41)遺跡出土土器と異なり、志賀町小浦(註42)遺跡、富山県吉峰(註43)遺跡、富山県朝日町馬場山D(註44)遺跡等の資料との類似を見る。中部山地、北陸に広く分布する鍋屋町II(註45)式の範疇に属するが、小島俊彰氏は富山県滑川市安田古宮(註46)遺跡で縄文地浮隆爪形文型式をともなうかたちであらわれるものと予察を行っている。本遺跡においては伴出する粗製土器はつかみ得なかったが、施文方法の違いは遺跡ごとにつかみ得るようである事から細分案は妥当な見解と思われる。1・2・6は細身の半截竹管を施文具とし、口縁先端の器肉が薄くなり、ゆるく外展するキャリパー器形をとるところから、朝日下層(註47)式に含めて考えている。粘土紐の貼付がまったく認められない点に留意する必要を感じる。5は器形の想定が困難なものである。小三角形の刺突や渦巻文の条に凹線が認められるところから、その位置づけは留保しておきたい。7は小波状を呈するもので、口縁内面に細半隆起線文、口縁に縦位の隆帯をつけ絡条体圧痕文を施文するもので、東北地方の円筒下層式の要素と北陸の文様が組合った注目すべき土器である。地域的波及と変様を考慮せずに短絡的な物言いとしては、円筒下層d(註48)式と朝日下層式との結びついたものと考えている。昭和57年度に調査された能都町真脇跡が、円筒式土器

と北陸の土器形式の関係を明快に示してくれるものと期待される。

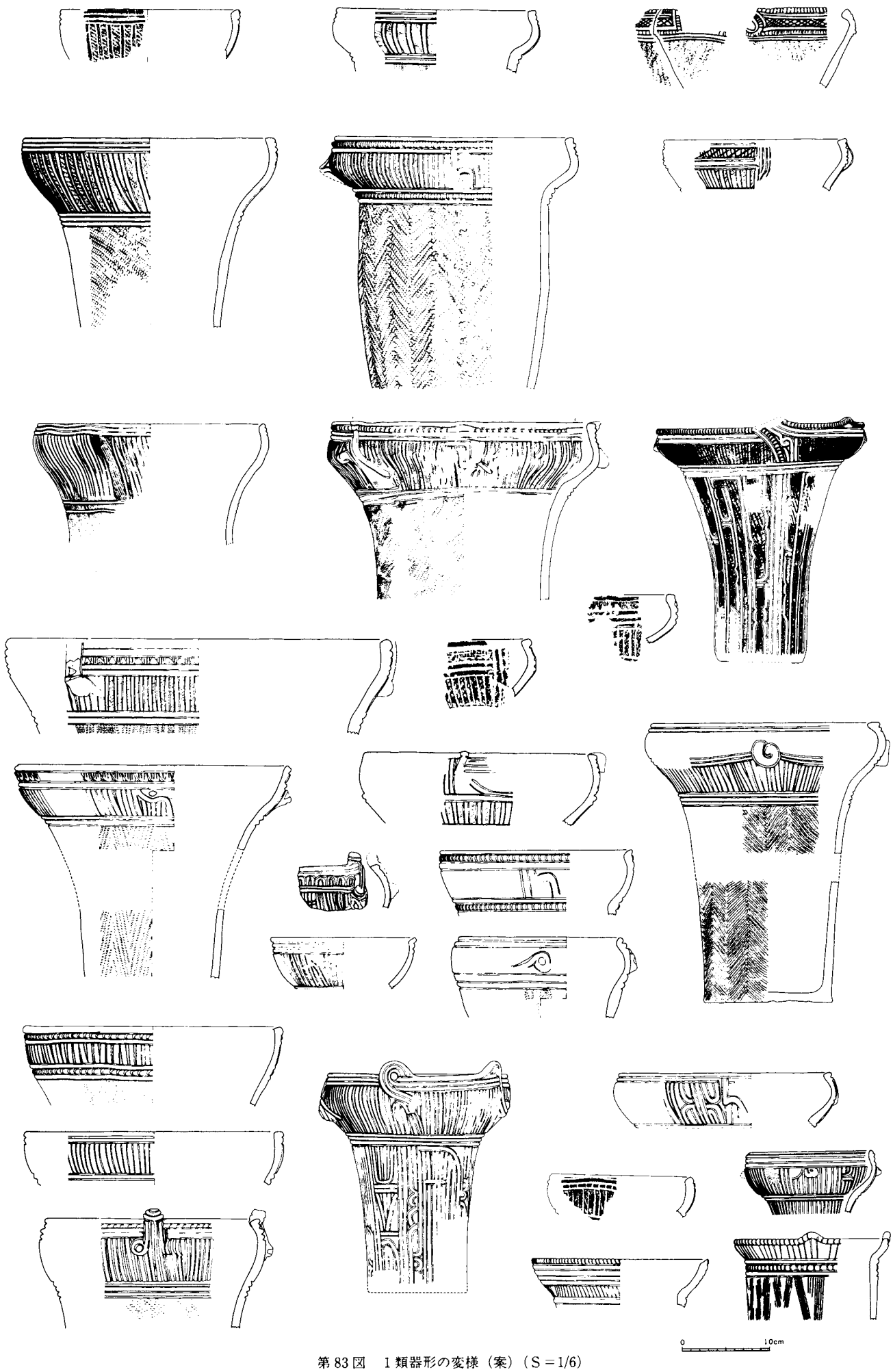
第2群土器は15の粘土紐貼付のものをのぞいて（朝日下層式？）、新保式土器にスムーズに比定できるものであろう。10・11は口縁文様帯が二段構成となるもので、福井県勝山市古宮遺跡IV群A類[註49]、福井県美山町西中遺跡2群e類[註50]に見られ、松井政信氏が指摘するように新保式の新しい文様構成として考える事は可能であろう。バケツ状器形である3類のなかにも、格子目状文帯を横位に区切る手法が認められる。新保遺跡の第Ⅰ3型式に比定されよう。

第2群土器を出土する遺跡は、新保遺跡、朝日貝塚をはじめとして数多くが知られている。金沢市笠舞遺跡[註51]、富来町酒見サンノハザマ遺跡[註52]、鳥越村杉森B遺跡[註53]、岐阜県久々野町堂之上遺跡[註54]、新潟県津南町上野遺跡[註55]、安田町中道遺跡[註56]、栄村吉野屋遺跡[註57]、山形県羽黒町郷の浜J遺跡[註58]等が上げられる。朝日下層式土器の系譜として理解されるが、東日本の五領ヶ台式や踊場式、梨久保式土器との類縁性も強く感じさせるものである。郷の浜J遺跡は口唇に絡条体圧痕文を施す円筒上層a式土器の影響を強く受けた類と共に、斜格子状文土器3類器形が組み合う点が注目される。そして、山形県庄内地方は大木文化圏に含まれ、大木7a式の土着の土器をともなうという指摘は、北陸における中期初頭の編年を考える上で見のがせない遺跡と思われる。

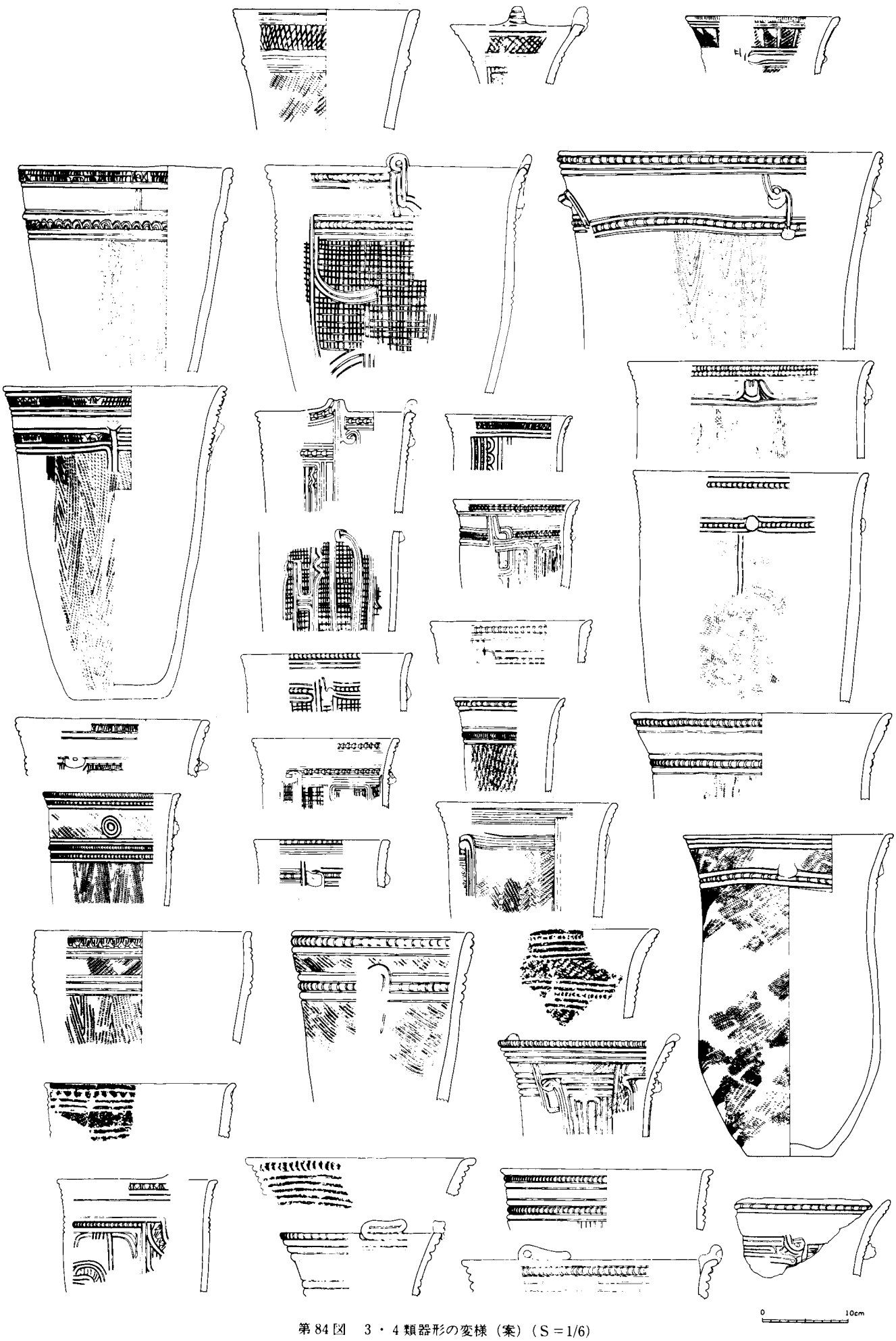
第3群土器はキャリパー状器形を呈するもので大部分が占められ、他の器形は少数となる。3類すなわち円筒状器形をとるものは極端に少なく、第3次調査出土の第22群1類の小型土器がその少数例である。当群の系統は新保遺跡の第II1型式の流れとして理解されるが、3類器形の在り方から、第2群土器3類が異種文様で口縁部文様を二段構成としない理由が、別の視点から逆照射されるものと思われる。すなわち、円筒状器形の際には、格子目状文と縦位平行線文とは組み合わないという約束事であるが、新保遺跡、本遺跡で認められると言えるものの、他の遺跡では不明確であり、器形ごとの文様構成に注意を払ってゆくひとつの手掛りとして提起しておきたい。

第3群土器は9種に細別を行っている。縦位平行半隆起線の間隔がひらいている1類Aが、新保遺跡第II1型式に相等するものと見られる。また、1類Bの一部が含められるかもしれない。新保遺跡第II1型式は新保遺跡出土土器の過半を占める型式であるが、本遺跡では平行半隆起線の間隔が狭くなる点や縄文を施文しない種類（1類C）が加えられる点が注意される。口唇部の突起は半円形状のものは穿孔され（65）、三角形状の突起（64）が新保遺跡の在り方に近いと言え、また、口唇から垂下する隆帯が口辺部文様帯のなかばで止まるか、ないしは文様帯を縦位に区画している点（30・39・40）についても、新保式土器の特色を備えているととらえられる。そして、縄文施文についても高堀勝喜氏が指摘された「頸部から上に絡縄文を印した場合、胴部も亦絡縄文をとるのを原則とするが、縄文の場合は縄文を押圧するとは限らない。」[註59]が生きていると言え、第4・7群土器にもそれを見る事ができる。突起および文様単位としては、完形土器の少数例から27・39の4単位、43の突起が3、65の胴部文様が3単位となっているのが知られるが、むしろ単位性を越えた口唇部突起の在り方に注意が引かれる。また、口縁に沿って引かれる半隆起線が隆帯あるいは突起が介在する事によって1条分段差が生じている例が、39・65で見られ、第3群土器以外でも253・504が上げられ、土器の正面性を意図したものではないかと想定している。1類Gと8類は1点づつの出土であり、施文手法が第3群土器のなかで若干異なる。1類G（80）は小三角形印刻の頂点をヘラ先で引きおろす沈線を持つもので、第4群に含むべきかもしれない。東京都八王寺市椚田第IV遺跡[註60]、長野県貉沢遺跡[註61]6号での類似例を想定しうるにすぎず、中間地域での在り方は筆者の力では及ばなかったが。8類も同様に北陸地域外での所産ではないかと思われる。

第4群土器は軌軸文と仮称したものと逆位蓮華状文を施文するのを特徴として上げた。軌軸文は関東の五領ヶ台式土器（細線文）との関連が見てとれるもので、新保遺跡第IV2・IV3型式、富山県厳照寺Ⅰ式土器、福井県古宮遺跡IV群H類、金沢市中平遺跡、押水町坂手山遺跡第4・6類に類似例が見られる。軌軸文に他の文様を組合せたヴァラエティが認められる。系統の時期差としては軌軸文から三角形印刻文の加飾によって変貌し、中平遺跡の六角形鋸歯状文を一方に生じ、逆位蓮華状文に定着し、新崎式期の蓮華状文として開花するという図式である。坂手山遺跡の資料で、嵯峨井亮氏らが「蓮華状文の祖形であろう。」との指摘を行っているのは評価される。



第83図　1類器形の変様（案）（S＝1/6）



第84図　3・4類器形の変様（案）（S＝1/6）

日本海沿岸ではこの種の文様は広い範囲にわたって分布を見せ、滋賀県琵琶湖粟津遺跡[註62]では軌軸文と三角形印刻文が見られ、新潟県西蒲原郡巻町大沢遺跡[註63]、同安田町中道遺跡、同県南蒲原郡栄村吉野屋遺跡、東頸城都浦川原村顕聖寺遺跡[註64]、柏崎市剣野B遺跡[註65]、同剣野E遺跡[註66]では逆位蓮華状文が知られ、横位無文帯手法を持つものと組みあうようだ。吉野屋遺跡では蓮華状文の種類が10数種類に細別できるとされ、その系統を沈線文系と半隆起線文に分け変遷を想定されている。第4群土器に加飾されない施文手法として半隆起線上の爪形文を上げる事ができよう。第4群土器のなかでは123・136・145・147の4点だけであり注目すべき点であろう。吉野屋遺跡出土例のなかでも古手の蓮華文は爪形文を持たないようだ。第4群土器1類A、第5群土器1類Aは第3群土器1類Aの縦位平行半隆起線文土器の系譜としてたどる事ができ、松井政信氏の口辺部文様が二段構成になるものが新保式のなかでも新しいという指摘や新しい文様の受容現象の視点とも考えあわせると、1類すなわちキャリパー状口縁の時期的な流れを明確にとらえる事ができよう。

第4群土器の軌軸文に横位無文帯が付加される類のなかでも、キャリパー状口縁を持つものが様々な口縁タイプをとっているのが注意される。第6群土器とした横位無文帯を主文様とする1類器形の整然とした在り方と大きくへだたったものと言え、また、新保式～新崎式期にかけての器形の微細な変化はとらえきれていない面は否定できないにせよ、1類B、6・7類の流動的とも言える器形は注目するべきものと考えられる。口辺部の突起および隆帯は資料的に限定されているが、頸部以下には降下していない事が指摘され、口唇の突起にも窓があいているのが注意される。106・107で見られる口辺の無文部は、隆帯の横走りによる残部処理的文様として受け取れるが、祖形的な位置づけも可能と考えられよう。

3類器形のなかでは、147の無文帯が胴部へ降下している例が、後出的な要素を持つのであろう。軌軸文や蓮華状文が横位無文帯の上下に配置される文様パターンは、新崎式に引きつがれるものと見なされる。器形では従来のバケツ状器形に154のように胴部中央がふくらみを持ちはじめているのが注意される。胴部の縄文は資料的には少ないが撚糸文が目立つ点は従来と変らない。

第5群土器は連続弧線文を持つもので、半截竹管を使用した蓮華状文とも言えるものも含まれている。1類と3類だけでなり、その施文の手法は歴然と異なっている。1類器形は第3・4群土器との関連が濃厚と見なされるものであるが、新保遺跡第IV3型式に近似するもの1点を見るだけで、中平遺跡では見られないと言えそうだ。しかし、本遺跡第3次調査[註67]ではU字状に半隆起線を引き連ねるタイプが5例見られ、文様としては客体的なものではない事を想像させる。新崎式に盛行する有抉蓮華文や刻印蓮華文とは異なり半隆起線で成る蓮華文の祖形としての位置づけが可能なのではと考えている。県外では、富山県上市町野島大門遺跡、福井県勝山市古宮遺跡[註68]IV群E類、新潟県柏崎市十三仏塚遺跡[註69]、長野県飯山市深沢遺跡に少数例認められる。長野県の梨久保遺跡[註70]や九兵衛尾根5号住居址出土土器[註71]につながる可能性を考えている。170の口唇突起が口縁に対して交叉し渦巻状に粘土をつぎたし穿孔を入れるものは、梨久保遺跡第7類土器とのつながりが感じられ、口辺部突起としては「U」の字のまるまった形状のもの（182・234）が存する事も傍証として上げうるが、さらに詳細な検討が必要と考えられる。どのような契機で「U」の字状の形から逆「U」の字状に変化するのであろうか（逆位蓮華状文についても同様であるが）、それとも、同時期に存していたのであろうかを考えてゆかねばならない。

第6群土器は横位無文帯を主文様とするものであるが、1類器形は少なく3類器形での大型化が目立つ。1類器形には縦位平行半隆起線を下段に施文する二段構成の文様帯を形成するものが見られ、第3群土器1類Aのつながりが生きていると言える。口辺部の突起は横位無文帯の中央部かやや下がった位置に貼付しているのが、3類土器と微妙な違いを見てとる事ができる。3類器形のものは北陸に広く見られるもので、押水町坂手山遺跡、金沢市中平遺跡、穴水町新崎遺跡[註72]、富山県八尾町前山I遺跡[註73]、同県婦中町厳照寺遺跡、新潟県柏崎市剣野B遺跡[註74]が上げられる。新保遺跡では見られない点を留意したい。半隆起線文は3本単位で中央に爪形文を付すのが基本形で、無文帯を上下にはさんで施文する。無文帯を縦位に区切るかたちで突起やそれに続く半隆起線文が引かれるが、1類土器のように口唇部にまで突出する類は極端に少なくなり、むしろ、無文帯部から降下し胴部上端にかろうじてとどまっていると言えそうだ。文様の降下現象の一形態としてとらえる事も可能と考えている。

横位無文帯手法については、観察が不十分な面から成立形態を誤解してとらえている点を指摘しておきたい。それは、文様を施文しない消極的な無文帯としての位置づけであり、無文部をのこすという認識に代表されるのであるが、本遺跡出土土器で見ると横方向のナデ調整が施されているのが通有であり、ある例では器壁が減じているものさえ認められる。39には胴部B字状文の区画をなす縦位半隆起線間をナデ調整で無文帯としているものも見られる。つまり、成形後において、1次的施文としての縄文、撚糸文がころがされた後に、後次的調整としてナデが施され、無文帯を作出するという積極的な施文として把握するべきものと考えている。無文帯成立期における手法としては上記のとおりであるが、時期的に下る場合は「手ぬき」の論理で、当初のような無文帯をのこすという形へと変化してゆくかもしれないが、他遺跡においての観察が十分ではないので予想にとどめておく。無文帯の系譜をたどるのは周辺地域の資料が少ない点からやや冒険的ではあるが、長野県梨久保遺跡第7類土器、同県飯山市深沢遺跡や神奈川県横浜市宮の前貝塚(註75)出土の第6・8群土器を考えているが、縄文時代前期～中期にかけての集合沈線文やソーメン貼、格子目状文、半隆起線文の多用を見ると、文様であふれるような土器型式のなかに無文帯の出現はひとつの新鮮な感覚ではなかったかと思われる。そして、新崎式期のそれは施文すべき器面が残っているとしてとらえられたのであろう。

口縁の外反度が強くなる4類器形のものは少数例である。第3次調査時においては第16･20群土器としての報告があるもので、半截竹管の幅が広くなり、半隆起線の条数が増加する傾向を見せ、口唇部分に不規則な隆帯突起をのせるのを特色として上げられる。新崎式期に盛行する蛇体状突起の前段階として理解できよう。4類器形は金沢市中平遺跡においてはかなりの比重を持つ類と見られ、新崎式への移行も容易にとらえきれるものと考えられている。県下では中平遺跡の他に能登島町通り鼻遺跡(註76)で出土例を見る事ができるが、現在的には出土例の乏しいもの言わざるを得ない。口唇部突起の形状を見ると中平遺跡には半円形状突起で穿孔をしないものや、なだらかな小三角形波状を持つものが認められ、第3次調査出土のなかに前者の例が見られる。横位無文帯も本遺跡の3類A器形に比較して半隆起線が多条になるためか狭くなっているように感じられる。4類器形のものは中平遺跡と徳前C遺跡の微妙な時期差を考えていく上で、共通の器種であるところから重要な位置を占めるものと理解される。

3類Cは胴部に格子目状文を持つもので、全点が半隆起線のB字状文と組みあうかたちとなっている。第2群土器では口縁帯に斜格子目状文のかたちで施文されているが、胴部へ降下し正位格子目状文として全面的に展開するのが3類Cの土器群である。図示しえたもののなかで、施文単位を読み取れる例は得られなかったが、無文帯下位にある貼付突起を基点として垂下する半隆起線が基本線として考える事ができる。図示した多くの例は、半截竹管やヘラを使って引く正位格子目状文を施文した後に、突起を貼付し半隆起線文を引くものであった。沈線は縦方向を先行させるのを基本としている。半隆起線を引いた後に、格子目状文を施文するタイプは、264、266、267が上げられ後出的な手法として理解される。なお、後節で記述するが、B字状文と胴部格子目状文の破片点数は590片、188片という数字が得られ、B字状文の3分の1以下となっている。資料的には限定されているのであるが、胴部全面に正位格子目状文を施文するものは、3類器形に限定されていると理解して良いようで、第2群土器3類につながる器型と文様の原則が働いていると考えられる。胴部の格子目状文は新崎式、上山田式にも引き継がれてゆく文様であるが、一次施文として全面に展開する本遺跡の在り方は注目され、編年を考えてゆく上でひとつの視点となりうると考えられる。胴部に施文される正位格子目状文を出土する遺跡は、伝統的な文様である事から時期幅を広くとらえると多数の遺跡が上げられる。穴水町新崎遺跡、七尾市赤浦遺跡、宇ノ気町上山田貝塚、金沢市古府遺跡、同市古屋谷遺跡(註77)、富山県八尾町前山遺跡、婦中町巌照寺遺跡、新潟県佐渡郡金井町堂の貝塚(註78)、柏崎市宮平遺跡(註79)、十三仏塚遺跡、南蒲原郡栄村吉野屋遺跡、西蒲原郡巻町大沢遺跡、岐阜県益田郡萩原町沖田遺跡(註80)、福井県勝山市古宮遺跡等が上げられ、さらに検索すればこれに倍する以上の遺跡が上げられるであろう。福井県から新潟県までをつつみ込む広い範囲にわたり分布している事がわかり、第2・4群土器との分布と重なり合う部分が多いと言えよう。

9類器形の土器は現在的には、富山県婦中町巌照寺遺跡で口縁部を欠いたかたちで出土している例を除いては

知られていない器形である。口唇部分に蓮華状文が施文され、頸部文様帯で上下に分離させ、縦位の半隆起線文で小区画を形成するのを特色としている。

10・11類器形はきわめて少数である。波状口縁で横位無文帯を二段にわたって施文する279がその代表例であるが、胎土、色調、焼成が他に比較して大きく異なっている。同類には初歩的ミスからキャリパー器形のものも含めてしまっている。渦巻文を持つと考えられる類には、軌軸文、連続刻目文を半隆起線の間に充填するものが見られ、後出的な土器と考えられる。

第7群土器は縄文地文を残すもので、1類器形はわずかで3類器形が大半を占めている。1類Bは厳密に言えばキャリパー状口縁とは言えないものであるが、新保遺跡第II 6型式の範疇に含める事ができるだろう。3類器形のものは、第6群土器3類との関わりが深いものであり、308を除いて無文帯に仕上げるナデ調整を施さないものと考えられる。309では口辺部と胴部の縄文原体が異なっているのは第3群土器に見られる手法である。

5類器形では319の復原土器の胴部が下ふくらみを呈しているのが注目される。321の縦位半隆起線がある単位を持って施文されていて、302、323と共に新潟県安田町中道遺跡第14類に類似例を見るものである。314は類例を探索できなかったもので、搬入品ではないかと考えている。

第8群土器は新保遺跡第III型式に系譜をたどるものと理解されるが、第3・6群土器胴部とのかかわりが強いと考えられるものの、円筒状器形では第6群3類で見られるように、横位無文帯が上位置に置かれるようだ。胴部の施文で目を引くのは、横断する半隆起線で上下に分割する手法で(F)、時期的に限定されるのではないかと、小島俊彰氏より教示を受けた。本遺跡では格子目状文を持たないB字状文胴部片は590片で、うち分割手法を考えられるものは9点であり約2%の値であった。第3次調査時では7点が図示されており、個体としての比率は高くなるものと考えている。375は鉢器形と考えられるもので、新保遺跡第II 7型式の器型を引き継ぐものであろう。山形県遊佐町吹浦遺跡(註81)、青森県森田村石神遺跡(註82)の資料中に散見される器形を始源としているのではないかと考えている。

第9群土器のうちEは朝日下層式に、Fは口唇に撚糸を押圧する点から円筒上層a式とのかかわりを想定されるものである。また、Gのくの字口縁のタイプも東北日本との関係を想定している。

第10群土器は縄文を施文するだけの粗製土器群である。1類と3類器形で成っており、口縁部の立ち上がりや口唇部分の調整技法での細分類も可能と見られる。1類Aは口縁径が30 cmを越えるもの、1類Bは口縁径20～30 cm、1類Cは口縁径10～20 cm、1類Dは口縁径10 cm以下のものとして分類した。口縁片による概数であるが、AとBは96片(40%)、Cは109片(45%)、Dは37片(15%)という結果を得ているが厳密な数値ではないので御承知いただきたい。傾向を知る手掛りとして3類器形のものも行ってみた。撚糸文の大・中型品7片、結束縄文の大型品13片、斜縄文の中・小型品24片、折り返し口縁の中型品4片、小型品7片である。1類と3類器形の比率は81%と19%と格段の差が生じている。なお、数値を得るにあたって2 cm以上の小片から1片とし、接合復元しえたものをも1片としている。分類してみると撚糸文が以外に少ないのにおどろくが、1類器型には施文される事は極めて少ないと言えそうだ。結束縄文の盛行が目立つ。

胴部片の資料についても数値化を行った。竹管文のもの778片(11%)不明のもの2,140片(31.4%)、結束縄文612片(9%)、斜縄文のもの1,485片(21.8%)、撚糸文のもの1,737片(25.5%)、結節・付加条その他のもの45片(0.7%)で合計6,800片である。不明のものを除くと4,660片となり、竹管文、結束縄文、斜縄文、撚糸文の比率は17%、13%、32%、37%となり、第10群土器の結果とは違う傾向を示している。これは、第3・4群土器の胴部片が加わった結果と見られ、底部片に付いている結果がより信頼性が高いのではないかと考えられよう。再録すると、竹管文35%、縄文32%、撚糸文25%、無文8%となる。無文土器については、桜井仁吉(註83)氏の考察が知られているので、再検討を要しよう。

口縁部分には突起や隆帯が貼付するものが目立つが、単位を見てとれるのは限られている。4単位となるのであろうか。

粗製土器は各遺跡において十分な検討がなされていないと言え、報告書の資料呈示もなおざりにされているき

らいがあり、今後の課題であろう。また、資料の数値化にあたっては、口縁部片、胴部、底部と別個なかたちで数えてみたが、十分な結果を得たとは思われず、同一資料にあたって別の角度から数値化を計ってみたいと考えている。

d、編年的位置について

新保遺跡の資料を11型式に細分された小島俊彰氏は、遺跡の発掘状況、資料の検討をとおして、分離、細分するのは困難であり、新保式の範疇におさめ、1時期としてとらえられた。斜位格子目状文、縦位平行半隆起線文を持つ第Ⅰ～Ⅲ型式（本遺跡第2群、第3群1類A）を純粋なかたちで出土している野島大門遺跡との違いを、様式内における形式系列の有無という地域差で解決をはかられている。そして、東間坂手山遺跡のなかに見られる第Ⅱ1型式が中平式の第Ⅳ3型式に主体文様および器形が変様するというとらえ方であると見られる。これに対して、高堀勝喜(註84)氏は中平遺跡には口縁の内湾する類（1類器形）は決して少なくないとの指摘を行い、胴部の中ふくらみ器形の未発達な形態や、蓮華文の祖形（六角形鋸歯状文？）、広幅無文帯（横位無文帯）の出現や、木目状撚糸文のあり方についての考え方を重視しておられる。徳前C遺跡の第3次調査をまとめられた米沢義光氏は、第2群土器の占める割合が低い点や、軌軸文の流れを新保→徳前C→中平ととらえ六角形鋸歯状文の位置を別個に発達したタイプとしてとらえられる点、第6群土器4類が中平遺跡に比較して少ない点、徳前C遺跡では見られない花弁の長い蓮華状文が中平遺跡で見られる点その他を含めて、徳前C遺跡の時期を「新保式に後続し中平式に先行するある1時期（過渡期）の土器群」と考えられた。

これらの経緯や研究史をあとづけてゆくと、新しい文様手法や器形の変化によって地域の編年が成り立っているのに、新保式はなぜ二分されないのかの疑問があった。新しい手法と認めながらも細分による混乱をさけようとした点や、出土状況と土器の在り方がきわめて単純と考えられたからと推定しているが、新保式を第Ⅰ～Ⅲ型式と第Ⅳ型式を分離したならば、器形の変化や文様の流れをスムーズにとらえられるのではなかろうか。分離する事によって、小島俊彰(註85)氏が位置づけた朝日下層・新保様式の第1段階として朝日下層式（朝日貝塚）、第2段階として新保式（野島大門、新保第Ⅰ～Ⅲ型式）、第3段階として（東間坂手山第4・6類、新保第Ⅳ型式、徳前C）をあてはめる事になる。中平式に見る横位無文帯、六角形鋸歯状文の始まりを新保遺跡第Ⅳ型式、坂手山第4・6類にさかのぼらせ、新保式を2分し新しい方を朝日・新保様式第3段階とする考えかたである。中平遺跡で見られる器形の問題点は、本遺跡第3群土器の変化を介在させる事によって口縁内湾器形（キャリパー状口縁深鉢

大区分	様式	形式名	徳前C遺跡の代表的器種	北陸の主要遺跡	中部	関東	東北
前期		福浦上層式	第1群3・4	吉峰 小浦			
前期	朝日下層・新保様式	(第1形式) 朝日下層式	(第1群)	朝日貝塚	踊場	十三菩提	円筒下層d
中期	朝日下層・新保様式	(第2形式) 新保式	第2群 第3群1A類	野島大門 新保 西中	梨久保式第3群 (藤森1967)	(五領ヶ台)	円筒上層a 大木7a
中期	朝日下層・新保様式	(第3形式) (第3段階)	第3群1B類 第6群3類	東間坂手山 古屋谷 徳前	(梨久保式) 梨久保式第2群 (藤森1967)	(五領ヶ台)	
中期	新崎様式	(第1形式) 中平式	第3群1C類 第6群4類	中平 通り鼻			
中期	新崎様式	(第2形式) 新崎Ⅰ式		新崎 厳照寺 堀松貝塚		(勝坂)	
中期	新崎様式	(第3形式) 新崎Ⅱ式		赤浦 上山田貝塚	新道	(勝坂)	

第4表　編年対応表試案

1類）をとらえる事ができ、口縁の外傾する深鉢も第6群土器3・4類の流れとして考える事ができると思う。中平式を新崎様式の第1段階として位置づけた小島俊彰氏の案は、主要器形のあり方を通して得られたもので、妥当なものと考えられる。以下、簡単に各群のまとめを記述してゆく。

第1群土器は本遺跡の形成を示す資料で、福浦上層式、朝日下層に考えたもので、鍋屋町II式系のものは新しい類としてとらえられるものと考えられる。問題は円筒下層d式と朝日下層式の特徴が結びついた深鉢口縁部片である。縄文を押圧する資料は、東間坂手山遺跡に3点、志賀町上野ヤケダ遺跡(註86)で2点、能都町真脇遺跡(註87)で多数が得られている。朝日下層式、新保式土器の撚糸文に代表させたかたちで東北地方の影響をとらえられているが、円筒状器形のあり方、突起、隆帯の手法等を含めて、日本海沿岸を通じた東北地方（円筒土器様式、大木土器様式）との関係を、一時的な影響を越えているものとしてとらえなおす必要性を強く感じる。

第2群土器では山形県羽黒町郷の浜J遺跡にまで拡大しているのを知るが、円筒上層a式、大木7a式期のものと共伴しているとの報告は、福井県勝山市古宮遺跡が関西系の鷹島様式の土器と混在して新保第I・II型式が知られている事と共に、第2群土器が全国的な編年体系のなかでの併行関係を見てゆく上で重要な知見であろう。

第3群土器の1類Aが新保第II1型式で、平行半隆起線の間隔が狭くなっている1類Bを第3段階と考え、縄文地文が消失している1類Cを中平式に近いものと理解したい。

第4群土器は軌軸文（細線文・キャタピラ文）を持つもので、無文帯手法の出現と共に第3段階での主要文様である。1類A器形での軌軸文の受容形態は口縁部文様帯を二段に分割して施文しているが、縦位平行半隆起線文が第3群土器1類B・Cに近いあり方を示し、さきの細分が妥当なものと考えられる。また、無文帯手法が口縁部の残部処理的な位置にあって生起した事をもとらえる事ができよう。1類器形で横位無文帯と組むものに、様々な口縁形態が見られる事、すなわち器形がゆれている点については過渡的な段階での動態として理解できないかと考えているが、今後の研究課題である。

口唇部におかれる突起には様々の形を見るが、一般的な山形状、半円形状のもので見ると、中平式には穿孔されたものがなく押圧を施すだけで新崎期式に盛行する形であると言え、朝日下層・新保様式のものは穿孔が通有であると見れる。

第5群土器はこれまでまとまった形での出土はなかったと見られるものの、中部高地との交流を別の視点で見る事ができると思われる。半截竹管を逆U字状に引く蓮華状文の祖形としてとらえられる。また、中平遺跡で1点見られる花弁の長い蓮華状文は新崎式期に引き継がれるものであるが、第3群土器1類Fに見える三角形印刻文から引き出す沈線でなる文様からの派生としてとらえられないかと考えている。3・4類器形と1類器形の違いが文様に反映するのではないかとの見通しであるが、ともあれ、蓮華状文は一元的な生起、発展をとげたものではないと言えそうである。

第6群土器の3類と4類器形の分別が、朝日下層・新保様式第3段階と中平式を関係を如実に語るものである。4類器形は新保式にはなく、米沢義光氏の指摘のように新崎式の主要器形に引き継がれてゆくものと考えられる。半隆起線文の多条化、竹管幅の拡大化、口唇部の外への肥厚、蛇体状突起の貼付、無文帯幅の相対的減少等を特徴として上げる事ができる。

無文帯手法の見直しについては先の項で記述したので重複はさけ、3類Cとした格子目状文を胴部に施文する類に形式間の差を考えたい。口辺部から降下した格子目状文は、斜位から正位にかわり、地文的なかたちで胴部全面に施文され半隆起線文を加飾するのが、本遺跡で得られた特色とする事ができる。突起から出発する半隆起線が底部まで垂下し文様単位を区切る手法が、新崎式の特徴として南久和氏が規定している「縦横方向の割付文と被割付文の盛行期(註88)」を生起させてゆくものと考えられる。区画文内に充填される格子目状文がその特徴であり、本遺跡の3類Cはそれより先行する位置にあるものと考えたい。呪縛的といえる新崎期の文様パターンは、区画文を先行させるために生起したものと考えられる。

縄文を施文する第10群土器では、新崎式の指標となる入字状口縁をとるものがないと言え、キャリパー状口縁には結束縄文が目立ち、撚糸文が極端に少なくなる点は注目される。撚糸文を施文するものは、円筒状器形を呈

するものに多く、口縁に加飾されるキャリパー状器形にも使用されるが、底部の立ち上がり角度に極端な差を見てとる事ができる。

第1～6群土器を時期的変化としてとらえられる点を略記したが、器形と文様の結びつき方におぼろげな形態が浮かびあがってきたように思われる。「く」の字状に内屈する口縁形から、キャリパー状口縁の盛行、円筒状器形へと変移を見せ、口縁の外反が強くなる器形を主体とする新崎式までの流れを容易に想像する事ができる。口辺の外傾する器形には、格子目状文が不離の位置にあり、軌軸文を始源とする蓮華状文、横位無文帯をまじえて変化をとげてゆく。キャリパー状口縁深鉢には縦位平行半隆起線文とその派生と見られるB字状文が伝統として受け継がれてゆくようだ。これは本遺跡での器形と文様の大雑把なつながりであり、各遺跡、各地域ごとの検討を重ねてゆく必要は言うまでもない。

浅鉢、粗製土器、石器や遺跡の性格についての検討はほとんど出来なかった点が残念なところであり、また、他地域との対比も十分にとれなかった事も反省される。厳照寺遺跡では遺構と結びついた土器群と土器製作段階での詳細な区分基準に基づいてI～III期に分類し、I式を広義の新崎式の古手、II式を新崎式、III式を上山田古式にそれぞれ併行するものとされている。I式は中平式にあてるようだが、本遺跡の主体的な土器とも交錯するようにも受けとれる。新保式からの新しい類での朝日下層・新保様式第3段階と、新崎式から古い部分をぬき出した厳照寺I式との在り方は今後の研究課題である。

第2・3段階の土器の分布は北は秋田県北秋田郡鷹巣町栄摩当(註89)、山形県庄内地方の郷の浜J遺跡、西は京都府丹後町平遺跡(註90)、滋賀県大津市瀬田粟津遺跡までの日本海沿岸の広い地域にわたっているが、中期中葉段階から小地域の土器文化圏に変遷してゆく過程を見る上で、大きな研究課題であろう。

徳前C遺跡の縄文土器を整理するにあたって、荒木繁行氏をはじめとして多くの人の助言、協力を受けた。南久和氏、松井政信氏、斎藤隆氏、高橋修宏氏から貴重な教示を受けた。第3次調査を担当された米沢義光氏には文献の検索や土器の検討について協力を受け、得るところが大きかった。記して感謝の意を表しておきたい。

註1　高堀勝喜　1952　「珠洲郡松波町新保遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌第4号』
2　高堀勝喜　1955　「先史文化」『能登』　九学会編
3　沼田啓太郎　1957　「石川県の縄文式土器」『県下の貝塚と古墳』石川県図書館協会
4　村井一郎・嵯峨井亮・松永清　1965　「石川県高松町押水町入会・東間坂手山縄文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌第9号』
5　高堀勝喜　1965　「縄文文化の発展と地域性－北陸－」『日本の考古学II』　河出書房
6　富山県立上市高等学校地歴クラブ　1971　「野鳥大門遺跡の遺物紹介」
7　小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年－戦後の研究史と現状」『大境第5号』
8　小島俊彰　1977　「珠洲郡内浦町松波新保遺跡発掘資料再見」『石川考古学研究会々誌第20号』
9　沼田啓太郎　1976　「金沢市大桑町中平遺跡報告」『石川考古学研究会々誌第19号』
10　秋田喜一　1954　「羽咋郡中荘村上田通称地頭方遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌第6号』
11　高堀勝喜　1954　「金沢市古府遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌第6号』
12　高堀勝喜　1955　「石川県羽咋郡堀松貝塚調査報告」『石川県羽咋郡旧福野潟周辺総合調査報告書』
13　註2に同じ
14　註7に同じ
15　橋本澄夫　1966　「考古資料」『中島町史（資料編）』
16　高堀勝喜　1970　「原始時代」『七尾市史資料編第4巻』
17　註11に同じ
18　小島俊彰　1972　「縄文中期」『富山県史考古編』
19　註7に同じ
20　小島俊彰　1973　「富山県朝日町下山新遺跡第1次発掘調査概報」　富山県教育委員会
21　南　久和　1976　「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」『石川考古学研究会々誌第19号』
22　南　久和　1974　「金沢市古府遺跡－第4・5次調査報告－」　金沢市教育委員会
23　南　久和　1977　「北陸の縄文中期に見られる連続刺突沈文について」『石川考古学研究会々誌第20号』
24　桜井憲弘・四柳嘉章・杉畠孝博・唐川明史　1977　「赤浦遺跡」　石川県七尾市教育委員会
25　平口哲夫・西野秀和・小島俊彰・小島芳孝　1979　「上山田貝塚」　石川県宇ノ気町教育委員会
26　神保孝造・岡上進一・松本幸治　1977　「厳照寺遺跡緊急発掘調査概要」　富山県教育委員会

27 橋本　正　1968　「回転押型文土器の問題一富山県の場合一」『大境第4号』
28 西中遺跡発掘調査団　1982　「西中遺跡一発掘調査略報一」　福井県美山町教育委員会
29 註9に同じ
30 註21に同じ
31 V・G・チャイルド、近藤義郎訳　1964　「編年一文化連続の設定一」『考古学の方法』　河出書房
32 山内清男　1964　「縄文土器・総論」『日本原始美術Ⅰ』　講談社
33 小林達雄　1977　「縄文土器」『日本原始美術大系1』　講談社
34 註21に同じ
35 南　久和　1981　「金沢市笠舞遺跡」　金沢市教育委員会
36 小林達雄　1975　「タイポロジー」『日本の旧石器文化1』　雄山閣
37 可児通宏　1979　「縄文土器の技法」『世界陶磁全集1日本原始』　小学館
38 土肥　孝編　1982　「縄文時代II（中期）」　至文堂
39 胴部に施文されるB字状文の1種としてジグザグ状のものを考える事ができるかもしれない。
40 沼田啓太郎　1975　「金沢市中戸遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌第18号』
41 杉畠孝博　1974　「福浦ヘラソ遺跡」『石川県富来町史資料編』
42 杉畠孝博　1974　「志賀浦縄文遺跡群」『石川県志賀町史資料編第1巻』
43 柳井　睦・神保孝造　1974　「富山県立山町吉峰遺跡第4次緊急発掘調査概報」　富山県教育委員会
44 中村奇襄・小鳥俊彰　1976　「朝日町馬場山D遺跡採集の遺物」『大境第6号』
45 室岡　博編　1960　「鍋屋町遺跡」　新潟県柿崎町教育委員会
46 小島俊彰　1978　「富山県滑川市安田古宮遺跡発掘調査報告書」　滑川市教育委員会
47 富山県立氷見高等学校歴史クラブ　1964　「富山県氷見地方　考古学遺跡と遺物」
48 村越　潔　1974　「円筒土器文化」　雄山閣
49 渡辺　誠・小沢一弘・上野修一・鈴木忠司・南　博史　1978　「福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書」　勝山市教育委員会
50 西中遺跡発掘調査団　1982　「西中遺跡」p18　福井県美山町教育委員会
51 岡本　晃　1975　「金沢市笠舞遺跡」『石川考古学研究会々誌第18号』
浅井勝郎・浅井哲夫　1968　「金沢市笠舞縄文遺跡」『石川考古学研究会々詩第11号』
南　久和・上田亮子　1981　「金沢市笠舞遺跡」　金沢市教育委員会
52 杉畠孝博　1974　「酒見サンノハザマ遺跡」『石川県富来町史資料編』
53 吉岡康暢　1972　「手取谷の原始時代」『石川県鳥越村史』
54 大野政雄・戸田哲也　1978　「堂之上遺跡　第1～5次調査概報」　岐阜県久々野町教育委員会
55 江坂輝弥・石坂寅二・可児弘明・増田和彦　1962　「新潟県中魚沼郡津南町上野遺跡発掘調査報告」津南町教育委員会
56 山口良彦・川上貞雄・家屋順一郎・渡辺文男　1980　「中道遺跡」p15　新潟県安田町教育委員会
57 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班　1974　「吉野屋遺跡」第3図
58 川崎利夫・野尻　侃・安部　実　1981　「郷の浜J遺跡」p11　山形県教育委員会
59 註1に同じ
60 吉田　格編　1982　「神谷原II」　八王子市椚田遺跡調査会
61 藤森栄一　1965　「井戸尻の縄文式土器」『井戸尻』
62 吉川義彦・吉崎　伸・泉　拓良・岡田文男　1980　「遺跡確認法の調査研究　昭和55年度実施報告一水中遺跡の調査一」拓影III　文化庁
63 甘粕　健・古川一明・古川知明・半沢　正　「大沢遺跡」p25　新潟県巻町・潟東村教育委員会
64 中川成夫・岡本　勇・小松芳男・秦　繁治　1959　「顕聖寺遺跡」　新潟県浦川原村教育委員会
65 金子拓男編　1982　「剣野B遺跡」『柏崎市史資料集　考古編2』図版43　新潟県柏崎市
66 註65に同じ　「剣野E遺跡E」図版35
67 米沢義光　1982　「徳前C遺跡」図7『鹿島町史』資料編続　石川県鹿島町
68 註63に同じ　「十三仏塚遺跡」図版58
69 西沢隆治　1982　「深沢遺跡」（飯山市蓮深沢）　長野県史刊行会
70 宮坂光昭　1965　「長野県岡谷市梨久保遺跡の再調査」『長野県考古学会誌　第3号』
71 註61に同じ
72 沼田啓太郎　「新崎遺跡拓本集」　未公刊。沼田文庫には北陸3県はもとより全国にまたがる拓本集がある。所在不明の資料の採拓も数多く含まれ、その公刊が待たれる。
73 飯田　勉　1981　「富山八尾中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」　富山県八尾町教育委員会
74 註65に同じ　「剣野B遺跡」図版44
75 今村啓爾・田村善次郎・金子浩昌・吉田　格　1972　「宮の原貝塚」　武蔵野美術大学考古学研究会
76 高堀勝喜　1982　「通り鼻遺跡」『能登島町史』　石川県能登島町
金沢大学考古学研究会　1970　「金沢大学考古学研究会活動報告第2号」

77　岡本　晃　1976　「医王山大菱池遺跡の遺物」『石川考古学研究会々誌第19号』
78　関根宣昭・金沢和夫・中川喜代治・本間信昭・小片　保・森沢佐蔵　1977　「堂の貝塚」　新潟県佐渡郡金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会
79　註65に同じ　図版52
80　紅村　弘・増子康真・橘　宣忠　1974　「飛騨　桜洞・沖田」　岐阜県萩原町教育委員会
81　柏原亮吉・江坂輝彌・酒井忠純・酒井忠一・加藤　稔　「吹浦遺跡調査報告」　致道博物館内荘内古文化研究会
82　江坂輝彌・村越　潔・平山久夫　1970　「石神遺跡」　ニュー・サイエンス社
83　桜井仁吉　1981　「新崎式土器のパターン認識II」『大境第7号』
84　註76に同じ
85　註8に同じ
86　杉畠孝博　1974　「上野ヤケダ遺跡」『石川県志賀町史資料編第1巻』
87　1982年度の発掘調査で多数が出土している。
88　註23に同じ
89　山内清男　1964　「日本原始美術1」p149　講談社
90　堅田　直編　1966　「京都府丹後町平遺跡調査概要」　帝塚山大学考古学研究室

参　考　文　献

江坂輝彌・笹津備洋・西村正衛　1958　「青森県蟹沢遺跡調査報告」『石器時代』第5号
鈴木克彦　1974　「中の平遺跡発掘調査報告書」　青森県教育委員会
奥山　潤・大里勝蔵・菅原　洋　1974　「沢田遺跡発掘調査報告書」　秋田県教育委員会
岩見・藤井・田口　1979　「館下I遺跡発掘調査報告書」　秋田県教育委員会
村越　潔　1970　「円筒土器の分布」『考古学ジャーナル　No. 43』　ニュー・サイエンス社
椚　国男・佐々木蔵之助　1976　「八王子市明神社北遺跡第3次調査概報」『考古学ジャーナル　No. 122』　ニュー・サイエンス社
今井康博・宮澤　寛他　「港北ニュータウン地域内文化財調査報告IV」　横浜市埋蔵文化財調査委員会
鈴木保彦　1972　「東正院遺跡調査報告」　神奈川県教育委員会
山本暉久　1976　「草山遺跡」　神奈川県教育委員会
山下正博・池谷信之　1981　「秦野市山之台遺跡出土の土器と石器」『小田原考古学研究会会報第10号』
岡本　勇　他　1969　「平塚市文化財調査報告書　第9集」　平塚市教育委員会
藤森栄一　1967　「中部高地の中期初頭縄文式土器」『富士国立公園博物館研究報告第16号』
会田　進　他　1974　「扇平遺跡」　岡谷市教育委員会
大江まさる・紅村　弘　他　1973　「北裏遺跡」　岐阜県可児町教育委員会
増子康真　1980　「岐阜県八百津町南森遺跡発掘調査報告」　八百津町教育委員会
静岡県考古学会　1980　「縄文土器の交流とその背景」『静岡県考古学会シンポジューム』
金子拓男　1967　「新潟県柏崎市剣野E地点遺跡出土遺物について」『信濃』19―2
中島栄一　他　1979　「綾ノ前遺跡」　新潟県三条市教育委員会
甘粕　健・小野　昭　1982　「原通八ッ塚」　新潟県新井市教育委員会
安藤文一・山本　肇　1982　「西倉遺跡」　新潟県川口町教育委員会
本間信昭　他　1976　「北原八幡遺跡」　新潟県教育委員会
上野　章　他　1982　「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群」　富山県教育委員会
湊　　晨・竹内俊一　1971　「愛本新遺跡」　富山県宇奈月町教育委員会
岡上進一　他　1978　「富山県砺波市宮森新北島I遺跡緊急発掘調査概要」　富山県教育委員会
山本政敏・神保孝造　1975　「富山県立山町金剛新遺跡緊急発掘調査概報」　立山町教育委員会
橋本　正・柳井　睦・神保孝造・池野正男　1975　「富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報」　庄川町教育委員会
岡上進一・橋本正春・山本政敏・松本幸治・橋本　正　1978　「富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第6次緊急発掘調査概要」　富山県教育委員会
上野　章・神保孝造・酒井重洋　1976　「富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第4次緊急発掘調査概要」　富山県教育委員会
酒井重洋・神保孝造・奥村吉信　1981　「富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概要」　立山町教育委員会
高橋修宏・松井政信・山森伸正　他　1982　「小泉遺跡」　富山県大門町教育委員会
平口哲夫　1981　「新保遺跡」『内浦町史』第1巻　石川県内浦町
山内清男　1979　「日本先史土器の縄文」　先史考古学会

第4節　弥生・古墳時代前期について

第4次調査で該期の遺物を出土した包含層は調査区全域を覆うもので、その広がりは第1次の調査地点にまで及ぶものと考えられる。これは、第1次調査で『下層』として確認、報告されて以来、臨接地を調査してきた第2次・第3次の調査区でも同層が確認されたことから推察されるもので、今回の調査は該期の遺跡の広がりをより広範囲のものとしてとらえることができた点でも価値のある成果を納めたといえよう。以下、検出した遺物に若干の考察を加えまとめとしたい。

出土遺物の大半は土器である。しかしその殆どが細片となって包含層から検出されたものであり、一括資料として取り扱うことはできない。そこで、出土した土器を器種および形態差等により分類・細別することで、徳前C遺跡の土器の様相を把握したいと思う。また、他遺跡における該期の土器の様相と比較・対照し、当遺跡出土土器群の編年的位置付けや画期等についても推察してみたい。

〈壺形土器〉

掲載した壺形土器はその形態から長頸壺（A類～F類）、広口壺（G類、K類、N類）、二重口縁壺（H類、J類、L類、M類）、短頸壺（I類）に再度分類することができる。

長頸壺は弥生時代後期（畿内第V様式）を代表する器形の一つであることは言うまでもないが、その器形の源流については未だ統一的見解をみるに至ってはいない。ただ、出現後の器形の変化については一応の流れが認められそうである。(註1)

第5表は県内における弥生時代の遺跡から出土した長頸壺をタイプ別に分類したものである。(註2) いずれも出土状況が異なることから編年的配列を含むものでないことを注記しておく。aタイプは広口長頸壺の系譜を汲むものを抽出した。広口長頸壺は基本的に口縁部が外方に開くもので、装飾性に富むという特徴を具備する。スタイルについては各遺跡出土のものも体部を欠損することから明確にしえないが、西念・南新保遺跡出土の3にみられるような頸部の長さが、しだいに短頸化する傾向は否めないであろう。また、それに伴ない装飾性も薄れてゆくものと考えている。徳前C遺跡出土の23、25もそうした流れの内に求められる。bタイプは通有の長頸壺を口縁端部や頸部の傾度の差異によりあえて細分したものである。b_1は口縁端部が丸味を帯びるものを抽出した。本文中A類としたものである。b_2は口縁端部に面を形成するもので本文中においてはB類とした。b_3は頸部が大きく開くもの、b_4は口縁部が外傾するものとしてタイプを設定したが、当遺跡からの出土例はない。徳前C遺跡出土のb_1・b_2両タイプは共に体部を欠損するものであるが、同タイプに含まれる西念・南新保遺跡出土の4・5、柳田うわの遺跡出土の13・14を見るかぎりにおいては撫で肩かあるいは倒卵形を呈する体部が付くものと思われる。また、頸部の長さについてはaタイプ同様の変化が考えられる。cタイプは有段状の口縁を有するものである。c_1は口縁帯を無文とするもの、c_2は口縁帯を華飾するものとして選別した。いずれも本文中においてはF類として一括したものである。本文中、D類・E類として抽出したものについては類例が乏しく、明確にしえないが、D類はaタイプかb_2タイプの流れの内に求められるものと考えたい。E類については短頸壺になる可能性も考えられることから、ここではあえて削除することにした。

広口壺としたG類、二重口縁壺としたH類は共に口縁片で、頸部以下の形状については不明である。しかし、両類は共に長頸壺になる可能性もあることを付け加えておきたい。また、H類・J類の口縁帯にみられる調整技法が、近江系受口状口縁甕形土器として類別した甕形土器I類と共通するものであることは見逃せない事象である。この事は再度後述するが、甕形土器O類についても言えることである。

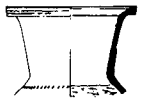
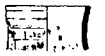
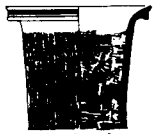
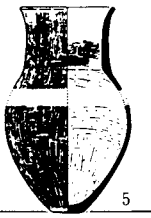
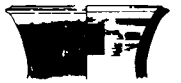
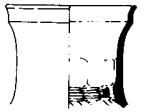
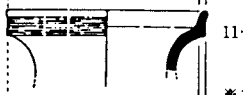
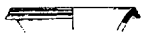
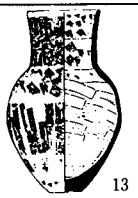
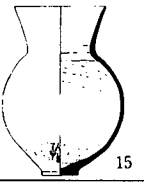
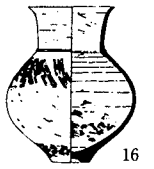
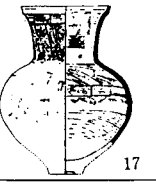
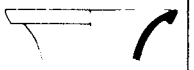
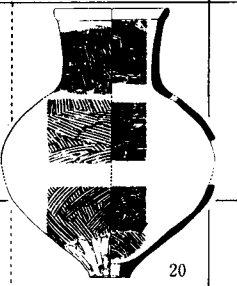
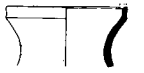
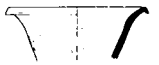
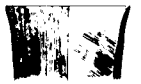
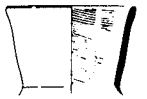
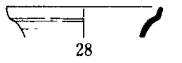
K類は全形を窺うことのできる広口壺である。県内における類品は乏しいが、体部の球形化や頸部の外反度に注目すると、庄内期(註3)あるいは庄内期直前の様相を具備するものと考えられる。庄内式土器と併行すると考えられている北陸の土器型式に月影式土器(註4)がある。二重口縁壺としたL類がほぼそれにあたる。ただ、徳前C遺跡第1次および第4次調査では月影式独特の甕形土器の出土例は無い。L類同様の器形で、口縁帯を棒状浮文で飾るM類は、その装飾技法が月影期に続く古府クルビ期(註5)で盛行することから、L類よりもやや後出的様相を有するもの

と考えたい。N類は掲載した壺形土器の内で最も後出するものである。類品が辰口町高座遺跡[註6]や鹿西町金丸宮地遺跡[註7]などで認められることから古墳時代中期以降にまで下るものと考えられる。ただ、N類に含めた30に関しては若干古くなる可能性が強い。

短頸壺としたI類はE類同様類品が乏しく、時期については明確にしえない。

以上、徳前C遺跡第4次調査で出土した該期の土器から壺形土器を抽出し、その様相を把握すべく若干の考察を加えてきた。そこで最後に編年的位置付けを試み、壺形土器のまとめとしたい。ただこのことは、後述する甕形土器や高坏形土器の編年的位置付け作業にも関連することであり、壺形土器のみではなく全般におよぶものとならざるをえない。

第1次の調査報告の中で湯尻修平氏は、『下層出土の土器を更に細かく見るとそれが大きく次の三様式に分類することが可能であり、一応の見通し的なものとしておいた。』と記された後、一様式から三様式に説明を加えられている。それによると、一様式は羽咋市柳田うわの遺跡[註8]溝状遺構A出土遺物を標式とするもの、二様式は金沢市塚崎遺跡[註9]7・21号竪穴出土遺物と、それに続く金沢市月影遺跡出土の遺物に類品を求めえるもの、三様式は鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡出土のA群土器に類似するものとされている。この三様式分類は、調査地点を異にする今回の調査区においても時期的にはほぼ認めえるものである。ただ、出土土器に編年的位置を与える場合、柳田うわの遺跡出土土器と塚崎遺跡7・21号竪穴出土土器では新古の様相は看取しえても、分類に際して混乱を生じるのが現状である。これは塚崎遺跡の報告の中で吉岡康暢氏が提示された、「塚崎遺跡出土土器編年試案」以後の資料の増加に起因するところが大きい。氏は報告の中で塚崎遺跡出土土器をI～III式に類別され、編年的位置付けをなされた。また、II式とした土器群中において新古の様相が認められることを示しながらも、その変化は漸移的かつ連続的な推移であるとされた。しかし、II式の新古に認められる土器様相の違いは、I式とII式の古相とされる土器とにみられる差異より大きく、資料の増加をみた現段階においてはII式の新古を明確にすることの方が緊急の課題となりつつある。加えて、氏が塚崎I式の設定に際し、資料の薄化からその実態を加賀ではなく、羽咋市に所在する柳田うわの遺跡に求めたのは、塚崎遺跡が猫橋式土器の分布地域の東限付近に位置しながらも、北陸東南部（能登から富山県西南地域を包括する一帯）に広く分布する土器の様相（柳田式土器に代表される）を具備していたからにほかならない。ただ、塚崎I式に北陸東南部地域の様相が認められたとしても、続くII式、III式への変化に関しては同一視野で見難いものがある。これはIII式の標式とされた月影式土器の分布範囲を鑑みるとより明白である[註10]。これらのことは近年の発掘資料の増加により、しだいに浮き掘り化してきたもので、現状では能登・加賀の地域差を認めないわけにはいかないと考えている。それでは、能登地域における柳田式土器（塚崎I式）に続く土器（いわゆる地域差を踏まえた塚崎II式併行期の土器）として何を充てることができるのか。それには七尾市奥原遺跡[註11]出土土器群が適当であると考えている。報告者（西野秀和）は『住居址等の遺構から出土した量と等量に近い包含層出土土器を通覧しても、現在的に考えられている大方の土器編年のなかでも時期幅を広く考えなければならない必要性は低いものと思われる。』と記され、結論として柳田うわの遺跡溝状遺構A出土土器より新しく、同遺跡二号住居址出土土器より先行するという編年的位置を与えられた。また、『塚崎遺跡での編年と比較すると塚崎II式古に併行する能登地域における一型式と見て大過ないであろう。』と付加され、今後、加賀との地域差を踏まえた能登あるいは北陸東南部における編年作業の必要性を示唆している。このことは、谷内尾晋司氏[註12]や三浦純夫氏[註13]らが随時、説かれていることであり、ここで更めて加筆するつもりはない。ただ、奥原遺跡出土土器群を塚崎II式古併行の能登の土器と考えた場合、II式の新段階の様相がはなはだ不透明なものとなる恐れがある。II式新段階の様相を的確に捉える資料は、今日に至っても未だ十分とはいい難いのが現状であるが、その中にあって最も良くその様相を留めるものに津幡町谷内石山遺跡[註14]第1号住居址出土土器と同遺跡第1号溝出土土器がある。また、同報告書中に引用掲載された宇ノ気町塚越遺跡第3号住居址床面出土土器も該期の様相を留める良好な一括資料として扱うことができよう。ただ、両遺跡は共に能登と加賀の界で営まれた集落跡であることから、必ずしも能登の土器の様相を包括しているとはいいがたい点がある。しかし、現状ではより良好な資料として取り上げることのできるものは見当たらず一応当遺跡を該期の標式として扱うことにした。この点

遺跡名 ＼ タイプ	a	b_1	b_2	b_3	b_4	c_1	c_2	備考
猫　橋 （加賀市片山津町地内）	 1		 2					1・2…包含層出土 ※北陸大谷高校地歴クラブ「紀要二号」
西念南新保 （金沢市西念町・南新保町地内）	 3	 4	 5			 6		3…B－1区・T－1出土 4…A区出土 5…F区・T－2出土 6…F区・T－2出土 ※宮本哲郎氏の好意で未発表資料を拝借した
法　仏 （松任市法仏町地内） 現千代野ニュータウン	 7	 8	 9			 10	 11	7～10…6号住居址出土 11…J地区30C土ﾗ出土 ※谷内尾晋司氏の好意で未発表資料を拝借した
柳田うわの （羽咋市柳田地内）	 12	 13	 14	 15	 16	 17	 18	12～18…溝状遺構A出土 ※「羽咋市史原始・古代編」
奥　原 （七尾市奥原地内）	 19				 20	 21	 22	19…第1号住居址出土 20…包含層出土 21…　〃　〃 22…第7号住居址出土 ※七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡」石川県立埋蔵文化財センター1982
徳　前　C （鹿島町徳前地内）	 23	 24						23…包含層出土 24…　〃　〃 ※「鹿島町徳前C遺跡調査報告(1)」石川県教育委員会　1978・3
上　段（1次） 下　段（4次）	 25	 26	 27			 28 29	 30	25～30…包含層出土

第5表　長頸壺タイプ別細分表（加賀・能登）　　※縮尺不同

については、今後の資料の増加を待ち再度検討したいと考えている。これに続くIII式については、標式となる月影式土器の分布が加賀地域一帯で認められるのに対し、能登では未だに〝希薄〟というのが現状である。先に、塚崎遺跡にみられるI式からIII式への変化をストレートに能登では考えられない理由として、III式の分布範囲を挙げたのは、かく現状によるものである。ただ将来的には、押水町竹生野遺跡(註15)出土土器の一部が該期の能登の土器として捉えられるのではないかと考えている。

このような現状を踏まえ、第4次調査出土土器の編年的位置付けに際しては、その標式とする遺跡を下記のように変更した。

	第1様式		第2様式	第3様式
第1次調査	柳田うわの併行期		塚崎7・21号住 〜 月影併行期	金丸宮地 併行期
第4次調査	柳田うわの 〜 奥原併行期		谷内石山 〜 月影併行期	金丸宮地 併行期
長頸壺	A、B、C、D、F、(E)			
広口壺		G	K	N
短頸壺		I		
二重口縁壺		J	L、M	
(受口状口縁)	H			

各類別した壺形土器は、その中心を柳田うわのから奥原併行期に求めることができる。これは、第1次調査で出土した該期の土器群に認められた結果と一致する。また、第1次調査で設定された第II様式と第III様式との間には、土器型式にして2型式程度の存在が考えられることから、徳前C遺跡の最大の画期はここに求められそうである。

〈甕形土器〉

第4次調査で出土した土器の内で、その数量が最も多いのは甕形土器である。甕形土器は本文中において24類別しえたが、再度、系譜別に組変えると以下の6系譜に集約される。

系譜1……有段口縁の口縁帯を擬凹線で飾るもの……A

系譜2……有段口縁の口縁帯をナデで仕上げるもの…C、D、F、G、H

系譜3……付加状口縁を有するもの（つまみ上げ）…B

系譜4……受け口状口縁を有するもの……I、J、X

系譜5……付加状口縁を有するもの（屈曲、貼付）…K、L、M、N、E

系譜6……〝く〟の字状口縁を有するもの……O、P、Q、R、S、T、U、V、W

系譜1・2は共に北陸地方における通有の有段口縁甕形土器には違いないが、口縁帯を擬凹線で装飾するものとしないものとの分布に地域的な差異が認められることから、あえて別系譜として扱うことにした。また、系譜3・5は付加状口縁という共通の名称を以って表記したが、混乱を避けるためにも今後、より的確な呼称名を与えなければならないと考えている。

上記した6系譜は、徳前C遺跡第4次調査で出土した甕形土器について認められた系譜であり、周辺地域において必ずしも同一様相が認められるというわけではない。これは該期における流動的な社会・政治情勢の反映として捉えられなければならない事象であり、前述した壺形土器や後述する高坏・器台形土器等を含めた各遺跡間相互の土器の様相差を、今後検証していかなければならないと考えている。

系譜1として類別したA類は、系譜2としたC、D、F、G、H類同様北陸地方一帯に認められる通有の甕形土器であることは先に注記した通りである。しかし、その分布域内における両系譜の分布密度には大きな違いが

認められる。ここで各類の出土遺跡を列挙するつもりはないが、一応の様相としては加賀以南を中心にA類が、また、能登以北を中心に系譜2にまとめた各類が、それぞれその密度を濃くするようである。このような現象が顕著に認められるのは、吉岡編年でいう塚崎II式古段階以降で、能登においては奥原期以降ということになろう。徳前C遺跡第4次調査で出土した該期の土器の内、系譜1に含まれるものは掲載したA類の4点のほか、実測不能の十数片を数えるにすぎず、割合い的にも低い数値を示す。これは奥原遺跡においても共通の様相として認められることである。

系譜2として一括したC類、D類、F類、G類、H類の内、G類とH類に共通して有段部内面の段の退化が認められる。H類などは〝内面くの字〟と言って憚(はばか)(註16)るものではない。有段口縁の退化現象として内面が〝くの字〟化する傾向は、有段口縁甕形土器主要分布圏である山陽地方や山陰地方においても認められることである。(註17)ただその時期については地域差が介在することから一概に規定することはできない。そこで能登地方に限定してみるとこの傾向は塚崎編年でいうII式新からIII式併行期頃には認められるのである。傍証として、前項でも引用した津幡町谷内石山遺跡1号住居址や同遺跡1号溝出土土器のほか、宇ノ気町塚越遺跡3号住居址床面出土土器、未発表資料ではあるが、押水町南吉田葛山遺跡(註18)7号溝出土土器、同町竹生野遺跡出土土器等を挙げることができる。有段口縁の退化現象が能登において谷内石山期（塚崎II式新併行期）から認められるのに対し、加賀では以然系譜1を中心として存続し、月影期に至る。月影式土器を代表する有段口縁の甕形土器もその後〝内面くの字化〟傾向を示しながら衰退するのであるが(註19)、なぜ能登の土器は月影期を待たずして退化的様相を呈するのであろうか。そこには地域差だけではない何らかの政治的かつ社会的な変動が考えられる。その原因については明確にしえないが、徳前C遺跡だけについてみても畿内的色彩の濃い器台形土器の存在や近江糸受口状口縁甕形土器(系譜4)の存在、また、東海的様相を有する高坏形土器脚部の混在など、他地域との接触が急速かつ頻繁化したことが窺えるのである。ただ、このような他地域との交流を在地の人々が能動的立場で行ったかどうかについては明確にしえない。

系譜3としたB類は、北陸通有の有段口縁甕形土器とは若干様相を異にするものである。形状からみて〝くの字〟状口縁の端部を上方につまみ上げて口縁帯を形成したもの、いわゆる付加状口縁と一応呼称することにした。口縁帯がやや内傾するという特徴を有しており、類品を柳田うわの溝状遺構A出土土器群中に認め得るが、量的に恵まれるとはいい難い状況である。

系譜4は近江系受口状口縁甕形土器およびその影響を色濃く反映するものとして捉えた一群である。I類は様相的に近江でも湖北地方のものに近似するが、胎土の違いなどから搬入品とは考えにくく(註20)、在地で作成されたものと考えている。徳前C遺跡第4次調査で出土した受口状口縁甕形土器の器形（口縁部の形態および調整技法）を、近江地方で考えられている同甕形土器変遷過程に対照すると、野洲町久野部遺跡七坪調査区(註21)出土土器に与えられた年代観（下層…畿内上小坂～馬場川併行期・上層…畿内馬場川～上六万寺併行期）の上層併行期にほぼ該当するものと考えられる(註22)。県内における近江系受口状口縁甕形土器の出土遺跡としては、加賀市猫橋遺跡(註23)をはじめ金沢市西念・南新保遺跡(註24)、羽咋市柳田うわの遺跡、同市吉崎・次場遺跡(註25)など全県に及ぶ範囲で認められるが、数量的には僅少である。また、富山県上市町所在の飯坂遺跡(註26)や江上A遺跡(註27)、江上B遺跡(註28)からも同甕形土器が出土していることから、その分布域はかなり広範囲に及んでいることが考えられる。ただ、各遺跡出土の同甕形土器はいずれも弥生後期後葉に位置付けられることから、漠然とではあるが該地（近江地方）との接触時期を推定する傍証となるのではないかと考えている。

系譜5は系譜3同様付加状口縁を有するものとして捉えた土器群である。しかし、系譜3のように明確な口縁帯を形成するわけではなく、単に〝くの字〟状口縁の端部を若干上方に屈曲させ、受口状あるいは有段状としたものである。本文中N類としたものについては、口縁帯外面に粘土紐を貼付してはいるものの系譜的には同一系譜で追えるものと考えている。系譜5にまとめた各類の類品が、羽咋市柳田うわの遺跡溝状遺構A出土土器や七尾市奥原遺跡(註29)、押水町上田出西山遺跡、富山県上市町江上A・B遺跡、小杉町囲山遺跡(註30)などで認められるのに対し加賀では、未だ僅少であることから、その分布域が北陸東南部を中心とするものではないかと考えている。ただ、

N類に含めた33の口縁帯調整技法が系譜4で包括した近江系受口状口縁甕形土器のそれと共通するものであることは看過できない。このことは両者の共存性あるいは前後関係を考えるうえにおいて、貴重な参考資料になりうるものと考えるからである。

系譜6は、いわゆる〝くの字状口縁〟の甕形土器を包括したものである。O類とした36は口縁端部に面が形成され、そこを施文帯としてN類33同様の調整が施される。O類の器形自体は七尾市奥原遺跡2号住居跡や同遺跡包含層出土土器中に認められることから、近江系受口状口縁甕形土器にみられる特有の調整技法のみが在地の土器に取り入れられたことが窺えるのである。これについては前述した壺形土器H類・J類および甕形土器N類33も同様の現象として捉えられるものと考えている。P類の類品は柳田うわの遺跡溝状遺構A出土土器および奥原遺跡2号住・4号住で、またQ類の類品は奥原遺跡3号住でそれぞれ認められることから、その編年的位置については容易に判断できる。しかしT類・U類・V類については指標となる良好な資料が乏しいことから、現状での編年的位置はやや流動的なものにならざるをえない。ただ、W類に関しては広口壺N類同様、金丸宮地併行期にまで下りえるものと考えている。

以上、徳前C遺跡第4次調査で出土した該期の土器の内甕形土器を抽出し、その様相を把握すべく若干の考察を加えてきた。そこで、最後に壺形土器同様の編年基準に立脚した、各系譜別の編年的位置付けを行ない、まとめとしたい。

第4次調査	柳田うわの～奥原併行期		谷内石山～月影併行期	金丸宮地併行期
系譜 1	A			
系譜 2	C	D、F	G、H	
系譜 3		B		
系譜 4	I			
系譜 5	E、K、L、M、N			
系譜 6	O、P	Q、R、S	T、U、V	W

壺形土器同様、甕形土器においてもその編年的中心は柳田うわのから奥原併行期に求められる。ただ、該期における能登の土器の複雑な様相は、そのまま当時の流動的な社会情勢の反映として捉えて憚(はばか)るものではなく、その点からみて該期の徳前C遺跡は最も緊張した社会情勢下で営まれた集落の1つであると考えることができよう。

〈高坏形土器〉

徳前C遺跡第4次調査で出土した該期の高坏形土器の類別にあたっては、混乱を避けるためにあえて坏部片のみをその対象とし、脚部片については別途説明を加えその様相を明示してきた。そこでここでは二、三の問題点を抽出し、若干の考察を加えまとめとしたい。

まず、本文中で行った分類（A類～D類）は、主として坏部（口縁）の形態差を基準としたものであり、高坏形土器本来の姿（いわゆる完器）をその系譜等を踏まえて分類したものとは異なることを明確にしておきたい。ただ、断片的な資料からその様相を抽出するためには、かく操作を最低限の作業として行う必要があると考えている。

A類としたものは口縁の立ち上がり角度が大きく、かつ長さが短いものである。同類を高坏形土器の変遷過程(註31)に対照してみると、やや古相を有するものとして捉えることができる。ただ、器壁が薄いことや口縁端部の引き出し等を考慮すると、その上限が羽咋市柳田うわの遺跡溝状遺構A出土土器に与えられた年代観を大きく遡るものとは考えにくく、概ね併行期の1タイプとして捉えうるものと考えている。

B類は口縁端部に水平かつ明確な面を形成するものである。口縁の立ち上がり角度はA類に比べやや小さい。

類品が加賀市敷地後方遺跡[註32]や松任市法仏遺跡[註33]、羽咋市柳田うわの遺跡、七尾市奥原遺跡等で認められる。また、徳前C遺跡第1次調査においても同類の出土が認められており、報告者（湯尻修平）は第1様式の範疇で捉えられるものと規定している。

C類は口縁部の外傾化がA類に比べ顕著に認められるものとして、あえて分類したものである。しかし、編年的位置に関してはA類、B類と同様の枠の中に収まるものと考えている。

D類は口縁部の長化傾向や外傾化および装飾技法等から、やや後出的様相を有するものとして捉えることができよう。ただ、C類同様次様式（谷内石山～月影併行期）にまで下りうるものとは考えにくく、一応奥原併行期頃の所産と考えておきたい。

脚部片に認められる様相差については、本文中で明記したとおりである。ただ、有段脚に付くと考えられる棒状脚部（柱状部）や小型高坏形土器脚部に対応する坏部の不在については、出土土器の細片化や摩滅等により明確にしえないのが実状である。掲載した脚部片の内、柱状部片22･23に認められる沈線装飾技法は、主として東海地方（畿内およびその周辺地域にまで及ぶ）にその中心的分布を認めえるものである。このことは近江系受口状口縁甕形土器等の存在と合わせ、該期の能登あるいは北陸の、社会的・政治的動向を考えるうえにおいて重要な資料となりうるものであろう。

〈器台形土器〉

高坏形土器同様、口縁部（器受部）の形態差を以って分類の指標とした。その結果として5類別しえたが、その大半が細片資料であることを予め明記しておく。

A類に含めた口縁片からその全形を窺うことはできないが、類品として認めうるものの出土例としては、羽咋市柳田うわの遺跡溝状遺構A出土土器や七尾市奥原遺跡7号住居跡出土土器、金沢市西念･南新保遺跡出土土器、富山県上市町江上A遺跡SD01、03区出土土器等を挙げることができる。出土例の大半は中型品と考えられるが小型化する傾向は否めないと考えている。また、同類の器形の特徴としては、口縁部・体部・裾部の明確な分化を挙げることができよう。

B類は口縁端部に円形浮文を貼付するもので、その装飾技法の差異によりあえて類別したものである。しかし、器形自体はA類に近似するものと考えている。

C類は中型器台形土器唯一の完形品である。体部の退化が顕著に認められ、形態的には口縁部に裾部が直結した様相を呈する。県内における類品の出土例としては、金沢市西念･南新保遺跡出土土器を挙げることができる。また、系譜的にはその源を畿内に求めえるもので、該地の土器変遷過程[註34]に対照すると弥生後葉から末に比定できるものと考えている。

D類は口縁端部が上方に屈曲し受口状となるものである。類品は羽咋市柳田うわの遺跡溝状遺構A出土土器中に認められる。脚部の退化はC類同様顕著に認められ、中型器台の終末期の様相を具備するものと考えられる。

E類は口縁部が皿状を呈する小型器台形土器である。同類の出現は、いわゆる小型丸底壺（坩）の出現に伴うものと考えられるが、第4次調査で出土した土器中から小型丸底壺（坩）を見い出すことはできなかった。しかし、器台形土器の小型化傾向が顕著に認められるのは、畿内における庄内期、北陸では月影期頃からと考えられることから、徳前C遺跡出土の器台形土器E類の編年的位置についても月影併行期（若干下る可能性を含む）に求められるものと考えている。また、掲載した脚部片については全てE類に付くものと考えている。

以上、器台形土器の様相を把握すべく若干の考察を加えてきたが、最後に壺形土器・甕形土器同様の編年基準に立脚した位置付けを、高坏形土器と合わせて行いまとめとしたい。

第4次調査	柳田うわの～奥原併行期	谷内石山～月影併行期	金丸宮地併行期
高坏形土器	A、B、C、D		
器台形土器	A、B、C、D	E	

高坏・器台形土器は共に、その編年的中心を柳田うわのから奥原併行期に求めることができる。これは、壺形土器・甕形土器に共通して認められた事象である。ただ、器台形土器E類の編年的位置に関しては、時期的に若干下る可能性を含んではいるが、一応月影併行期の所産として、取り扱うことにした。また、鉢形土器・蓋形土器については、その点数が少ないことからここでは敢えて触れなかった。

以上、徳前C遺跡第4次調査で出土した該期の土器を、壺形土器・甕形土器・高坏形土器・器台形土器に分け、その様相・系譜・編年的位置付け等に触れながら若干の考察を加えてきた。その結果、徳前C遺跡が営まれた中心時期を柳田うわの遺跡から奥原遺跡の間（両遺跡の造営期間と時間的に併行する時期）に求めえるものとして捉えることが可能となった。このことは、地溝帯を縦断する形での三地点（柳田うわの遺跡→徳前C遺跡→奥原遺跡）の関連性や、各遺跡の立地条件の差異から推察される該期の社会情勢等を考えるうえで重要かつ貴重な資料になりうるものと考えている。

終りに、数々の助言や適切な指導をいただいた諸氏に深甚の謝意を表し、その名を銘記する。

兼康保明、田中勝弘（滋賀県文化財保護課技師）、谷口徹（滋賀県埋蔵文化財センター技師）谷内尾晋司、湯尻修平、三浦純夫（石川県立埋蔵文化財センター）

註1　『六条山遺跡』－奈良県文化財調査報告書（第34集）－奈良県教育委員会　昭和55年3月
寺沢薫氏は上記報告書中において、忌部山遺跡出土の長頸壺を型式組列の上限に据え、以下その流れを編年細分表として提示されている。

2　一応、加賀・能登各3遺跡を抽出した。

3　庄内式土器により規定される時期。田中琢「布留式以前」（『考古学研究』第12巻第2号）1965年。

4　浜岡賢太郎・吉岡康暢「加賀・能登の古式土師器」（『古代学研究』32）1962年。

5　「金沢市古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書III』石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団　1976年

6　『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』　石川県教育委員会　1978年3月

7　吉岡康暢・橋本澄夫「石川県鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡の土師器」（『石川考古学研究会々誌』9）昭和40年

8　谷内尾晋司「柳田うわの遺跡」『羽咋市史』－原始・古代編－羽咋市史編纂委員会　昭和48年

9　「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団　1976年

10　現在の知見では月影式土器の主要分布圏の北限を概ね津幡町附近に位置付けて大過ないと考えている。ただ、断片的な資料としては羽咋市吉崎・次場遺跡や、富山県串田新遺跡等でも認められる。

11　『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1982年

12　氏は石川考古学研究会古墳部会第2回例会（1980年）において、加賀・能登の土器様相の違いを指摘され、今後各地域ごとの精緻な編年作業の必要性を説かれている。

13　氏は、押水町上田出西山遺跡・同町竹生野遺跡の調査を担当して以来、塚崎遺跡におけるいわゆる吉岡編年には軌を一にしない土器群（様相の異なる土器群）が能登において存在することを指摘されている。

14　『津幡町谷内石山遺跡』　津幡町教育委員会　1980年

15　建設省押水バイパス建設に係る埋蔵文化財事前発掘調査遺跡の1つ。羽咋郡押水町竹生野地内に所在。弥生時代終末期から古墳時代にかけての集落跡および土坑群が検出されている。調査は第1次が昭和54年度、第2次が昭和57年度事業として県立埋蔵文化財センターにより実施された。出土遺物は現在整理中である。

16　有段口縁内面における屈曲度の鈍化現象を仮称したものである。

17　山陰地方にみられる有段口縁の退化現象としては、〝内面くの字化〟というより、有段部内面の屈曲部がつまると表現した方がより適切かと思われる。
『青木遺跡発掘調査報告書ＩＦ・Ｊ地区』鳥取県教育委員会　1976年3月

18　建設省押水バイパス建設に係る埋蔵文化財事前発掘調査遺跡の1つ。羽咋郡押水町南吉田地内に所在。調査は昭和56年度、県立埋蔵文化財センターが実施した。出土遺物については現在整理中。

19　吉岡康暢「北陸における土師器の編年」（『考古学ジャーナル第6号』1967年）

20　田中勝弘氏（滋賀県文化財保護課技師）より教示。筆者も現地にて実見する機会を得た。

21　『久野部遺跡発掘調査報告書－七ノ坪地区－』　滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会・財団法人、滋賀県文化財保護協会　1977年

22　兼康保明氏（滋賀県文化財保護課技師）より教示。

23　加賀市片山津地内に所在する弥生後期の標式遺跡。

24　金沢市西念町・南新保両町に跨がる弥生～古墳時代前期の集落遺跡。昭和55年度、区画整理事業の事前調査として金沢市が発掘。近々、報告書刊行予定。

25　橋本澄夫「次場遺跡」『羽咋市史』－原始・古代編－羽咋市史編纂委員会　昭和48年

26・27・28　『北陸自動車道遺跡調査報告』－上市町地器・石器編－上市町教育委員会　1982年3月

29　羽咋郡押水町上田出地内に所在する縄文時代～平安時代にわたる複合遺跡。

30　「小杉町囲山遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書II』　富山県教育委員会　1972年3月

31　谷内尾晋司　石川考古学研究会古墳部会第2回例会資料（編年試案）参照。

32　『敷地町後方遺跡発掘調査報告』　加賀市教育委員会　1982年3月

33　松任市法仏町地内（現千代野ニュータウン）所在。弥生後期終末～平安時代にわたる複合遺跡。調査は昭和50年～昭和51年にかけて県文化財保護課により実施された。出土遺物は現在整理中。

34　註1文献を参考とした。

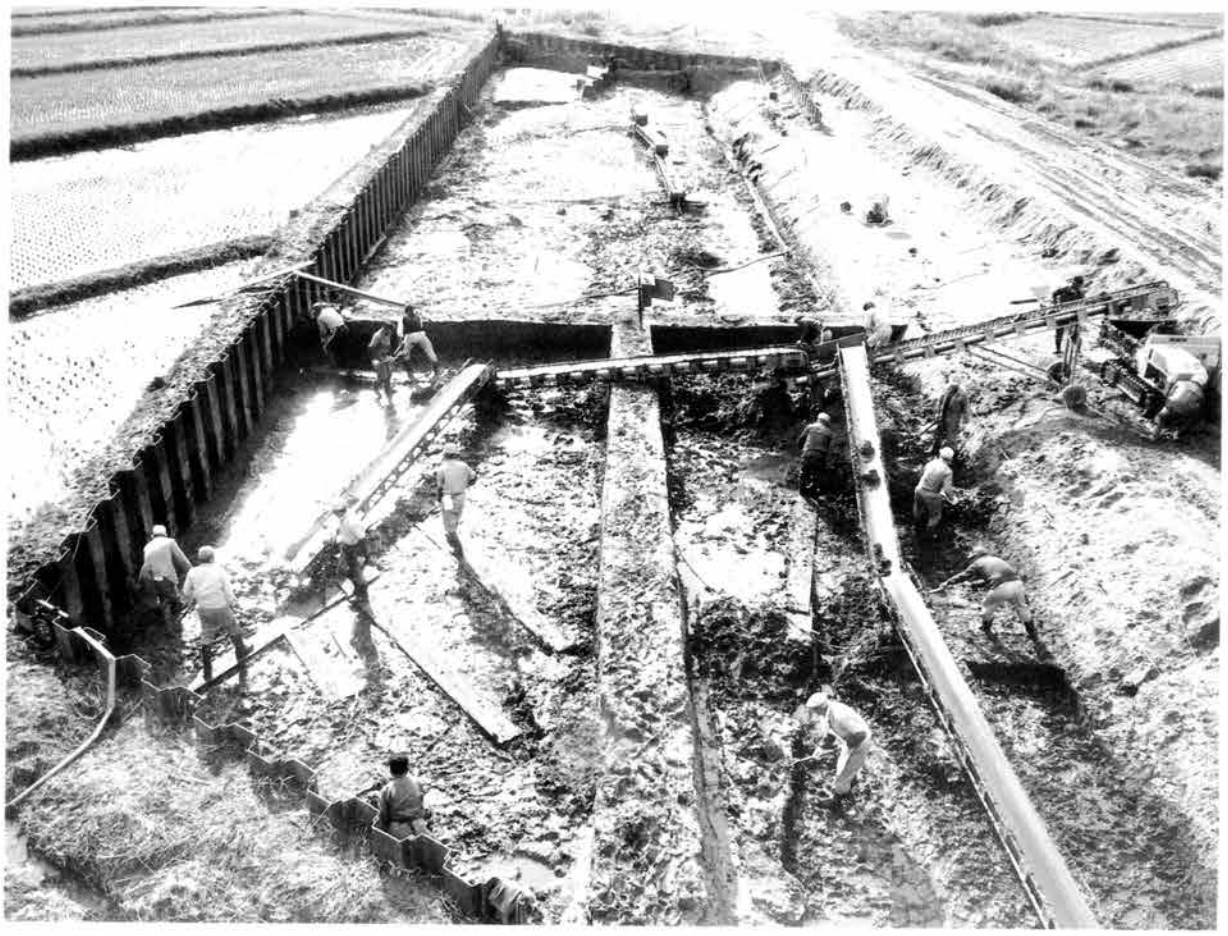
第5節　奈良時代について

第四次調査で出土した遺物は、遺構に伴って検出されたものでないことは先述したとおりである。今次の調査は、昭和52、53年に実施した第Ⅰ、Ⅱ次調査区の北東約100ｍの地点にありまたその縁辺部にあたっており、また地形的にもやや低くなる位置にあたり河川の移動、氾濫等により遺構を留めることがなかったものと推定される。第Ⅰ、Ⅱ次調査によって検出された上層の遺構では、7棟の掘立柱建物と1基の井戸、32条の溝跡、2基の土坑などが検出され、出土した遺物により奈良時代前期（8世紀前葉）のかなり短期間に行なわれた集落と想定されている（報告者　湯尻修平）。またその集落の変遷を三期に分類し、第一期で3棟の建物、第二期でも4棟の建物と井戸という単位を集落の構成する基礎的な単位である房戸としてとらえているようである。今次の調査で出土した遺物の大半については、前述の第Ⅰ、Ⅱ次調査で検出した集落に伴なう遺物とみて差しつかえないであろう。第Ⅰ、Ⅱ次調査においても須恵器の量が圧倒的に多く土師器の量が非常に少なかった。今回もその大半は須恵器で占められ、破片数でみると坏蓋59.9%、坏身29.6%、壺2.6%、甕3.3%、鉢2.0%、長頸瓶(壺)1.3%、薬壺1.3%の比率となる。蓋と坏で89.5%を占め供膳用の食器類が集落内で多用されたことが伺える。また、壊れやすいと言う性格もあって土師器の出土が少ない。第Ⅰ、Ⅱ次の際にも塗彩土器の出土が報告されているが、今次の資料の中にも塗彩の坏（盤）が認められる。これらは、成形・調整ともに良く特殊の扱いがなされたものと思われる。出土した須恵器類のほとんどは、吉岡康暢氏により分類、整理された春木三号窯式期かその前後のものである。また、須恵器、土師器の中でも六世紀前半代のものが少量存在することから、周辺地域に同世代の遺跡の存在する可能性が考えられる。また、平安中後期の遺物が2～3点、中世期の遺物でも少量が出土しており、細々と集落の営まれていたことが伺われる。

航空写真（1/15,000，1974.10.25）撮影：セントラル航業㈱

航空写真（1/5,000，1979.12.19）撮影：セントラル航業㈱

調査風景（4－3区弥生期包含層除去）



調査風景（4－7・8区弥生期包含層除去）

土層断面（4－3区）

発掘風景（4－7・8区）

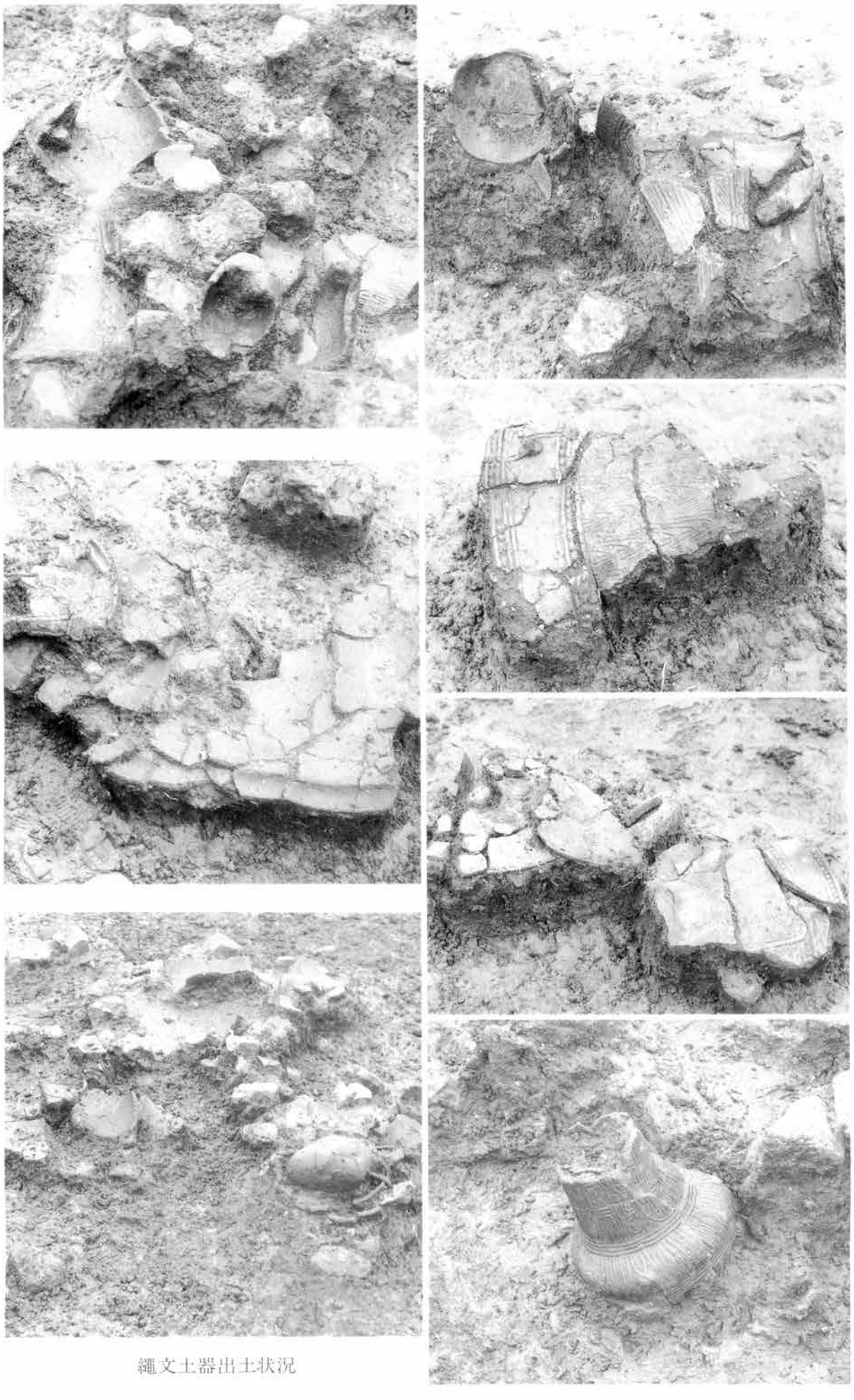
弥生期遺構全景（南西から）

弥生期遺構全景（北東から）

弥生期遺物出土状況

縄文期包含層発掘風景

縄文期遺物出土状況



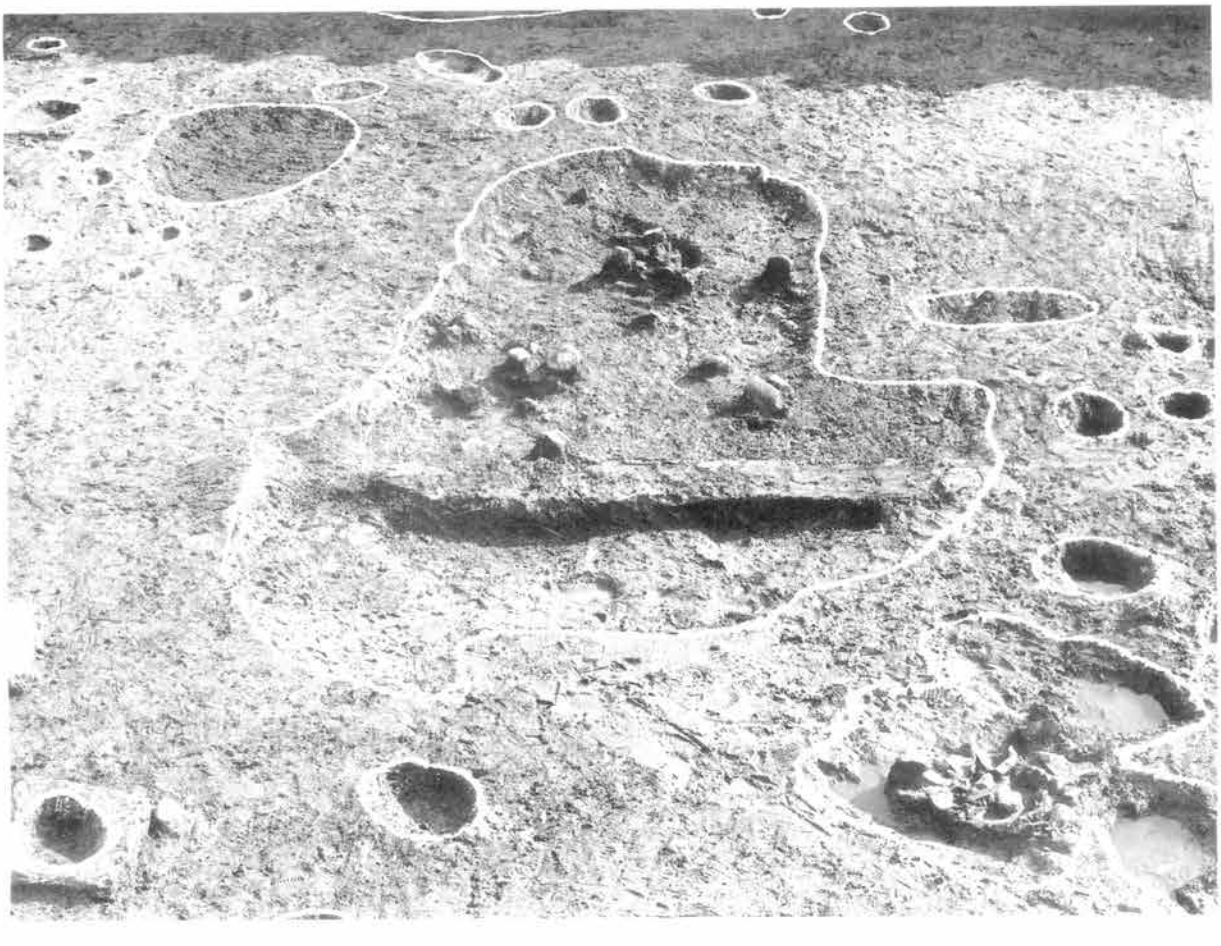
縄文土器出土状況

遺構全景（北東から）

遺構全景（北東から）

図版10

土坑遺物出土状況（No133）



不整形落ち込み（No129）

3

39

40

43

27

65

縄文土器（復原土器）

154

155

274

273

146

322

縄文土器（復原土器）

198

319

279

399

194

447

454

縄文土器（復原土器）

471

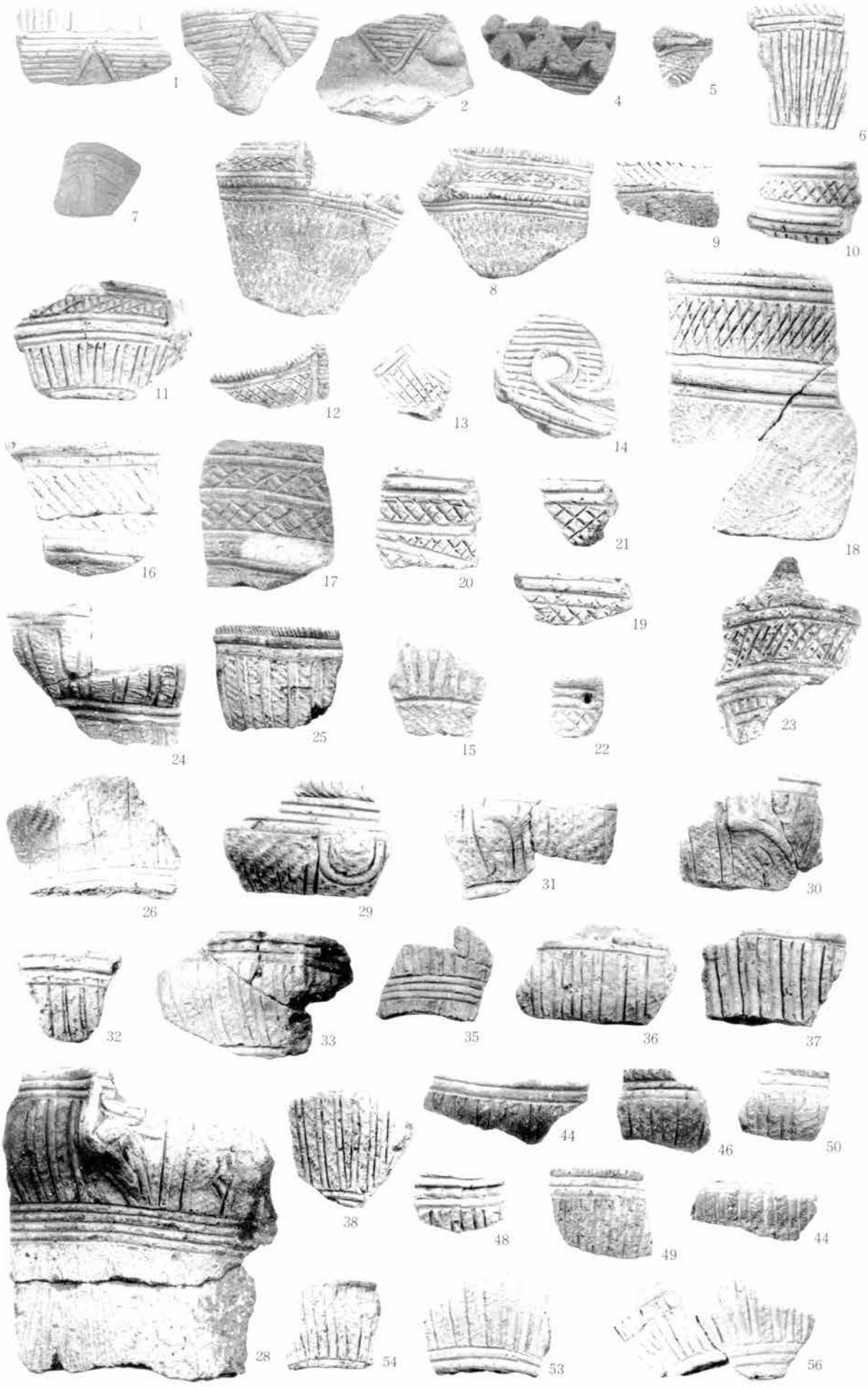
487

503

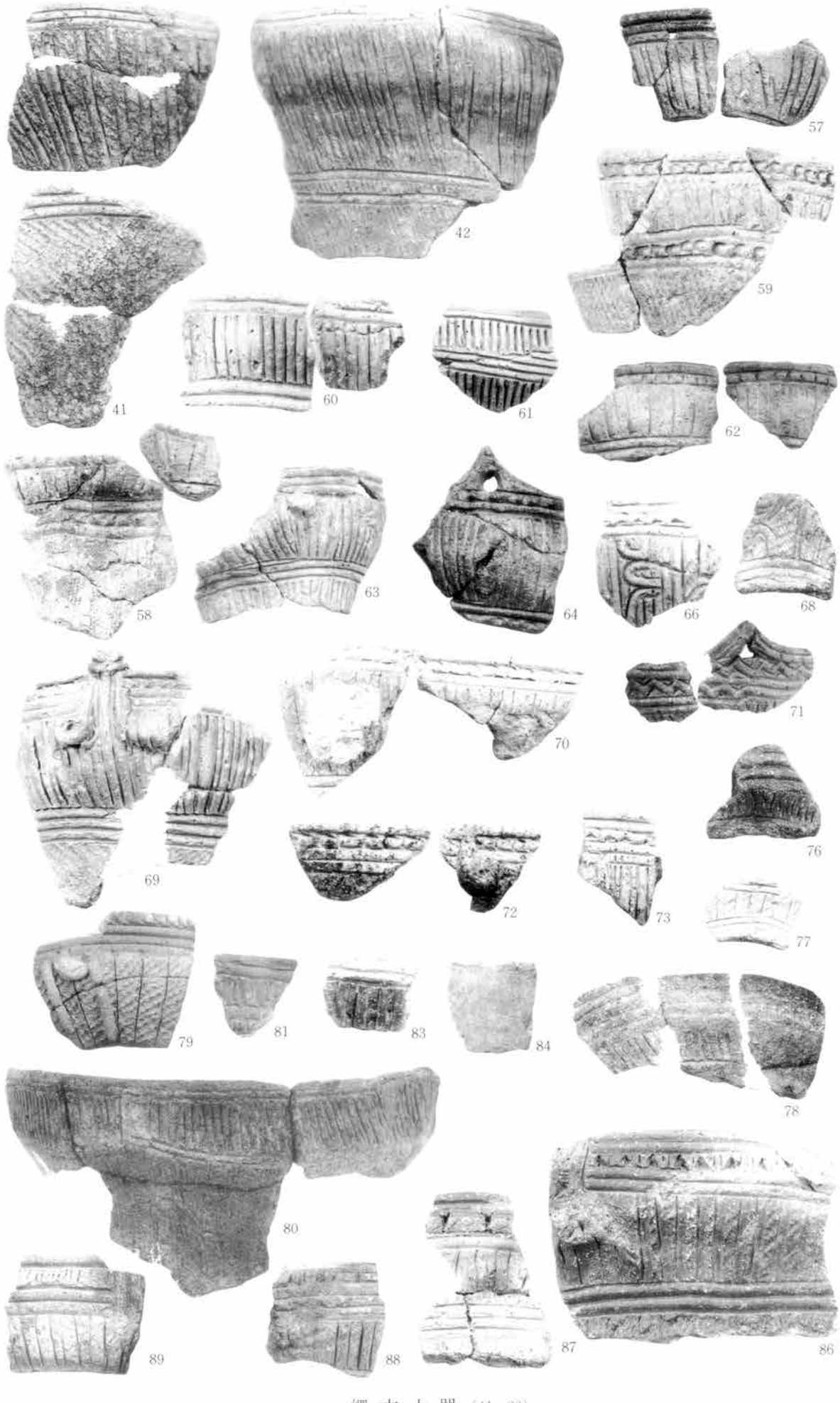
522

504

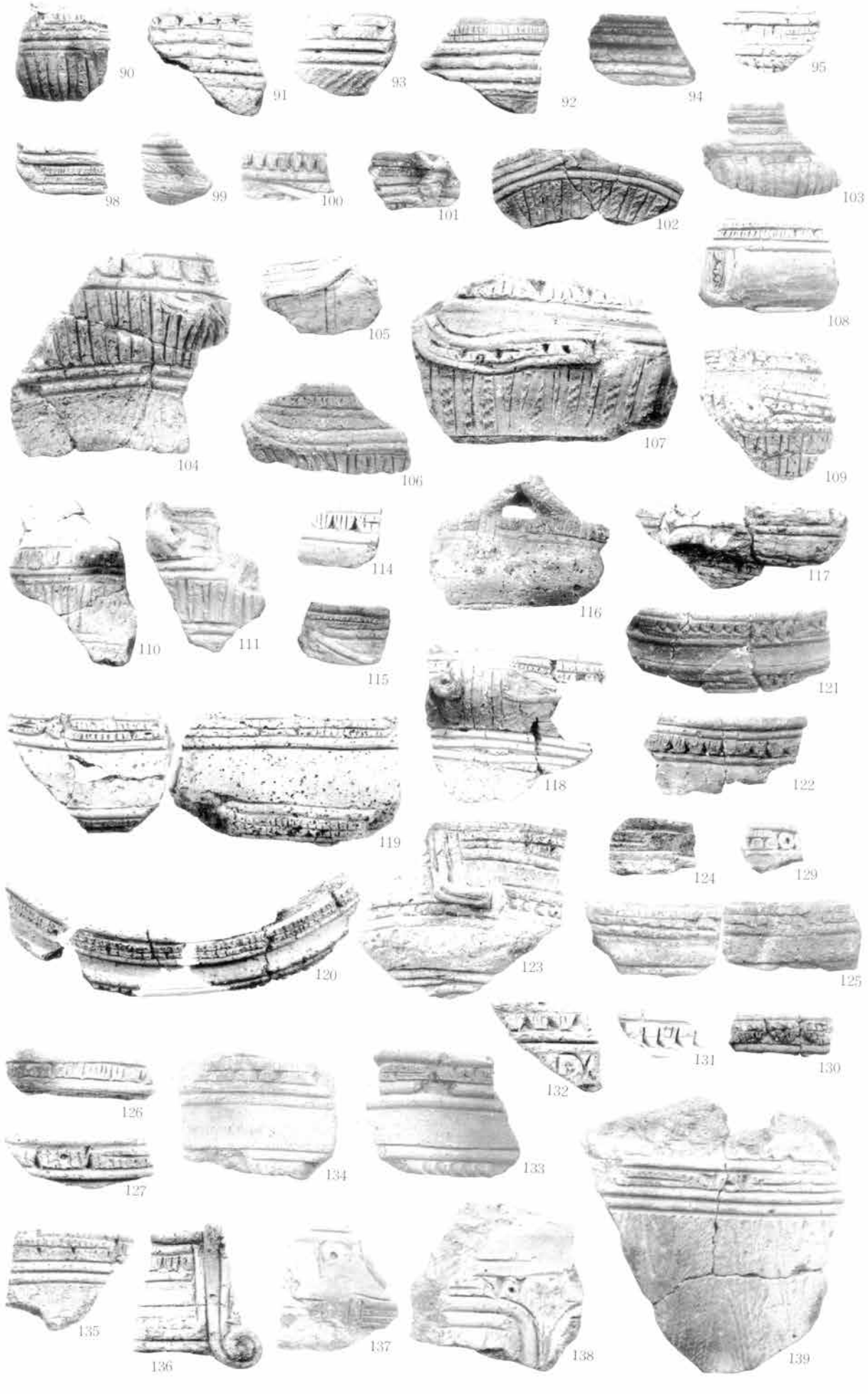
縄文土器（復原土器）



縄文土器（1～56）


41
42
57
59
60
61
62
58
63
64
66
68
69
70
71
72
73
76
77
79
81
83
84
78
80
89
88
87
86

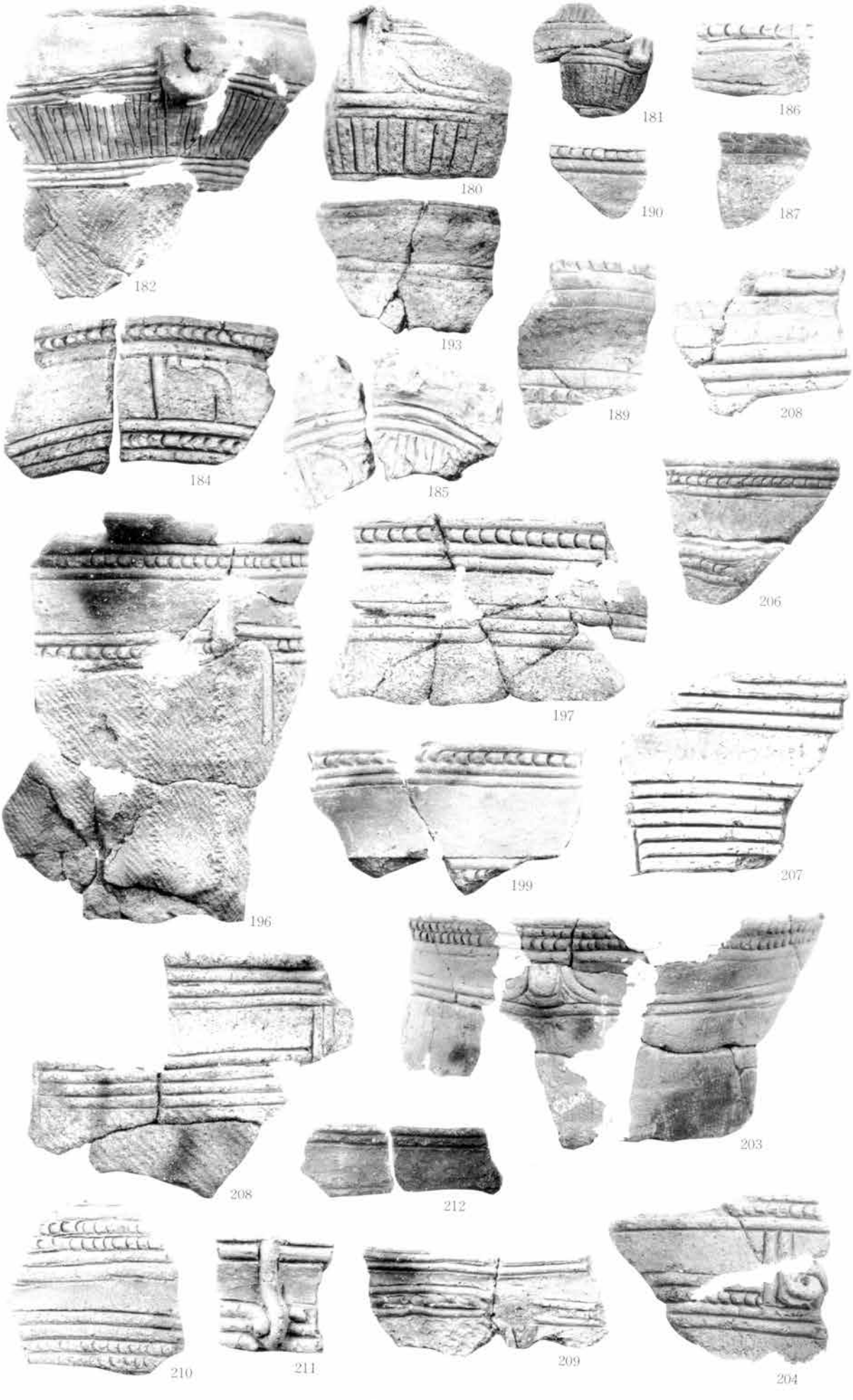
縄文土器（41～89）


90
91
93
92
94
95
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
129
125
126
127
134
133
132
131
130
135
136
137
138
139

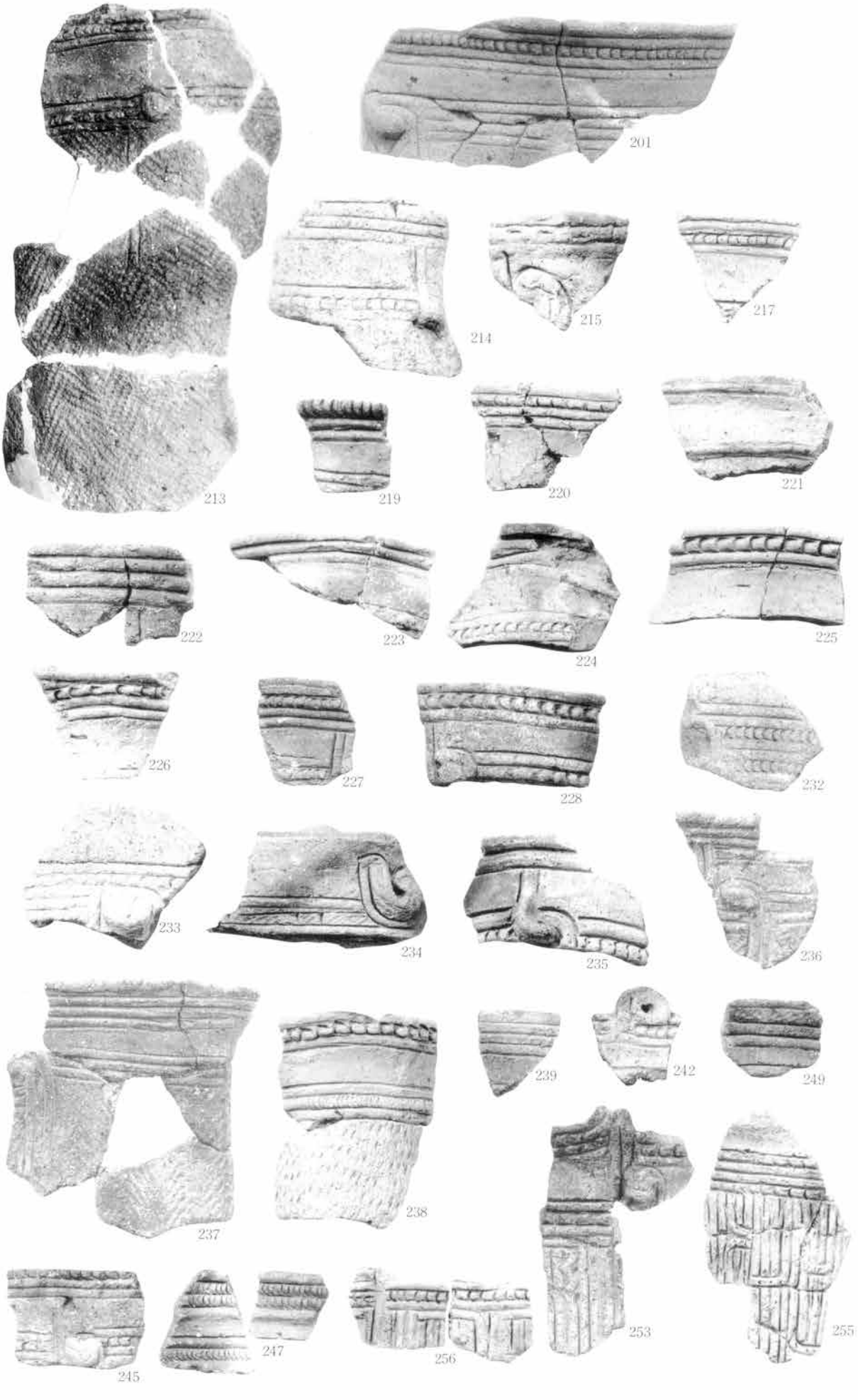
縄文土器（90－139）

140
141
142
143
149
144
145
150
148
147
157
151
152
153
160
159
161
158
163
165
166
156
164
167
168
169
175
172
173
174
170
171
177
178
179

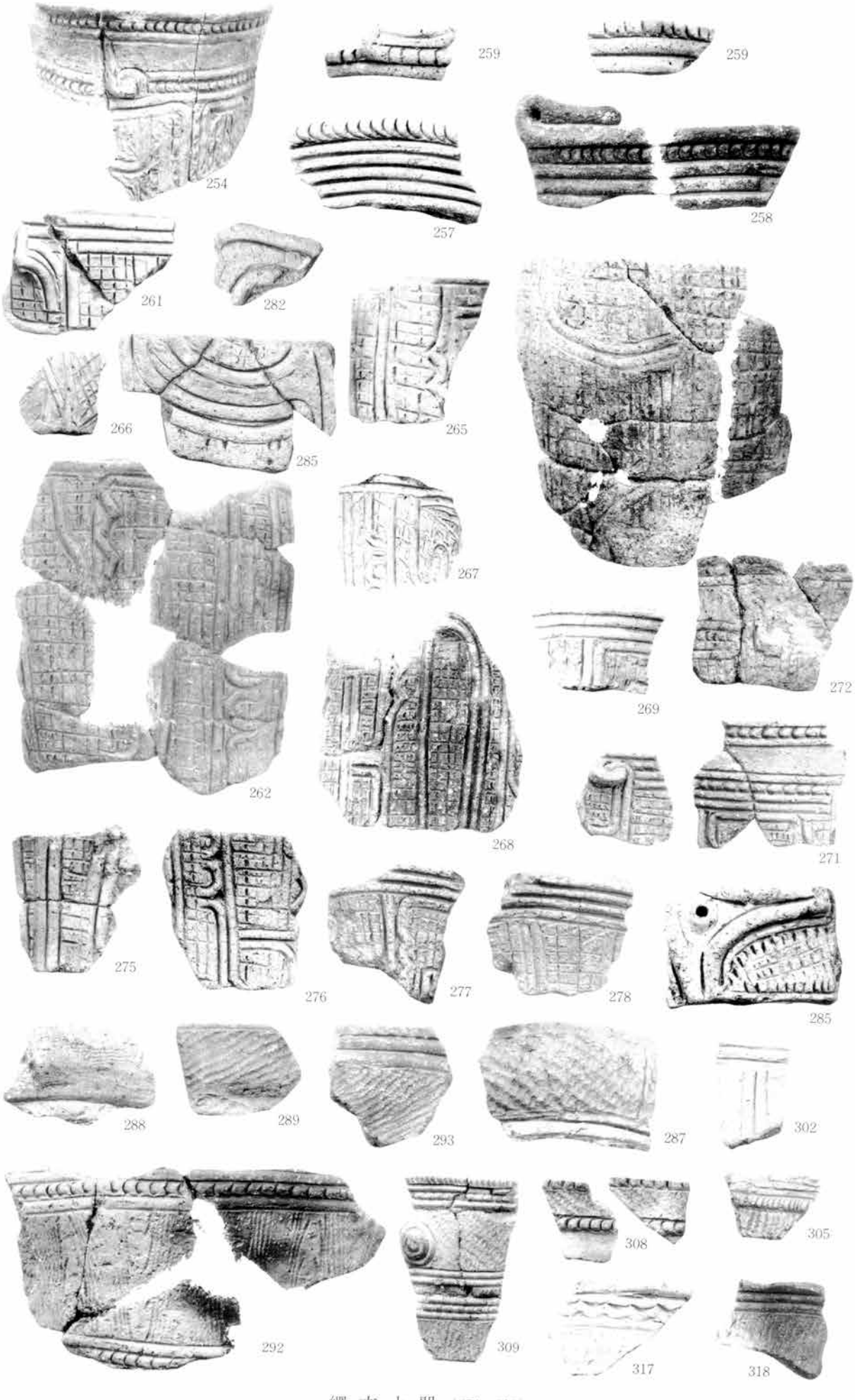
縄文土器（140～179）


182
180
181
186
190
187
193
189
208
184
185
206
196
197
199
207
208
212
203
210
211
209
204

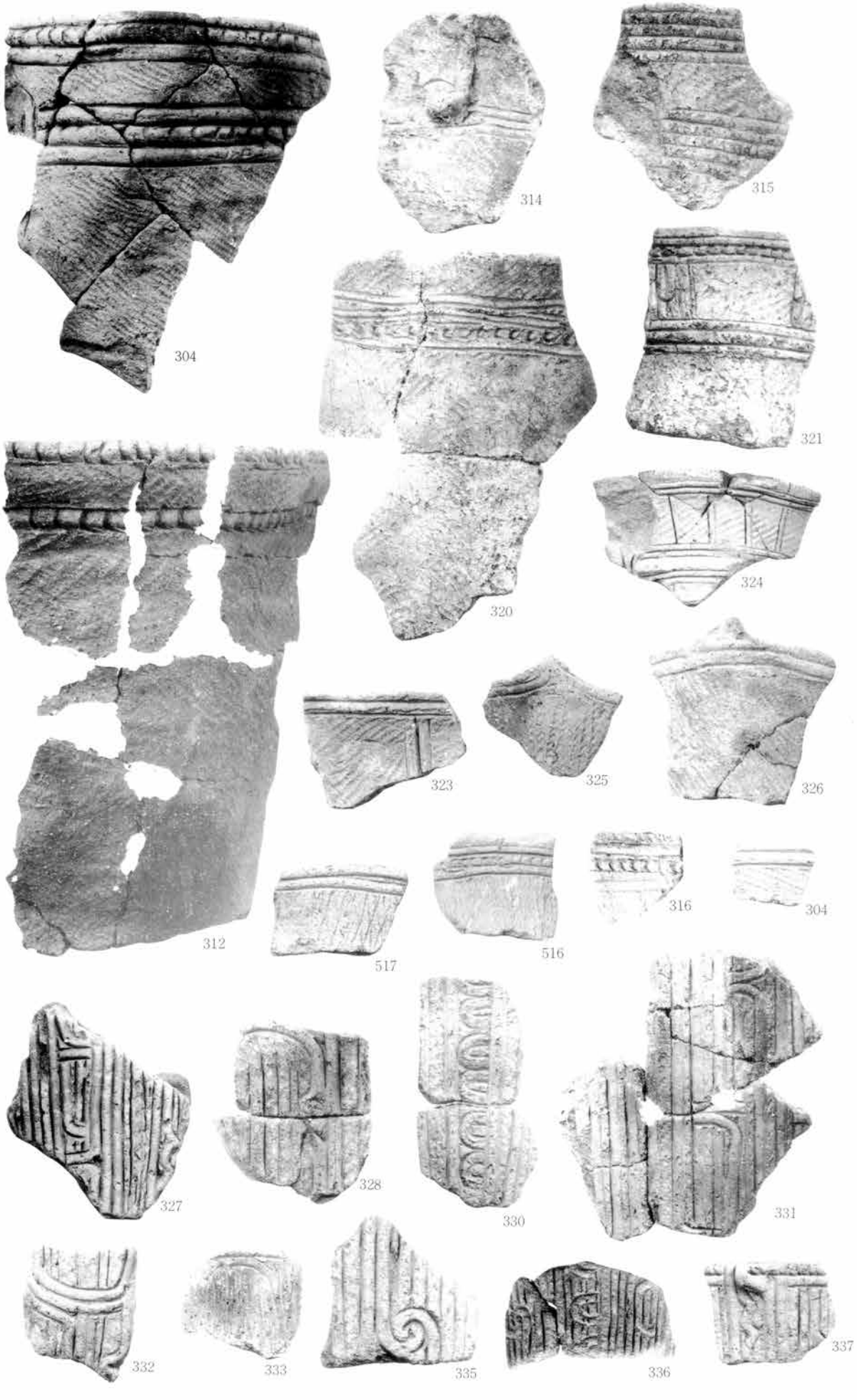
縄文土器（180－211）


201
214
215
217
213
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
232
233
234
235
236
237
238
239
242
249
245
247
256
253
255

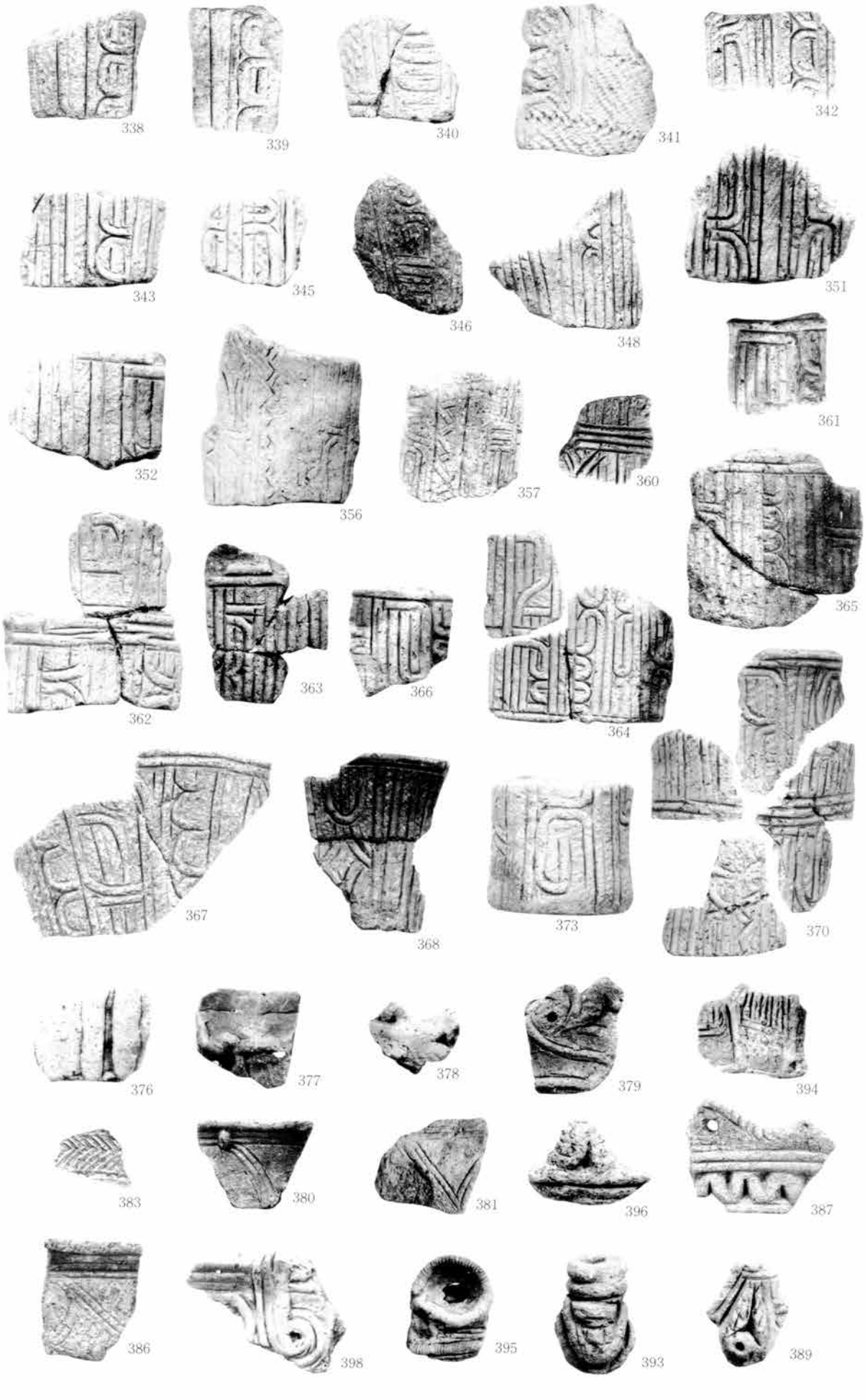
縄文土器（201～255）


254
259
259
257
258
261
282
266
285
265
267
262
269
272
268
271
275
276
277
278
285
288
289
293
287
302
292
309
308
305
317
318

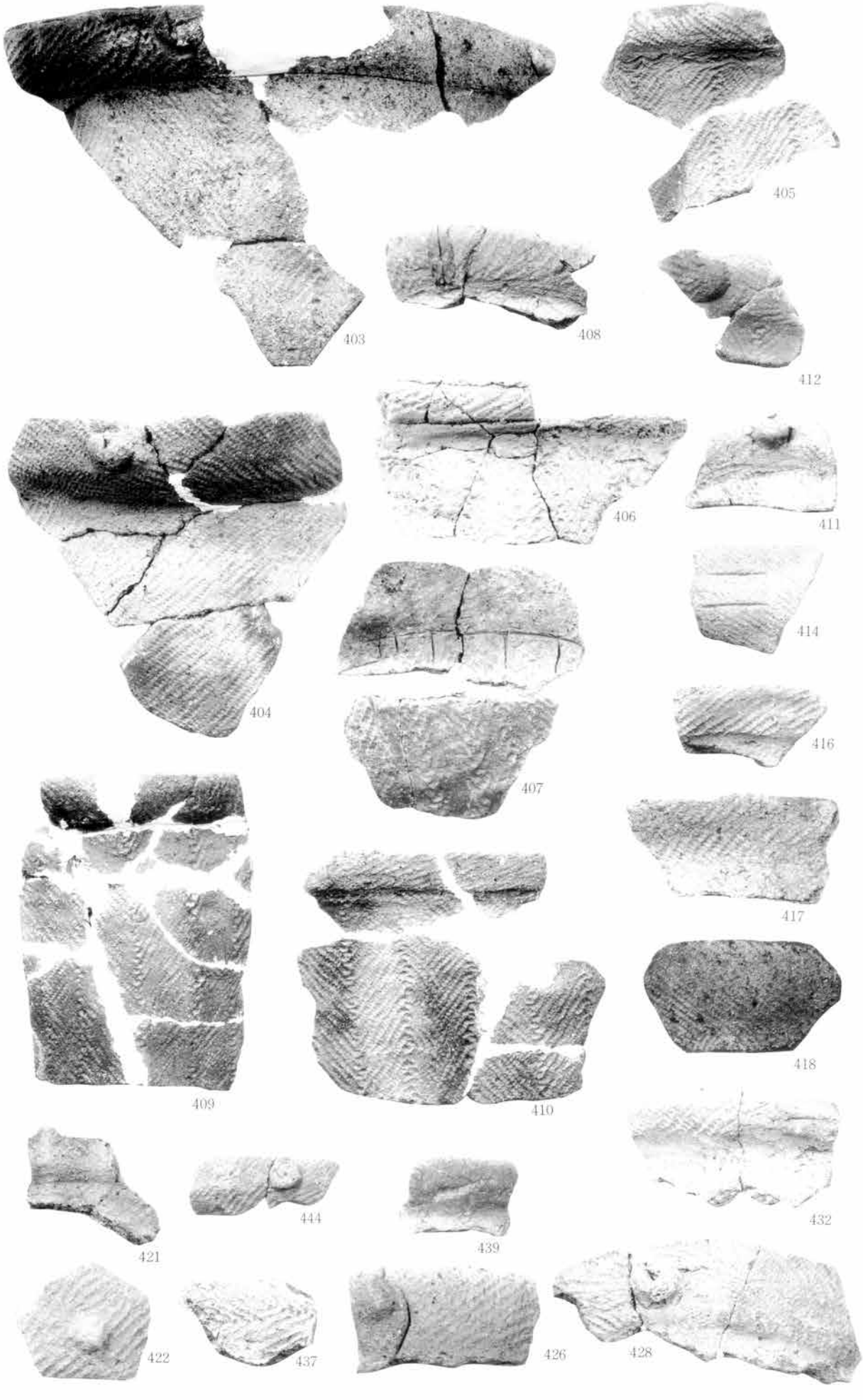
縄文土器（254～318）


304
314
315
321
320
324
312
323
325
326
316
304
517
516
327
328
330
331
332
333
335
336
337

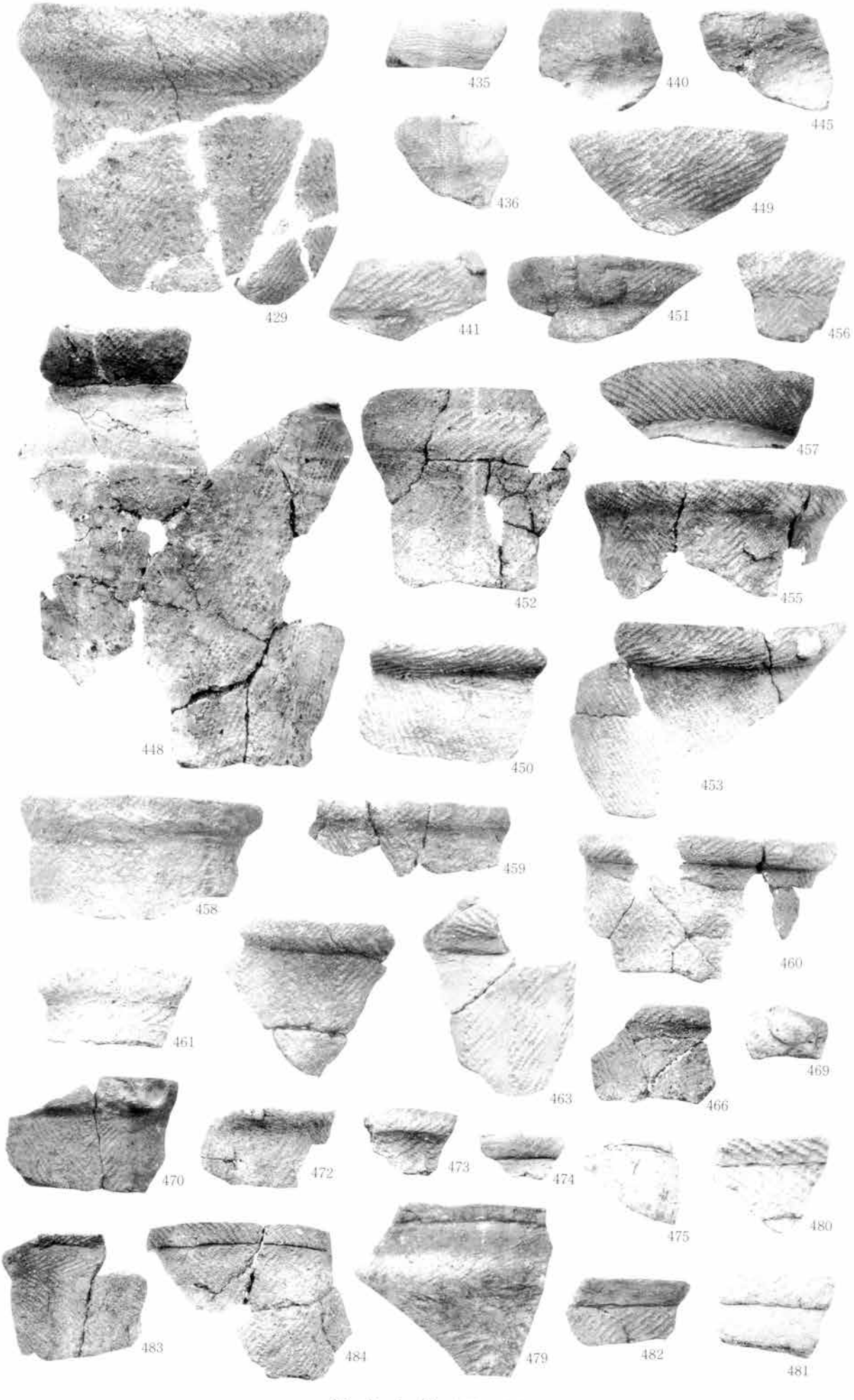
縄文土器（304～337）


338
339
340
341
342
343
345
346
348
351
352
356
357
360
361
362
363
366
364
365
367
368
373
370
376
377
378
379
394
383
380
381
396
387
386
398
395
393
389

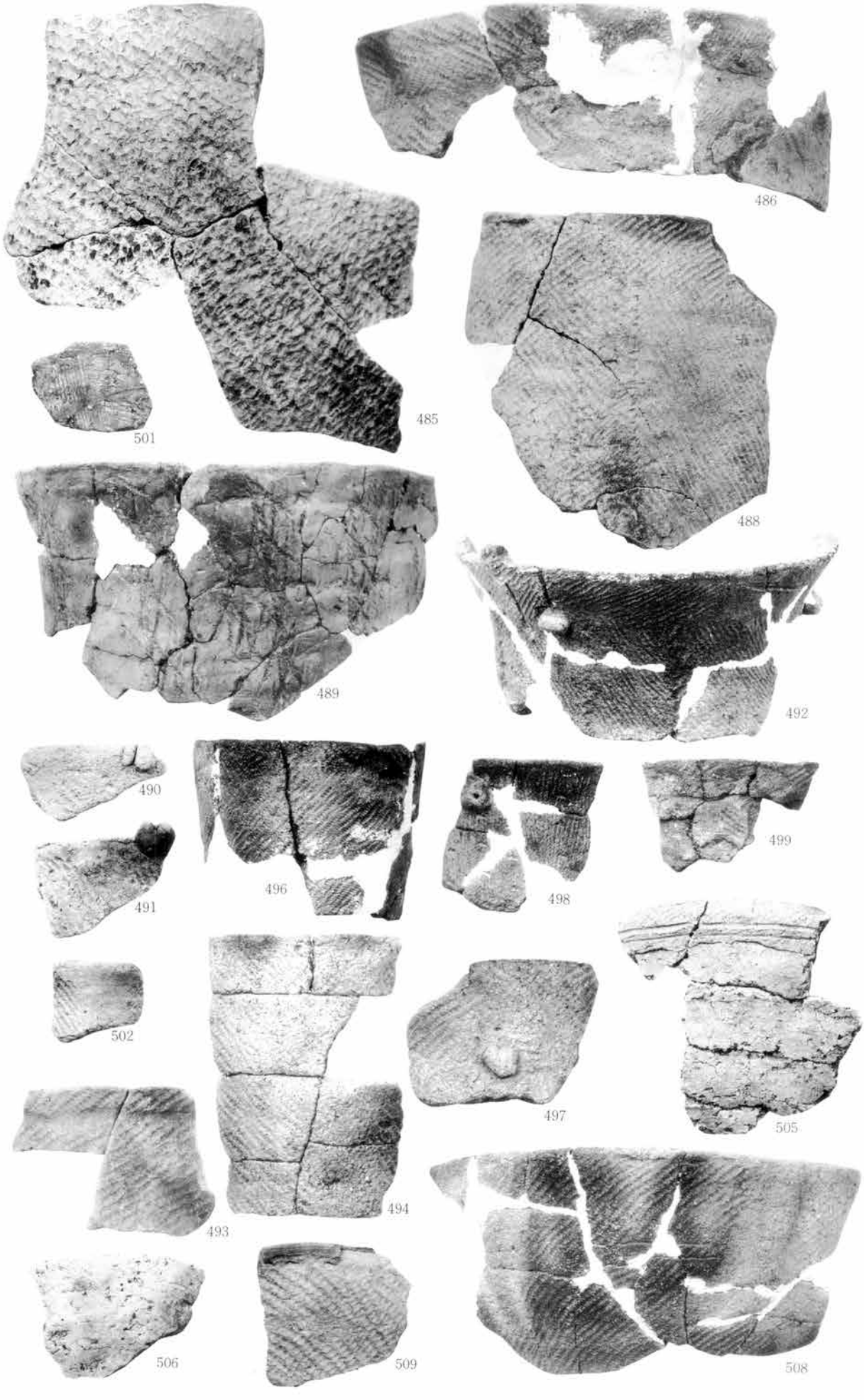
縄文土器〔338～398〕


403
405
408
412
406
411
404
414
407
416
417
409
410
418
432
421
444
439
422
437
426
428

縄文土器（403～428）


435
440
445
436
449
429
441
451
456
457
452
455
448
450
453
459
458
460
461
463
469
466
470
472
473
474
475
480
483
484
479
482
481

縄文土器（429～483）


485
486
488
489
490
491
492
493
494
496
497
498
499
501
502
505
506
508
509

縄文土器（485～509）

510

511

512

518

513

523

519

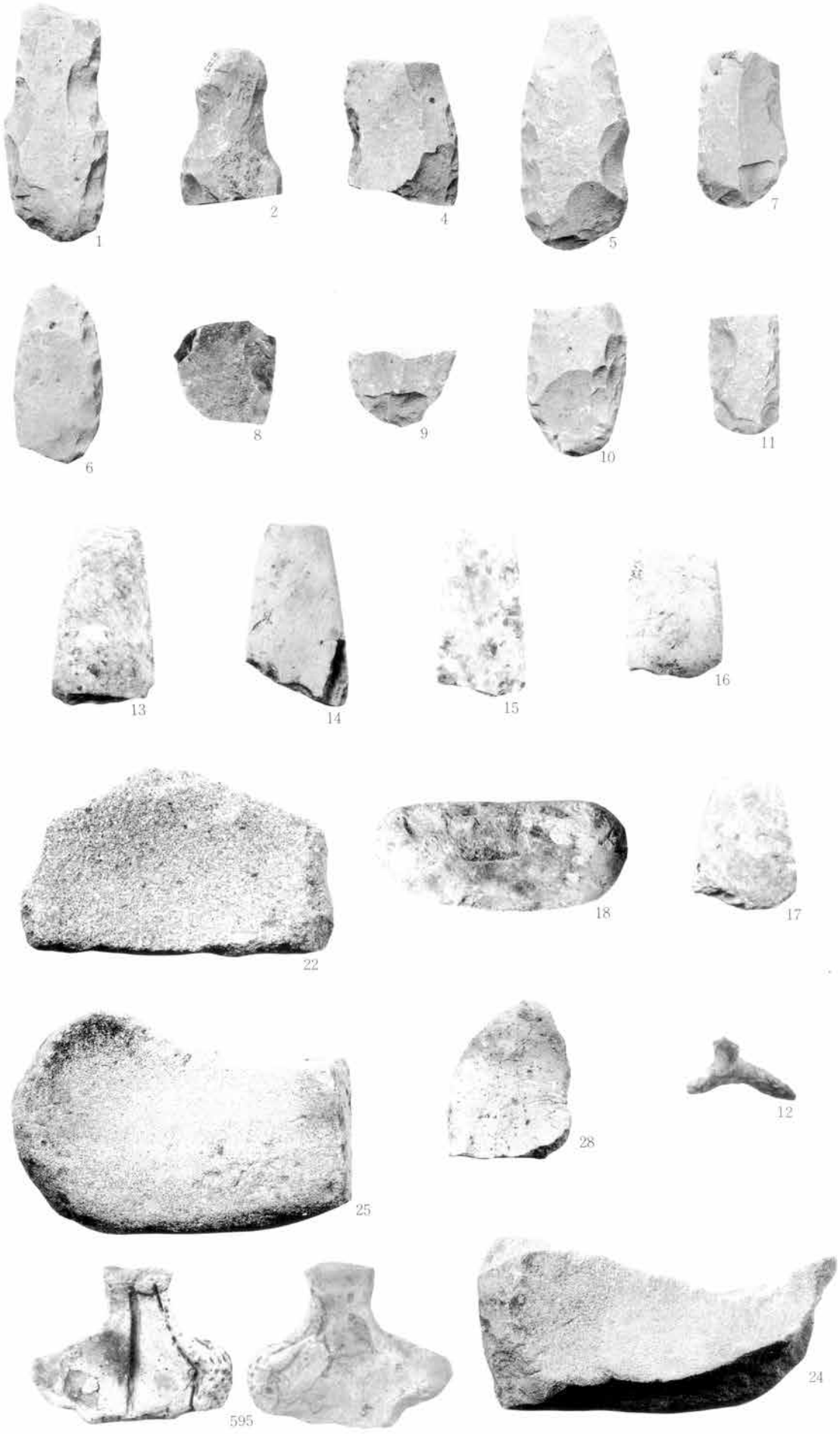
524

525

520

528

縄文土器（510～528）



縄文時代石器（1～24）、土偶（595）

62-12

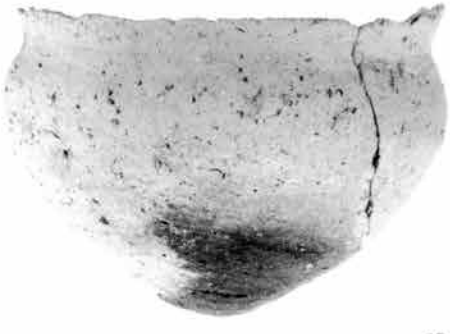
61-22

61-29

61-31

61-30

65-67



65-66

66-2

弥生・古墳時代前期の土器

69-8

69-12

69-18

69-15

64-69

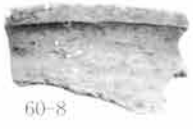
69-23

60-1

60-2

60-3

60-4


60-8

60-5

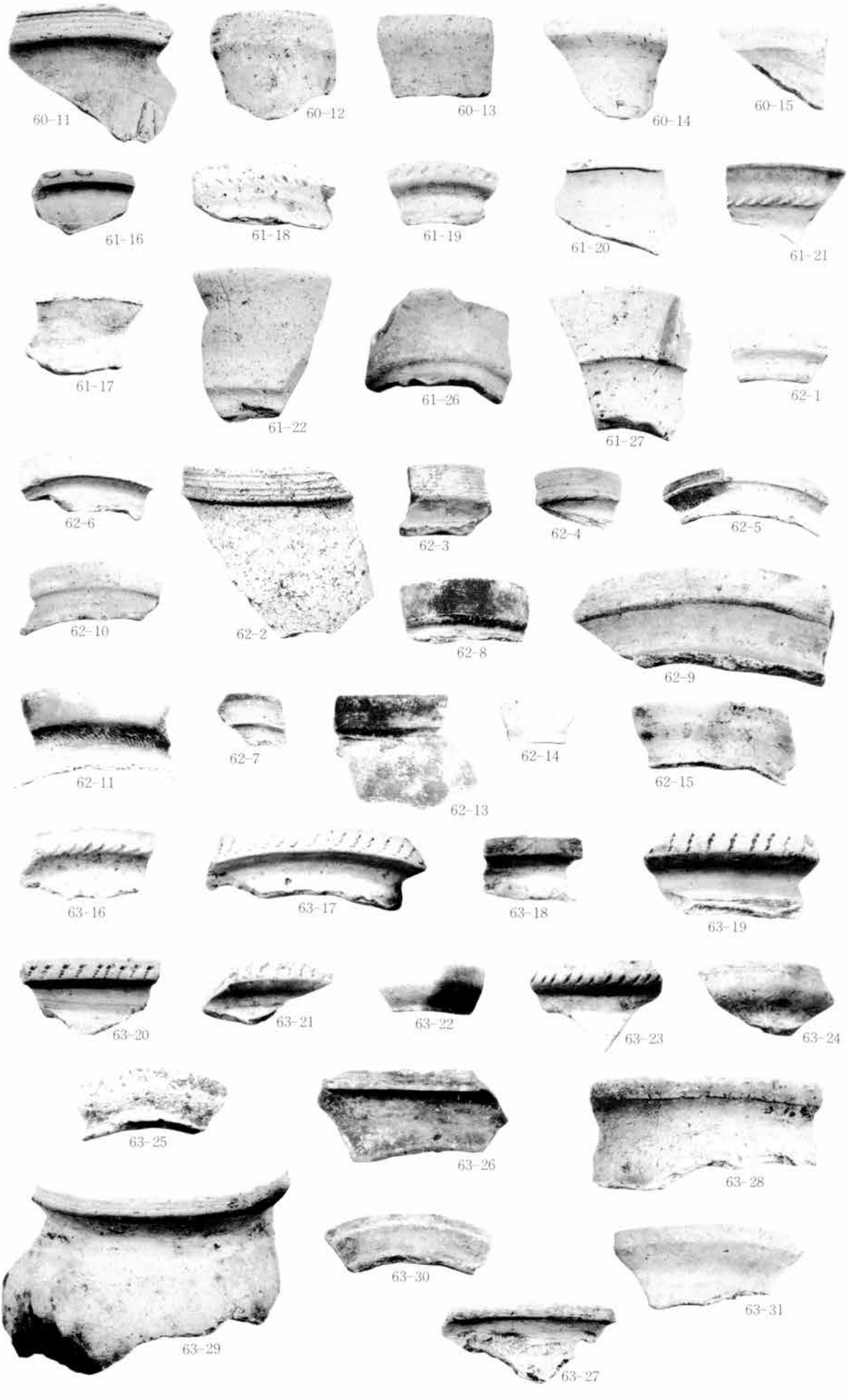
60-6

60-7

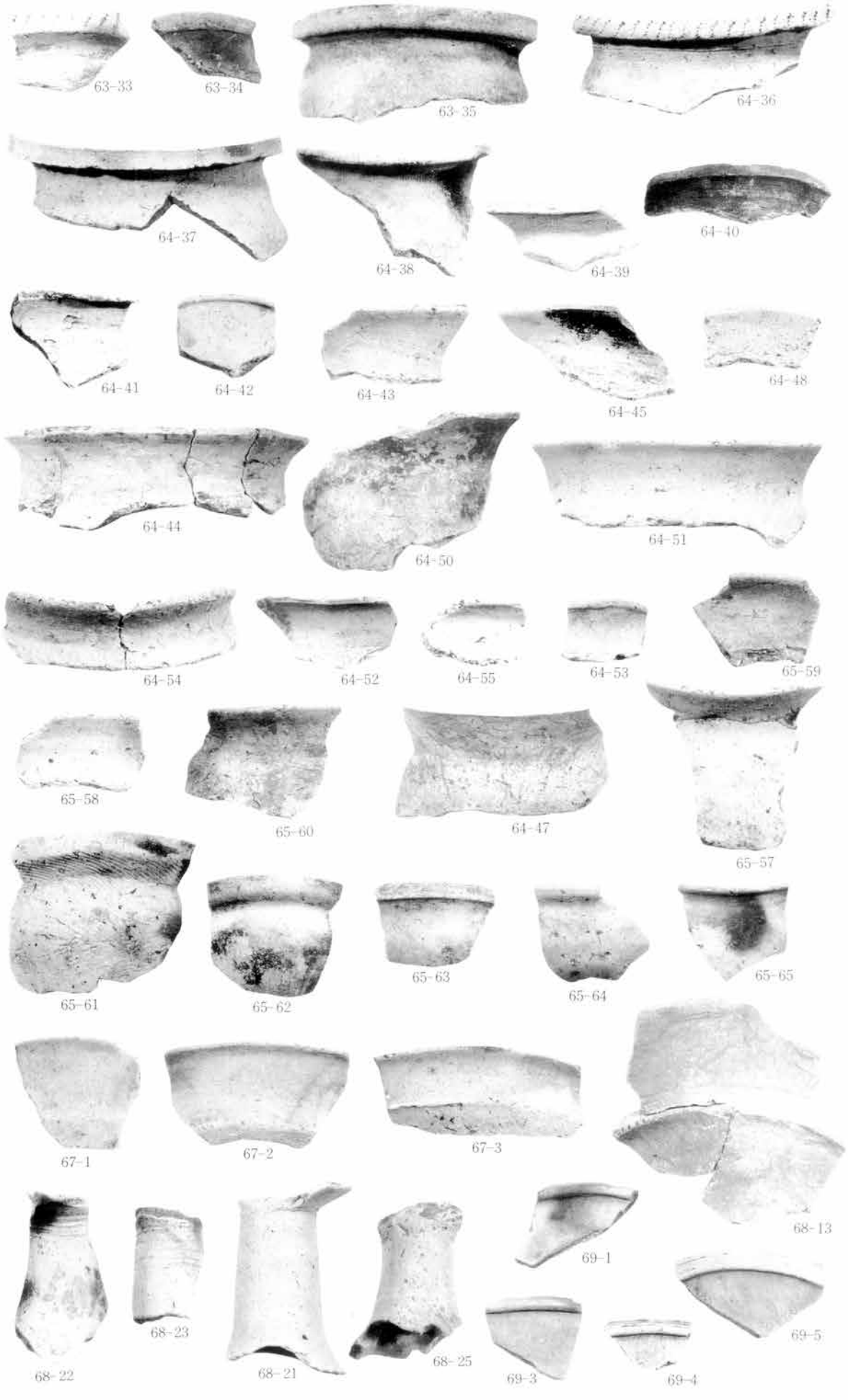
60-9

60-10

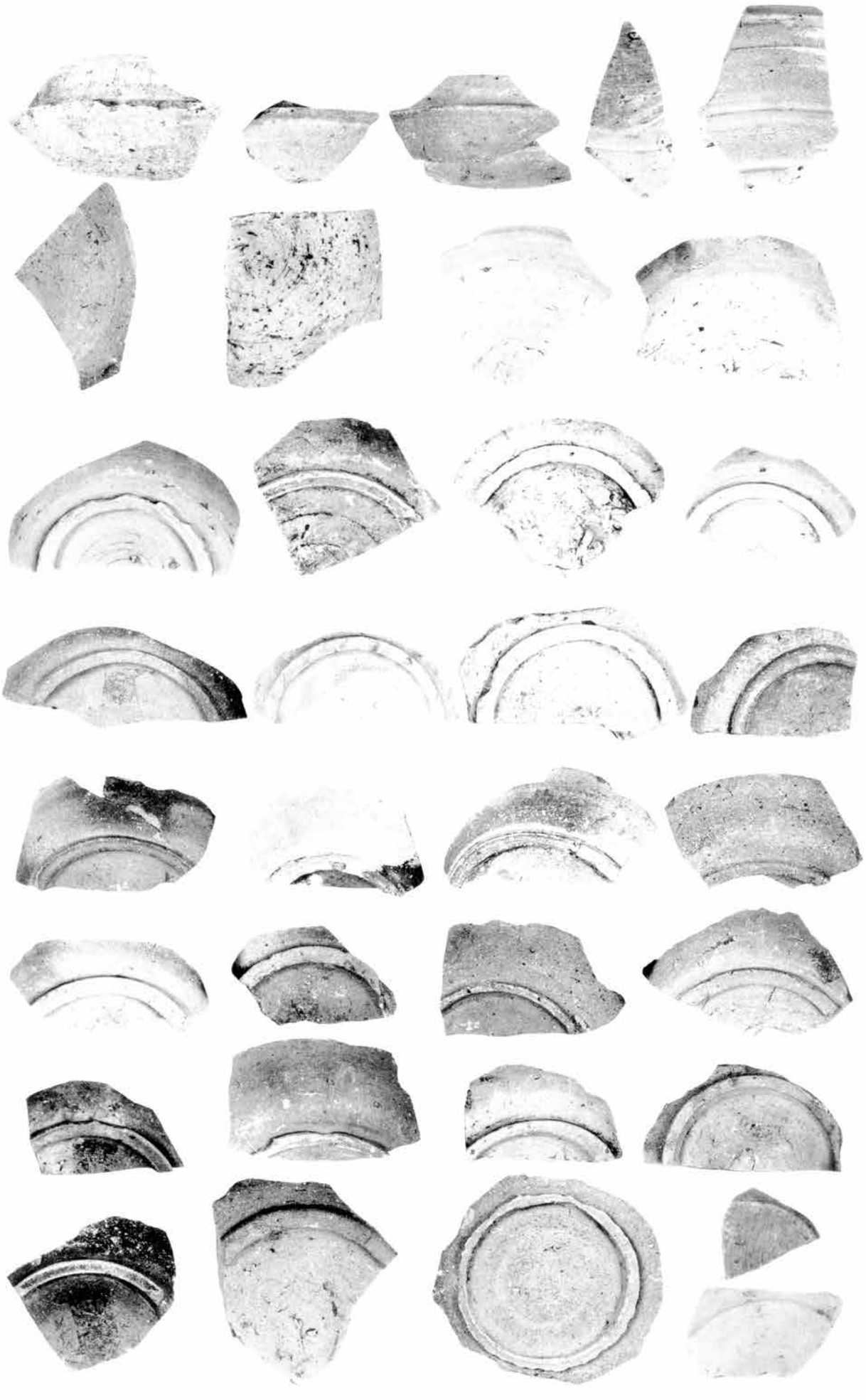
弥生・古墳時代前期の土器



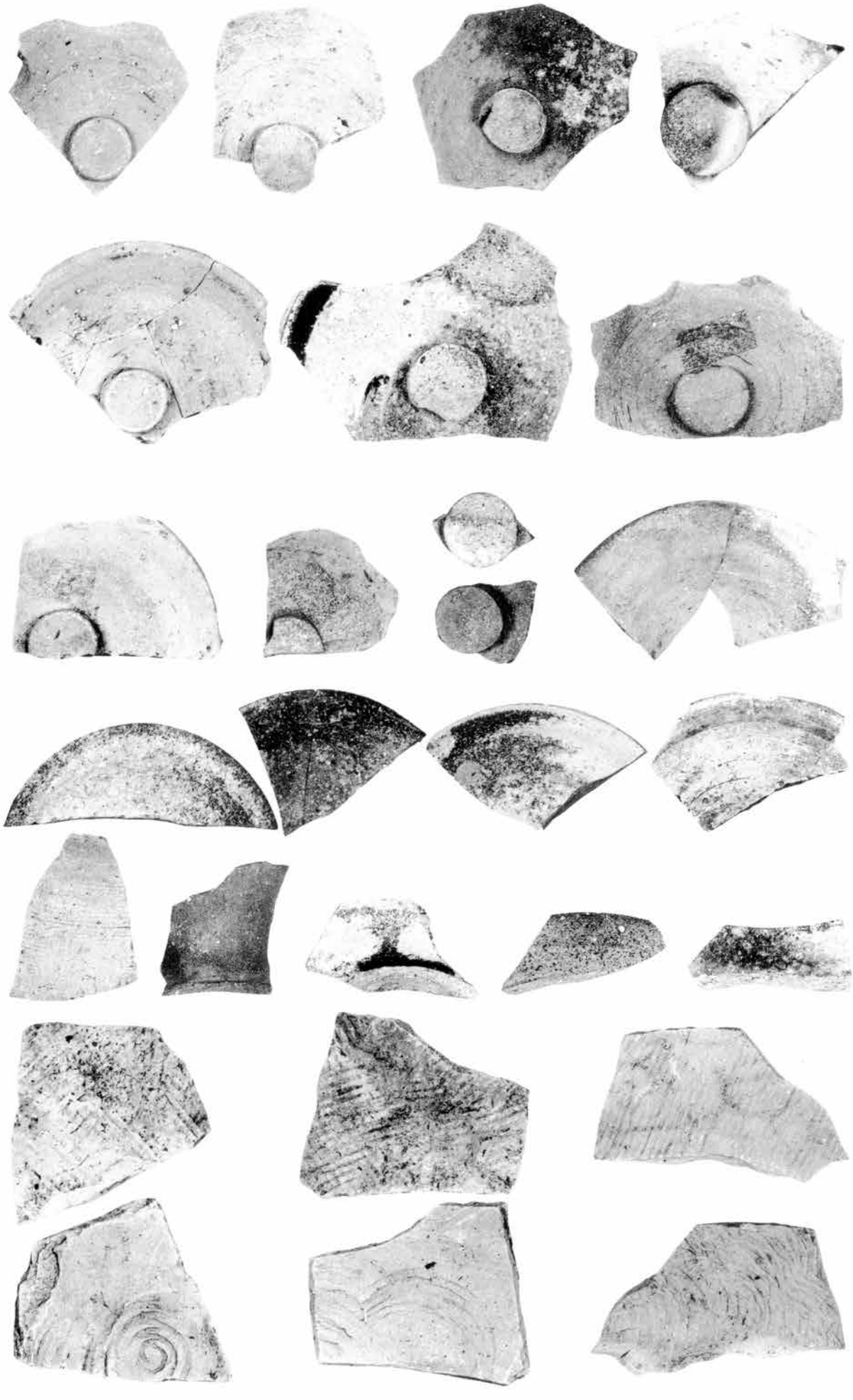
弥生・古墳時代前期の土器



弥生・古墳時代前期の土器

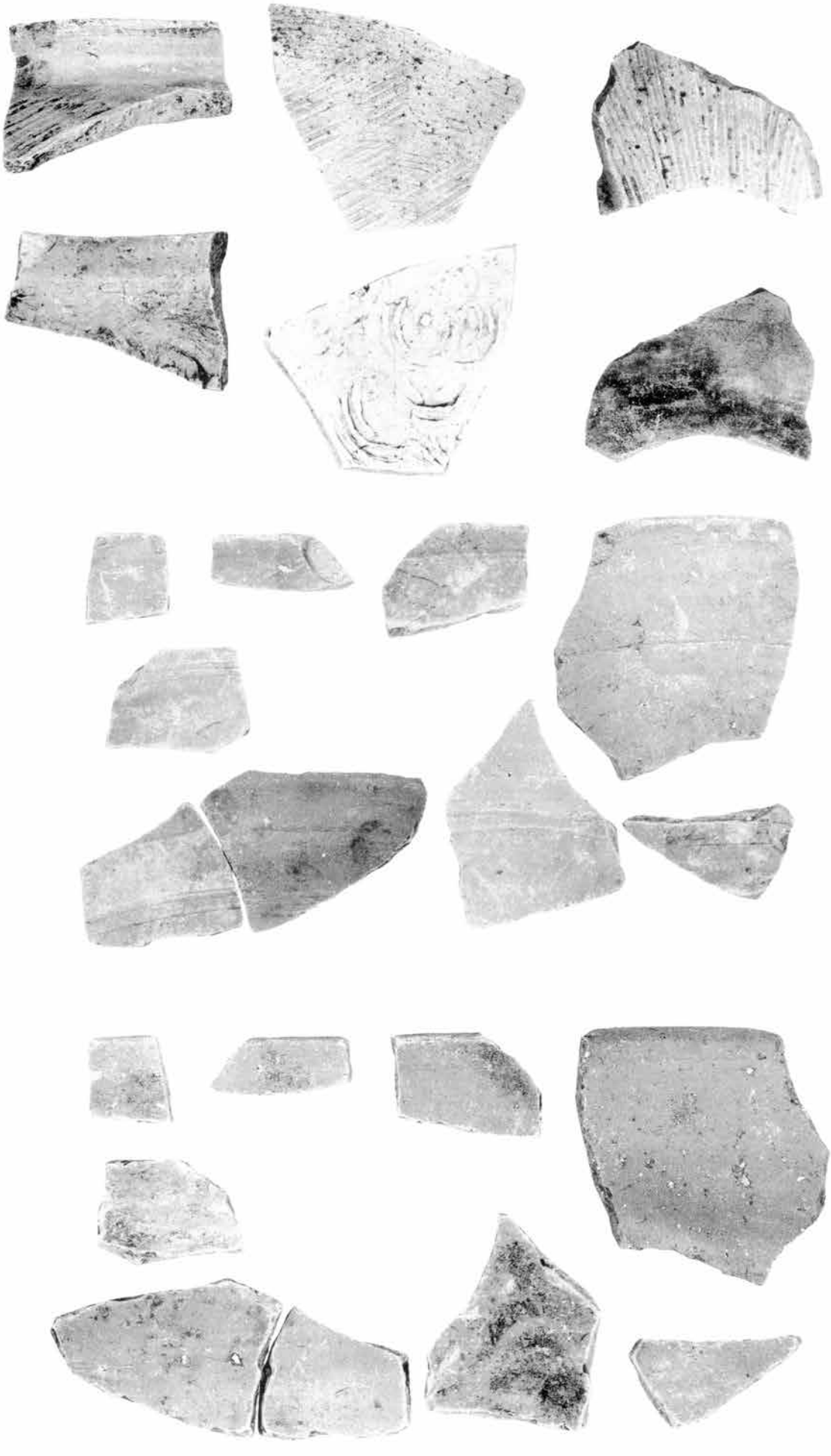


古墳時代後期・奈良時代の須恵器

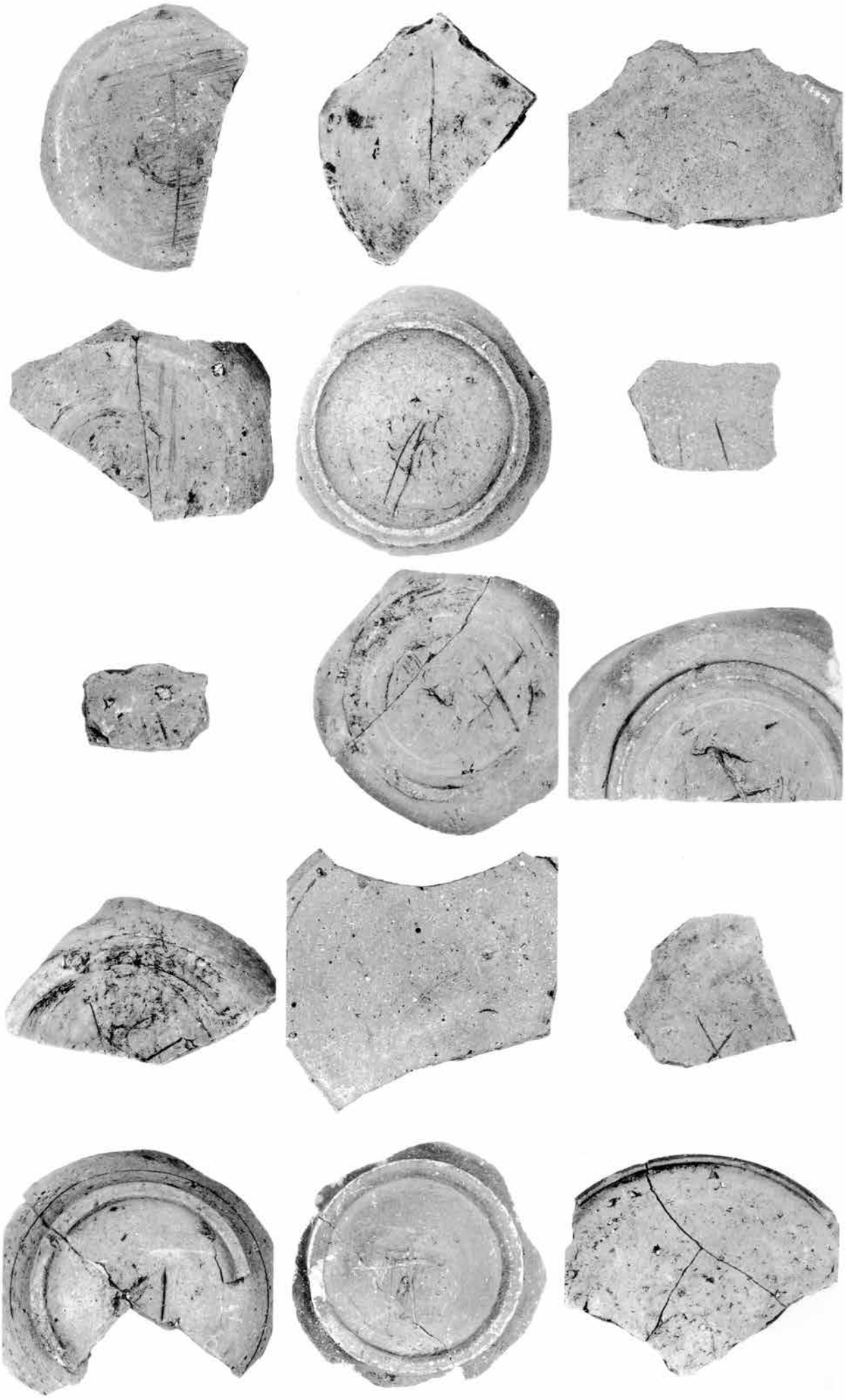


奈良時代の須恵器

奈良時代の須恵器



奈良時代の須恵器、珠洲焼



ヘラ記号集成

鹿島町徳前C遺跡（IV）

国道159号線改築事業に係る石川県鹿島郡
鹿島町徳前C遺跡第4次緊急発掘調査報告

発行日　昭和58年3月20日（1983）

編集者
発行者　石川県立埋蔵文化財センター

〒921　金沢市米泉4－133
電話　（0762）－43－7692

印刷者　㈱橋本確文堂

〒920　金沢市大手町2－35
電話　（0762）－61－8221